

京都府遺跡調査概報

第 82 冊

1. 松ヶ崎遺跡第 5 次
2. 横枕遺跡第 2 次
3. 井町古墳群
4. 京都縦貫自動車道関係遺跡
 - (1) 桑原口遺跡第 3 次
 - (2) 今福北城跡
 - (3) 盛林寺裏山古墳状隆起
5. 鳥谷古墳群
6. 太田遺跡第 5 次

1 9 9 8

卷頭図版 桑原口遺跡



(1) A地区全景(西から)



(2)出土遺物

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当調査研究センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成7～9年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府丹後土地改良事務所、京都府道路公社、京都府亀岡土地改良事務所の依頼を受けて行った松ヶ崎遺跡第5次、横枕遺跡第2次、井町古墳群、京都縦貫自動車道関係遺跡(桑原口遺跡第3次・今福北城跡・盛林寺裏山古墳状隆起)・鳥谷古墳群・太田遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、網野町教育委員会・丹後町教育委員会・宮津市教育委員会・京北町教育委員会・亀岡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 松ヶ崎遺跡第5次 2. 横枕遺跡第2次 3. 井町古墳群
 4. 京都縦貫自動車道関係遺跡(桑原口遺跡第3次・今福北城跡・盛林寺裏山古墳状隆起)
 5. 鳥谷古墳群 6. 太田遺跡第5次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 松ヶ崎遺跡第5次	竹野郡網野町大字木津小字松ヶ崎	平9.7.7～ 9.10	京都府土木建築部	戸原 和人
2. 横枕遺跡第2次	竹野郡網野町字鳥津小字横枕	平9.10.8～ 12.19	京都府丹後土地改良事務所	松尾 史子
3. 井町古墳群	竹野郡丹後町徳光小字井町	平9.10.16～ 平9.12.19	京都府丹後土地改良事務所	引原 茂治
4. 京都縦貫自動車道関係遺跡 (1) 桑原口遺跡第3次 (2) 今福北城跡 (3) 盛林寺裏山古墳状隆起	宮津市字喜多小字桑原口 宮津市字喜多小字今福 宮津市字今福小字梶谷	平8.4.25～ 9.25 平8.7.3～ 9.25 平8.6.19～ 7.2	京都府道路公社	田代 弘 小池 寛
5. 鳥谷古墳群	北桑田郡京北町字下中小字鳥谷地内	平9.11.5～ 平10.1.14	京都府土木建築部	竹下 士郎
6. 太田遺跡第5次	亀岡市蔭田野町太田	平9.10.29～ 平10.3.3	京都府亀岡土地改良事務所	増田 孝彦 岡崎 研一

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

本文目次

1. 松ヶ崎遺跡第5次発掘調査概要	1
2. 横枕遺跡第2次発掘調査概要	25
3. 井町古墳群発掘調査概要	43
4. 京都縦貫自動車道関係遺跡平成8年度発掘調査概要	51
(1) 桑原口遺跡第3次	52
(2) 今福北城跡	79
(3) 盛林寺裏山古墳状隆起	80
5. 鳥谷古墳群発掘調査概要	93
6. 太田遺跡第5次発掘調査概要	107

挿図目次

1. 松ヶ崎遺跡第5次	
第1図 調査地位置図	1
第2図 調査トレンチ位置図	2
第3図 第5トレンチ北壁断面図	3
第4図 第5トレンチ平面図	3
第5図 第8トレンチ断面図	4
第6図 第7・8トレンチ平面図	4
第7図 石囲い炉S X03実測図	5
第8図 第8トレンチ第18-2層(第19層直上)出土遺物拓影	7
第9図 第8トレンチ第17層出土土器実測図	8
第10図 第8トレンチ第17層出土土器拓影・実測図	9
第11図 出土土器拓影(1)	10
第12図 第8トレンチ第12-1層出土土器拓影	11
第13図 出土土器拓影(2)	12

第14図	第7トレンチSK04出土土器拓影-----	15
第15図	出土土器拓影・実測図-----	16
第16図	第8トレンチ出土石器・木器実測図-----	17
第17図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成-----	19
第18図	試料中に残存する脂肪のステロール組成-----	19

2. 横枕遺跡第2次

第19図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図-----	26
第20図	第1次調査出土遺物実測図-----	27
第21図	トレンチ配置図-----	28
第22図	第1トレンチ実測図-----	30
第23図	第2トレンチ実測図-----	31
第24図	第5トレンチ土層断面図・第2トレンチ遺構実測図-----	32
第25図	出土遺物実測図(1)-----	35
第26図	出土遺物実測図(2)-----	36
第27図	出土遺物実測図(3)-----	37
第28図	出土遺物実測図(4)-----	38
第29図	銅製帯金具実測図・写真-----	39
第30図	出土遺物実測図(5)-----	39
第31図	るつぼ・鍛冶滓-----	40
第32図	遺構変遷図-----	41

3. 井町古墳群

第33図	調査地位置図・古墳分布図-----	44
第34図	調査地位置図-----	45
第35図	調査地平面図-----	46
第36図	調査地断面図-----	47
第37図	主体部実測図-----	48
第38図	出土遺物実測図-----	49

4. 京都縦貫自動車道関係遺跡

(1) 桑原口遺跡第3次

第39図	遺跡位置図-----	53
第40図	桑原口遺跡第1次調査-----	55
第41図	桑原口遺跡第2次調査-----	55
第42図	桑原口遺跡調査トレンチ配置図-----	56
第43図	A地区東壁断面図-----	56
第44図	桑原口遺跡第3次調査地区割り図-----	57

第45図	桑原口遺跡第3次調査検出遺構配置図	58
第46図	A地区検出遺構実測図	59
第47図	A-S K05実測図	59
第48図	A-S X08遺物検出状況	60
第49図	A-S D02遺物検出状況	61
第50図	Z地区検出遺構実測図	61
第51図	A-S D02出土遺物実測図(1)	64
第52図	A-S D02出土遺物実測図(2)	65
第53図	A-S D02出土遺物実測図(3)	66
第54図	A-S D02出土遺物実測図(4)	67
第55図	A-S D02出土遺物実測図(5)	68
第56図	A-S X08出土遺物実測図(1)	69
第57図	A-S X08出土遺物実測図(2)	70
第58図	A-S X08出土遺物実測図(3)	71
第59図	A-S X08出土遺物実測図(4)	72
第60図	A-S X08出土遺物実測図(5)	73
第61図	Z地区出土遺物実測図	74
第62図	A地区出土遺物実測図(1)	75
第63図	A地区出土遺物実測図(2)	75
第64図	A地区出土遺物実測図(3)	76
(2)今福北城跡		
第65図	今福北城跡トレンチ配置図	79
(3)盛林寺裏山古墳状隆起		
第66図	盛林寺裏山古墳状隆起トレンチ配置図	80
第67図	盛林寺裏山古墳状隆起調査風景	81
5. 鳥谷古墳群		
第68図	調査地及び周辺遺跡配置図	94
第69図	調査地配置図	95
第70図	3号墳・4号墳調査前測量図	96
第71図	4号墳墳丘平面図	97
第72図	4号墳墳丘断面図	98
第73図	石室実測図	99
第74図	排水溝実測図	100
第75図	第2トレンチ平面図及び断面図	101
第76図	第3トレンチ平面図及び断面図	102

第77図	出土遺物実測図(1)	-----	104
第78図	出土遺物実測図(2)	-----	105
6. 太田遺跡第5次			
第79図	調査地周辺遺跡分布図	-----	107
第80図	トレンチ配置図	-----	108
第81図	基本土層図	-----	108
第82図	遺構配置図	-----	108
第83図	第1トレンチ遺構配置図	-----	109
第84図	第2トレンチ遺構配置図	-----	110
第85図	第3トレンチ遺構配置図	-----	111
第86図	竪穴式住居跡1実測図	-----	112
第87図	出土遺物実測図(1)	-----	113
第88図	掘立柱建物跡2実測図	-----	114
第89図	掘立柱建物跡8実測図	-----	115
第90図	井戸1・2実測図	-----	116
第91図	井戸6実測図	-----	118
第92図	出土遺物実測図(2)	-----	119
第93図	出土遺物実測図(3)	-----	120
第94図	銭貨拓影	-----	121

付 表 目 次

1. 松ヶ崎遺跡第5次			
付表1	縄文時代前期土器の分類	-----	5
付表2	松ヶ崎遺跡出土の糞石の残存脂肪抽出量	-----	19
付表3	糞石中に分布するステロールの割合	-----	19
付表4	松ヶ崎遺跡出土動物遺存体種名表	-----	21
付表5	松ヶ崎遺跡出土植物遺存体種名表	-----	22
4. 京都縦貫自動車道関係遺跡			
(1) 桑原口遺跡第3次			
付表6	調査地一覧表	-----	51

付表 7	桑原口遺跡A地区 S D02出土土器観察表-----	83
付表 8	桑原口遺跡A地区 S X08出土土器観察表-----	87
付表 9	桑原口遺跡Z地区出土土器観察表-----	92

図 版 目 次

1. 松ヶ崎遺跡第5次

図版第 1	(1)調査地遠景(南東から) (2)調査地遠景(南から) (3)調査地全景(東から) 手前から第5・6・7・8トレンチ
図版第 2	(1)第5トレンチ全景(東から) (2)井戸 S E01検出状況(南から) (3)井筒検出状況(南から) (4) S E01出土桶 (5)第7トレンチ全景(西から) (6) S K04縄文土器出土状況(上が東)
図版第 3	(1)第7トレンチ全景(東から) (2)第7トレンチ西断面(東から) (3)第7トレンチ下層南断面(北から)
図版第 4	(1)石囲い炉 S X03検出状況(上が西) (2)第17層遺物出土状況(上が西) (3)第18-2層遺物出土状況(上が北)
図版第 5	第8トレンチ出土土器(1)
図版第 6	第8トレンチ出土土器(2)
図版第 7	(1)第7トレンチ S K04・第10層出土土器 (2)第8トレンチ出土石器・木器
図版第 8	(1)第5トレンチ S E01・ S X02出土遺物 (2) S E01出土桶細部(1) (3) S E01出土桶細部(2)
図版第 9	出土動物遺存体
図版第10	出土植物遺存体

2. 横枕遺跡第2次

図版第11	(1)調査地遠景(南東から) (2)調査地全景(南東から)
図版第12	(1)第1トレンチ全景(北東から) (2)第2トレンチ全景(北東から)
図版第13	(1)第1トレンチ調査前風景(南東から) (2)第1トレンチ谷の肩部掘削状況(南東から) (3)第1トレンチ谷の肩部完掘状況(南東から)

- 図版第14 (1)第1トレンチ谷の肩部完掘状況(北東から)
(2)柱穴4(北東から) (3)銅製帯金具出土状況(南から)
- 図版第15 (1)第2トレンチ掘立柱建物跡(北東から)
(2)第2トレンチ竪穴状遺構(北から) (3)第2トレンチ土坑群(南から)
- 図版第16 (1)S X 08掘削状況(南から) (2)S X 08完掘状況(南から)
(3)S X 05掘削状況(南から) (4)S X 05完掘状況(南から)
(5)S E 01完掘状況(南東から) (6)S K 01土層断面(南から)
(7)第5トレンチ石材散乱状況(西から) (8)五輪塔(東から)
- 図版第17 (1)第2～5トレンチ近景(南西から)
(2)第3トレンチ全景(南から) (3)第4トレンチ全景(北東から)
- 図版第18 出土遺物(1)
- 図版第19 出土遺物(2) (1)土師器 (2)黒色土器・須恵器 (3)緑釉陶器
- 図版第20 出土遺物(3) (1)無釉陶器・丹塗り土師器 (2)石製品・輸入陶磁器
(3)漆器椀

3. 井町古墳群

- 図版第21 (1)調査前全景(空撮、右上が北) (2)調査前全景(東から)
- 図版第22 (1)1・2号墳区画溝断面(東から) (2)1・2号墳区画溝(東から)
- 図版第23 (1)2号墳全景(北東から) (2)2号墳完掘後全景(北東から)
- 図版第24 (1)2号墳第1主体部(北西から) (2)2号墳第1主体部完掘後(北西から)
- 図版第25 (1)2号墳第2主体部(北西から) (2)2号墳第2主体部完掘後(北西から)
- 図版第26 (1)2号墳第3主体部(北西から)
(2)2号墳第3主体部遺物出土状況(南西から)
- 図版第27 (1)2号墳第3主体部完掘後(北西から) (2)3号墳全景(北東から)
- 図版第28 (1)3号墳主体部(北西から) (2)出土遺物(鉄製品)

4. 京都縦貫自動車道関係遺跡

(1) 桑原口遺跡第3次

- 図版第29 (1)桑原口遺跡遠景(南東から) (2)A地区全景(西から)
- 図版第30 (1)A-S D 02検出状況(北西から) (2)A-S D 02検出状況(南から)
(3)A-S D 02埋土の状況(南から)
- 図版第31 (1)A-S D 02遺物出土状況(南東から) (2)A-S D 02遺物出土状況(東から)
(3)A-S D 02出土遺物の記録風景
- 図版第32 (1)A-S X 08掘削風景 (2)A-S X 08遺物出土状況(西から)
(3)A-S X 08(上から)
- 図版第33 (1)A-S X 08木の根掘削風景(北西から)
(2)A-S X 08木の根検出状況(西から)

- (3) A-S X08木の根検出状況(北東から)
- 図版第34 (1) A-S X08遺物出土状況(真上から) (2) A-S X08遺物出土状況(西から)
(3) A-S X08遺物出土状況(真上から)
- 図版第35 (1) Z-S D01検出状況(南から) (2) Z-S D01検出状況(南東から)
(3) Z-S D02検出状況(南から)
- 図版第36 出土遺物(1)
- 図版第37 出土遺物(2)
- 図版第38 出土遺物(3)

5. 鳥谷古墳群

- 図版第39 (1) 調査地遠景(西上空から東をみる、調査地は中央下)
(2) 調査前風景(東から)
- 図版第40 (1) 4号墳墳丘全景 (2) 4号墳石室全景
- 図版第41 (1) 石室内遺物出土状況(南から) (2) 排水溝検出状況(南から)
(3) 排水溝検出状況(南から)
- 図版第42 (1) S X01検出状況(南から) (2) S X01完掘状況(西から)
(3) 2トレンチ完掘状況(西から)
- 図版第43 (1) 墳丘盛り土土層断面(南面・西面)
(2) 裏込め土堆積状況(奥壁裏・西側壁裏) (3) 3号墳外護列石(南から)
- 図版第44 出土遺物(1)
- 図版第45 出土遺物(2)
- 図版第46 出土遺物(3)

6. 太田遺跡第5次

- 図版第47 (1) 調査地空中写真(真上から) (2) 調査地空中写真(南から)
- 図版第48 (1) 調査地空中写真(西から) (2) 調査地空中写真(東から)
- 図版第49 (1) 1・2トレンチ全景(真上から) (2) 3トレンチ全景(真上から)
- 図版第50 (1) 調査前近景(南西から) (2) 1トレンチ全景(北から)
- 図版第51 (1) 1トレンチ全景(南から)
(2) 1トレンチ道路遺構・掘立柱建物跡2全景(南西から)
- 図版第52 (1) 竪穴式住居跡1・2全景(北から) (2) 竪穴式住居跡1・2全景(南から)
- 図版第53 (1) 2トレンチ全景(南から) (2) 3トレンチ全景(南から)
- 図版第54 (1) 3トレンチ西側拡張部掘立柱建物跡4全景(北から)
(2) 掘立柱建物跡8全景(北から)
- 図版第55 (1) 掘立柱建物跡8全景(西から) (2) 1・2トレンチ道路遺構全景(北東から)
- 図版第56 (1) 井戸1全景(南から) (2) 井戸3全景(西から)
(3) 井戸4全景(南から)

- 図版第57 (1)井戸5全景(南から) (2)井戸6全景(北から)
(3)井戸6断面(南から)
- 図版第58 (1)柱穴内遺物出土状況(西から) (2)土坑1遺物出土状況(西から)
(3)土坑2礫検出状況(東から)
- 図版第59 (1)掘立柱建物跡7(南から) (2)掘立柱建物跡6(南西から)
(3)掘立柱建物跡5周辺柱穴検出状況(西から)
- 図版第60 (1)掘立柱建物跡2柱穴内石材検出状況(西から)
(2)掘立柱建物跡2柱穴内石材検出状況(西から)
(3)掘立柱建物跡2柱穴内石材検出状況(西から)
- 図版第61 (1)2トレンチ溝1東断面(西から) (2)1トレンチ溝2東断面(西から)
(3)3トレンチ溝2西断面(東から)
- 図版第62 出土遺物(1)
- 図版第63 出土遺物(2)
- 図版第64 出土遺物(3)

1. 松ヶ崎遺跡第5次発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、丹後リゾート関連事業として計画された国道178号線拡幅工事に伴う事前調査として、京都府土木建築部の依頼を受けて(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。調査地は、京都府竹野郡網野町大字木津小字松ヶ崎に所在し、弥生時代前期から中期及び奈良時代の集落と推定されている松ヶ崎遺跡の範囲に含まれている。

松ヶ崎遺跡の範囲は、昭和35年から39年にかけて行われた3次の試掘調査によって明らかになっている。昨年度の第4次調査では、奈良時代後期の遺物を含む地層や弥生時代前期の層が確認され、水路遺構などが見つかっている。

今回の調査では、江戸時代の水路跡、古墳時代前期の井戸を検出し、さらに下層から縄文時代前期初頭の石囲い炉と、同時代の遺物を包含する地層について調査を行った。

現地の調査は、当調査研究センター主任調査員戸原和人が担当した。平成9年7月7日から開始し、同年9月10日をもって埋め戻しを完了した。調査面積は、合計で約460㎡となった。この調査に係わる経費については、京都府土木建築部の負担による。調査にあたっては、京都府峰山土木、同丹後教育局、網野町教育委員会、同郷土資料館をはじめ、現地調査に参加していただいた作業員、調査補助員に多大の苦勞をかけた。また、調査中の調査事務所については網野町企画室をはじめ、さまざまな方がたのお世話になった。感謝する。(戸原和人)



第1図 調査地位置図(1/25,000)

2. 位置と環境(第1図、図版第1・2)

松ヶ崎遺跡は、京都の北部で日本海に面し、丹後半島の西側の付け根に位置する。

松ヶ崎遺跡の周辺の遺跡としては、調査地の北約1.1kmに縄文時代中・後期の浜詰遺跡、北東約7kmには縄文時代早期の宮ノ下遺跡、北東約6kmには縄文時代中期の新樋越川遺跡、東約6kmには縄文時代中・後期の柳谷口遺跡があり、また西約3kmには久美浜町に所在する史跡函石浜遺跡がある。また、大宮町の裏陰遺跡、舞鶴市の志高遺跡は、縄文時代前期の遺跡として知られている。この中で、今回の調査で明らかになった松ヶ崎遺跡の状況を比較する上で、最も好資料が出土している遺跡としては、宮ノ下遺跡があげられる。

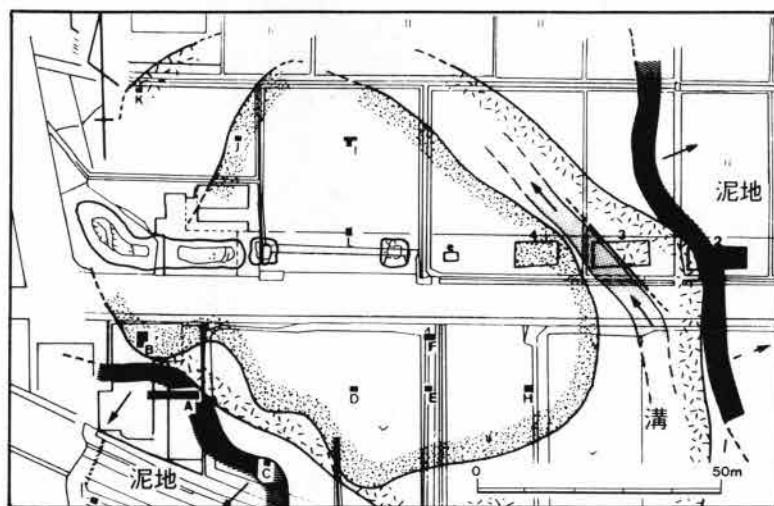
宮ノ下遺跡の立地状況は、遺跡付近の基盤をなす地層(海成砂からなる第三紀層)の上に、層厚約100cmの赤褐色ローム層、層厚約15cmの灰褐色粘土層、多量の木炭片を混入する層厚約10cmの黒色粘土層が堆積する。縄文時代前期の土器は、以上の三層から出土している。

松ヶ崎遺跡の立地状況は、網野町浜詰から久美浜町湊にかけて分布する、日本海側で三大砂丘の一つに入る丹後砂丘の後背地にあたり、古砂丘の分布域である。縄文時代前期の層は、この砂丘砂に覆われる状況で検出した。

両遺跡の立地状況及び出土土器の概要には相似性がみられる。土器の時期差については、今後の課題となるが、おそらく松ヶ崎遺跡出土土器の方が、若干時期が新しくなるのではないだろうか。また、この地域の縄文時代早期末～前期初頭の遺跡は、古砂丘下で形成されていることがいえるのではないだろうか。

以上、松ヶ崎遺跡の立地状況と出土遺物を比較する際に、最も近い遺跡として宮ノ下遺跡の調査経過を述べた。両者とも、立地状況及び出土土器の概要は相似性がある。このことから、この地域の縄文時代早期末～前期初頭の遺跡は、古砂丘の下の粘土層で形成されていることが、今回の松ヶ崎遺跡の発掘調査と宮ノ下遺跡の調査で明らかになった。

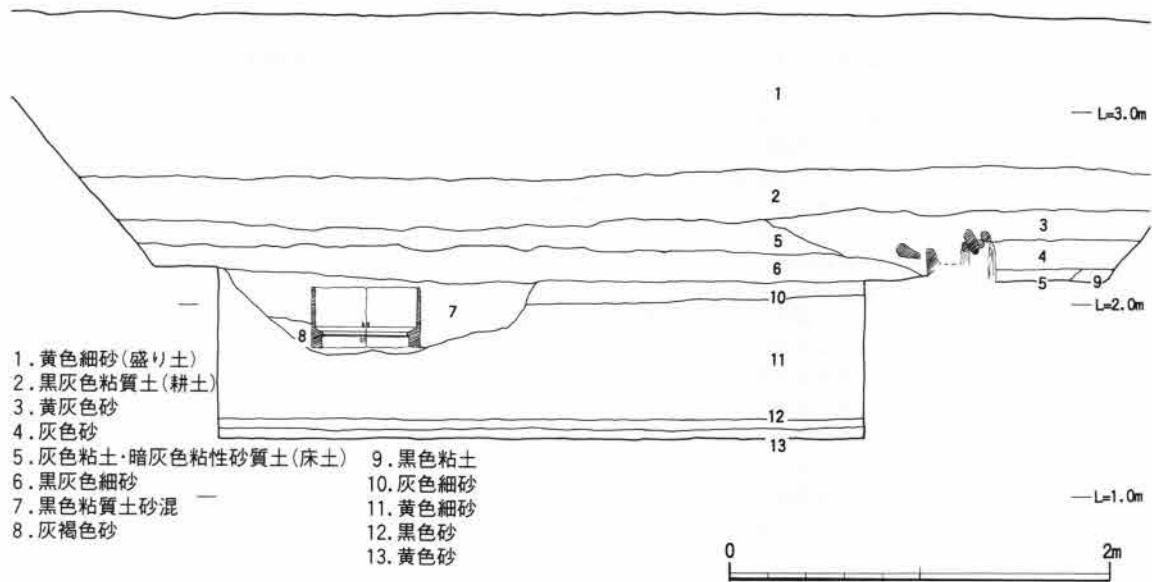
(堀井泰樹)



第2図 調査トレンチ位置図

3. 調査の概要

調査地は、民家への進入路の確保や埋設物などを避け4か所に分かれた。その地区名は、昨年度の調査トレンチに合わせて続き番号とし、東から第5トレンチ～第8トレンチとした(第2図・図版第1-(3))。以下、調査トレンチごとに調査の概要についてふれる。



第3図 第5トレンチ北壁断面図

(1)検出遺構・層位

①第5トレンチ(第3・4図、図版第2-(1)~(4)・8)

古墳時代前期の土器溜まりや、井戸を検出した。

地層は、盛り土層、旧水田耕作土、床土が海拔約2.3mまで堆積している。その下層には、黒灰色細砂層、灰色細砂層、黄色細砂層が水平に堆積しており、黒灰色細砂層と灰色砂層の間には、部分的に暗灰色砂層や黒色粘質土砂混層の堆積が認められる。この面で古墳時代前期の井戸SE 01や、同時期の土器溜まりを検出した。海拔約2.2mの土器溜まりSX 02からは、弥生時代前期から中期の土器が混入して出土している。

井戸SE 01 調査地の北側で検出した。直径約1.5m・深さ約0.45mの掘形に桶を転用した井戸枠が使用されていた。桶は、井戸に使用する段階で底板がはずされていた。この井戸の掘形内からは、古墳時代前期の二重口縁壺などが出土した(図版第8-(1))。

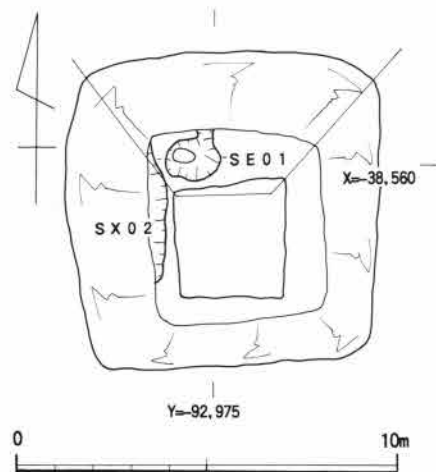
古墳時代遺物包含層SX 02 調査地の西側で検出した。厚さ10cm未満の黒色粘質土砂混層内からは、弥生時代前期から中期の土器片とともに古墳時代の土師器と、ガラス玉1点が出土した(図版第8)。

②第6トレンチ(第2図・図版第1-(3))

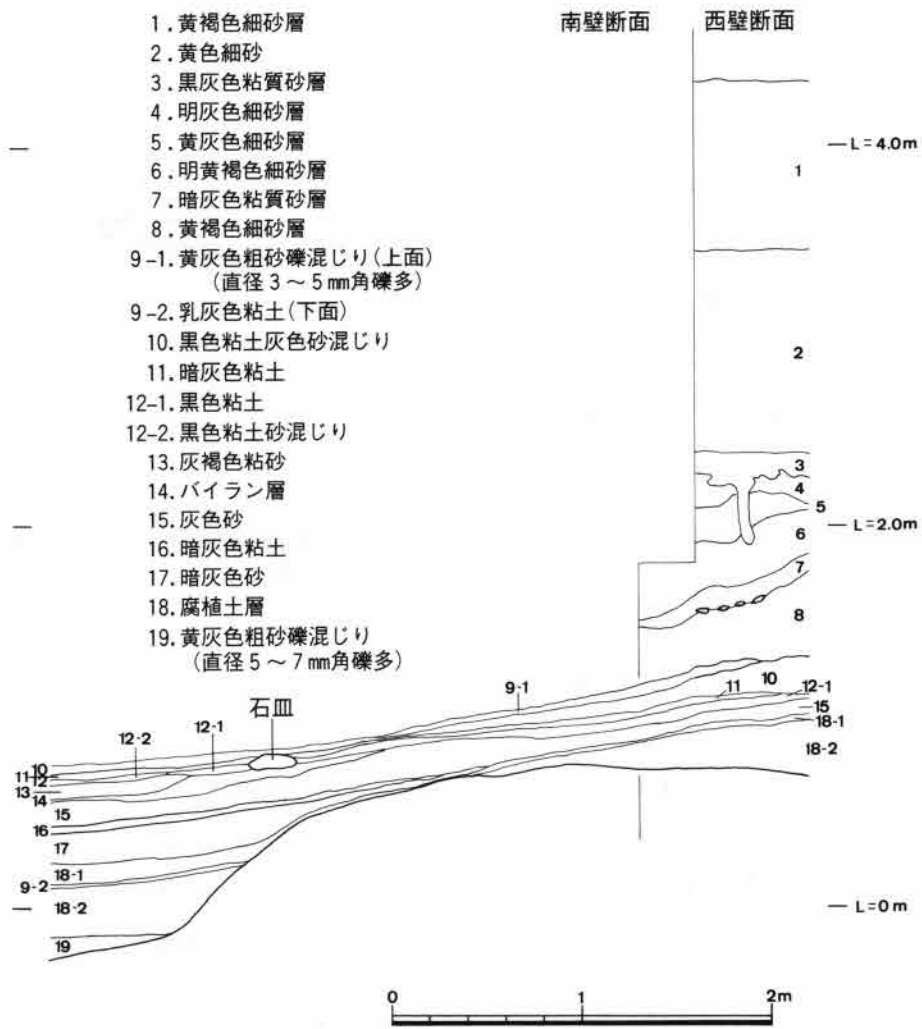
地層と遺構の有無を確認した後、土置き場としたトレンチである。造成前は第5・6トレンチが一筆の水田であったこともあり、基本層位は第5トレンチと同様である。雨で壁面が崩落して、トレンチの西側断面に弥生時代・古墳時代の遺物を包含する黒色粘質土砂混層を一部で確認したが、遺構面は確認できなかった。

③第7トレンチ(第6図、図版第2-(5)・(6))

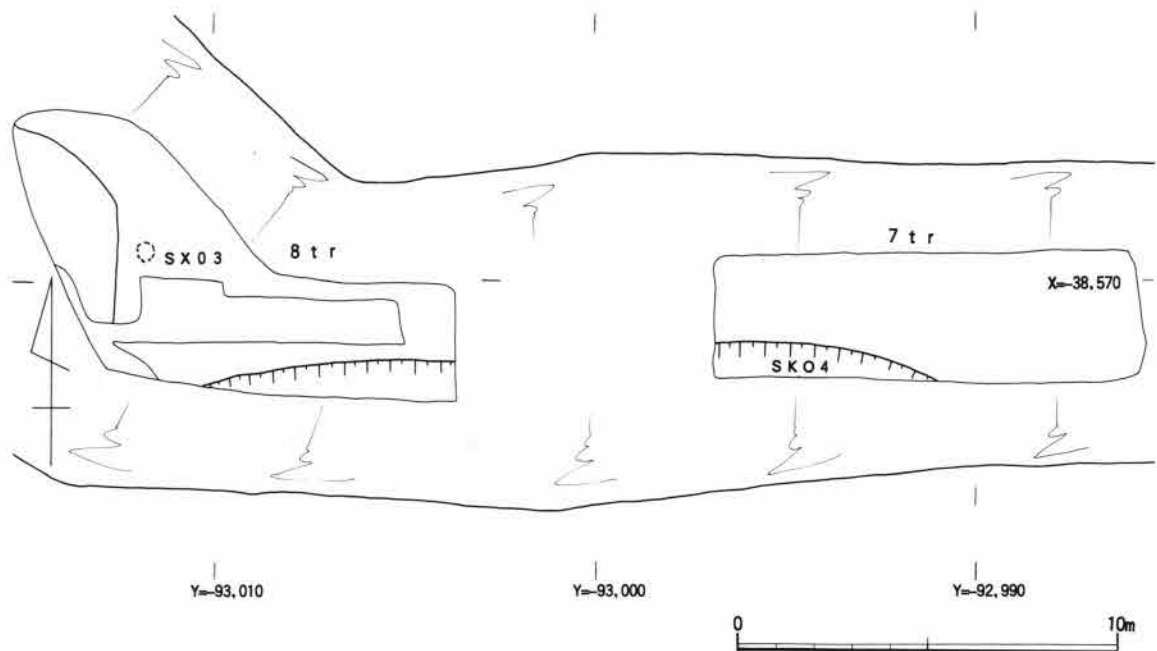
海拔約1.4mで縄文時代前期初頭の遺物が出土する



第4図 第5トレンチ平面図



第5図 第8トレンチ断面図



第6図 第7・8トレンチ平面図

黒色砂層を検出した。トレンチ西よりの南側で前期初頭の遺物が出土する落ち込みSK04を検出した。

④第8トレンチ(第5・6図、図版第3・4)

層位は、現在の道路面(海拔約4.4m)から1.6m下までは黄褐色系の細砂層で、その層の下に堆積する黒灰色粘質砂層を掘り込んでおり、松の丸太と杭を用いた江戸時代の護岸工事の痕跡を検出した。黒灰色粘質砂層(第3層)の上面からは、土師器片が出土している。

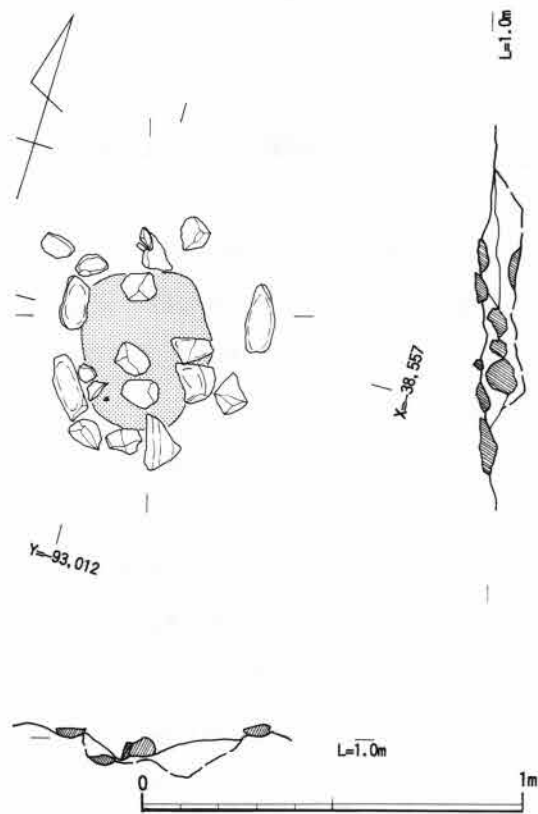
海拔1.8~1.5mでは、黄褐色から青灰色の細砂層が堆積しており、両層の間には暗灰色粘質砂層(第7層)が斜めに堆積しており、拳大の円礫と弥生土器片が出土している。

海拔1.5~0.8mの黒色粘土層(第12-1層)からは、縄文土器が出土している。この黒色粘土層は、調査地の西に向かって高くなっており、南西の山の方向に地形が上がると考えられる。

この山裾にあたる部分で、黒色粘土層に埋まり、パイラン層(第14層)を掘り込んで築かれた石囲い炉SX03を検出した。

黒色粘土層以下では、トレンチ中央部で東西に断ち割りを行い、地層及び遺物の出土状況を確認する調査を海拔約-0.8mまで行った。

石囲い炉SX03(第7図・図版第4-(1)) 南北約1.3m・東西約0.9mの楕円形の掘り込みに河原石の平坦面を内傾させ囲む構造で、内部には炭が散乱していた。



第7図 石囲い炉SX03実測図

付表1 縄文時代前期土器の分類

4. 出土遺物

(1)縄文時代

縄文時代前期初頭と思われる土器は、黒色粘土層(第12層)以下、腐植土層(第18層)までの間で出土した。前期以外の土器は、黒色粘土灰色砂混層(第10層)と暗灰色粘土層(第11層)から、中期・後期と考えられる土器が出土している。

記号	器形		記号	調整(地文)		記号	施文
	口縁	胴部		器表面	器裏面		胴部
A	山形口縁	キャリハ ^o -形	I	条痕	条痕	a	棒状押引文
B	平口縁	キャリハ ^o -形	II	条痕	ナデ	b	爪形刺突文
C	山形口縁	砲弾形	III	条痕+ナ ^o	条痕+ナ ^o	c	貝殻刺突文
D	平口縁	砲弾形	IV	縄文	条痕	d	ヘラ描き沈線文
E	平口縁	鉢形	V	縄文	条痕+ナ ^o	e	半截竹管文
F	その他	(不明含む)	VI	ナデ	条痕+ナ ^o	f	隆帯貼り付け文
			VII	縄文	ナデ	g	縄文
			VIII	縄文・ナ ^o	ナデ	h	羽状縄文
			IX	ナデ	ナデ	i	結節縄文
					j	刻み目文	
					k	無文	
					l	貝殻斜格子文	

前期の土器は、器形から6分類(A～F)、器面の調整により9分類(I～IX)、施文により12分類(a～i)した(附表1)。以下、各層ごとに上記分類に従い土器を述べる。

A. 第8トレンチ

a. 第18-2(第19層直上)層出土土器(第8図・図版第5)

この層からは、山形口縁キャリパー形土器(A群)と、平口縁砲弾形土器(D群)が中心に出土した。

①山形口縁キャリパー形土器

A VIIa(第8図1) 器表面はRLの縄文、器裏面は横方向にナデ。口縁部は、端部面取りをしている。口縁端部には、爪形刺突文を施している。胴部屈曲部にはナデをした後、2列の棒状の押引文を施している。

A VIIba(第8図2) 器表面は、LRの縄文後ナデ、器裏面はていねいなナデ。口縁部は、端部面取りをしている。口縁端部には爪形刺突文。口縁部には5列の爪形刺突文。その直下に3列の棒状押引文、胴部屈曲部にも3列の棒状押引文。器厚は4mmと非常に薄い。

A VIIk(第8図4) 器表面はRLの縄文、器裏面はナデ。口縁は丸くおさめている。

②山形口縁砲弾形土器

C VIIk(第8図3) 器表面はRLの縄文、器裏面はナデ。口縁端部は丸くおさめている。平口縁の一部が突出する。この層からの山形口縁砲弾形土器の出土は少ない。

③平口縁砲弾形土器

D VIIe(第8図5) 器表面はLRの縄文、器裏面はナデ。口縁部は、端部面取りをしている。口縁端部には、ヘラ状工具による刻み目文。口縁部に縄文を施した後、半截竹管文を施している。

D VIIk(第8図6) 器表面はナデ、器裏面は条痕調整の後ナデ。口縁部は、軽く端部面取りをしている。口縁端面に爪形文を施す。この土器は、口縁部付近に破損後の補修孔をもつ。

D VIIk(第8図7) 器表面はLRの縄文、器裏面はナデ。口縁部は、端部面取りをしている。口縁部の傾きが強く、キャリパー形の可能性もある。

D IXj(第8図8) 器表面・器裏面ともナデ。口縁部は、丸くおさめている。器表面には部分的に刻み目文がみられる。凹状の擬口縁をもつ。

④その他の器形

F Ic(第8図9) 器表面・器裏面ともに二枚貝による横方向の条痕を施す。器表面には貝殻刺突文を連続的に施す。

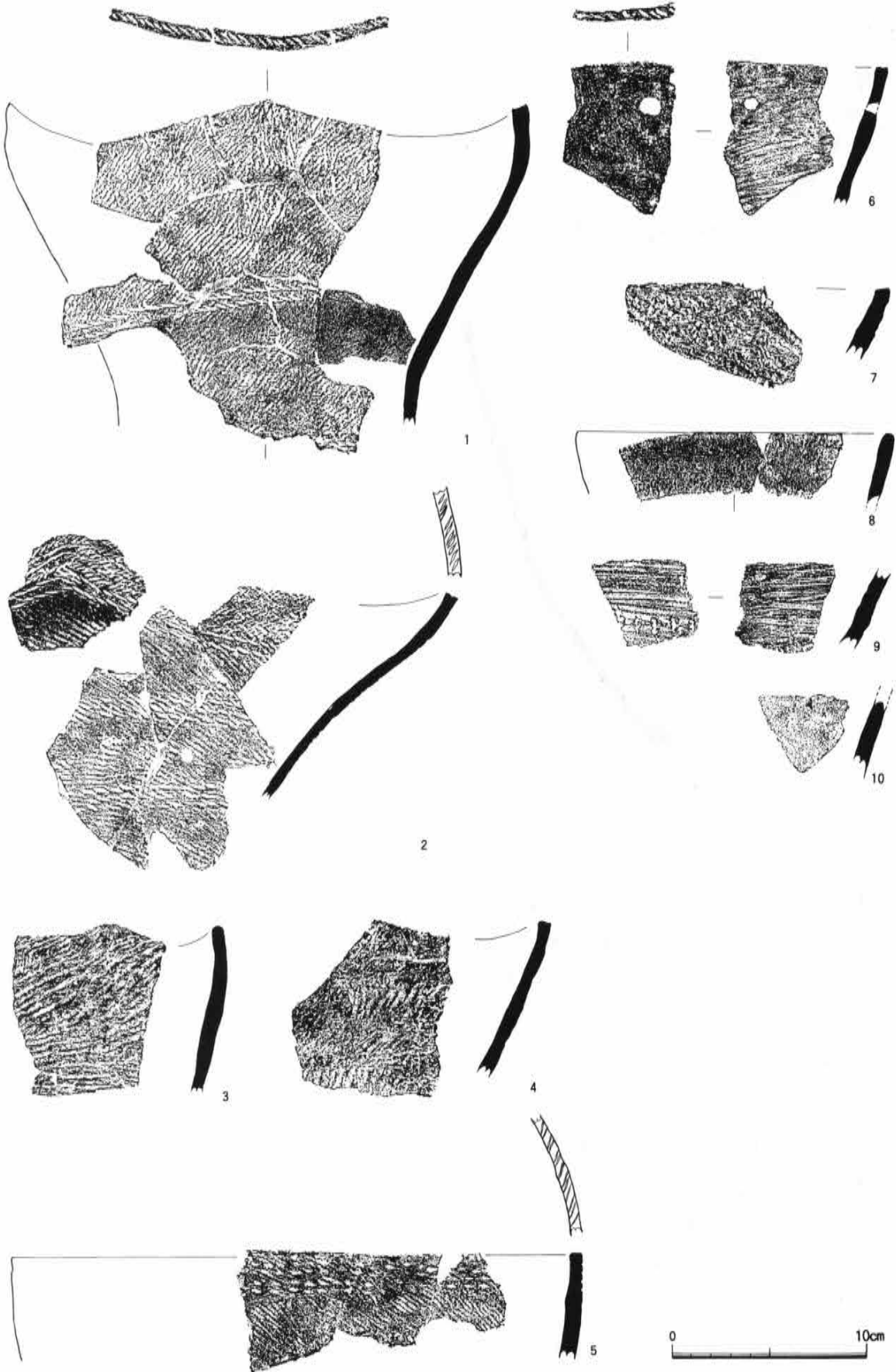
F VIIk(第8図10) 器表面は縄文、器裏面はナデ。破片上端部には、凸状の擬口縁をもつ。

b. 第17層出土土器(第9・10図、図版第6)

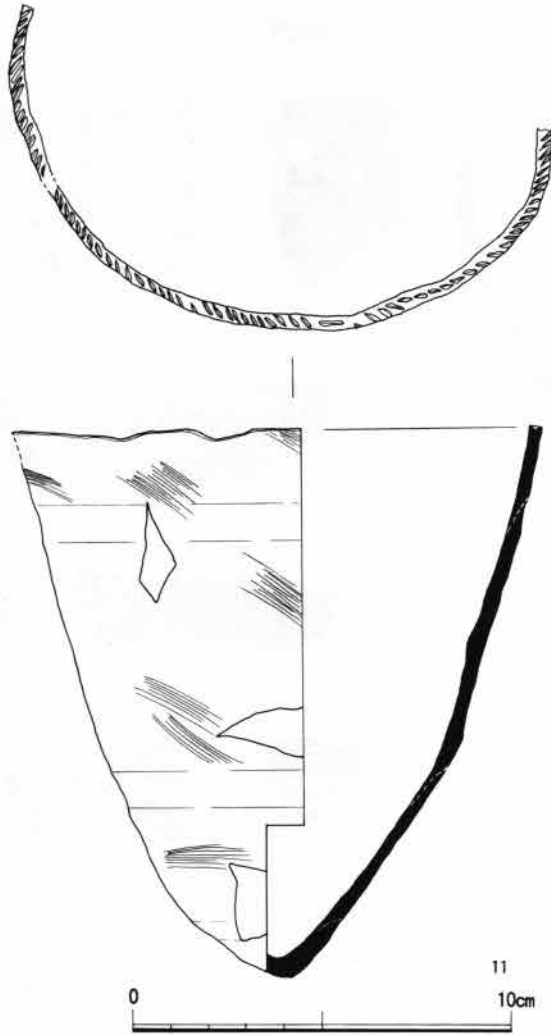
この層からは、山形口縁砲弾形土器(C)が1点出土している。第17層としているが、第18層直上としてとらえている。また、平口縁砲弾形土器が12点出土している。

①山形口縁砲弾形土器

C VIIk(第10図17) 器表面はナデ、器裏面は二枚貝で調整後軽くナデ。口縁端部はナデ。施文は特にみられない。



第8図 第8トレンチ第18-2層(第19層直上)出土遺物拓影



第9図 第8トレンチ第17層出土土器実測図

②平口縁砲弾形土器

D II k(第9図11) 器表面は条痕調整の後ナデ、器裏面はナデ。口縁は、端部面取りをしている。口縁端部に爪形刺突文を施している。完形品である。

D VII k(第10図12~14) 6点出土している。器表面はRLの縄文(12)、またはLRの縄文(13・14)、器裏面はすべてナデ。口縁は、端部面取りをしている。13を除き、口縁の端部に爪形刺突文を施している。13は、端部を面取りするだけである。

D VII b(第10図15) 器表面はRLの縄文、器裏面はナデ。口縁は、端部面取りをしている。口縁端部に爪形刺突文を施している。胴部には2列の爪形刺突文を施している。

D IX k(第10図16) 3点出土している。胎土の具合などから同一個体と思われる。器表裏面ともナデ。口縁は、端部面取りをしている。口縁部に爪形刺突文を施す。器表面には施文はみられない。

D I c(第10図18) 1点出土している。器

表面を二枚貝と思われる工具で縦方向に調整。ナデていないため条痕が残されている。器裏面は器表面と同じ二枚貝で、横方向に調整されている。施文には、意図的に二枚貝調整を残している施文と、口縁部外面に2列の刺突を施している。口縁端部には、二枚貝による連続刺突の施文をしている。口縁部外面の2列刺突と同一の工具を使用していると思われる。この土器は、松ヶ崎遺跡出土土器の中でも、特異な文様を施している。

③その他の器形

F I k(第10図19) 器表裏面とも二枚貝による横方向の条痕。器形は不明。

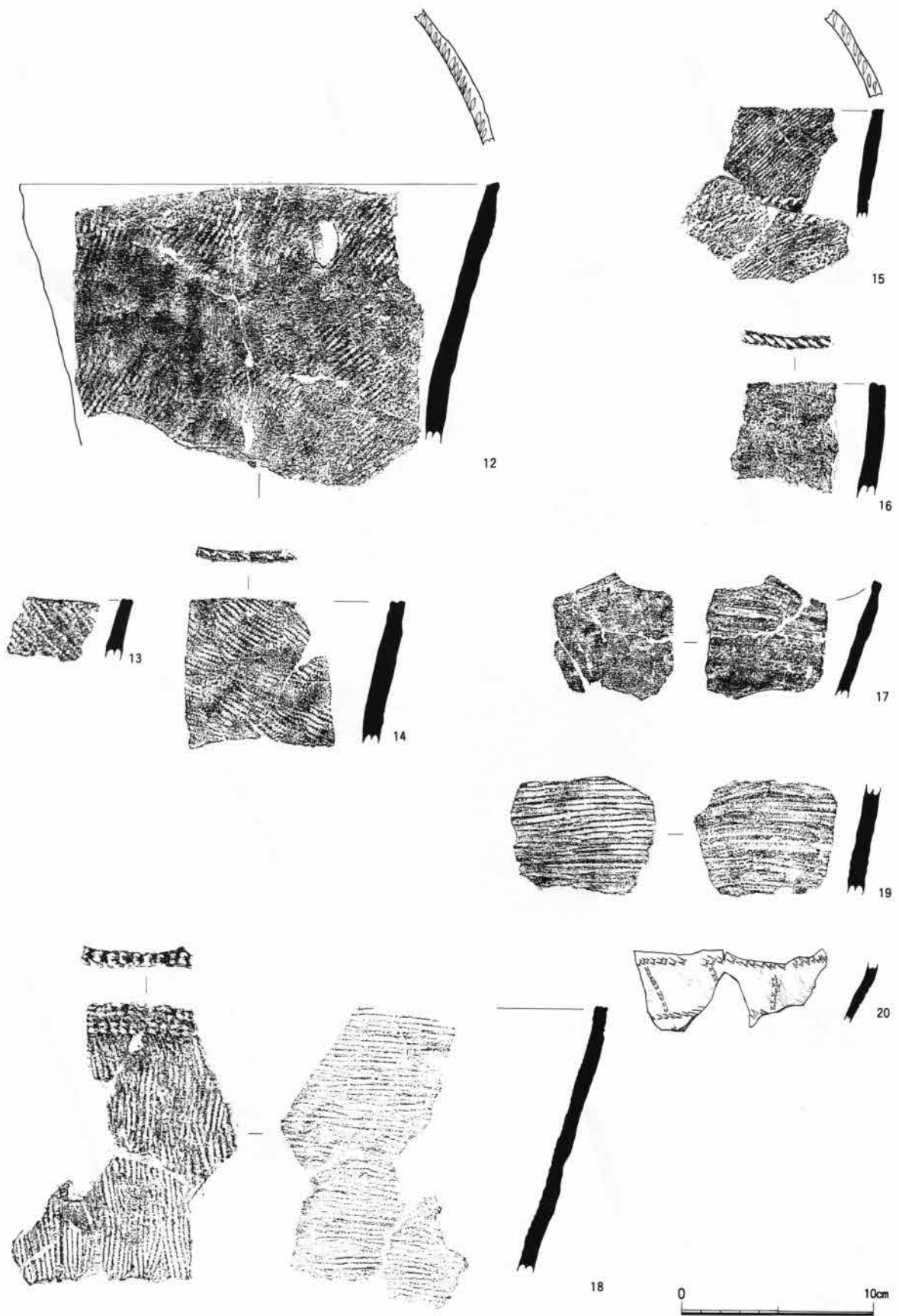
F II c(第10図20) 小形品で器種不明の胴部片である。胴部に貝殻刺突による二連一対の連続刺突を縦・横に施す。

c. 第15層出土土器(第11図・図版第5)

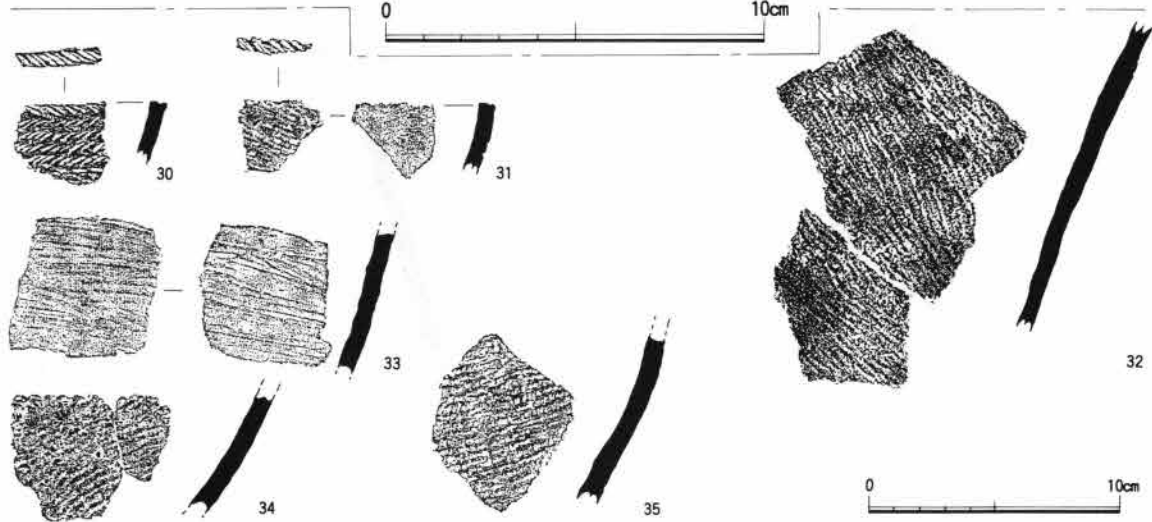
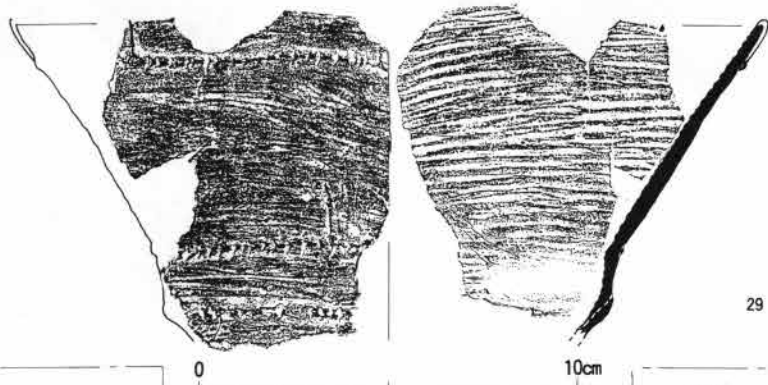
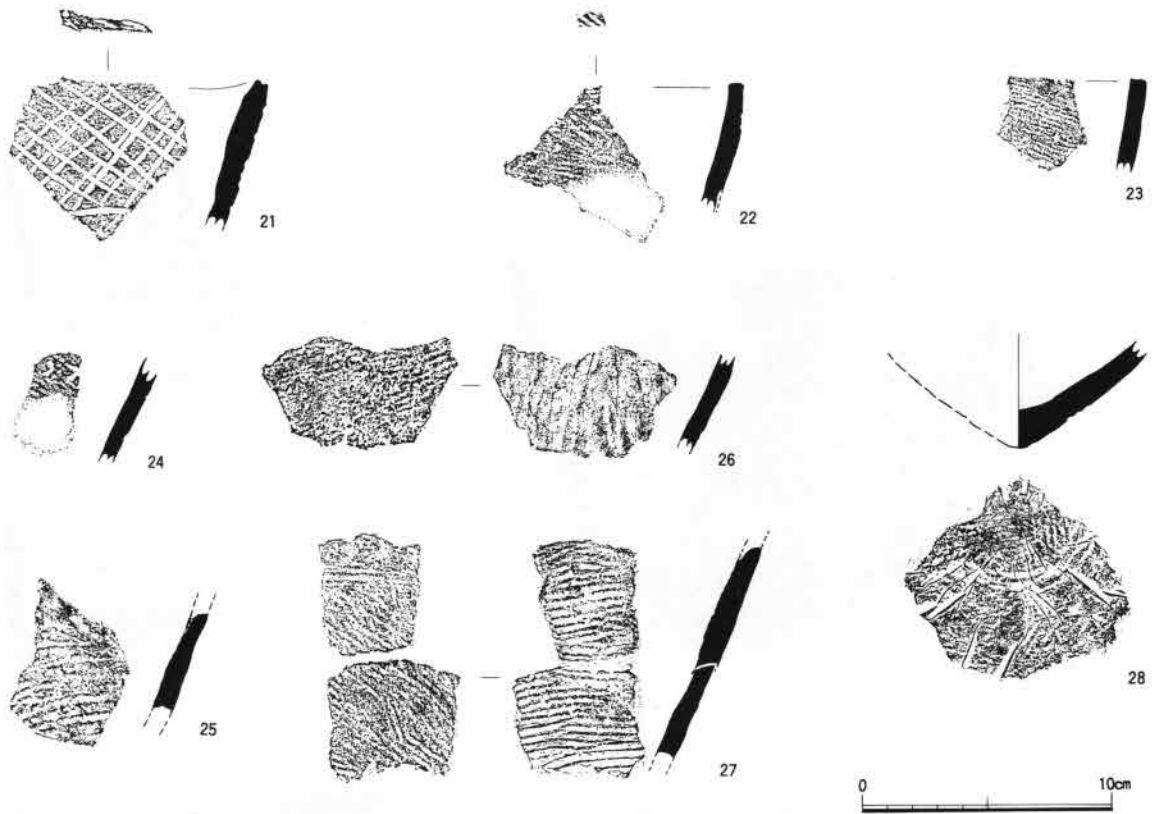
この層からは山形口縁弾形土器(C)と、平口縁砲弾形土器(D)の二種類の土器が出土した。

①山形口縁弾形土器

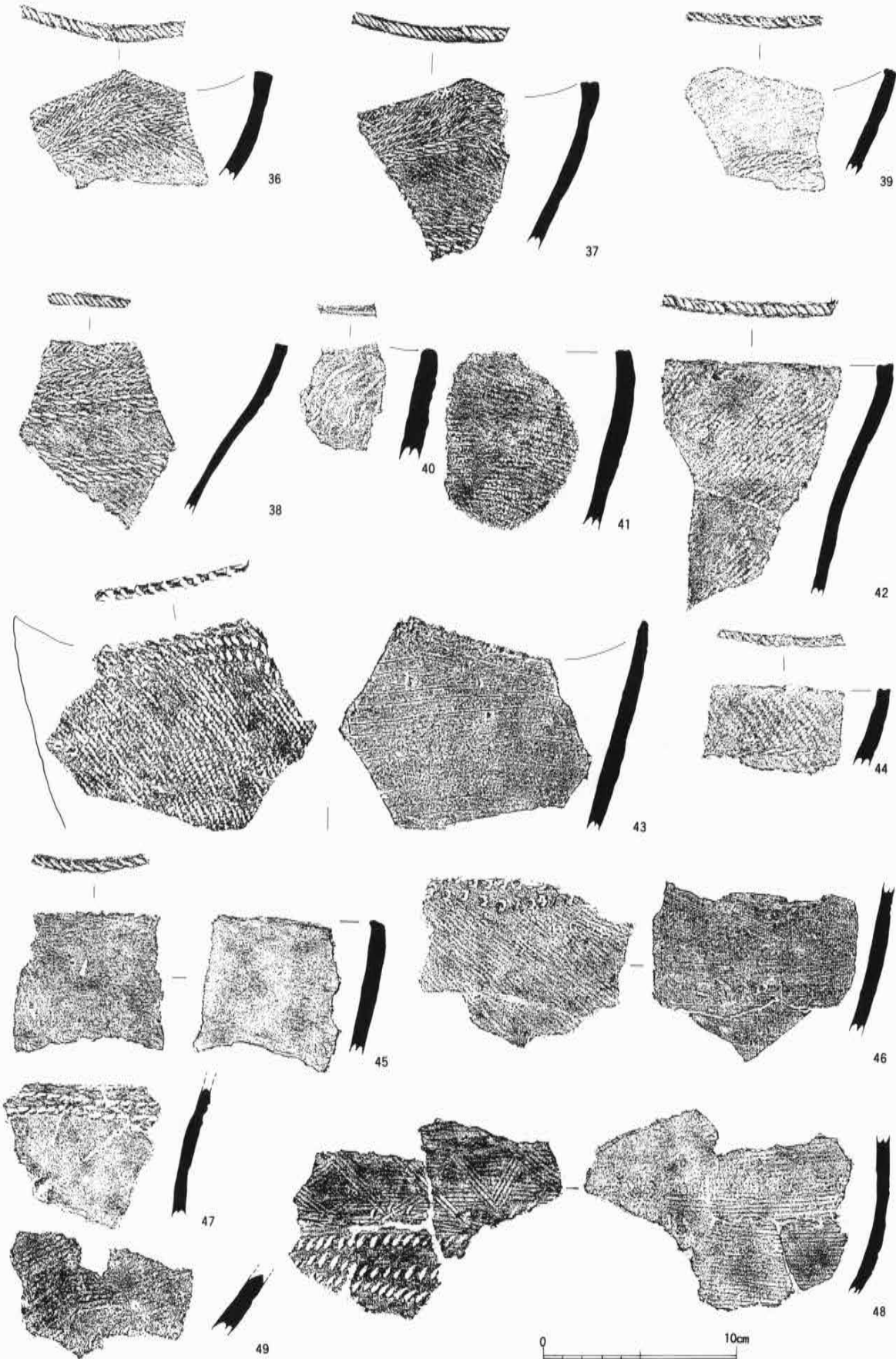
C IX d(第11図21) 器表裏面ともナデ。口縁はわずかに面取りをしている。口縁部には、端面に爪形刺突文を施している。器表面は、口縁部下部にヘラ状工具で斜格子状に沈線文を施してい



第10図 第8トレンチ第17層出土土器拓影・実測図



第11図 出土土器拓影(1)
21~28. 第8トレンチ第15層 29~35. 第8トレンチ第12-2層



第12図 第8トレンチ第12-1層出土土器拓影

る。それを画するかのよう、1条の沈線文を施している。

②平口縁砲弾形土器

D VIIe(第11図22) 器表面はLRの縄文、器裏面は横方向にナデ。口縁は、端部面取りを施している。口縁端部にはヘラ状工具による刻み目文を施す。口縁外面に半截竹管文を施している。この個体は、5と同一のものである。

D VIIb(第11図23) 器表面はLRの縄文、器裏面は横方向のナデ。口縁は、端部面取りを施している。

③その他の器形

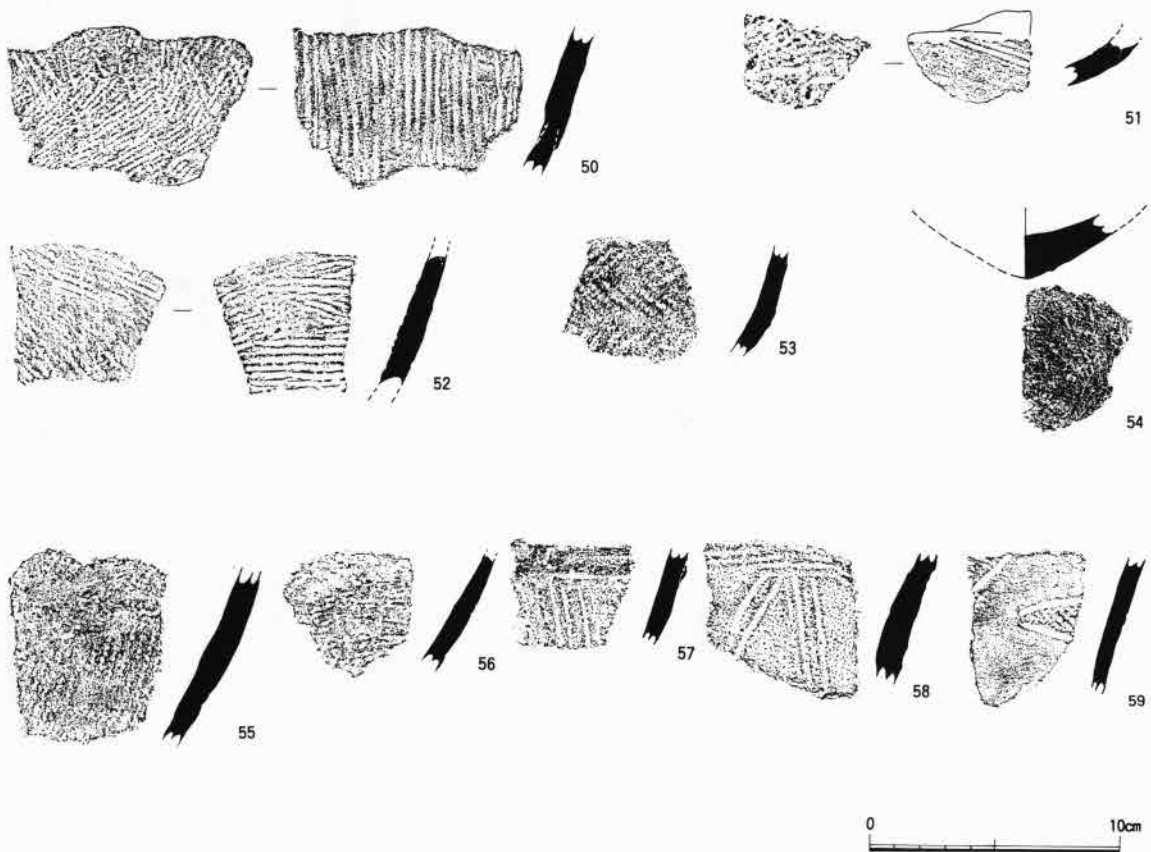
F VIIe(第11図24) 器表面はLRの縄文、器裏面は横方向のナデ。器表面には半截竹管文が施されている。

F IVk(第11図25) 器表面は縄文、器裏面は横方向のナデ。破片上部には凸状の、下部には凹状の擬口縁をもつ。

F V k(第11図26) 器表面はRLの縄文、器裏面は縦方向の条痕調整。施文はみられない。

F I k(第11図27) 器表面は、上部に横方向の、下部に縦方向の条痕調整。器裏面は、横方向の条痕調整。施文はみられない。破片の中央部に凸状・凹状の擬口縁が接合する。

底部(第11図28) 器表面は縄文、器裏面はナデ。尖底。



第13図 出土土器拓影(2)

50~54. 第8トレンチ第12-1層

55~59. 第8トレンチ第10層

d. 第12層出土遺物

湧き水と砂の流入する状況で、第12-1層、第12-2層と細分して土器を取り上げたが、ほぼ同一の時期と考えられる。この第12層から多くの縄文土器が出土している。縄系の土器はこの層から出土している。

ア. 第12-2層(第11図・図版第6)

①平口縁鉢形土器

E I f(第11図29) 器表裏面は条痕調整の後ナデ。口縁部は、端部を丸くおさめている。器表面には、口縁端部から粘土紐貼り付けによる2本以上の微隆起帯を垂下させ、口縁下で外周する1本の刻み目を施した隆起帯に接続する。胴部の屈曲部にも同様の隆起帯を外周させ、縦の隆起帯を上方に貼り付ける。胴部から底部にかけての屈曲部でも隆起帯が1本外周している。器形は鉢形の丸底もしくは尖り底で、平口縁もしくは小突起とも考えられる。胎土は、内外面・断面とも黒色を呈する。

②山形口縁キャリパー形土器

A VIIba(第11図30) 器表面はLRの縄文、後ナデ。器裏面はナデ。口縁は、端部面取りをしている。口縁部には端部に爪形刺突文。器裏面には5列の爪形刺突文、その直下に3列の棒状押引文を施す。口縁端部には連続刺突文を施す。

③平口縁砲弾形土器

D VIIe(第11図31) 器表面はLRの縄文、器裏面はナデ。口縁は、端部面取りをしている。口縁端部には爪形刺突文を施す。器表面には半截竹管文を施す。

④その他の器形

F VIIk(第11図32・34・35) 器表面はLRの縄文(32)、とRLの縄文(34・35)。器裏面はナデ。施文はみられない。34には凸状・凹状の擬口縁を、35には凸状の擬口縁をもつ。

F I k(第11図33) 器表裏面とも横方向のナデ。凸状・凹状の擬口縁をもつ。

イ. 第12-1層(第12図・図版第6)

①山形口縁キャリパー形土器

A VIIba(第12図36~38) 6点が出土している。器表面は、LRの縄文の後ナデ。器裏面は、ナデ調整。口縁端部は、面取りをしている。口縁端部には爪形刺突文。口縁部は5列の爪形刺突文、そのすぐ下で3列の棒状押引文、胴部の屈曲部に同じように3列の棒状押引文。

A VIIa(第12図39) 器表面はRLの縄文の後ナデ。器裏面は、いねいなナデ調整。口縁端部は、面取りをしている。口縁端部に爪形刺突文。胴部屈曲部付近に3列の棒状押引文。

②平口縁キャリパー形土器

B VIIk 器表面はわずかにLRの縄文、器裏面はナデ。口縁端部が無文の41と、器表面にRLの縄文地で、内面をナデ調整し、口縁端部に爪形刺突文を施す42がある。

③山形口縁砲弾形土器

C IXk(第12図40) 器表裏面及び端部をナデ調整する無文の土器。

C VIIb(第12図43) 口縁端部を丸くおさめる数少ない土器。器表面にLRの縄文、器裏面をナデ調整。口縁端部は、面取りをしている。口縁端部に爪形刺突文。口縁端部外面に2列の爪形刺突文。

④平口縁砲弾形土器

D VIIi(第12図44) 器表面はLRの縄文、器裏面をナデ調整。口縁端部に爪形刺突文を施す。口縁の下方に結節縄文を施す。

D IXk(第12図45) 器表裏面ともヨコナデ調整。口縁端部は、面取りをしている。口縁端部に爪形刺突文を施しているものが3点出土している。

⑤その他の器形

F VIIe(第12図46) 平口縁砲弾形土器と考えられる。器表面はLRの縄文、器裏面はナデ。口縁部外面には半截竹管による2列の連続刺突文を施す。

F VIIIb(第12図47) 器表面は縄文後ナデ、器裏面はヨコナデ。口縁部に2列の爪形刺突文を施している。上部には擬口縁が認められる。

F I b1(第12図48) 器表面は上段で横方向の条痕、下段で縄文施文後ナデ、器裏面は横方向の条痕を施す。器表面の上段に貝殻斜格子文、下段に3段の爪形刺突文を施している。器形は若干ふくらんでおり、キャリパー形になる可能性がある。

F VIIIk(第12図49) 器表面は、同一の原体で二方向に施文し、施文後ナデ調整を施す。器裏面はヨコナデ。上部には擬口縁が認められる。

F IVk(第13図50~52) 器表面は縄文、器裏面は条痕調整。器表面にRL縄文、器裏面に縦条痕を施すもの(50)と、底部付近の破片で、器表面をRL縄文器、裏面は斜め条痕で上部に擬口縁を残すもの(51)がある。また、器表面はLR縄文、器裏面は横条痕で上部に擬口縁を残す(52)がある。

F VIIh(第13図53) 器表面に羽状縄文を施し、器裏面はナデ調整する。

底部(第13図54) 器表裏面ともナデ調整を施す。粘土紐の貼り付け痕が顕著な尖り底。

e. 第10層出土遺物(第13図・図版第6)

器形のわかるものはない。

F VIIk(第13図55) 器表面にLR縄文、器裏面をヨコナデ調整している。

F IXe(第13図56) 底部付近の破片で、器表裏面ともナデ調整を施し、半截竹管による多条の刺突文を施している。

その他の器形 ヘラ描き沈線を施す中期の土器(57・58)と、後期のスリ消し縄文(59)が出土している。

B. 第7トレンチ

a. S K 04出土土器(第14図・図版第7)

この遺構からは、山形口縁キャリパー形土器(A)と、平口縁砲弾形土器(D)が出土している。

①山形口縁キャリパー形土器

A VIIb(第14図60) 器表面はLRの縄文、器裏面を横方向に条痕状の強いナデ、口縁端部をナデ

て面を作る。おそらく縄文
と思われる文様を施す。器
表面の屈曲部には2列の爪
形刺突文を施す。

②平口縁砲弾形土器

D VIIk(第14図61) 器表
面はRL縄文、器裏面はナデ
調整。口縁端部をナデて面
を作る。口縁端部に爪形刺
突文。



60

③その他の器形

F VIIk(第14図62) 平口
縁の砲弾形土器と考えられ
る。器表面はRL縄文、器裏
面はナデ調整を施す。

b. 第12-2層出土土器
(第15図・図版第7)

山形口縁砲弾形土器(C)
と平口縁砲弾形土器(D)が
出土している。

①山形口縁砲弾形土器

C VIIk(第15図63) 器表
面はLRの縄文、器裏面ナデ
調整を施す。口縁部は端部
をナデて面を作り、縄文と
思われる文様を施す。

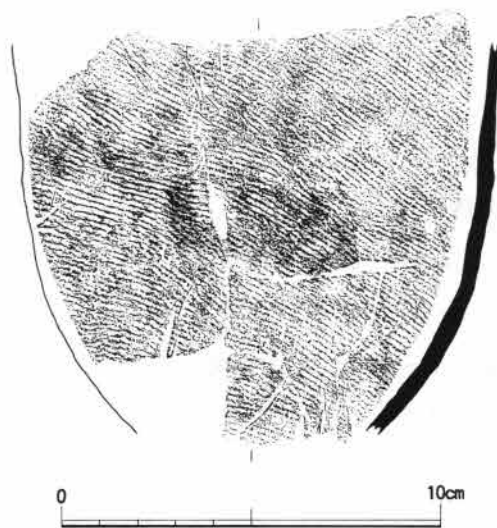


61

C IVk(第15図64) 器表
面は縄文、器裏面は条痕調
整を施す。口縁端部に爪形
刺突文を施す。

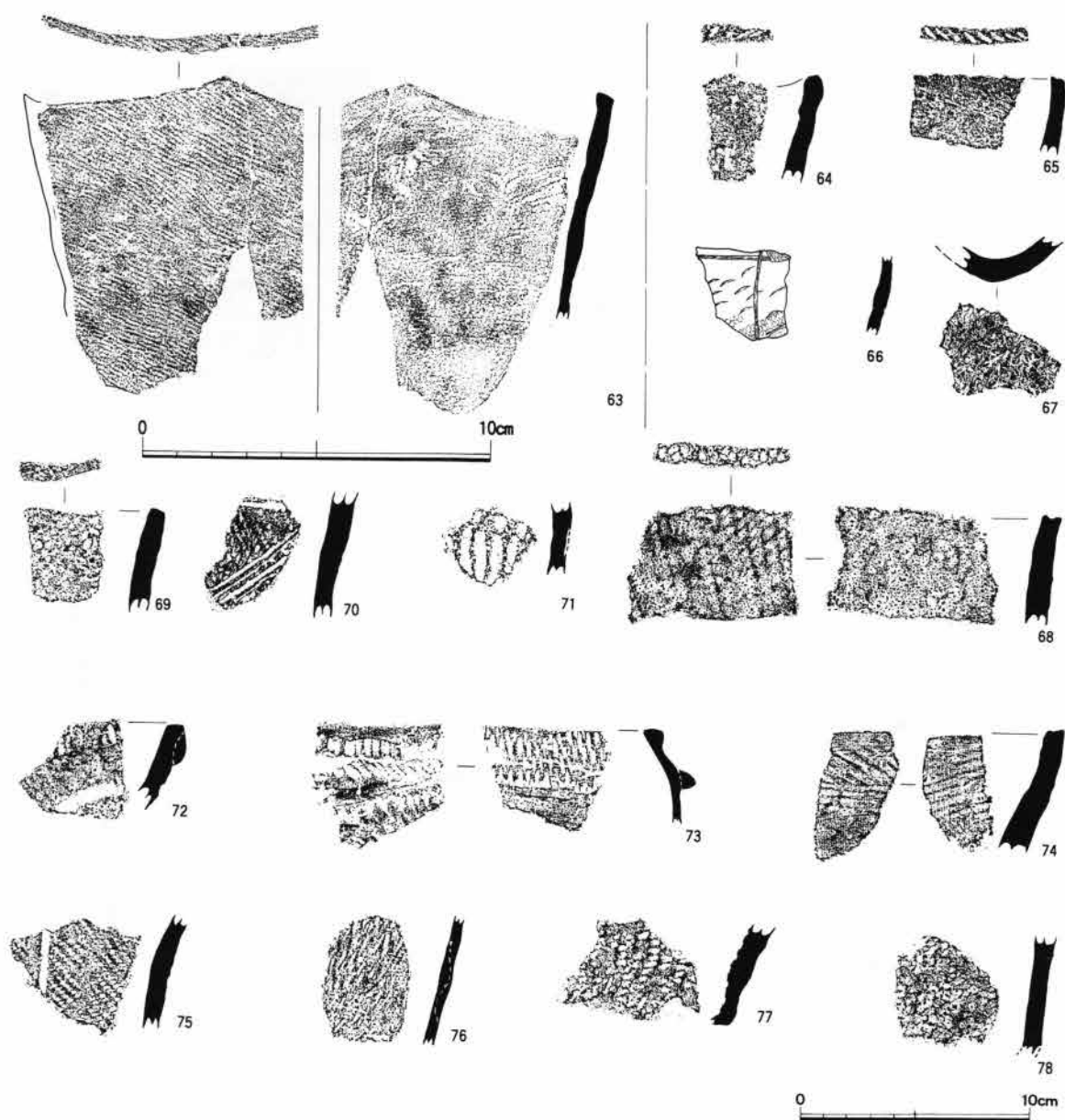
②平口縁砲弾形土器

D IXk(第15図65) 器表
裏面をナデ調整。口縁端部
をナデて面を作り、端面に
爪形刺突文を施す。



62

第14図 第7トレンチS K04出土土器拓影



第15図 出土土器拓影・実測図
63～71. 第7トレンチ第12-2層 72～78. 第7トレンチ第10層

底部(第15図67) 器表面は縄文、器裏面ナデ調整を施す。表面に爪形刺突文及びヘラ描き沈線文を施す。尖り底の底部片。

③その他の器形

器表面縄文、器裏面ナデ。器表面に爪形刺突文やヘラ描き沈線文を施すもの(66)や、中・後期と考えられる土器(68～71)が出土している。

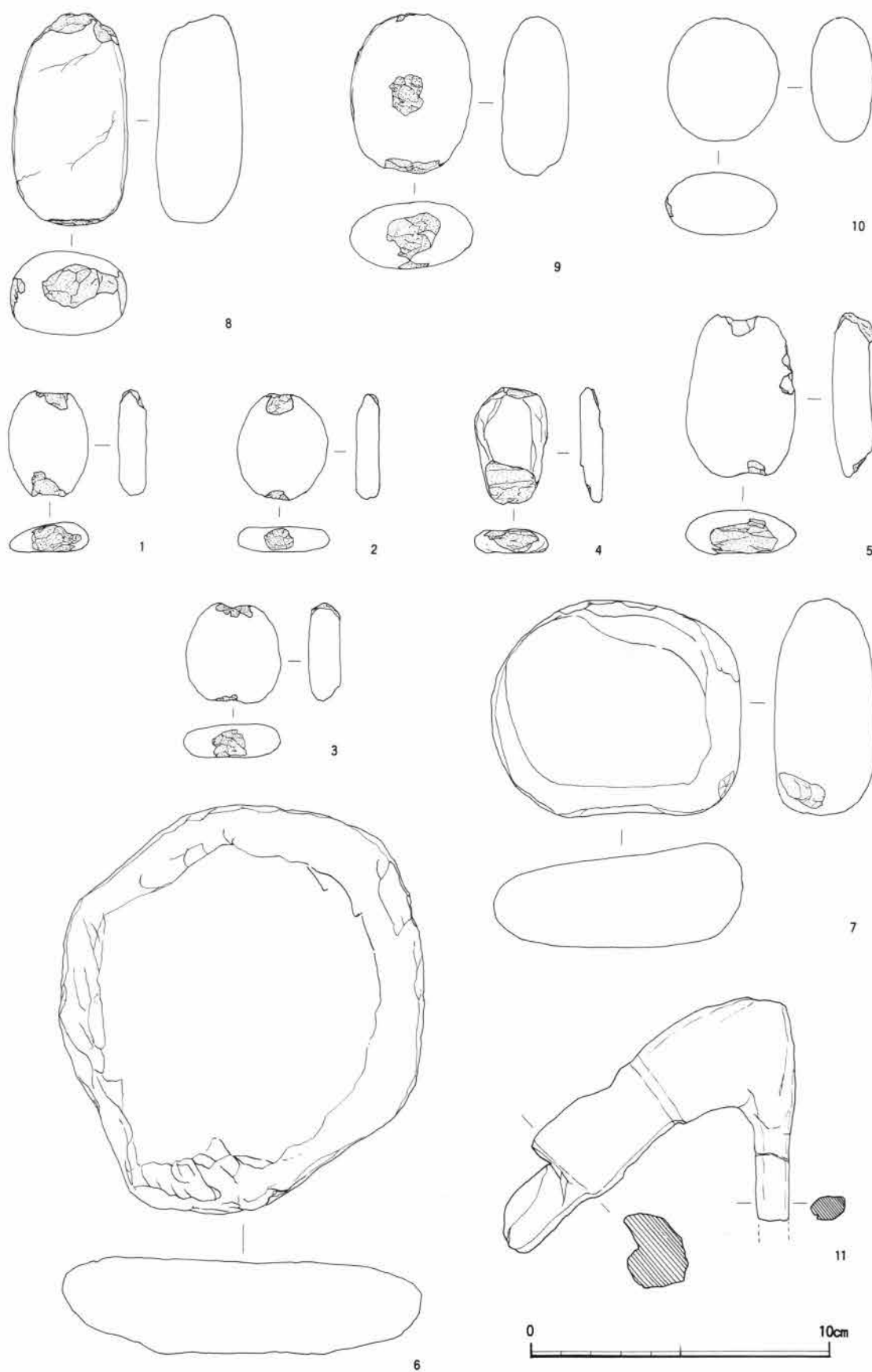
b. 第10層出土土器(第15図・図版第7)

中・後期と考えられる土器(72～78)が出土した。

①石器(第16図・図版第7)

ア. 漁撈具

石錘(第16図1～5) 第8トレンチ第12層から出土している。楕円形の河原石を用いて長軸の



第16図 第8トレンチ出土石器・木器実測図

両端部を打ち欠き、糸かけ部を作り出している。

イ. 調理具

石皿(第16図6・7) 第8トレンチ第12-1層から出土している。成形痕はなく、表面に磨滅した使用痕が認められる。

敲石(第16図8~10) 第8トレンチ第18層などから出土している。長軸の端部や、平面の中央部に使用痕が認められる。

②木器(第16図11・図版第7)

伐採具の石斧柄が第8トレンチ第18層から出土している。石斧の着装部を台外側から切り込み、固定部を3段に成形している。

(2)弥生時代(図版第8)

第5・6・8トレンチから土器が出土している。いずれも弥生時代の遺構から出土したものはなく、第5・6トレンチからは古墳時代の土器と混在して出土している。

(3)古墳時代(図版第2・8)

第5トレンチで井戸SE01に転用された木製の桶と土器、土器溜まりSX02から土器及びガラス玉が出土している。

前期の井戸に使用された桶は、大木を削り抜いた製品で、底板は桶の下からはめ込む構造で、板を止める楔のための柄が掘られている。内側には漆が施されており、大変ていねいな造りをしている。この桶は、井戸に転用される前のある段階でひび割れたようで、1か所には補修のための穴が一对開けられていた。

5. ま と め

今回行った発掘調査の成果としては、昨年度までの調査では確認されていなかった古墳時代前期の遺構と、縄文時代前期の遺構とをあらたに検出したことがあげられる。

今回検出できなかった弥生時代の遺構については、古墳時代前期の井戸の検出状況から、この時代の遺構も含め、後世の削平を受けたものと判断した。

新たに発見した前期初頭の土器群及びその他の遺物は、京都府北部の編年資料の空白部分の一部を埋めるものとして、また当時の自然環境や生活を復原する上で重要なものである。出土した土器の概要は、以下ようになる。

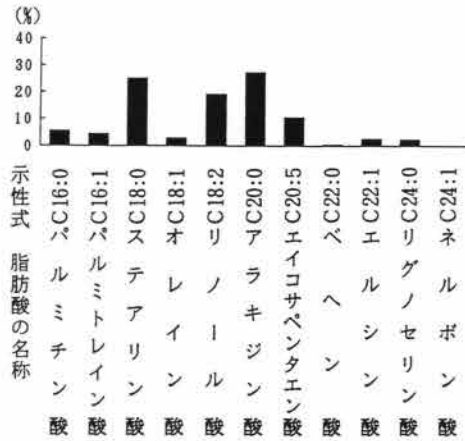
第8トレンチで土器が最も多く出土した層は、第12層(黒色粘土層)である。この層からは、轟式系の土器(第11図29)が出土している。器表裏面条痕調整、口縁部の端面を丸くおさめる、口縁端部から垂下させる微隆帯、器表面を外周する刻み目を施した貼り付け隆帯という特徴は、鳥取県・目久美遺跡出土土器の特徴とよく似ている。このことから、九州地方で端を発した轟B式土器が山陰地方までその影響を及ぼし、京都府北部地方までその影響力が及んでいるのではないのだろうか。この層から出土した土器の多くは、A VIIba類である。また、第17層(暗灰色砂層)からは、半截竹管文の連続刺突を施した小型の土器が出土している。

付表2 松ヶ崎遺跡出土の糞石の残存脂肪抽出量

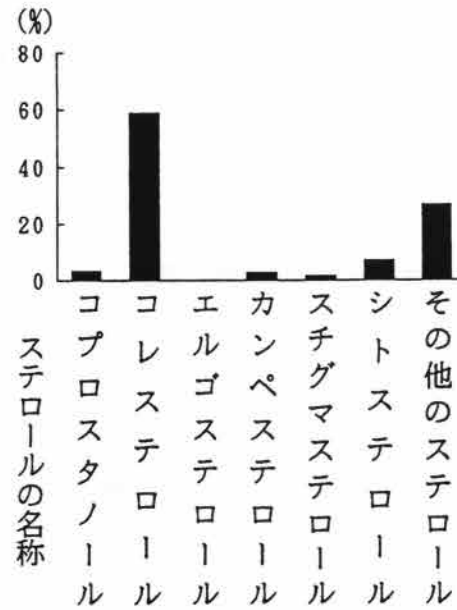
試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
松ヶ崎遺跡 糞石	0.95	0.3	0.0316

付表3 糞石中に分布するステロールの割合

コプロスタノール (%)	コレステロール (%)	シトステロール (%)	コレステロール/シトステロール	コプロスタノール/コレステロール
3.25	58.65	7.02	8.35	0.06



第17図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



第18図 試料中に残存する脂肪のステロール組成

松ヶ崎遺跡出土土器の特徴は、土器自体が全体的に黒色をしているところにあり、爪形刺突文を施している土器は、すべてていねいな作りをしている。また、繊維も若干胎土に含まれている。凸状・凹状の擬口縁をもつ土器がかなりの数で出土しているということは、土器の製作技法を知る上で重要な手がかりとなるものと考えられる。詳しい編年の位置づけは、今後の課題にしたい。

第8トレンチの第18層を中心に出土した多量の堅果類や石皿・敲石からは縄文時代前期初頭の植物食の状況が、獣・漁骨や石錘からは漁猟の実態の一部が明らかになってきた。すなわち、漁撈では、採取された骨から一年の各季節の漁撈が行われていた可能性が指摘されるし、同じく第8トレンチ第18層から出土した糞石を分析していただいた、帯広畜産大学中野益男教授によると、コレステロール中に含まれるコプロスタノールの割合により、人ではなく、犬の糞と判定できる(付表2)こと、ステロール組成により動物の脂肪が多く(第18図)、また脂肪酸の組成により、魚類を示すエイコサペンタエン酸が多い(第17図)ことにより、食事の中に占める魚食の割合が極めて高い結果が出ている。

(戸原和人・堀井泰樹)

調査参加者

渡辺哲夫・堀井泰樹・岡野由美・新保 直・平野智久・伊達優子・森 秀雄・小國喜一郎・城下 勇・安達定雄・大垣鉄雄・入江敏夫・岩佐正一・増田英男

※調査期間中、整理期間中を通じて、奈良大学教授泉 拓良氏のご指導を得た。なお、縄文土器については、泉氏の指導のもと、戸原和人・堀井泰樹が執筆したものを戸原が編集した。ここに記して感謝したい。

付 載 1

松ヶ崎遺跡出土の動植物遺存体

出土した動物遺存体の概要

動物遺存体は植物遺体と同様に、縄文時代前期の黒色粘土層の中でも特に有機遺物に富む腐植土層から出土している。魚類ではハタ科が多く、マダイ、クロダイが続く。ハタ科魚類にはクエに相当する体長1mはあろうかという大型のものから、2、30cmの小型のものまで、複数種が存在する。特に大型のハタ科魚類は岩礁性で、現在では釣りによって捕獲されている。コブダイ、イサキも沿岸の岩礁域に生息する魚種である。ヒラメ、コチなど砂底に生息する魚類も捕獲しており多様な海域を漁撈の場としていたことがわかる。哺乳類・鳥類の出土は少なく、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル、ムササビ、オシドリが少量ずつ出土しているのみである。骨角器の素材となった鹿角が2点出土している。

従来、貝塚の少ない日本海沿岸で、こうした低湿地遺跡から動物遺存体を検出できたことは大きな成果である。周辺の縄文後期の浜詰遺跡、弥生時代の函石浜遺跡なども併せて、この地域の生業活動を明らかにする上で重要な位置を占める。

松井 章(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)

宮路淳子(京都大学大学院人間・環境学研究科、学振)

出土した植物遺体の概要

植物遺体は、縄文前期の腐植土層から主に出土した。草本類では、オニバス、エゴマ、ヤマノイモ属、ヒョウタン仲間があり、木本類では、オニグルミ、カラスザンショウ、サンショウ、ミズキなどが多い。今回の調査では、未だ検出例の少ない縄文前期の植物利用の実態を知るための、貴重な成果が得られた。以下に主な特徴を述べる。

1. ヒョウタンの果皮には、明瞭な加工痕が認められる。加工痕は、福井県鳥浜貝塚で出土したヒョウタンと同じく、へたの周囲につけられている。
2. ヤマノイモ属の炭化イモ。縄文時代に根茎類が利用されていた可能性はこれまでも指摘されていたが、実際に検出した例は無かったのではないか。
3. いわゆる「栽培植物」とされるエゴマ。直径2mmをはかる。
4. オニバスの炭化種子は、食用とされていた可能性を示すのではないか。
5. 堅果類はトチノキ、クリ、オニグルミ、コナラ属アカガシ亜属、カヤなどが出土している。トチノキは、数少ない縄文前期の出土例として注目できるが、種皮と果皮の割合からいって、必ずしも食用とはいえない。クリは前期としては大きい(22mm×22mm)ほうである。カヤも少し大き

い。オニグルミは個体数で150をこえる。打撃痕を残すものが多いので、食用といえる。

6. 出土した植物遺体のほとんどが、食用とされる種類である。

南木睦彦(流通科学大学)

宮路淳子(京都大学大学院人間・環境学研究科、学振)

付表4 松ヶ崎遺跡出土動物遺存体種名表

脊椎動物門 PHYLUM VERTEBRATA	イヌ科 Family Canidae
軟骨魚類綱 CLASS CHONDRICHTHYES	イタチ <i>Mustela sibirica</i>
板鰓亜綱 Subclass Elasmobranchii	イノシシ科 Family Suidae
エイ類 (検討中)	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
サメ類 (検討中)	シカ科 Family Cervidae
硬骨魚類綱 CLASS OSTEICHTHYES	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
ハモ科 Family Muraenesocidae	
ハモ <i>Muraenox cinereus</i>	
ニシン科 Family Clupeidae ?	
イワシ類 (検討中)	
フサカサゴ科の一種 Family Scorpaenoidae	
コチ科の一種 Family Platycephalidae	
スズキ科	
スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>	
ハタ科の一種 Family Serranidae	
タイ科 Family Sparidae	
マダイ <i>Pagrus major</i>	
クロダイ属の一種 <i>Aacanthopagrus</i> sp.	
ベラ科 Family Labroidae	
コブダイ <i>Semicossyphus reticulatus</i>	
ヒラメ科 Family Paralichthyidae	
ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>	
フグ科の一種 Family Tetraodontidae	
カワハギ科 Family Monacanthidae	
鳥類綱 CLASS	
ガンカモ目 Order ANATIDAE	
ガンカモ科 Family ANATIDAE	
オシドリ <i>Aix galericulata</i>	
哺乳綱 CLASS MAMMALIA	
オナガサル科 Family Cercopithecidae	
サル <i>Macacus fuscatus</i>	

付表5 松ヶ崎遺跡出土植物遺存体種名表(地区・層位別)

分類	学名	部位	8tr北半 第12-1層	8tr断割 第12-1層	8tr西半 第12-2層	8tr北半 第12-2層	8tr北半 第15層	8tr中央 第15層	8tr北端 第16~17層	8tr東半 第17層	8tr中央 第18層	計
木 本 類												
クロキ	<i>Symplocos Lucida</i> Sieb. et Zucc.	核									1	1
ミスキ	<i>Cornus controversa</i> Hemsley	核									92	92
クマノミズキ	<i>Cornus macrophylla</i> Wallich	核									1	1
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	種子									7	7
		果皮									1	1
ムクロジ	<i>Sapindus mukurossi</i> Gaertn.	果実									2	2
		種子									3	3
サンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (Linn.) DC.	種子									35	35
カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	種子									97	97
アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Makino	種子									4	4
フジ属	<i>Wisteria</i> sp.	芽									2	2
サクラ属	<i>Prunus</i> sp.	核									1	1
ヤブツバキ	<i>Camelia japonoca</i> L.	種子									8	8
コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	果実									8	8
		幻果									2	2
		殻斗									2	2
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果実									21	21
アサダ	<i>Ostrya japonica</i> Sarg.	果実									2	2
イヌシデ属	<i>Carpinus</i> sp.	果実									2	2
オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核	3	2	6	16	1			6	372	406
カヤ	<i>Torreya nucifera</i> (Linn.) Sieb. et Zucc.	種子				3		2		8	15	28
マツ属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> sp.	葉									2	2
		果実		1					1			2
ツガ属	<i>Tsuga</i> sp.	種子									1	1
ムクノキ属	<i>Aphananthe</i> sp.	種子									2	2
ゴンスイ	<i>Euscaphis japonica</i> (Thunb.) Kanitz	種子									5	5
草 本 類												
エゴマ	<i>Perilla frutescens</i> Britton var. <i>japonica</i> Hara	種子									1	1
オニバス	<i>Euryale ferox</i> Salisb.	種子									11	11
ヤマノイモ属?	<i>Dioscorea</i> sp.	イモ									1	1
ヒヨウタン仲間	<i>Lagenaria</i> sp.	種子									3	3
		果皮									2	2

付 載 2

松ヶ崎遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

No.	試料	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	S X03	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	AMS法
2	S X03	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	AMS法
3	S K04	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	AMS法
4	第8トレンチ 第12層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	AMS法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代(年B.P.)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代(年B.P.)	暦年代(B.C.)	測定No. Beta-
No. 1	5770±50	-27.5	5730±50	交点 4550 B.C. 2 σ 4715~4465 B.C. 1 σ 4670~4635 B.C. 4620~4505 B.C.	111913
No. 2	5830±50	-27.8	5790±50	交点 4680 B.C. 2 σ 4780~4515 B.C. 1 σ 4725~4565 B.C.	111914
No. 3	5670±50	-28.8	5610±50	交点 4455 B.C. 2 σ 4535~4350 B.C. 1 σ 4485~4370 B.C.	111915
No. 4	5870±50	-26.8	5840±50	交点 4725 B.C. 2 σ 4815~4565 B.C. 1 σ 4780~4680 B.C.	111915

(2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年A.D.)から何年前(B.P.)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3)補正¹⁴C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4)暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

5)測定No.

本試料の測定は、Beta Analytic Inc. (Florida, U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定No.を意味する。

(株式会社 古環境研究所)

2. 横枕遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

横枕遺跡は、竹野郡網野町字島津小字横枕に所在する。弥栄町鳥取から網野町の離れ湖にぬける谷筋に張り出す丘陵先端と、その麓に広がる遺跡である。周辺の平安時代の遺跡には、林遺跡、三宅遺跡、長蓮寺遺跡、城山遺跡があり、背後の丘陵には大谷古墳群が分布している。遺跡の現況は水田及び山林であった。丘陵先端の平坦面は竹藪であったが、最近まで畑作を行っていたようである。周辺の谷筋に広がる水田は、明治・大正・昭和の3時期には場整備が行われており、平安時代の遺物が採集されていた。

今回の調査は、府営一般農道整備事業に先立ち、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。調査期間は平成9年10月8日から12月19日までで、調査面積は約530m²である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同調査員松尾史子^(注1)が担当した。なお、本調査に係る経費は、京都府が負担した。

(松尾史子)

2. 調査の経過

横枕遺跡は、『京都府遺跡地図』によれば、遺物散布地として周知されていたが、この地に農道建設が計画されたため、平成7年10月6日から平成8年3月25日まで、網野町教育委員会によって試掘調査された(第1次調査^(注2))。今回の調査は第2次調査となる。

第1次調査では、調査地内に3m四方のグリッドを5か所(第21図)設定し、その内、A・C～Eグリッドについては無遺物であった。Bグリッドで多数の遺物とともに、木柱なども出土した。

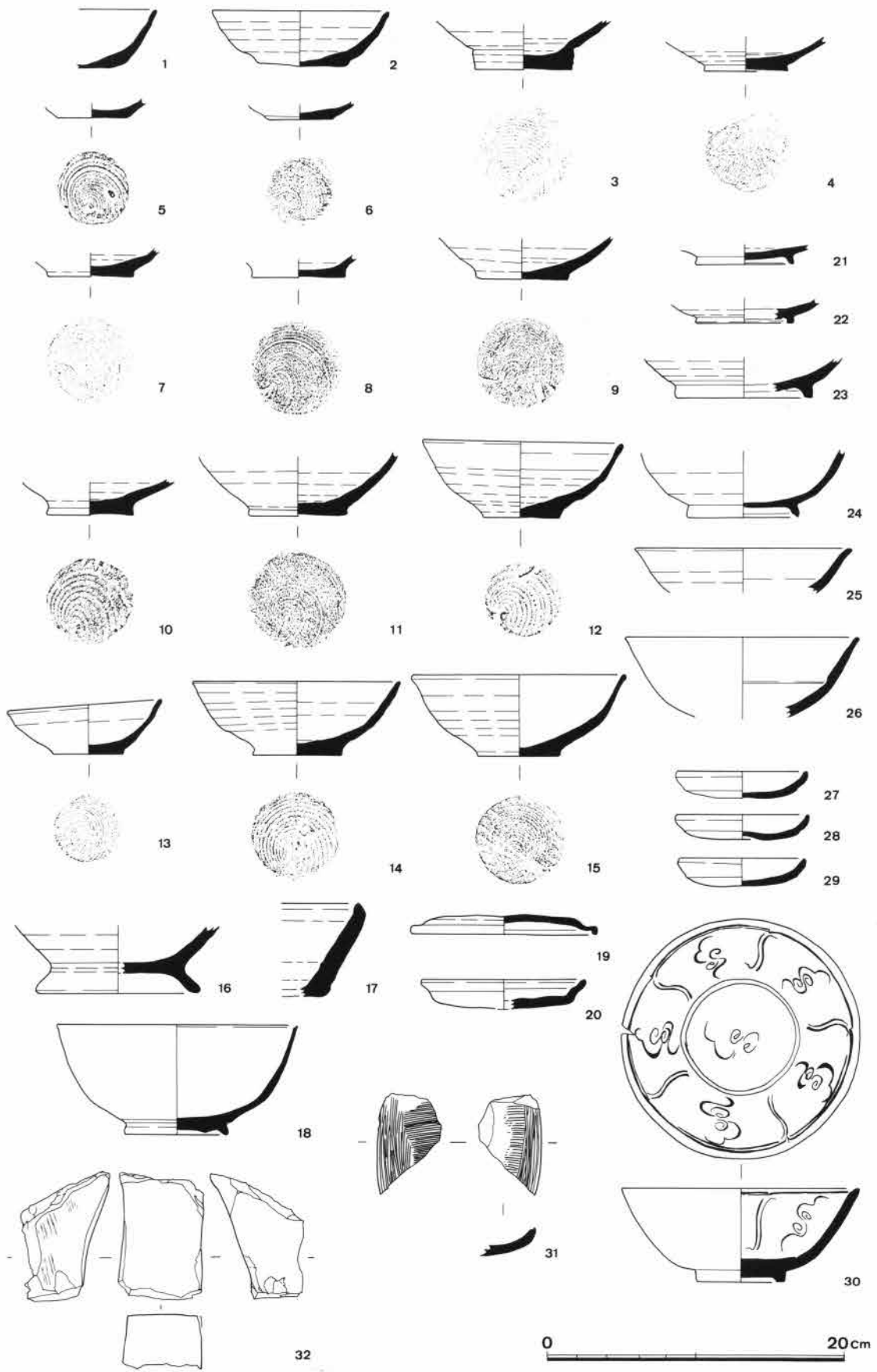
Bグリッドは谷部にあるため、湧水が激しく、遺物を出土層位ごとに取り上げることは困難を極めたとのことである。深さは約1.54mまで掘り下げたが、その中位で青磁碗や土師器皿が確認され、このセット関係から、中世前期の墓であった可能性がある。また、下位から平安時代前期の遺物が多量に出土した。出土遺物には緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器、中国製青磁などがある。今回、当調査研究センターが設定した第1トレンチは、第1次調査の成果を受けて、Bグリッドを中心に設定した。この二つの調査の関係を知るために、Bグリッドの出土遺物の一部について説明したい(第20図)。

1～3・5～15は、回転台土師器である。杯、碗が多く、皿は少ない。1・2は、底部ヘラ切りである。3・5～15は、底部糸切りである。いずれも色調は淡褐色で、一部分褐色のものもある。胎土は砂粒を含んでいる。糸切りは水平方向に行われ、高台の中央部分が抉れているのは、ごく一部分である。体部内外面とも回転などで調整されている。



第19図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-------------|------------|-------------|
| 1. 横枕遺跡 | 2. 大谷古墳群 | 3. 大谷A城跡 | 4. 大谷古墓 | 5. 大谷B城跡 |
| 6. 大谷東古墳 | 7. 大谷D城跡 | 8. 島津遠所古墳群 | 9. 遠所A城跡 | 10. 遠所古墓 |
| 11. 遠所B遺跡 | 12. 遠所C城跡 | 13. 遠所城跡 | 14. 遠所遺跡群 | 15. テヘン田遺跡 |
| 16. 谷崎古墳群 | 17. 城山古墳 | 18. くらがり古墳群 | 19. 中ダス古墳群 | 20. 溝川谷遺跡 |
| 21. 白滝古墳 | 22. 兎毛古墳 | 23. 城山古墳群 | 24. 城山遺跡 | 25. 岡古墳群 |
| 26. 離山古墳 | 27. 待谷古墳 | 28. 新浜古墳群 | 29. 林遺跡 | 30. 寛平法王陵古墳 |
| 31. 三宅遺跡 | 32. 銚子山古墳 | 33. 長蓮寺遺跡 | 34. 小銚子山古墳 | 35. 赤鉢城跡 |



第20図 第1次調査出土遺物実測図

16は、土師器杯である。底径約11.0cmである。貼り付け高台である。17は、土師器盤である。18は、土師器椀である。口径約16.3cm・器高約7.3cmである。口縁端部内面に1条の窪みが施されている。黒色土器椀の形に似ている。19・20は須恵器杯蓋と皿で、硯に転用されていた。19は、口径約12.6cm・器高約1.3cmである。つまみはつかない。20は、皿である。口径約11.0cm・器高約2.0cmである。いずれも、内外面とも回転なで調整している。

21～26は、緑釉陶器である。21・22は皿で、他は椀である。23・24は近江系で、他は京都系である。4は、無釉陶器椀である。底径約5.7cm・残存高約2.3cmである。内外面とも回転なで調整されており、ミガキが施されている。以上が、奈良時代末期から平安時代前期のものである。

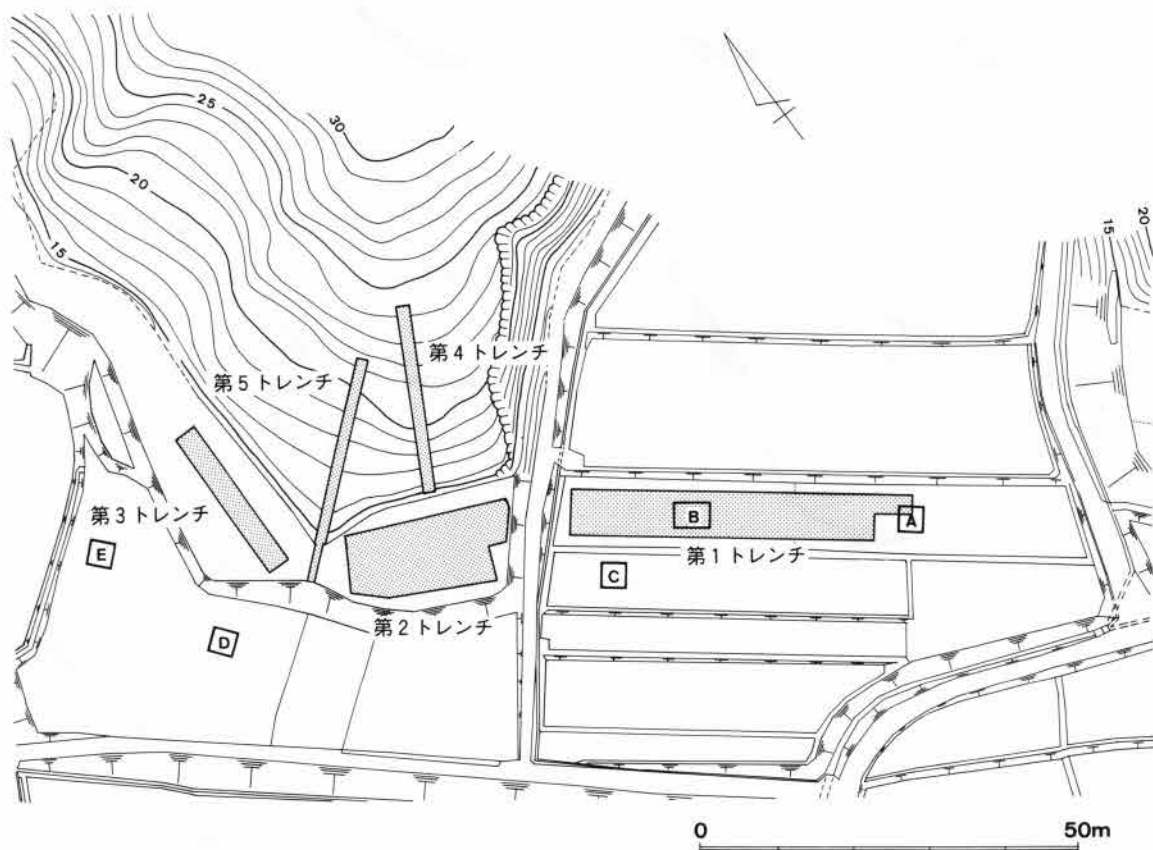
27～29は、土師器皿である。27は、口径約8.6cm・器高約1.9cmである。いずれも洛外産土師器皿Jタイプを模倣したものである。

30は、中国龍泉窯系青磁椀である。口径約16cm・器高約6.3cmのほぼ完形品である。内面に花文を施したもので、中国南宋もしくは元の時代に属するものである。

31は、黒色土器B類の硯である。現存は、長さ約6.5cm・幅約4.3cmである。おそらく風字硯と思われる。内側に墨が付着している。平安時代前期の平安京跡から若干出土するが、それ以外ではほとんど出土しない。

32は、砥石である。長さ約9cm・幅約5.5cmである。摺った面は3面である。

(伊野近富)



第21図 トレンチ配置図(A～Eは平成7年度網野町教育委員会調査地)

3. 調査の概要(第21図)

今回の調査では、第1次調査の成果を受けて、谷部(第1トレンチ)と丘陵部(第2～5トレンチ)に計5か所のトレンチを設定した。第1～3トレンチは、重機掘削の後、人力掘削により調査を実施した。第4・5トレンチはすべて人力掘削による。調査の結果、第1トレンチ・2トレンチで平安時代と鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。また、第5トレンチでは全壊しているが、古墳を1基確認した。

(1) 検出遺構

① 第1トレンチ(第22図)

丘陵南側の谷部の水田に設定したトレンチである。平成7年度の網野町教育委員会の調査地を拡張する形でトレンチを設定した。トレンチを設定した水田は、昭和40～50年代に耕地整理の対象となっており、土層の観察により、耕地整理前の水田に伴う畦などを確認した。耕地整理の際に、調査地の北側にあった畑地から丘陵斜面にかけて削平されており、谷の深い部分は、その土で埋められ水田が造成されていた。^(注3)この整地土と谷の堆積土から平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土した。

基本層序は、地山ブロック混明黄褐色土(昭和の耕地整理整地土)、水田耕作土、谷堆積土となる。トレンチの北側1/4は、表土直下で地山が確認でき、そこから南東へ傾斜していく谷の肩部を確認した。谷の肩部は平安時代に整地されており、柱穴1・2は整地面から掘り込まれていた。建物もしくは塀などの構築物があったと考えられる。柱穴4には柱根が残っていた。これらの柱穴の掘形は、いずれも一辺60～80cmの隅丸方形である。P2・P4は第18層上面から掘り込まれている。谷は、ある程度埋まった段階で再度遺構が構築され、その後水田となるようである。

出土遺物には、回転台土師器や須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入陶磁器などのほか、鍛冶滓・るつぼの破片・石鍋・碁石などがある。輸入陶磁器には越州窯系・龍泉窯系の青磁と白磁がある。白磁には定窯系もしくは邢窯系のものが含まれ、これらは、小破片ではあるが、丹後地方では今回の例が初出土となる。また、谷の肩から東へ4mの灰色粘土上面で黒漆塗りの銅製帯金具が出土した。これらの出土遺物から得られる年代は、8世紀後半から13世紀に及ぶ。

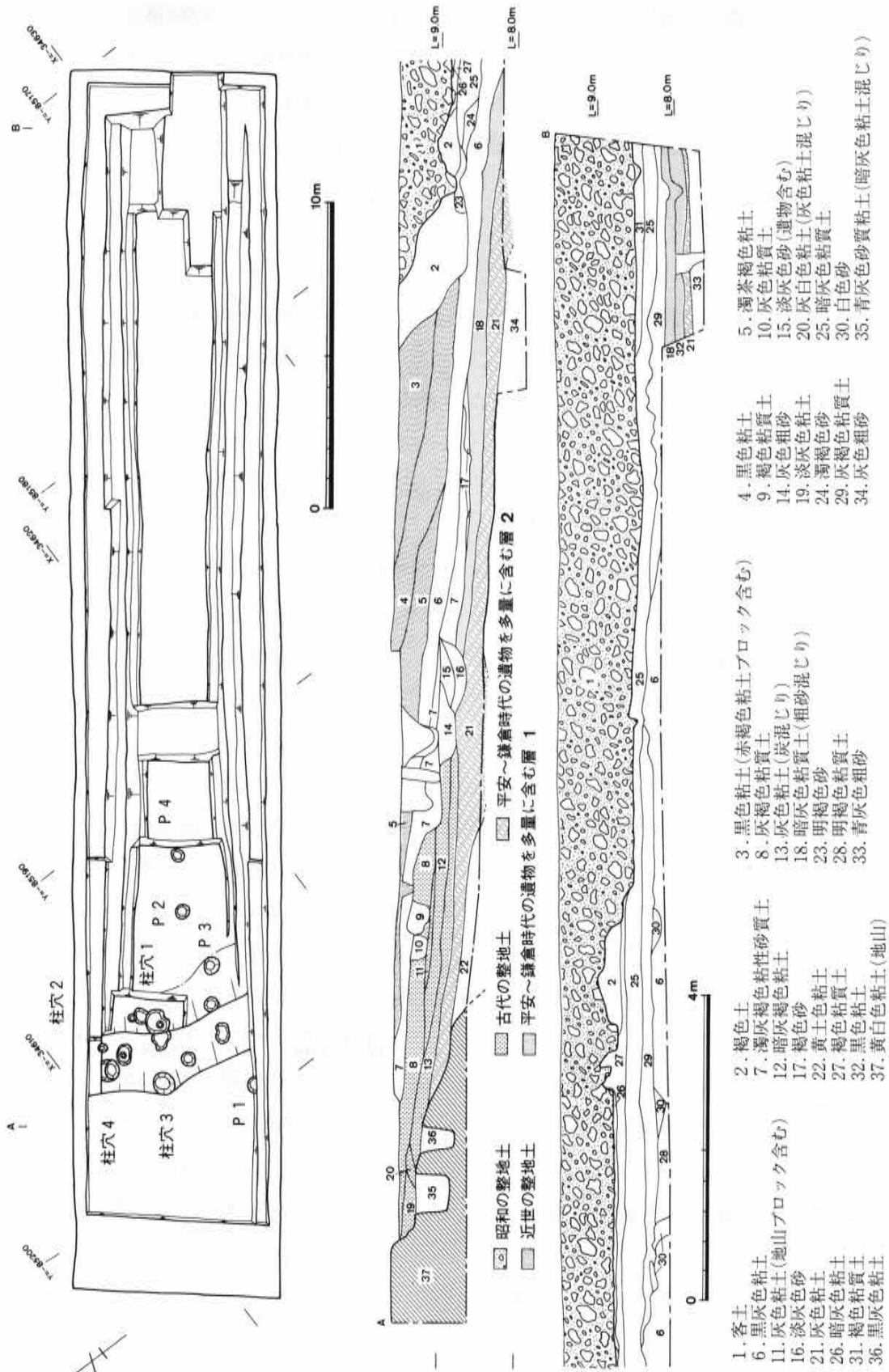
② 第2トレンチ(第23・24図)

丘陵先端の平坦面に設定したトレンチである。平安時代と鎌倉時代以降の遺構を検出した。

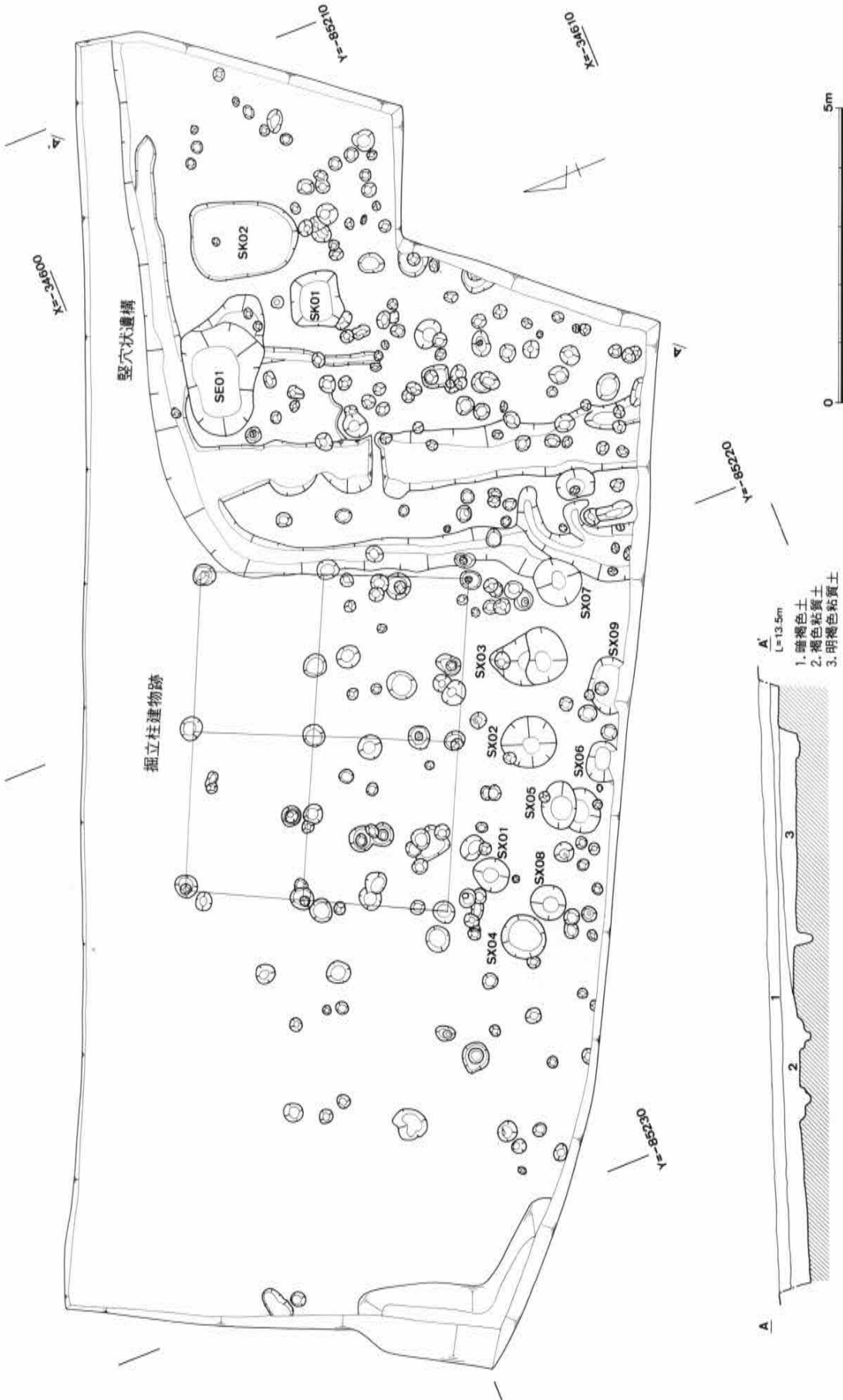
当初、約3m×約20mの規模で調査したところ、2間×2間分の建物跡と方形区画の一部を検出した。その後、建物跡の規模を確認するためさらに西側に拡張して、鍛冶関連土坑を確認した。

A. 平安時代の遺構 平安時代の遺構には、竪穴状遺構1基・井戸1基・土坑2基・鍛冶関連土坑9基がある。

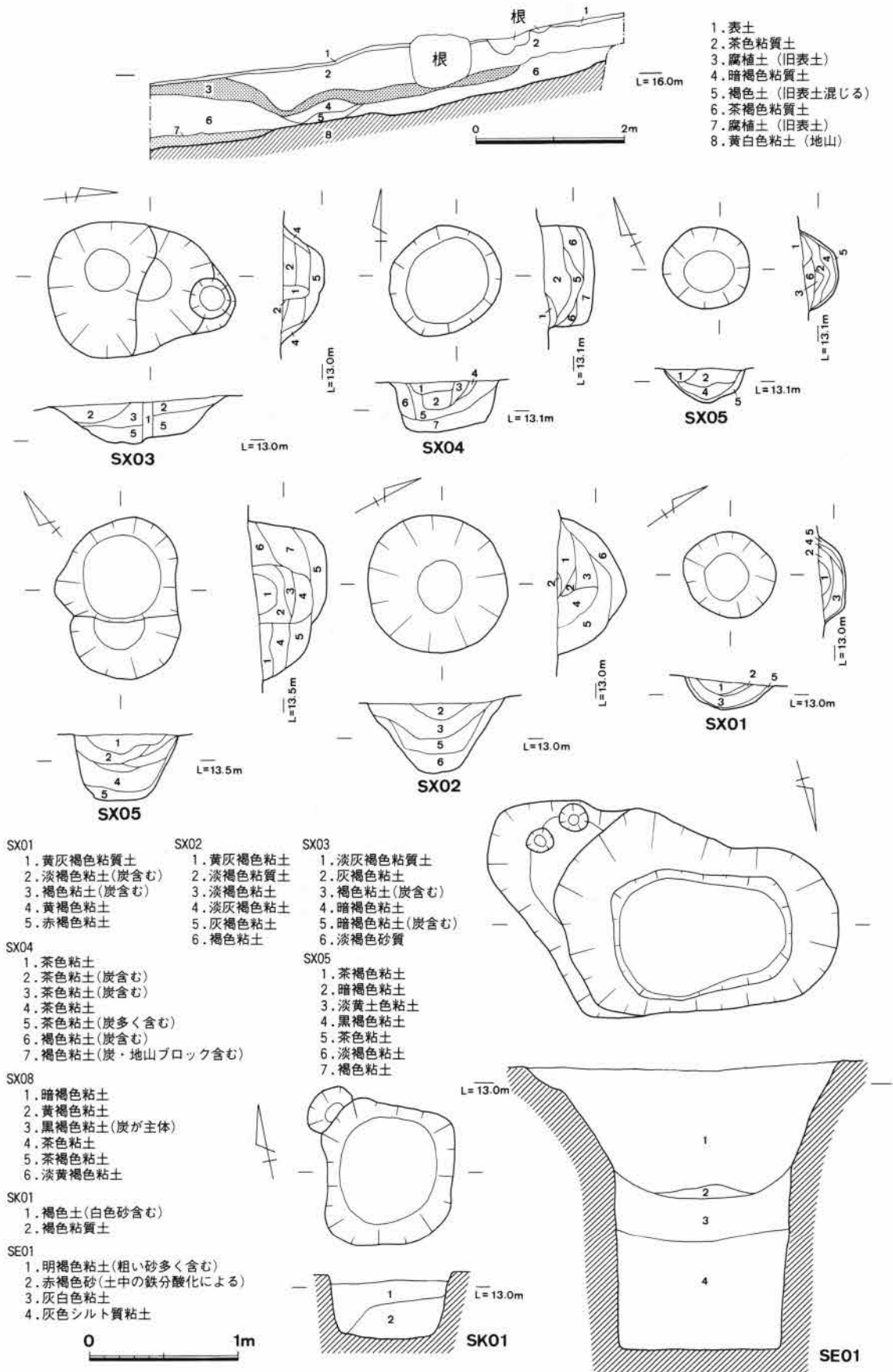
竪穴状遺構 溝によって地山を一段掘り下げたもので、約10m×約7m分を検出した。深さは、30～50cmを測る。西側周溝に沿って柱穴が並んでおり、覆い屋または塀の存在がうかがえる。また、内部で井戸1基と土坑2基を検出した。埋土から鍛冶滓や焼土が出土したこと、東側の床面に炭や鍛冶滓が散乱していたことから、作業場のような空間であったと考えられる。また、南側



第22図 第1トレンチ実測図



第23図 第2トレンチ実測図



第24図 第5トレンチ土層断面図・第2トレンチ遺構実測図

に「L」字状に曲がる溝があり、拡張されている可能性が考えられる。

SE01 平面形が楕円形の素掘り井戸である。長辺約1.5m・短辺約1.1m・深さ約1.8mを測り、湧水層に達していた。埋土上層には明褐色粘質土、下層には灰色系粘土が堆積しており、半分から上は一気に埋められているようである。底から糸切り底をもつ須恵器碗と木筒状木製品が出土した。木筒状木製品は、長さ約21.6cm・幅約4cm・厚さ0.9~1.2cmを測る。上端から1.6cmのところから両側からの切り込みがあり、荷札木筒と同様の形態である。墨痕は認められなかった。

SK01 平面形が隅丸方形の土坑で、長辺約0.95m・短辺約0.85m・深さ約0.4mを測る。竪穴状遺構の内部にある土坑で、性格は不明である。

SK02 平面形楕円形の浅い土坑で、長軸約1.8m・短軸約1.3m・深さ約0.1mを測る。

鍛冶関連土坑(SX01~SX09) 竪穴状遺構の外側で9基の鍛冶関連土坑を確認した。平面形は円形で、直径60~80cmを測る。壁が直角気味に立ち上がるものと、すり鉢状のものがある。埋土は、粘土と炭混じりの粘土であった。埋土の一部を洗浄したところ、砂鉄などが多く採取できた。竪穴状遺構の埋土から鍛冶滓や焼土、炭などが出土したこと、第1トレンチでつぼの破片や鍛冶滓が出土していることから、付近で鍛冶が行われたことは**注4)** 確実であろう。SX03とSX05は新旧の2時期があり、鍛冶関連土坑は全体で少なくとも2時期ある可能性が考えられる。

B. 鎌倉時代の遺構 鎌倉時代の遺構には、ピット群がある。トレンチ中央部に2間×2間の掘立柱建物が復原できる。建物は、竪穴状遺構を埋めて整地した後に建てられたようで、柱穴の一つは竪穴状遺構を切り込む。柱間は約2.7mを測る。その他の柱穴から輸入陶磁器(第28図137)や、土師器鍋(第25図49)が出土しており、これらの土器の年代から13世紀頃のものと考えられる。

③第3トレンチ

丘陵先端の北側平坦面に設定したトレンチで、方形にめぐる浅い溝のほか、顕著な遺構は検出されなかった(図版第17)。遺物は出土しなかった。

④第4トレンチ

丘陵の東側斜面に設定したトレンチである。樹木伐採の際、斜面の東端で五輪塔及び地藏が確認されたため(図版第16・17)、トレンチを設定した。遺構は検出されなかった。

⑤第5トレンチ

丘陵の尾根筋に沿って設定したトレンチで、後世に削平された古墳を1基確認した。付近に石材が散乱していることから横穴式石室墳と考えられる。土層の観察により、旧地表の上層に墳丘の盛り土と考えられる堆積土が確認できた(第24図)。また、削平された墳丘の表土直下から須恵器杯身が3点出土した。これらは、TK217並行期のものであり、古墳の築造年代を示すと考えられる。その他、15世紀の輸入陶磁器が出土しており(第28図138・139)、第4トレンチ付近に五輪塔などがあることから、周辺に中世墓が存在している可能性がある。今回の調査では確認できなかった。

(2) 出土遺物(第25～31図)

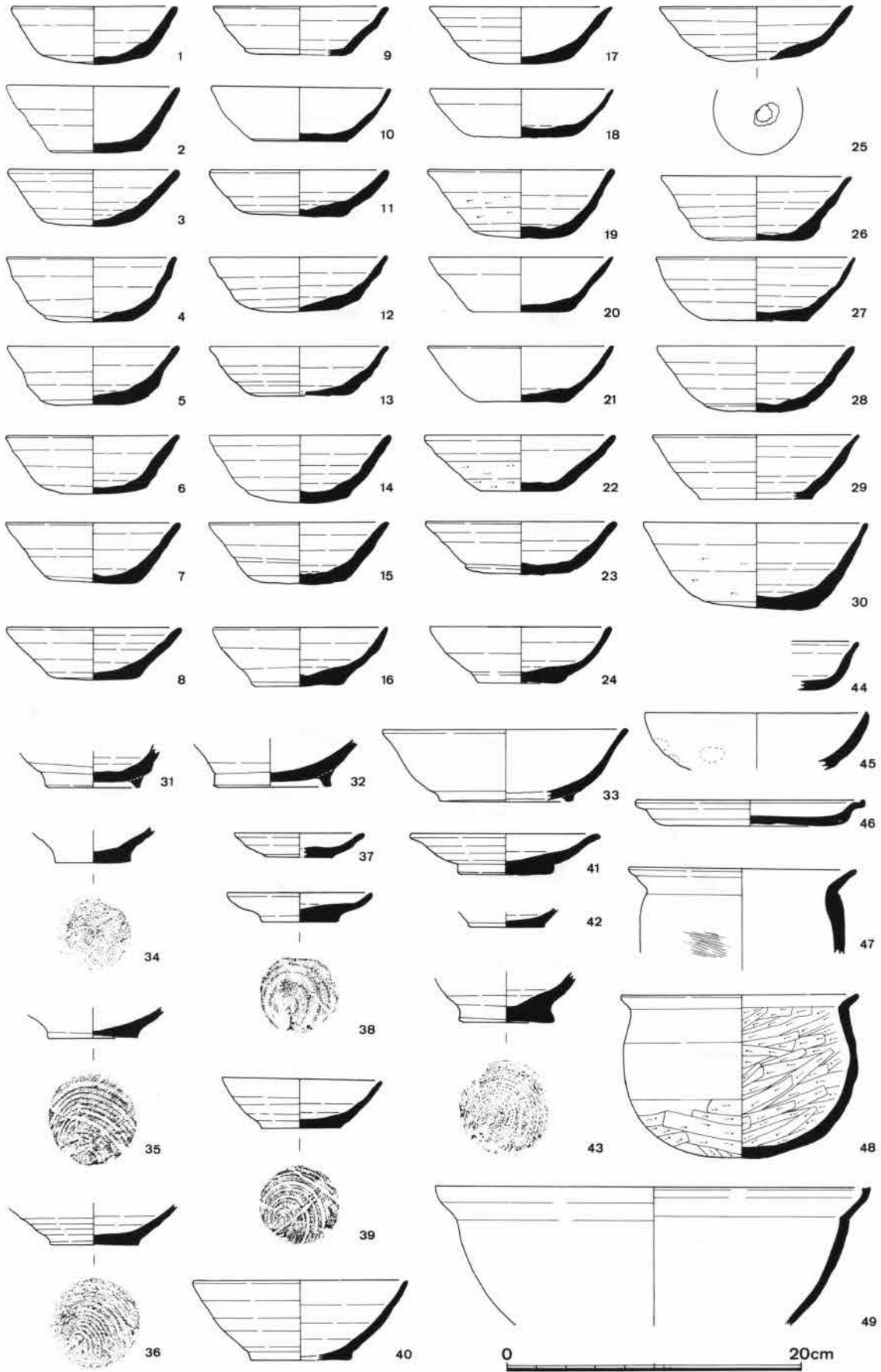
古代から中世にかけての遺物が、遺物整理箱で57箱分出土した。平安時代の遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、滑石製石鍋、土錘、帯金具、木筒状木製品があり、鎌倉時代の遺物には土師器、黒色土器、東播系須恵器、輸入陶磁器、漆器碗がある。これらの遺物のほとんどが第1トレンチの谷の造成土・堆積土から出土した。以下、今回図示できたものについて器種別に報告していく。^(注5)

土師器(第25図1～49) 回転台土師器が多く、墨書土器が含まれる。碗と杯が多く、碗が上層、杯は下層から出土している傾向がある。1～30は杯である。法量はほぼ単一で、口径11～13cm・器高3～4cmに集中するが、29・30のように大きいタイプもある。底部はヘラ切りのものがほとんどで、糸切りのものも数点みられる(34～40・42・43)。ヘラ切りのものには板目のついているものがみられる(3～5・12・25・27)。25は、底部穿孔である。31～33は、貼り付け高台をもつタイプである。34～36・39・40・42・43は、碗である。すべて糸切り底で、高台の出方がしっかりしているものとそうでないものがある。黒色土器とよく似た胎土・器形をもつものがある。37・38は、糸切り底の皿である。41は皿で、緑釉陶器の器形とよく似ている。44・46は、丹塗り土師器である。44は、体部が内湾し、口縁部が外反して内側に肥厚する杯である。色調は赤橙色で、実測図は載せていないが、他に斜行状暗文のあるものもある。46は皿である。色調は赤橙色で、口縁部が外反して内側に肥厚する。体部内外面はていねいに磨かれ、底部外面はヘラケズリで調整している。製作技法・赤色を意識している点など、44とともに都城の土師器の影響を強く受けている。47・48は、甕である。47は、口径約13.6cm・残存高約6.2cmを測り、口縁部は外反して口縁端部は丸くおさめる。口縁部及び体部内面はナデで調整し、体部外面はハケメ調整をする。48は、口径約18.3cm・器高約11.0cmを測り、口縁部は外反して口縁端部は丸くおさめる。底部及び体部内面はヘラケズリで調整している。49は、受け口状の口縁部をもつ鍋で、第2トレンチで検出した建物跡の柱穴から出土した。口径約29.6cm・残存高約9.6cmを測る。磨滅が激しく、調整などは不明である。

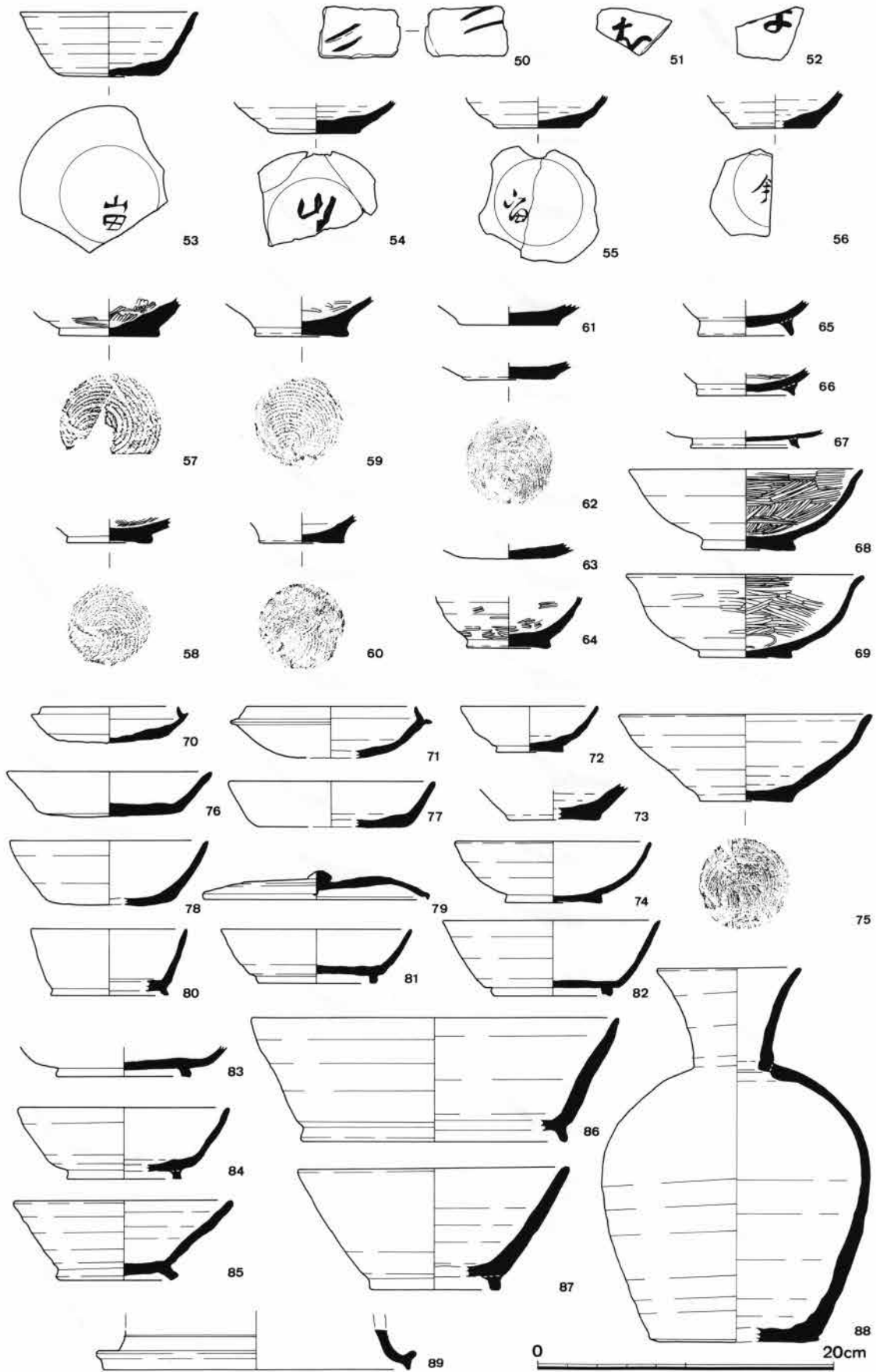
墨書土器(第26図50～56) 墨書土器は7点あり、器種には須恵器(50～52)と土師器(53～56)がある。かかれた文字は、現在判明しているもので「山田」が2点(53・55)、「山口」(54)、「ク」(50)、「傘」(56)である。「ク」(50)、「傘」(56)は記号の可能性はある。52は「は」・「ま」・「な」などのひらがなの一部のようにみえるが文字の確定はできていない。51についても不明である。文字の字体を観察すると「山田」の字体には行書と草書の2種類がある。

黒色土器(第26図57～69) 58～63・65～69はA類、57・64はB類である。57～64・68・69はロクロ成形・底部糸切りの碗である。65～67は貼り付け高台をもつ。67は、薄手で高台の断面形が近江産の緑釉陶器に似ており、搬入品である可能性がある。これらはⅡ期からⅢ期の古い時期に属するものばかりで、Ⅰ期に分類できるものはない。年代は、11世紀から13世紀と考えられる。

須恵器(第26図70～89) 70・71は蓋杯の杯身で、第5トレンチの古墳の表土直下から出土した。いずれも6世紀後半から末のもので、古墳築造の年代を示すと考えられる。72～75は、底部糸切

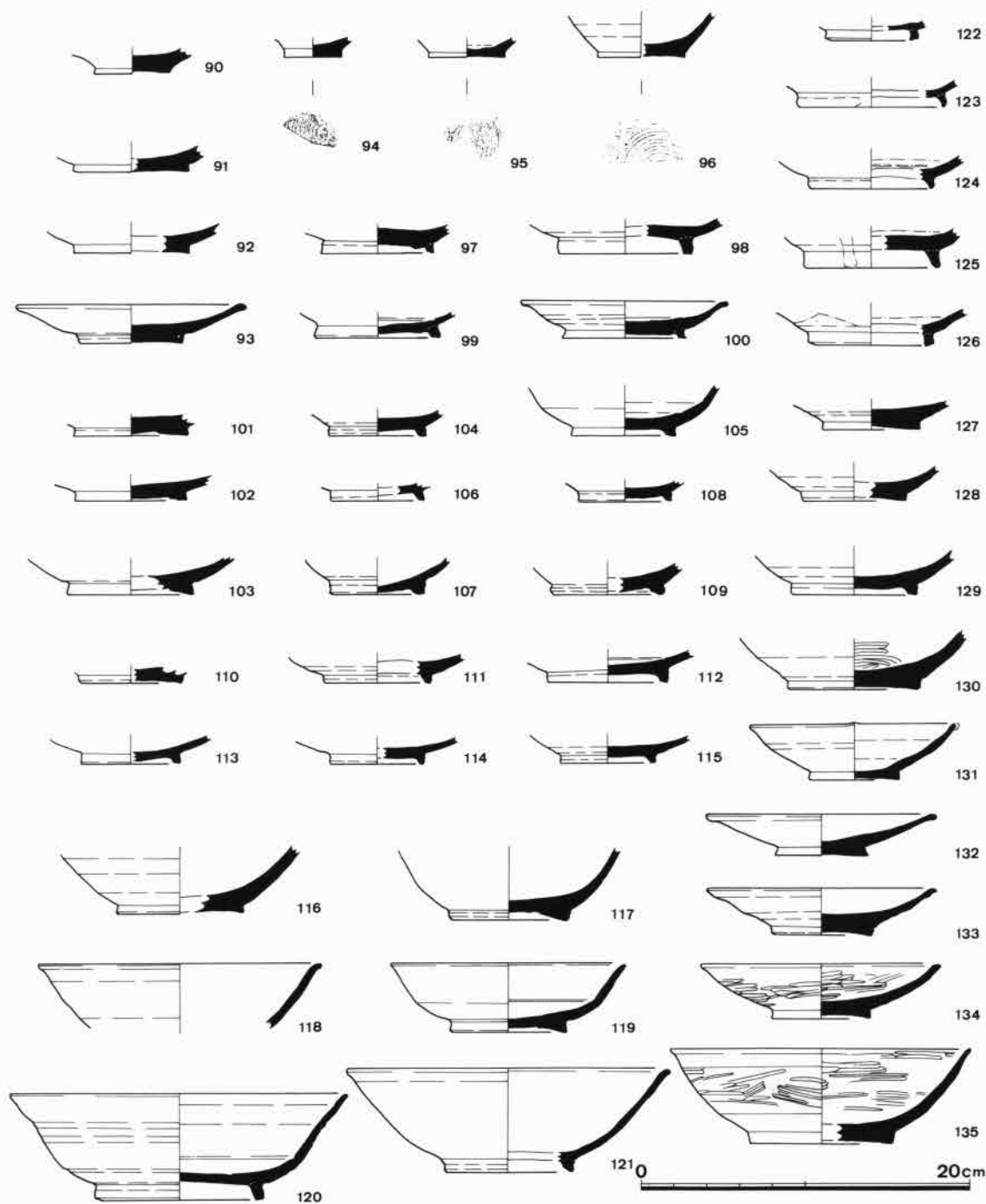


第25図 出土遺物実測図(1) 土師器



第26図 出土遺物実測図(2) 墨書土器・黒色土器・須恵器

りの椀である。いずれも体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外反して丸くおさめる。76~79は、杯である。79は、杯Bの蓋で、宝珠つまみをもち、口縁端部のかえりの断面は三角形を呈する。80~87は高台付の杯で、80・81は底部外面を硯に転用している。82や83は、高台がかなり内側にとりつけられており、今回出土の須恵器の中では古い様相をもつ。85・87は、体部が直線的に外へ立ち上がり、他の土器には見られない独特の器形をしている。86は大型の椀で、口径約24.7cm・器高約8.3cmを測る。体部及び口縁部は、ナデの後、ヘラミガキで調整している。88は、壺である。体部外面に自然釉がかかる。89は、円面硯の透かし部分の破片である。



第27図 出土遺物実測図(3) 緑釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器

緑釉陶器(第27図90~121) 京都系のものがほとんどで、一部近江系がある。破片点数で約120点が出土した。

90~93・116は、円盤状高台をもつ。116は、第2トレンチのS X 09から出土した。いずれも、全面に施釉しており、9世紀中頃のものと思われる。90は、胎土及び釉薬の色調から近江系と考えられる。94~96は、底部糸切りである。94は、耳皿の可能性もある。97~100は、貼り付け高台で高台の端部に稜線があり、近江系と考えられる。100は、皿である。97は、全面に施釉しており、9世紀後半のものと思われる。その他は、高台の内側には施釉しておらず、10世紀前半の所産と考えられる。101~121は、いずれも削り出し高台をもち、京都系と考えられる。101~103・117・119は、蛇の目高台をもつ。103は皿、119は稜椀である。101は、全面に施釉しており、9世紀のものと思われる。その他は、高台の内側には施釉しておらず、10世紀前半の所産と考えられる。104~115・118・120・121は、輪高台をもつ。120は稜椀で、口径約20.7cm・器高約6.55cmを測る。貼り付け高台で、近江系の古い時期のものか、東濃系と考えられる。104・105は、全面に施釉しており、9世紀のものと思われる。その他は、高台の内側には施釉しておらず、10世紀前半の所産と考えられる。

灰釉陶器(第27図122~126)

122は皿である。貼り付け高台で、内面は全面に施釉する。黒笹14号窯式のものと思われる。

123・124は椀である。貼り付け高台で、高台の断面は三日月形である。内面に重ね焼きの痕跡があり、体部内外面に施釉する。黒笹90号窯式のものである。125・126は椀である。貼り付け高台で、内面に重ね焼きの痕跡がある。体部内外面にツケガケによる施釉をする。折戸53号窯式のものと考えられる。

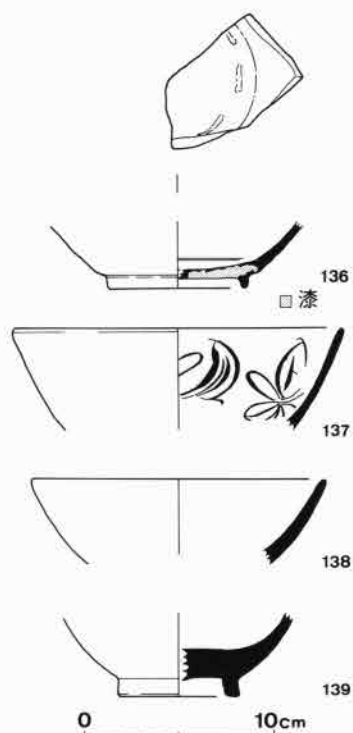
これらの灰釉陶器の年代は、9世紀後半から10世紀前半で、緑釉陶器の年代とほぼ一致する。

無釉陶器(第27図127~135) 127は第1トレンチのP 4から、他は谷の堆積土及び整地土から出土した。

127・132~134は、皿である。いずれも、体部内外面ともにていねいにみがかれており、底部は糸切りの後ナデで調整している。口縁部は外反する。

128~131・135は、椀である。129は、削り出しの輪高台をもつ。131は、輪花の椀で、内面が硯に転用されている。いずれも、体部内外面ともにていねいにみがかれており、底部は糸切りの後ナデで調整している。

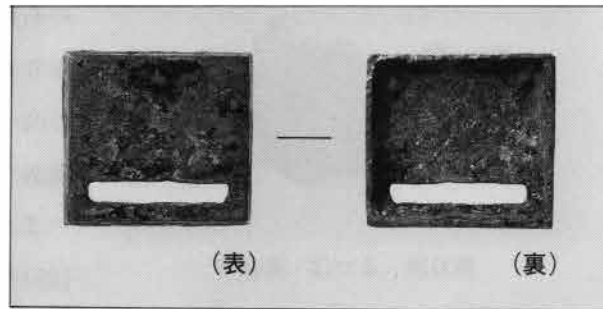
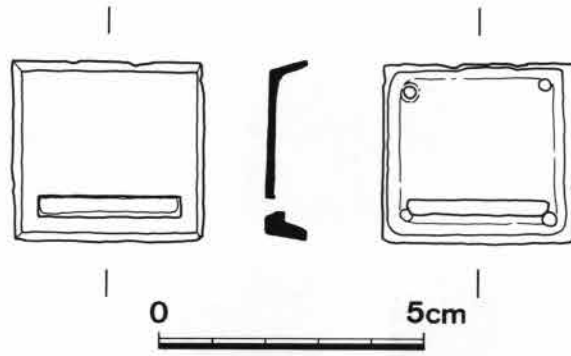
輸入陶磁器(第28図136~139) 青磁と白磁があり、青磁には越州窯系(136)と龍泉窯系(137~139)の椀がある。136は輪高台をもつ椀で、内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。全面に施釉する。森田編年のI-2類(注6)に相当し、8世紀から9世紀にかけ



第28図 出土遺物実測図(4)
輸入陶磁器：青磁

での年代が与えられる。また、割れ口に漆が付着しており、漆を接着剤に使用して修理し、再使用していた可能性がうかがえる。越州窯系の青磁は、丹後地方では宮津市中野遺跡^(注7)で数点出土例があるのみである。

137は、第2トレンチで検出した建物跡の柱穴から出土した。口径約8.7cm・残存高約5.2cmを測る。オリーブ色を呈し、内面に草花文を施す。森田編年のI-2類^(注8)に相当する。13世紀のものと考えられる。138・139は、第5トレンチ南部分の表土から出土した。無文の椀で、白く濁った緑色を呈する。森田編年のIV類^(注9)に相当し、15世紀のものと考えられる。



第29図 銅製帯金具実測図・写真

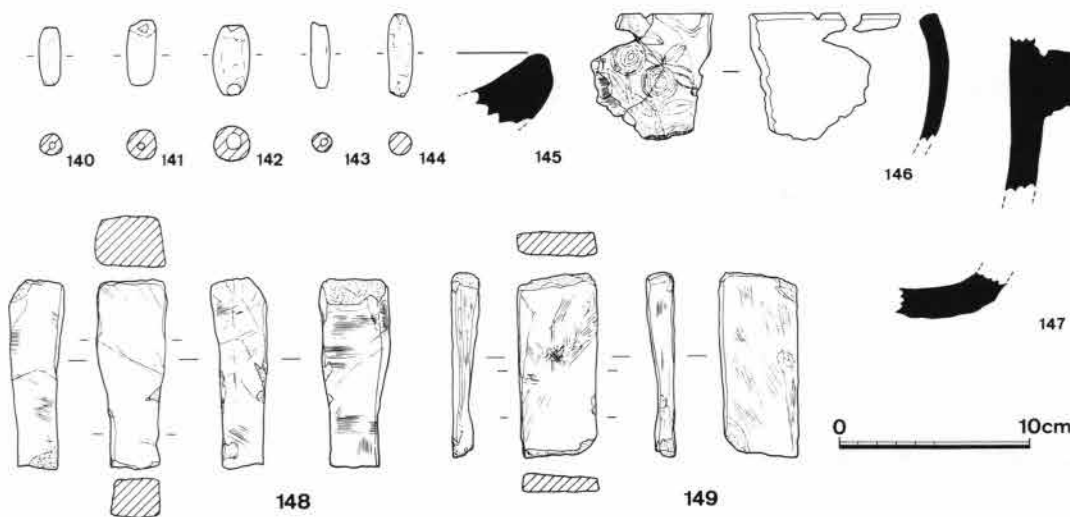
白磁は、破片5点が出土した(図版第20-(2) b)。小片のため図示できなかったが、邢窯系もしくは定窯系のものと考えられるものが含まれ、丹後地方では初出土である。

帯金具(第29図) 銅製黒漆塗りの巡方である。^(注10) 方形で長辺約3.6cm・短辺約3.3cmを測り、大型の部類に入る。下部に0.4cm×2.6cmの長方形の透かし穴がある。内側は中空で、四隅に鋳足の痕跡が残る。丹後地方では石帯も含めて3例目、^(注11) 銅製でははじめての出土である。

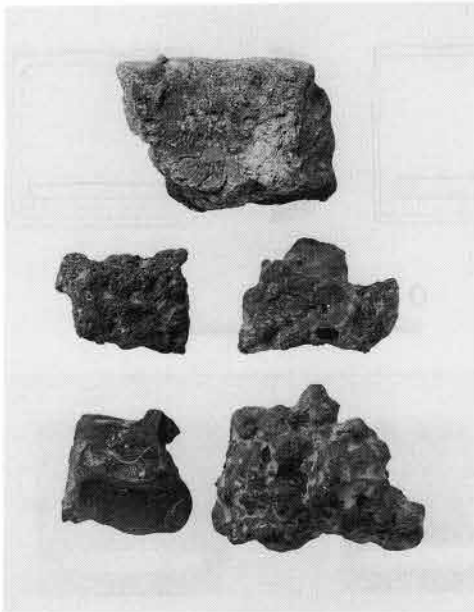
その他の遺物(第30図、土製品・木製品・石製品)

140~144は、土錘である。竪穴状遺構の埋土及び谷の堆積土から出土した。

146は、漆器椀である。内面赤色、外面黒色で、外面には赤色漆で植物文が描かれている。13世紀以降のものと考えられる。



第30図 出土遺物実測図(5) 土製品・木製品・石製品



第31図 るつぼ・鍛冶滓

147は、石鍋である。谷の堆積土(黒色粘土層)から出土した。口縁部の四方に把手が付くもので、把手の断面は四角形である。11世紀末から12世紀のものと考えられている^(注12)。

148・149は、砥石である。148は谷の堆積土(黒色粘土層)から、149は第2トレンチSK02から出土した。その他、石製品には基石と思われる小さな円形の石がある(図版第20-(2)c)。片面を偏平に削り、座りをよくしている。全部で5点出土しており、その内一つが黒色で、他は白色である。丹後町の竹野遺跡で基石の報告がある^(注13)。

また、鍛冶関連の遺物にるつぼの破片(第30図145)や鍛冶滓(第31図)がある。るつぼの破片は谷の

堆積土から、鍛冶滓は竪穴状遺構の埋土及び谷の堆積土(黒色粘土層)から出土した。

4. ま と め

今回の調査では、平安時代及び鎌倉時代の遺構を確認し、平安時代の遺構・遺物について大きな成果が得られた。特に、出土遺物については、この時期の資料を多量に追加したという点で重要であり、丹後地方の古代から中世にかけての土器編年に重要な役割を果たすと考える。

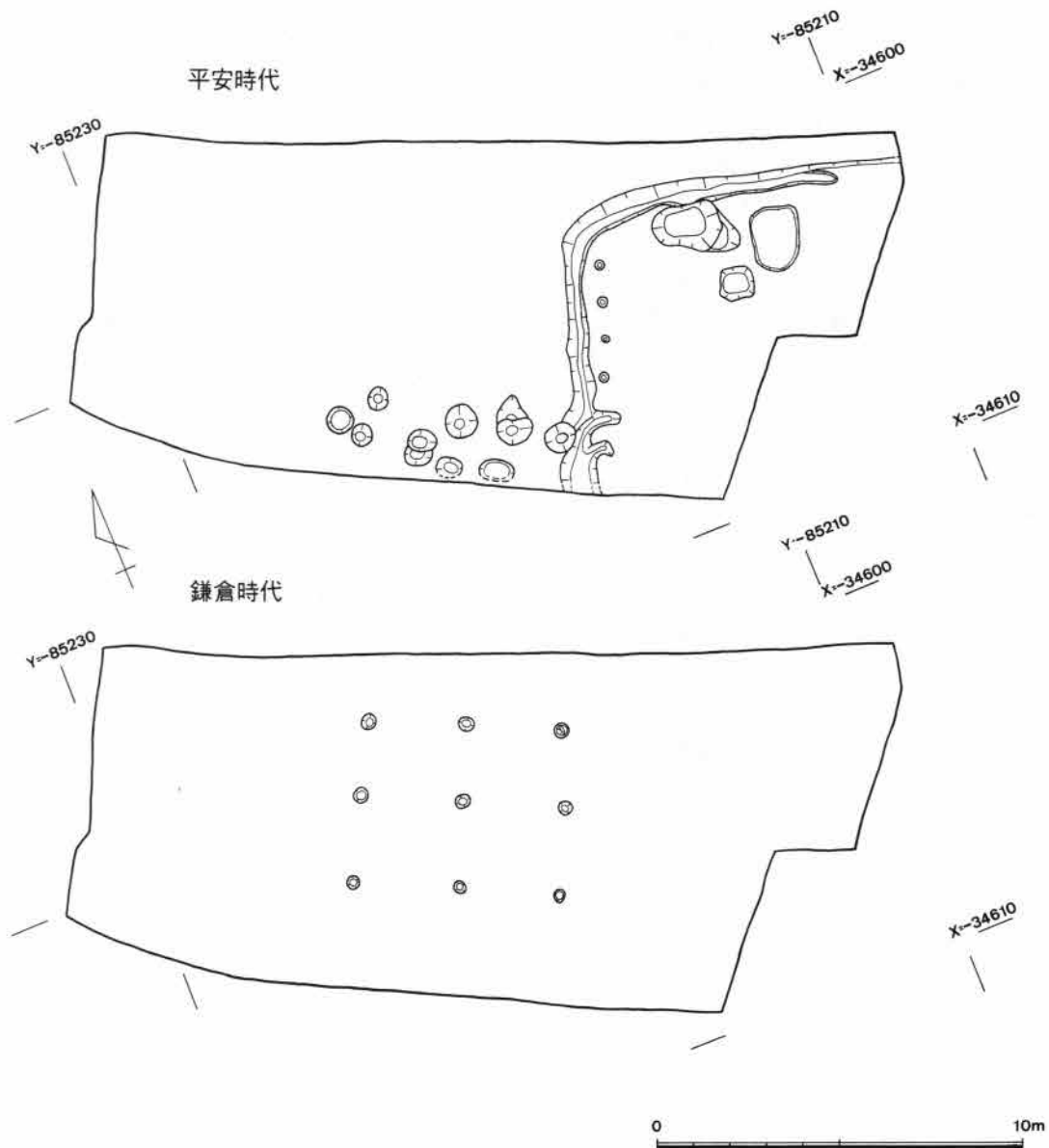
以下、時期ごとに調査成果をまとめ、問題点を整理していきたい。

①平安時代の遺構・遺物 遺構については大きな建物跡などはなかったが、第1トレンチの西側部分で柱穴群を、第2トレンチで作業場と考えられる竪穴状遺構とそれに伴う井戸と土坑、鍛冶関連土坑を確認した。第1トレンチの西部分で確認した谷の肩部は、平安時代に整地されており、柱穴群の一部は整地層の上面から掘り込まれている。残念ながら柱穴群は、調査面積が狭いため建物になるか不明である。また、谷の堆積土及び昭和の整地土からは土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・無釉陶器・灰釉陶器・墨書土器・輸入陶磁器が多量に出土した。そのほか、銅製帯金具、鍛冶滓やるつぼの破片、土錘、石鍋、基石、砥石なども出土している。これらの特殊な遺物の出土とあわせて緑釉陶器の量が多いことは、遺跡の性格を考える上で非常に興味深い。また、鍛冶滓やるつぼの破片の出土から、第2トレンチの作業場で、小規模ではあるが、鍛冶が行われていたことは確実であろう。丘陵先端の平坦面は、この作業場を構築する際に削り出されたと考えられる。出土遺物の年代は、9世紀後半から10世紀前半が中心である。遺構は少なくとも2時期はある。

②鎌倉時代の遺構・遺物 遺構には、第2トレンチで検出したピット群がある。トレンチ中央部に掘立柱建物1棟分が復原できた。この時期の遺物には、柱穴から出土した土師器鍋、龍泉窯系の青磁椀、第1トレンチで出土した漆器椀がある。遺物の年代から13世紀頃と考えられる。

③遺跡の性格について まず、第1・2トレンチで出土した鍛冶関連遺物の存在から鍛冶生産が行われていたことが明らかになったが、遺跡としては、生産遺跡というよりむしろ付屬的に小鍛冶が行われていたようである。調査地から南東へ約2kmのところにある弥栄町遠所遺跡群やニゴレ遺跡などの古代の製鉄コンビナートとの関連も検討していく必要があり、鍛冶の原料はそこから入手していた可能性がある。

次に遺物については、銅製帯金具・緑釉陶器・灰釉陶器・円面硯・転用硯・墨書土器の出土からうかがえるように、一般集落というよりも官衙の様相が強い。これらはすべて、京都を經由してもたらされたものと思われる。このことから、遺跡の性格として鍛冶工房を備えた寺院・官衙・官衙の出先機関・豪族居館などが考えられる。しかし、土器組成や他の土器の様相をみると在地色が強く、仏具関係の遺物もほとんどないことから、寺院や官衙そのものとは考えがたい。ただし、今回の調査対象地は遺跡の全体ではなく一部にすぎない。耕地整理などで削られている



第32図 遺構変遷図

が、丘陵平坦面は古代にはもっと広がったと考えられ、建物が建っていた可能性は十分にある。隣りの丘陵平坦面でも同時期の遺物が採集でき、周辺を含めたもっと広い範囲を遺跡として捉える方がよいと考える。また、時代背景をみると、丹後半島に渤海使が漂着した記事が見られ、緑釉陶器の出土量から、彼らを饗応した可能性も否定できない。遺跡の付近に嶋荘という荘園があったことも興味深い^(注15)。遺跡の北西にある離れ湖はかつては日本海に通じた潟湖であり、当時はその水際が遺跡のかなり近くまで迫っていたと思われる。このことから、横枕遺跡は当時海上・陸上交通の要衝にあたり、物資の集積地であったと考えられる。(松尾史子)

注1 平成9年度の横枕遺跡の発掘調査に係る主な調査参加者、調査協力者は次の通りである(順不同・敬称略)。

安達定雄・足達邦行・足達信昭・岩淵寛徳・大垣鉄雄・小国喜市郎・栄元一雄・嵯峨根次郎・城下圭介・城下則行・船戸 優・松田 章・森 秀雄・石井 清・藤原多津子・石田寿子・松村 仁・大江田津子・石嶋文恵・藤原悦子・野口美乃・山本 絹・金保眞由美・金久真弓・河崎裕子・有田美恵子・伊熊佐知子・寺尾貴美子・丸谷はま子・森川敦子・小林宏和・中島秀二
百瀬正恒・高橋照彦・清水みき

注2 第1次調査の成果については、網野町教育委員会金木泰憲氏のご教示を得た。

注3 作業員として当時の整備推進委員の方がこられており、当時の状況について話を聞いた。

注4 現状では、これらの土坑を鍛冶炉本体と考えることは困難であるが、鍛冶炉の下部構造に当たるものが含まれる可能性はある。当調査研究センターの河野一隆・野島 永に教示を得た。

注5 出土遺物については、(財)京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏・国立歴史民俗博物館高橋照彦氏・(財)向日市埋蔵文化財センター清水みき氏からご教示いただいた。また、当調査研究センターの伊野近富・竹原一彦・森島康雄にも教示をえた。なお、整理に当たっては、以下の文献を参考にした。

『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社 1995

竹原一彦「丹後における黒色土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(『史林』77-6) 1994、「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 国立歴史民俗博物館) 1995

森田 勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4) 1978
『大宰府条坊跡』Ⅱ 大宰府市教育委員会 1983

木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX 1993

注6 注5 森田・横田論文

注7 『中野遺跡第4次発掘調査概要』 宮津市教育委員会 1983

注8 注5 森田・横田論文

注9 注5 森田・横田論文

注10 養老令「衣服令」によれば奈良時代の官人の腰帯には金銀装腰帯と烏油腰帯があり、前者は五位以上の、後者は六位以下及び無位の官人が着用していた。今回、出土の帯金具は後者に当たる。

注11 大宮町正垣遺跡で巡方が、同町谷内遺跡で蛇尾が出土しており、いずれも石製である。

注12 注5 木戸論文

注13 『丹後竹野遺跡』(丹後町文化財調査報告第2集 丹後町教育委員会) 1983

注14 平安時代に大陸からの船が丹後国に漂着した記事が数件見られる。これについては、『網野町史』に簡潔にまとめられている。

注15 『丹後国田数帳』、石川登志雄「丹後国田数帳にみえる荘園公領について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

3. 井町古墳群発掘調査概要

1. はじめに

井町古墳群は、京都府竹野郡丹後町徳光小字井町に所在する。丹後半島を南から北に向かって貫流する竹野川の下流域にあたる。竹野川河口をややさかのぼったところで、支流の徳良川が合流する。徳良川は西から東に向かって流れる小河川で、この川に沿って細長く平地が広がっている。井町古墳群は、この平地の西側最奥部の丘陵上に位置する。丹後町から網野町に抜ける道を見下ろす場所にあたる。

この古墳群は、北東から南西方向にのびる小尾根上に位置する3基の古墳からなる。北東側最高所に1号墳があり、その南西側に隣接して2号墳がある。さらに、南西側にやや離れて3号墳が位置する。今回の調査対象となったのは、2号墳・3号墳の2基である。

今回の調査は、府営広域営農団地農道整備事業に伴うもので、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。調査経費は、同事務所に全額負担していただいた。

調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎と同主任調査員引原茂治が担当して実施した。調査を開始したのは、平成9年10月16日である。調査前の地形測量を空撮図化で行った後、人力で表土掘削・精査・遺構掘削した。調査終了は、12月19日である。調査面積は、約450m²である。この間、12月17日に、関係者を対象とした説明会を実施した。地元の歴史に興味を持つ方がたが多数参加された。

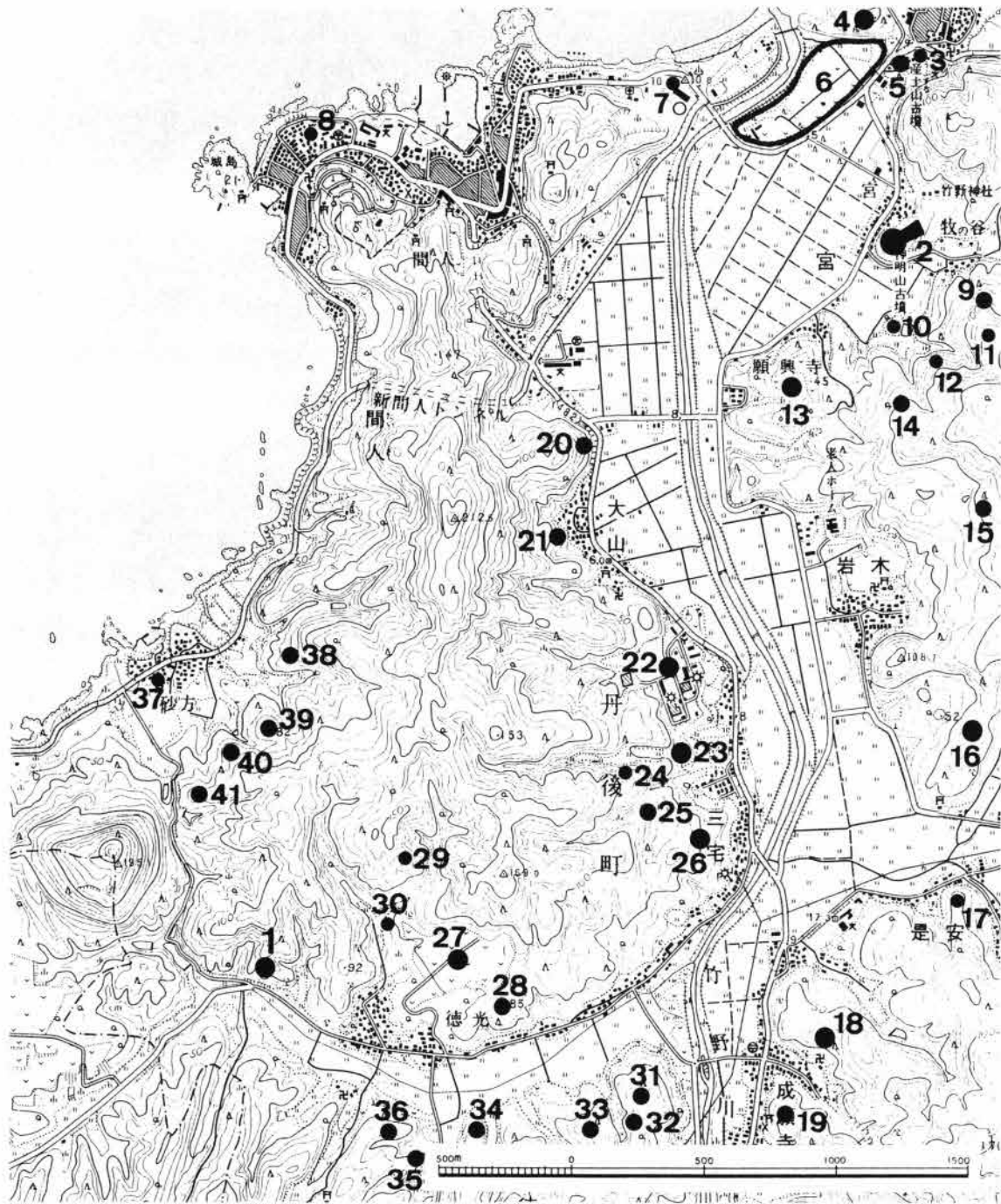
調査にあたっては、各関係機関から協力していただいた。特に、丹後町教育委員会の吉田 誠氏には、格別のご協力・ご配慮をいただいた。また、地元徳光・成願寺・三宅の各自治会にも、作業員手配などご協力いただいた。現地調査の作業には、多数の地元有志の方がたに参加していただいた^(注1)。感謝したい。

2. 位置と環境

井町古墳群は、丹後町の南西端部に位置し、網野町との境界に近接する場所にある。丹後町は、日本海に面したところであるが、この古墳群がある地域は、沿岸部から小山地を隔てており、内陸部的な様相である。

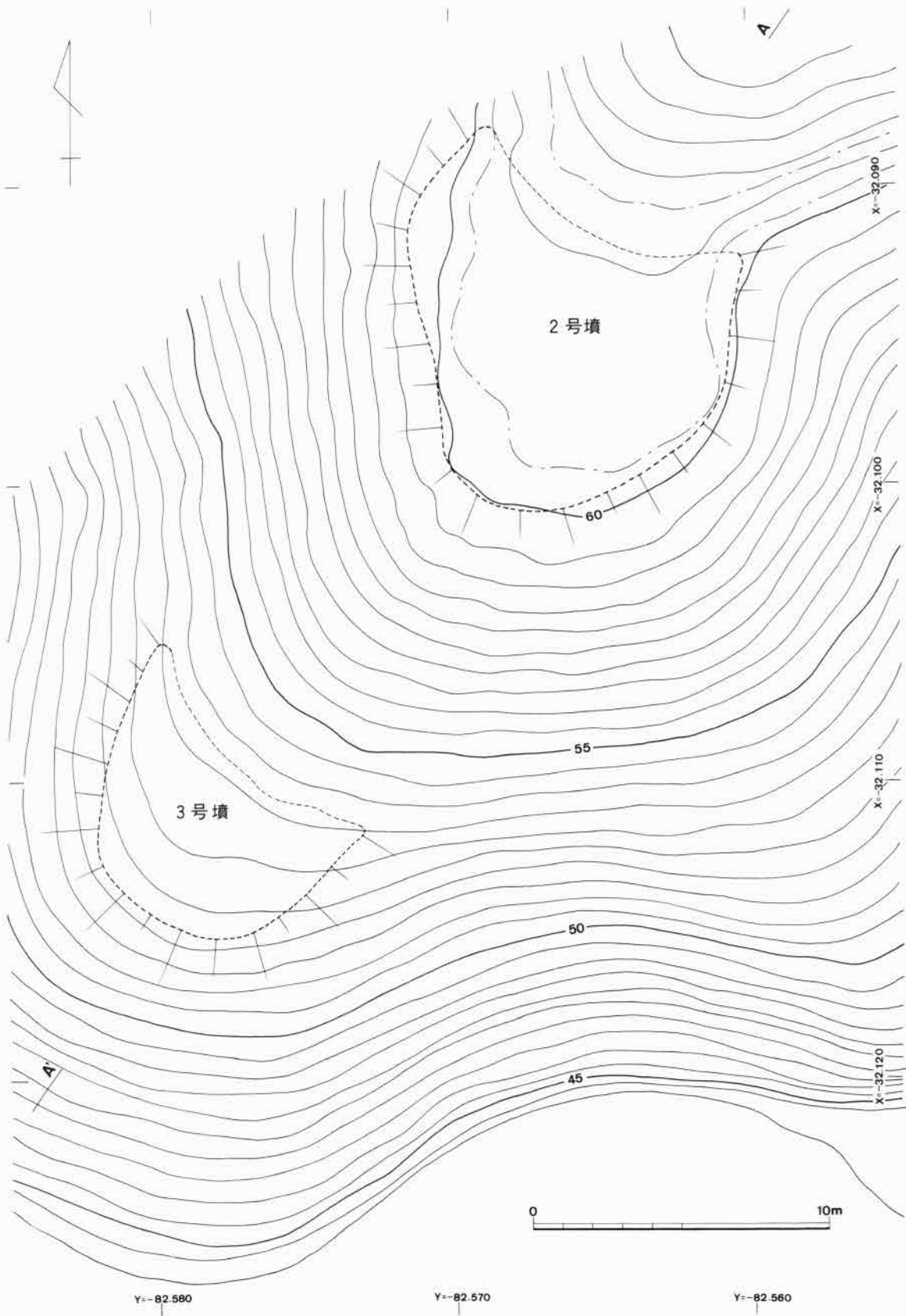
丹後町内には、多くの遺跡が分布する。縄文時代の遺跡としては、早期から晩期の遺物が多数出土した平遺跡がある。また、弥生時代の遺跡としては、前期の集落跡として知られている竹野遺跡がある。いずれも、日本海沿岸部に位置する。また、弥生時代中期から後期にかけての方形台状墓などが確認された大山墳墓群もある。

古墳時代の遺跡としては、多くの古墳が町内全域に分布している。その中でも代表的なものは、

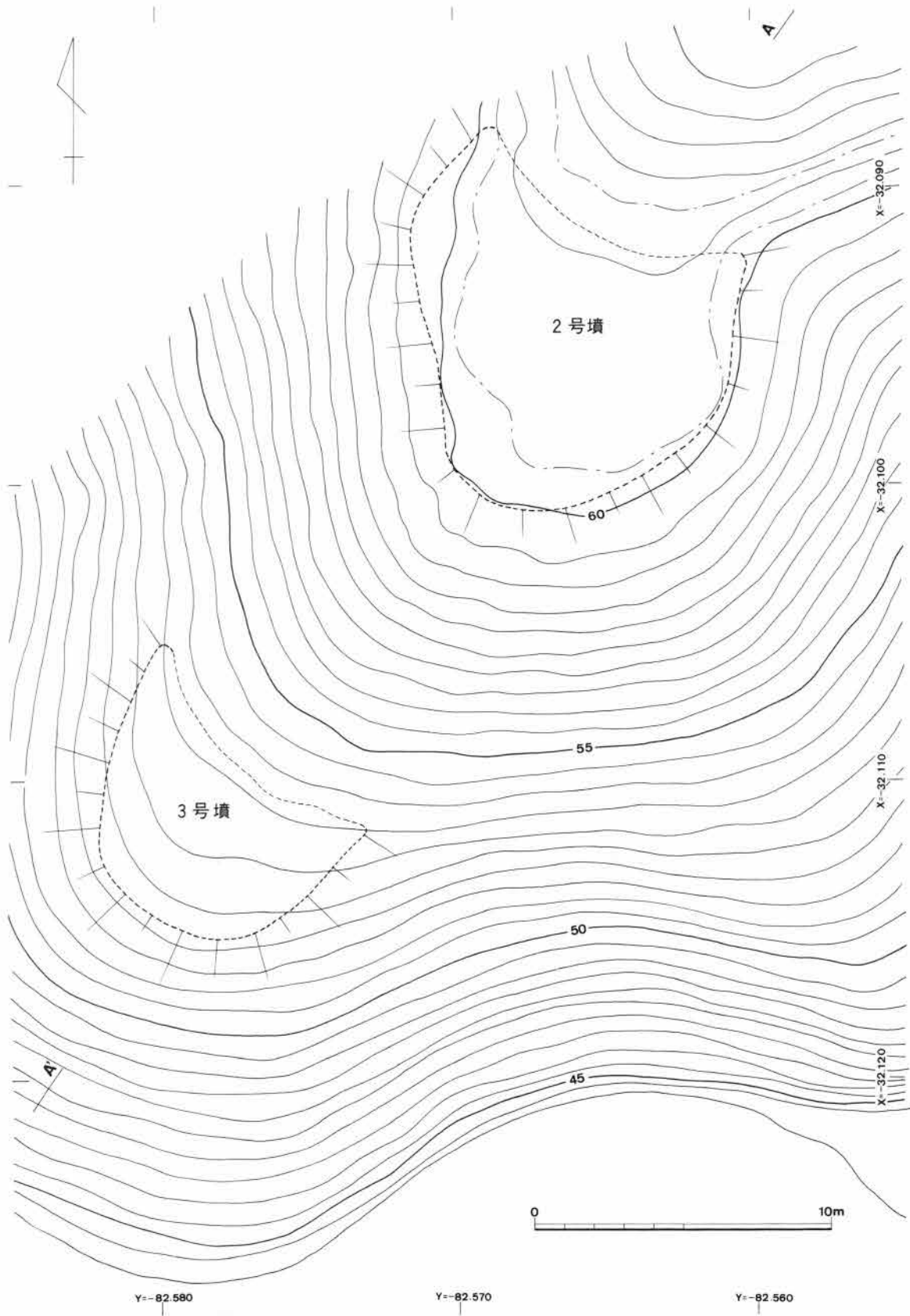


第33図 調査地位位置図・古墳分布図

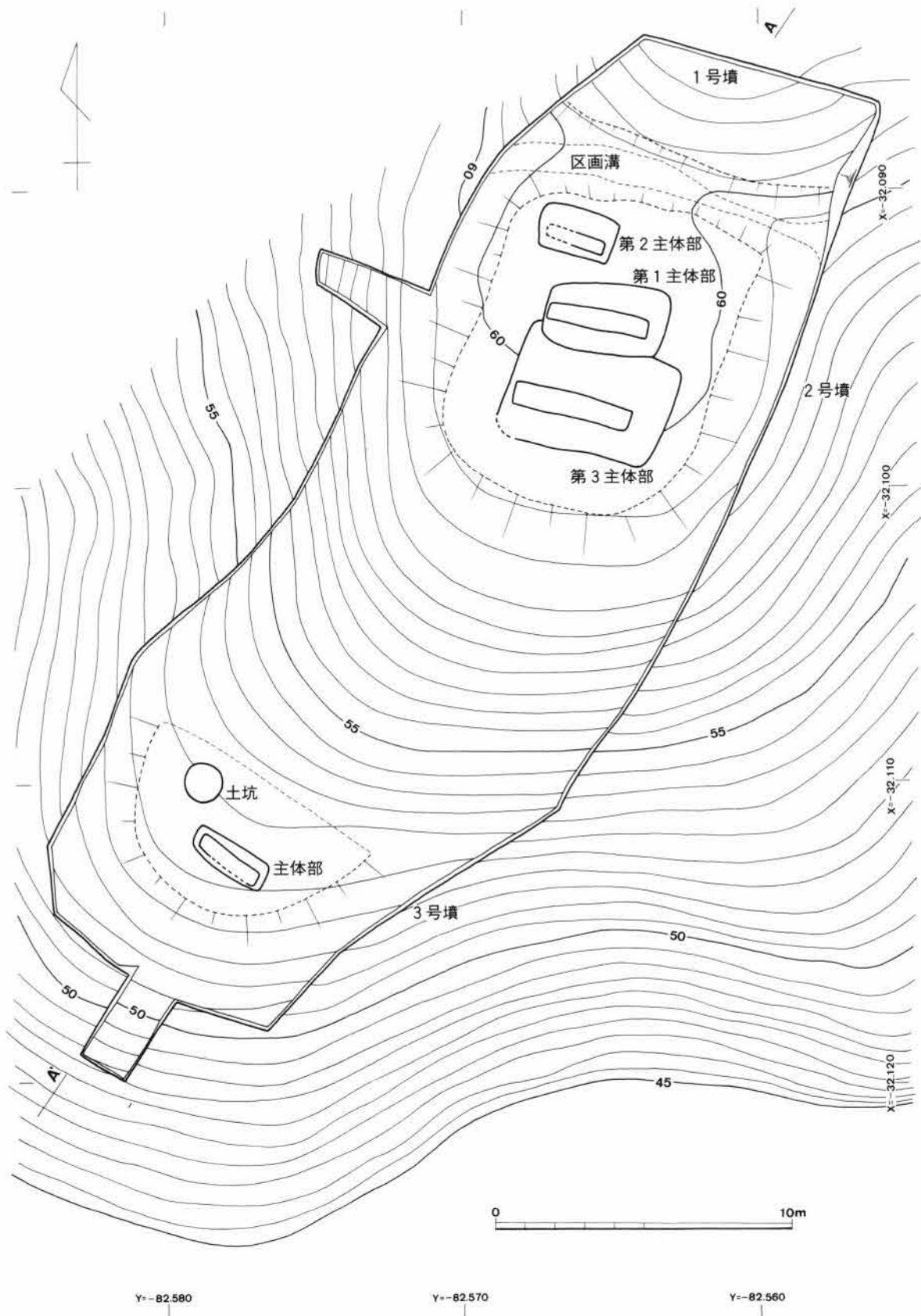
- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------|------------|
| 1. 井町古墳群 | 2. 神明山古墳 | 3. 産土山古墳 | 4. 大成古墳群 | 5. 片山古墳群 |
| 6. 竹野遺跡 | 7. 鼻下り古墳 | 8. 馬場ノ内古墳 | 9. 長者屋敷古墳群 | 10. 丸山古墳 |
| 11. オカンバチ古墳 | 12. シノ谷古墳 | 13. 願興寺古墳群 | 14. 柿谷古墳群 | 15. 初林古墳群 |
| 16. 矢畑古墳群 | 17. アマカオカ古墳 | 18. 池内古墳群 | 19. フカ谷古墳群 | 20. 平井古墳群 |
| 21. 大山北古墳群 | 22. 大山墳墓群 | 23. 上野古墳群 | 24. 滝谷古墳 | 25. 石ヶ原古墳群 |
| 26. 三宅古墳群 | 27. 高山古墳群 | 28. 段ナル古墳群 | 29. 荒神山古墳 | 30. 椿原古墳 |
| 31. セツ塚古墳群 | 32. 川向古墳群 | 33. 小行地古墳群 | 34. 取越古墳群 | 35. 副井古墳群 |
| 36. 奥山古墳群 | 37. 宮ノ谷古墳 | 38. 雨谷古墳群 | 39. 砂方A古墳群 | 40. 砂方B古墳群 |
| 41. 先セ山古墳群 | | | | |



第34図 調査地位置図



第34図 調査地位置図



第35図 調査地平面図

全長190mの前方後円墳の神明山古墳である。前期末から中期初頭頃の築造と考えられ、日本海側では、網野銚子山古墳に次ぐ規模の古墳である。中期古墳としては、長持形石棺が出土した産土山古墳がある。直径50mの円墳である。このほか、後期の大成古墳群や高山古墳群、終末期の上野古墳群など、さまざまな様相の古墳がある。

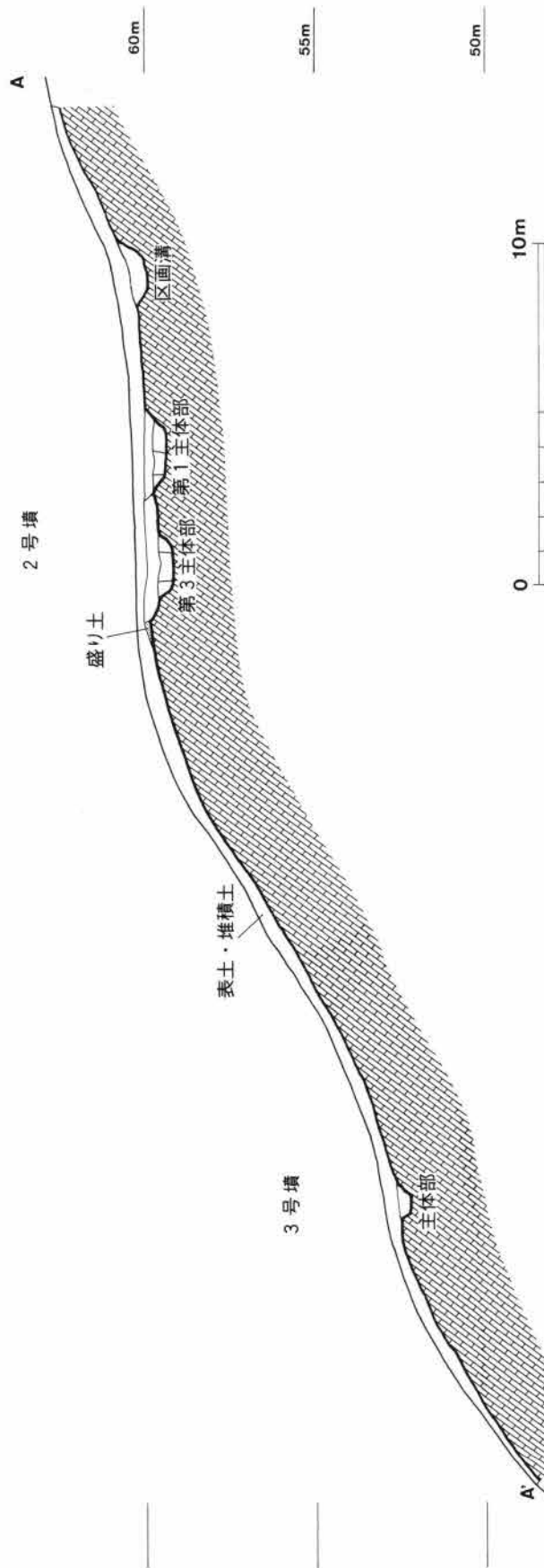
3. 調査内容

今回は、井町2・3号墳を調査した。2号墳は、当初の地形観察では墳形が明確ではなかったが、調査の結果、方墳であることが判明し、3基の埋葬主体部を検出した。3号墳は、当初わずかな緩傾斜地が認められる程度で、古墳であるかどうか不確定であった。調査の結果、主体部を検出したので、古墳であることが確認できた。

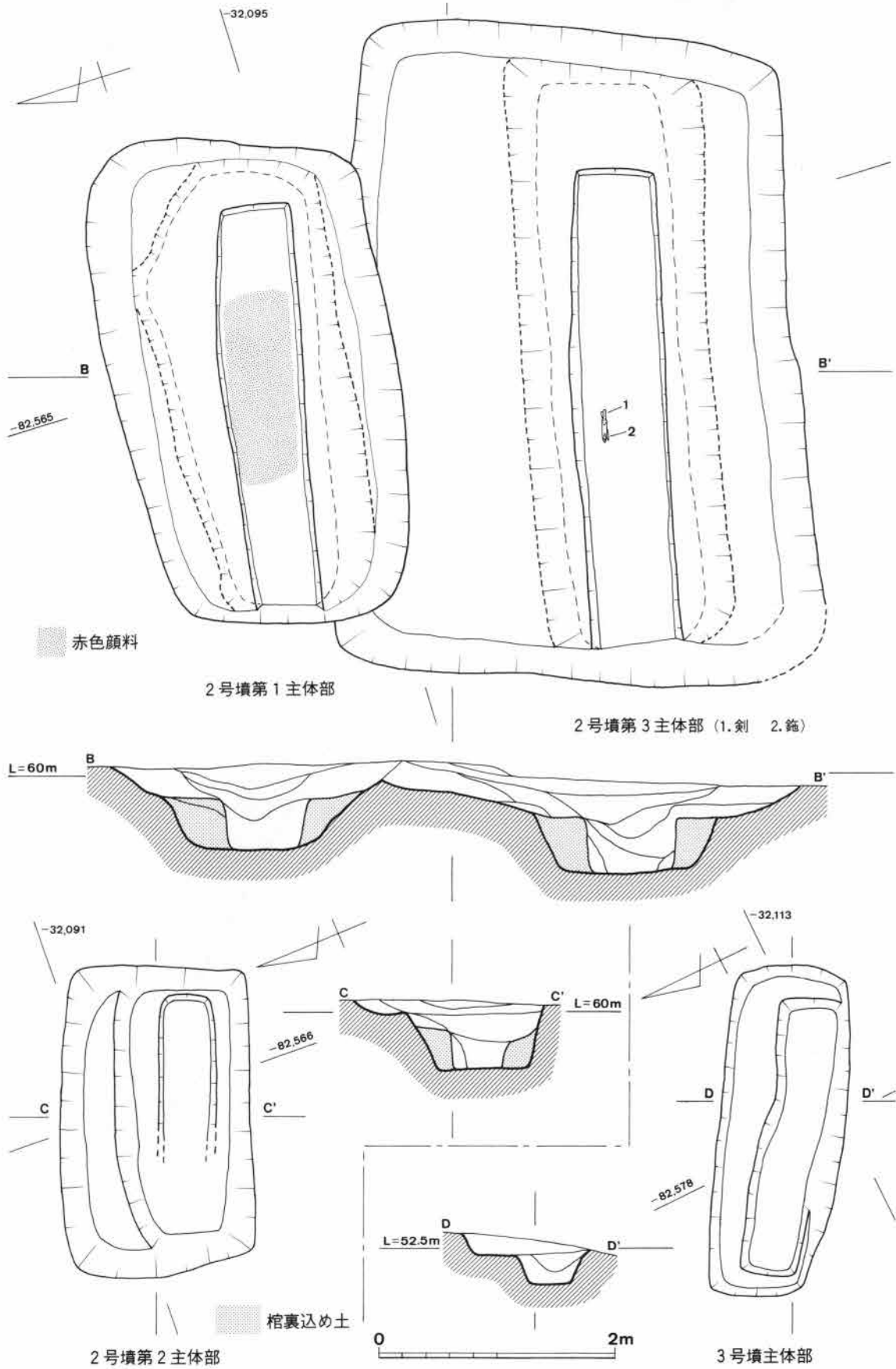
(1) 2号墳

2号墳は、尾根の最高所に築かれた1号墳の南西側に隣接して造られており、その境には幅約2mの区画溝が直線的に掘られている。一辺約12m前後の方墳と考えられる。墳丘は、ほぼ全体を地山の岩盤を削り出して築造しているが、南側にはわずかに盛り土がみとめられる。この古墳には、3基の埋葬主体部が設けられている。いずれも、木棺直葬である。主体部の主軸は尾根筋に直交しており、ほぼ東西方向である。

a. 第1主体部 墳丘中央部やや北寄りに設けられている。墓壙は、長さ約4m・幅約2.4m・深さ約0.2mの長



第36図 調査地断面図

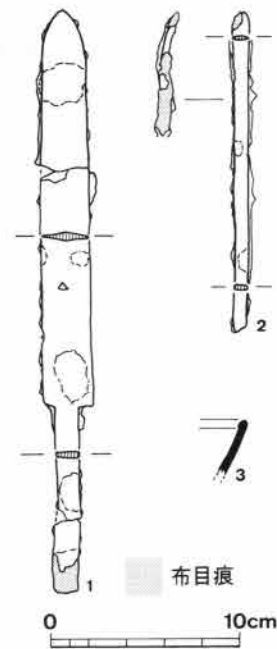


第37図 主体部実測図

方形に掘り込む。さらに幅約1.6m・深さ約0.4m掘り込んで、棺掘形を設ける。この掘形のほぼ中央部に、長さ約3.4m・幅約0.6mの棺を埋納する。棺の西側木口は、掘形西辺に接する。

棺内の遺体を安置したとみられる部分には、赤色顔料が残る。副葬品は出土していない。墓壙埋土には、白色軟質の大小の角礫が混じる。これは、墓壙掘削時に地山の岩盤を掘り抜いた排土を、埋葬時に埋め戻したためとみられる。

b. 第2主体部 墳丘北西部に設けられている。墓壙は、長さ約2.5m・幅約1.5mの長方形に浅く掘り込む。さらに、その南辺寄りに幅約1.1m・深さ約0.5m掘り込んで、棺掘形を設ける。掘形内に幅約60cmの棺を埋納する。棺の長さは不明であるが、他の主体部の棺が掘形西辺に接して埋納されており、この主体部も同様と考えれば、長さ約1.8mとみられる。棺内から副葬品は出土していないが、墓壙埋土からは古墳時代前期布留式併行期の土師器甕片(第38図3)が出土している。



第38図 出土遺物実測図

c. 第3主体部 墳丘中央部南寄りに設けられている。この古墳の主体部の内では、最も大規模である。墓壙は、長さ約5.4m・幅約4m・深さ約0.4m前後の長方形に掘り込む。さらにその中央やや南寄りに幅約1.6m・深さ約0.4m掘り込み、棺掘形を設ける。この掘形内に、棺西木口を掘形西辺に接して、長さ約4m・幅約0.8mの棺を埋納する。棺内のほぼ中央北辺寄りから鉄製の剣と鉞が出土した。切先は西に向く。なお、この主体部は、墓壙北辺を第1主体部に削り取られており、第1主体部に先行するものである。

この主体部から出土した鉄剣(第38図1)は、全長約30.5cm・刃部長約21cm・刃部幅約2.6cm・茎長約9.5cm・茎幅約1.2cm・厚さ約0.5cmである。鉄製鉞(第38図2)は、長さ約17cm・幅約1cm・厚さ約0.3cmを測る。これらの鉄製品には布目痕が残っており、出土状態から考えて、この2点は、重ねて布で包んであったものと考えられる。鉄剣の茎部にも布目痕があるので、拵えはなく抜き身の状態であったものとみられる。

(2) 3号墳

2号墳南西側の急傾斜の尾根上に位置する。2号墳とは約6mの高低差があり、約12m離れている。この古墳は、尾根の稜線を8m×4.5mの半円形テラス状に削り出して造成されている。

このテラスの南寄りに埋葬主体部が設けられている。木棺直葬で、主軸はほぼ東西方向である。墓壙は、長さ約3m・幅約1m・深さ約0.2mの長方形に掘り込む。さらにその南辺に接して、長さ約2.3m・幅約0.5m・深さ約0.24mの棺掘形を設ける。副葬品は出土していない。

また、テラス北側で、直径約1.2mの円形土坑を検出した。内部には、壺混じりの土が堆積していたが、出土遺物はない。そのため、この土坑の時期・性格などは、不明である。

4. 小 結

今回調査した井町古墳群がある地域は、水系的には竹野川流域に属する。本流の竹野川河口周辺には、神明山古墳や黒部銚子山古墳などの日本海側でも有数の大規模な前方後円墳があることは、よく知られている。これらの大規模古墳は、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造されたと考えられており、その頃の丹後地域の隆盛がうかがわれる。今回調査した井町古墳群は、2号墳第2主体部埋土出土の土師器甕片からみて、古墳時代前期の4世紀後半頃の築造と考えられる。位置的には、竹野川支流の徳良川流域になる。このような状況から、この古墳群は、竹野川本流域に大規模古墳を築造した支配者に従属する、小地域の有力者の墓とも考えられる。

徳良川流域には、金銅装双龍環頭大刀が出土した高山古墳群や、石垣状の列石をもつ上野古墳群などがあるが、いずれも古墳時代後期～終末期にかけてのものである。井町古墳群は、この地域ではじめて確認した前期古墳であり、この地域や丹後半島の古墳時代を考えるうえで、重要な遺跡と言えよう。

(引原茂治)

注1 主な調査参加者(敬称略)

岡崎仁作・岡崎千代子・岡崎美津恵・清水朋治・田家春枝・永島八重子・飯田 薫・飯田みよ・上羽利昭・上羽久子・金羽きぬ子・水口智恵子・中島恵美子・山中道代・山本弥生・山田三喜子

<参考文献>

『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988

『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995

「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』第1冊 丹後町教育委員会) 1983

『日本の古代遺跡』27 京都 I (株)保育社 1986

4. 京都縦貫自動車道関係遺跡 平成8年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、京都縦貫自動車道建設事業に伴うものである。京都府道路公社の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成4年度から継続的に実施している。平成8年度は、宮津市桑原口遺跡・今福北城跡・盛林寺裏山古墳群の計3遺跡の発掘調査を実施した(第39図)。

今福北城跡・盛林寺裏山古墳状隆起は、京都府教育委員会及び宮津市教育委員会による分布調査によって新たに確認されたものである。盛林寺裏山古墳状隆起では計2地点を対象とする試掘調査を実施した。今福北城跡は、丘陵に階段状の地形が見られ山城に伴う郭跡と考えられたので、主に尾根稜線上にトレンチを設定して遺構の検出に努めた。

桑原口遺跡は、昭和45年に宮福線敷設工事(北近畿タンゴ鉄道)に伴って発掘調査が行われ、円形住居跡・方形住居跡・溝などの遺構とともに、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器がまとまって検出されている。宮津谷のこの時期の中核的な集落遺跡であることが推測された。

現在、遺跡推定範囲のほぼ中央部を北近畿タンゴ鉄道が南北に横切っている。京都縦貫自動車道は、北近畿タンゴ鉄道に直交し、遺跡を東西に横切るかたちで建設が計画された。平成7年度は、線路の西側をA地区、東側をB地区と仮称し、両地区の試掘調査を実施した。続いてB地区の面的調査を実施した。B地区では、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての住居跡や溝が検出され、土器が多量に出土した。良好な土器資料群であり、丹後地域の弥生時代後期後半の重要な事例となった。今年度は、B地区の成果をふまえつつ、A地区の面的調査を実施した。

平成8年度の調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員小池 寛・田代 弘が担当し、多くの方がたの参加協力を得て実施した^(注1)。本概要の文責は、文末に記した。調査経費は、全額京都府道路公社が負担した。

調査を行うにあたっては、京都府教育委員会・宮津市教育委員会の指導・助言を得たほか、京都府道路公社建設事務所には種々便宜をはかっていただいた。また、桑原口遺跡の発掘調査を行うにあたっては、福井県教育委員会赤澤徳明氏・舞鶴市教育委員会吉岡博之氏からは、専門的立場から有意義なご教示を得た。

(田代 弘)

付表6 調査地一覧表

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(m ²)	調査担当
桑原口遺跡	宮津市字喜多小字桑原口	平7.6.23~12.15(第2次)	700	尾崎 昌之
		平8.4.25~9.25(第3次)	450	田代 弘 小池 寛
今福北城跡	宮津市字喜多小字今福	平8.7.3~9.25	160	田代 弘
盛林寺裏山古墳状隆起	宮津市字今福小字梶谷	平8.6.19~7.2	50	小池 寛

(1) 桑原口遺跡第3次

1. 遺跡の位置と環境

桑原口遺跡は、京都府宮津市字喜多小字桑原口に所在する。

宮津市域南部には、大江山塊から流れ出した大手川の沖積作用によってできた、宮津谷と呼ばれる狭隘な沖積地がある。大手川は、宮津谷に出てから谷の中央を流れ、宮津湾に注ぎ込む。桑原口遺跡は、段丘上～沖積面に立地する集落遺跡で、宮津谷の中ほどの大手川東岸、河口から約2kmさかのぼった地点に位置している。

桑原口遺跡の発掘調査概要の報告を記すにあたって、まず、周辺の遺跡を概観する。

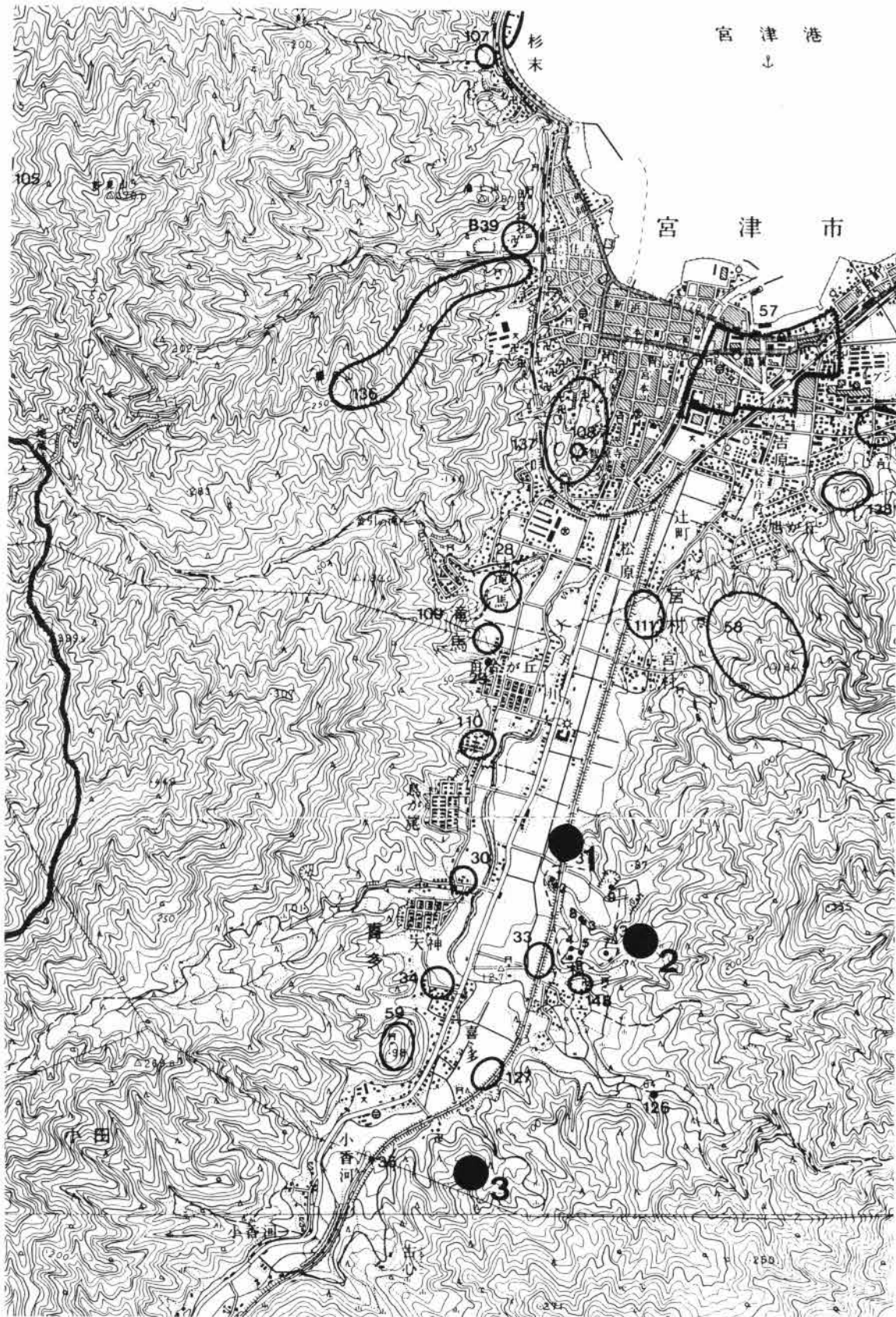
宮津市は、丹後半島の東端の基部に位置する。日本海に面し、港湾都市として古代から栄えた地域である。北西に特別史跡天橋立があり、阿蘇海と呼ばれる潟湖が形成されている。宮津市域の遺跡は、この潟湖周辺と、市域北部の日置地区、市域南部に位置する宮津谷周辺、東端の由良川河口域の4地区に分布の中心がある。縄文時代早期を最古として弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代の各時代の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡には、宮津市中野遺跡(早期)・大坪遺跡(後期)・国分遺跡(後期)がある。城ヶ谷遺跡は、大形の単頭石棒が出土したことで知られる。いずれの遺跡も遺物が断片的に出土するのみであり、詳細は明らかでない。舞鶴市域を流れる由良川流域では、志高遺跡(早期～前期)、三河宮ノ下遺跡(前期～後期)、桑飼下遺跡(後期～晩期)、浦入遺跡(前期～晩期)の発掘調査で充実した資料が得られている。宮津市は、隣接する地域でもあり、同時代の資料の増加が期待される場所である。

弥生時代には、日置高畔遺跡(前期・後期)、日置遺跡、霧ヶ鼻遺跡(中期)、一の宮遺跡(中期～後期)、小霞遺跡(後期)、宮村遺跡(中～後期)、桑原口遺跡(後期)、獅子遺跡(後期)などの集落遺跡が形成される。今熊野遺跡(中期)は、阿蘇海を望む高所に立地しており、物見櫓のような特別の役割を担った遺跡と考えられている。日置塚谷遺跡から出土した弥生時代中期の銅剣形磨製石剣は、弥生時代の祭祀形態を考える上で重要な資料となっている。現存してはいないが、由良からは江戸時代に銅鐸が出土した記録がある。

古墳時代の集落遺跡では、惣遺跡・天ヶ谷遺跡で土器の散発的出土をみるが、調査によって内容が明らかにされたものはいまのところない。古墳は前期初頭に位置づけられる三庄太夫・城ヶ腰古墳、前期の波路古墳・霧ヶ鼻1・2・3・5号墳、柿の木2号墳・倉橋山1号墳・小路山古墳・寺嵯峨古墳・高津神社古墳・中村古墳群・小田古墳・ひなた古墳などの後期古墳がある。波路古墳からは、靱が良好な状態で検出され注目された。

奈良時代の遺跡には、日置遺跡・荒木野遺跡・中野遺跡・杉本遺跡・丹後国分寺跡などがある。平安時代には籠神社経塚、真名井神社経塚、日吉神社経塚、河原山経塚などの経塚がたくさん作



第39図 遺跡位置図(1/25,000)

1. 桑原口遺跡 2. 今福北城跡 3. 盛林寺裏山古墳状隆起

られる。平安時代以降、鎌倉・室町時代には中野遺跡周辺を中心とした阿蘇海北岸地域に遺跡が集中する。中野遺跡からは平安～室町時代にかけての中国輸入陶磁器類、丹波、越前、瀬戸、常滑といった中世陶磁器類が多量に出土している。一の宮である籠神社、成相寺などの社寺がおかれたこの地は、港湾・交通路が整備され門前町、貿易中継地として大いに栄えた。

安土・桃山時代、江戸時代を代表するのは、宮津城である。城郭遺構は現市街地と重なっているため、明確な遺構は残っていないが、宮津市教育委員会が継続して発掘調査を行っており、少しずつその姿が明らかになりつつある。^(注2)

2. 調査経過

桑原口遺跡は、昭和45年に宮福線(近畿タンゴ鉄道)敷設工事に伴って発見された。京都府教育委員会による発掘調査の結果、竪穴式住居跡・溝などの遺構と、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土した。宮津市域の弥生時代後期を中心とする時期の中核的な集落であったことが明らかとなった^(注3)(第1次調査、第40図)。発掘調査後、遺跡推定範囲のほぼ中央を南北に横断する場所に鉄道が建設された。

平成7年度、京都縦貫自動車道が桑原口遺跡範囲内に建設されることになったため、当調査研究センターでは京都府道路公社から発掘調査の依頼を受け、調査に着手した。京都縦貫自動車道は、第1次調査地区を東西に横断する位置にあたっており、遺跡の中央部に当たることから、遺構・遺物が良好な状態で検出されることが期待された。平成7年度の調査は、まず、線路の西側をA地区、東側をB地区と仮称して試掘調査を行い、遺構・遺物の分布状況を把握した。B地区は丘陵裾の段丘上、A地区は沖積地に位置している。試掘の結果、遺構はB地区に密集し、A地区には遺構は希薄なものの、多量の遺物を含む包含層が広がることがわかった。その後、B地区の面的調査を実施した(第2次調査)。B地区では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡や溝、掘立柱建物跡などを検出し、住居跡からは良好な状態の土器が出土している^(注4)(第41図)。

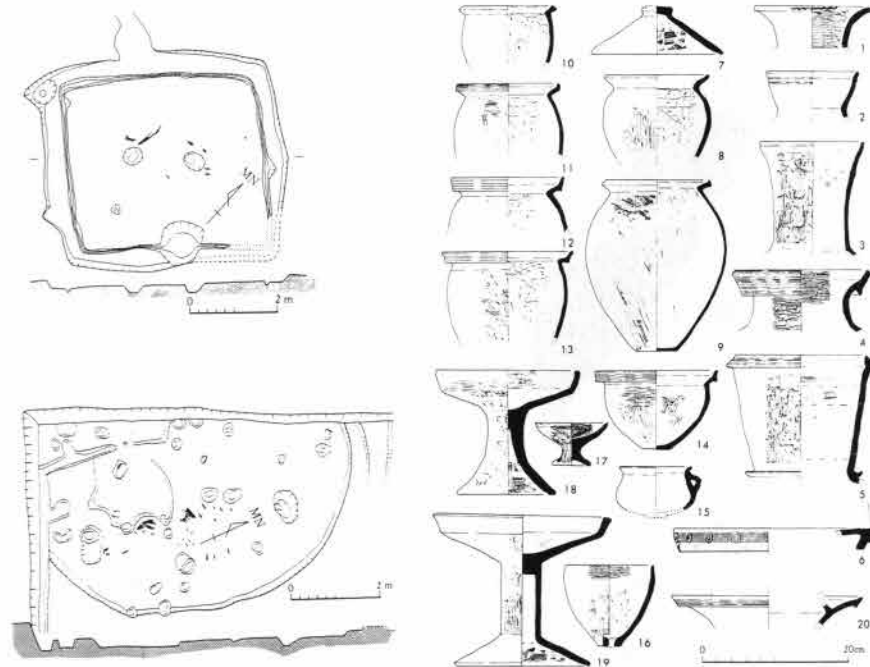
今年度は、これまでの調査成果をふまえて、A地区を対象としての発掘調査を実施した(第3次調査)。A地区の掘削にあたっては、最初に表土、耕地整理の際に盛り込まれたとみられる水平堆積土層を重機で掘削し、続いて人力によって清掃作業を行った。第7層途中まで粗掘りをした後、精査を行った。第8層には多量の土器片が含まれていたため、取り上げに留意し、第9層で遺構の検出に努めた。調査地区西端で検出した溝が地区外へと伸びることが予想されたため、最後に、Z地区として西側に若干拡張を行い、遺構の延長部分の検出を行った(第42図)。

3. 調査概要

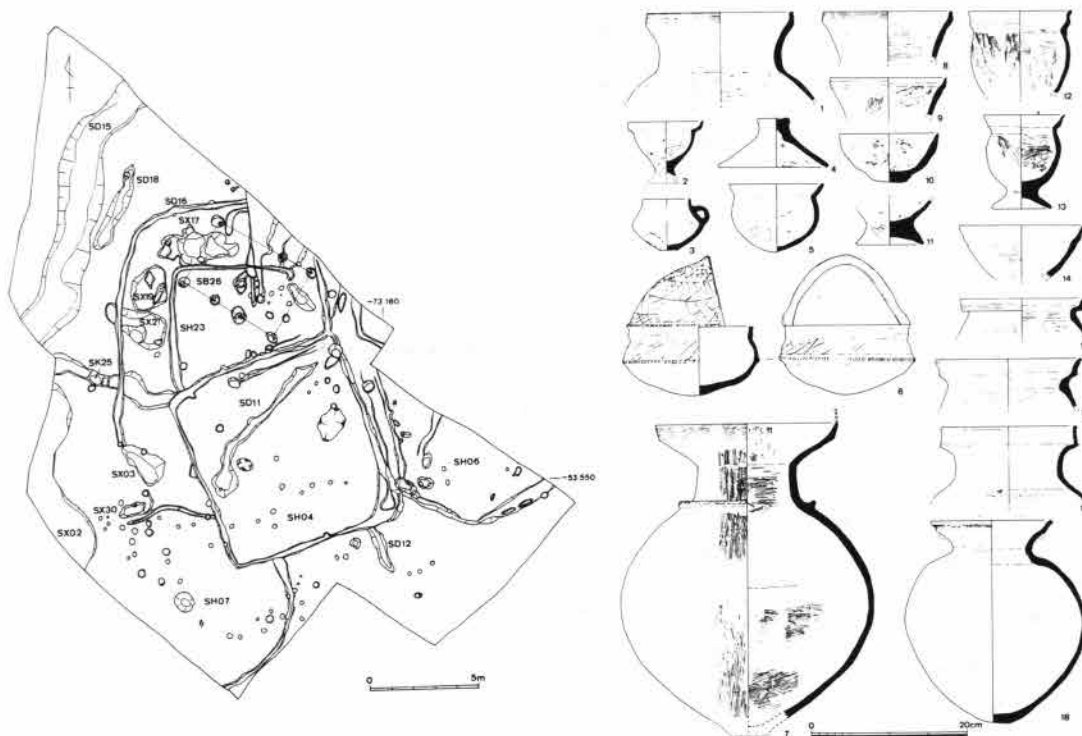
(1) A地区(第43図)

①土層堆積状況 この地区は、前年度に多数の遺構が検出されたB地区が位置する丘陵の先端にあたる。沖積地へと移行するゆるやかな傾斜地に位置している。

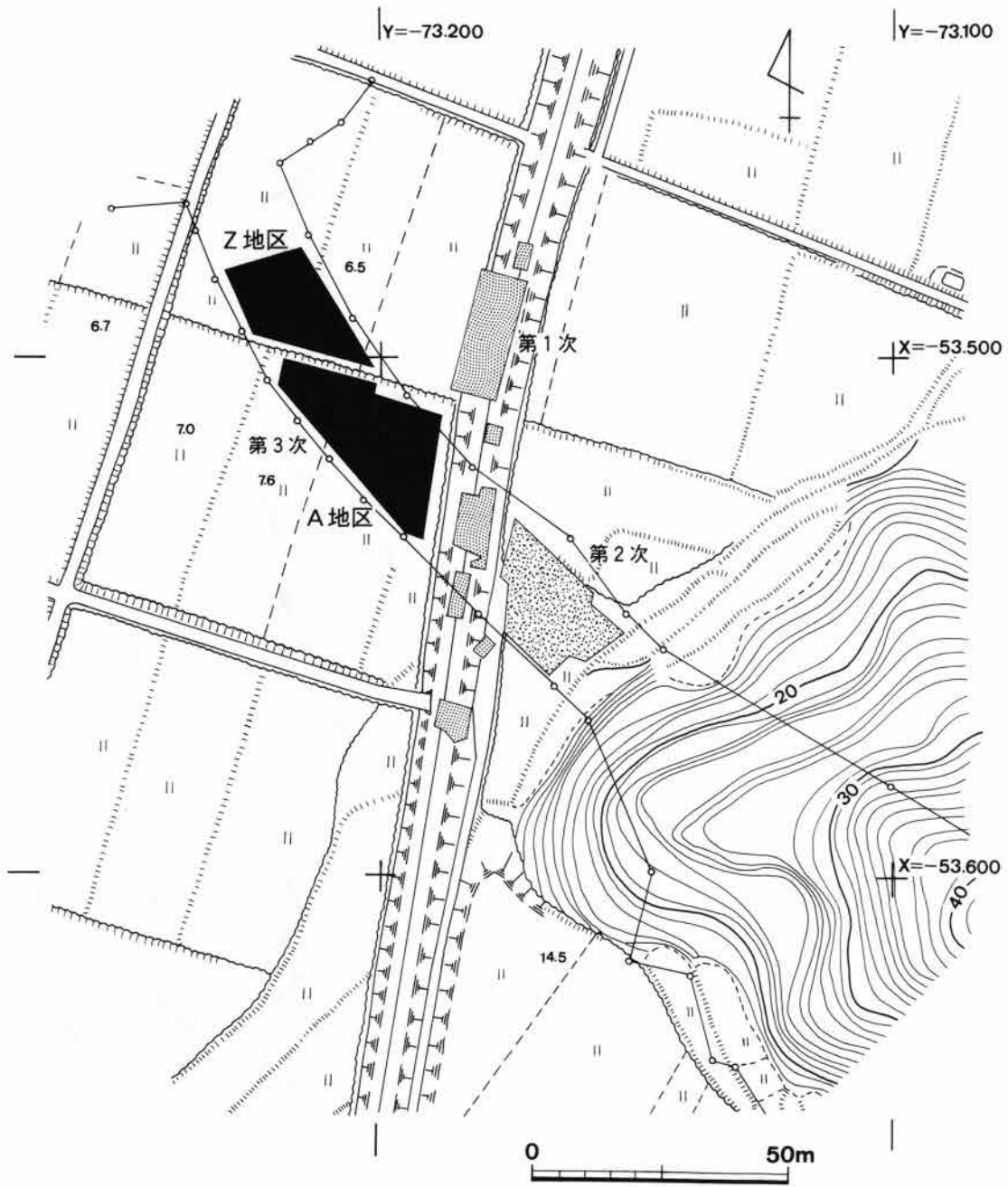
A地区の土層堆積は上層から、1.置き土、2.水田耕作土、3.水田床土、4.黄色砂土、5.黄色粘土、6.暗灰色粘砂質土である(第43図)。7層は暗茶褐色の粘砂質土である。1～3層は、近年実施された土地改良事業に伴う整地層であり、水平に整地され灌漑用水路の跡などがみられ



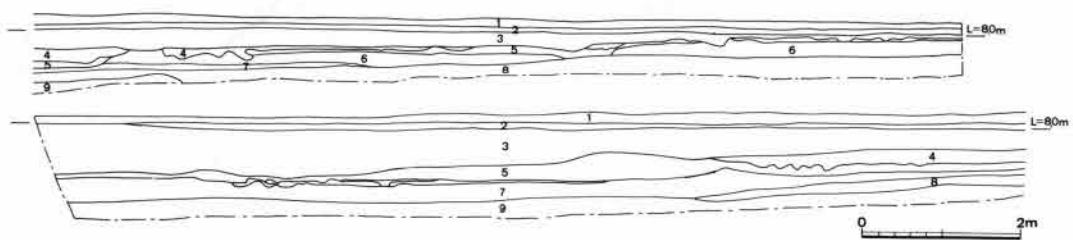
第40図 桑原口遺跡第1次調査



第41図 桑原口遺跡第2次調査



第42図 桑原口遺跡調査トレンチ配置図



第43図 A地区東壁断面図

る。4・5層は鉄分の沈着によって明るい黄色を示す土層である。4層の黄色砂土は直径1mm前後の石英粒を主体とするものである。不純物が少なく、長石・雲母なども含まれることから、風化した花崗岩体から流れ出したものが、水流によって短期間のうちに二次堆積したものとみられる。どちらの土層にも土器などはみられない。

堆積環境は6層以下で大きく変わる。6層・7層には、有機物、炭片、8層の粘土ブロックや磨耗した弥生土器細片などの混入が見られた。8層は、黒色の粘質土層である。後述するように、多量の弥生土器を包含する層である。土層中、遺物が特に集中していた場所を、任意にSX08と名付けて、遺物を一括して取り上げた。

9層は、暗青灰色の砂土である。沖積層であり、わずかに炭化物の小片を含んでいるが、遺物を含まないので、堆積時期は明らかではない。この層は、弥生時代の遺構のベースとなる沖積層である。

②検出遺構 Ⅷ層上面から精査を繰り返して遺構の検出をした結果、溝、土坑などの遺構、杭列、土器溜まりなどを検出した。しかし、遺構の分布は希薄であった。調査は、多量の土器片を含む第8層(SX08)とSD02の遺物回収に時間を費やすこととなった。遺構の形成時期は、8層以下で検出された弥生時代の遺構と、それ以降の2時期に大きく分けられる。前者を下層遺構、後者を上層遺構として説明する。

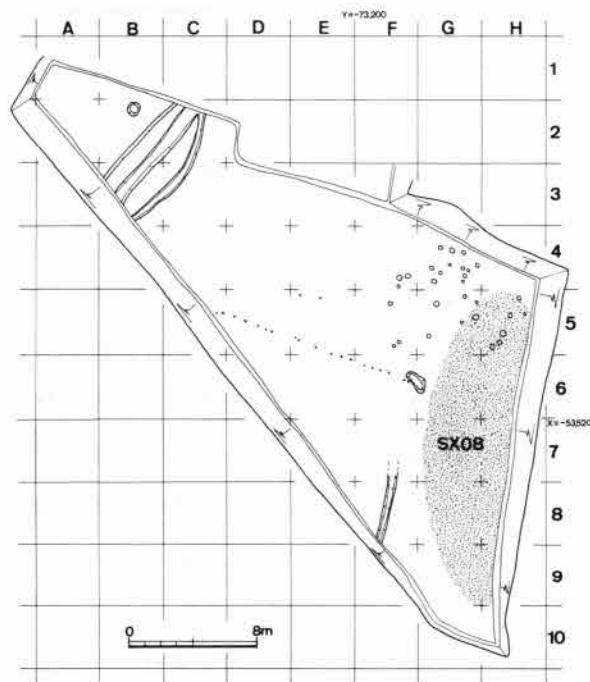
上層遺構

A-S A07(第45図) 現在の水田面直下で検出した杭列である。6層以上の層から打ち込まれたと思われる杭列である。ミカン割りにした材木をさらに分割して杭としたもので、30~50cmの高さが遺存していた。東西方向に約16mにわたって検出した。水田の畦畔などに伴う施設とみられるが、帰属時期は明らかでない。中世の土坑(A-S K05)などと交錯しており、この土坑以前のもと思われる。

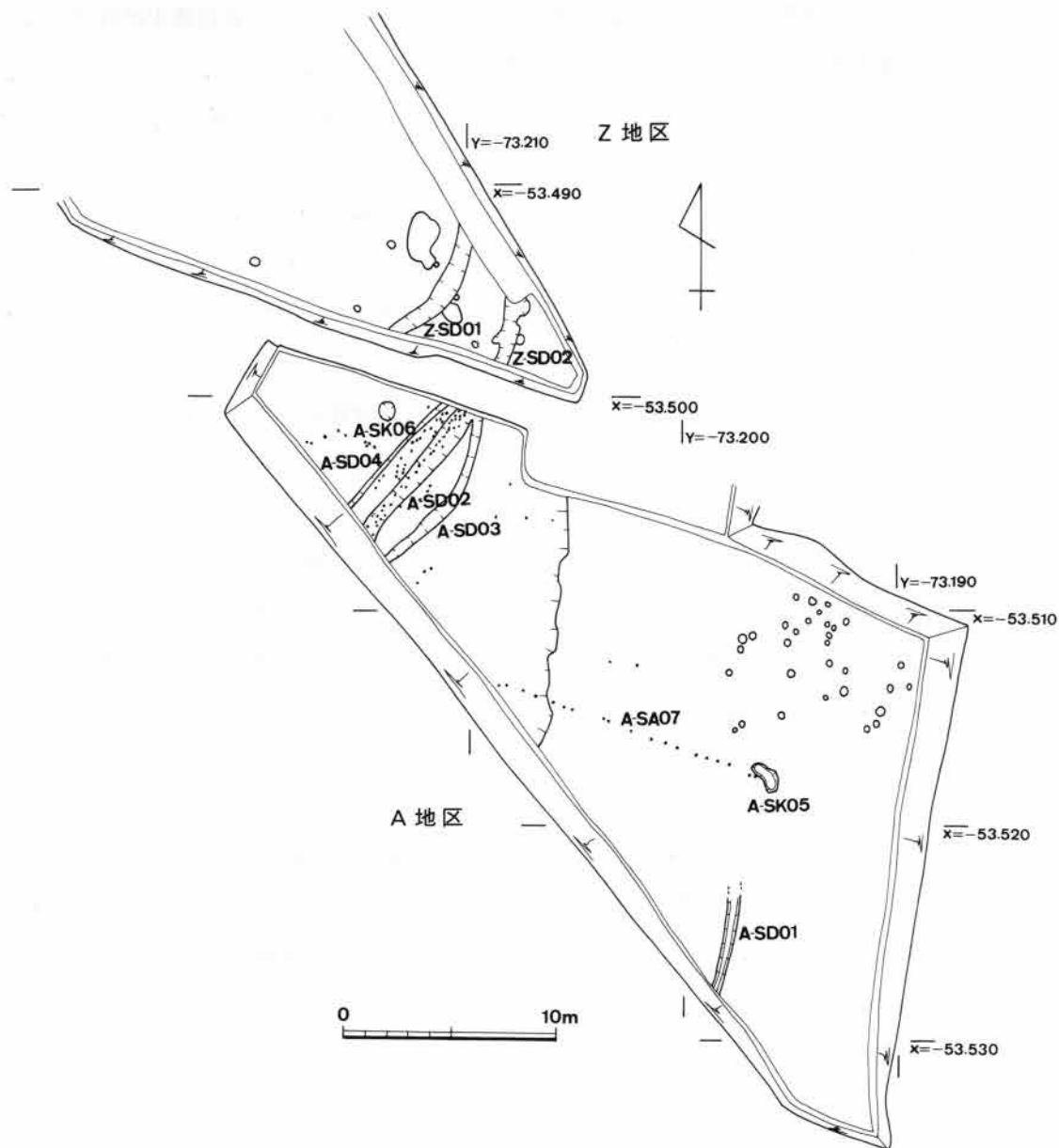
A-S K05(第47図) 長軸約0.9m・短軸約0.4m・深さ約0.2mの東西主軸の長楕円形土坑である。埋土は暗灰色砂土である。わずかに、土師器と龍泉窯とみられる青磁碗の細片が出土しており、中世の遺構であると判断した。

下層遺構

A-S D01 幅約40cm・深さ約10cm、断面が浅い「U」字形の細くて脆弱な溝である。約4.5mを検出した。埋土は黄色砂土で、著しく磨耗した弥生土器細片を含む。有茎式の銅鏃が1点出土した(第62図305)。



第44図 桑原口遺跡第3次調査地区割り図

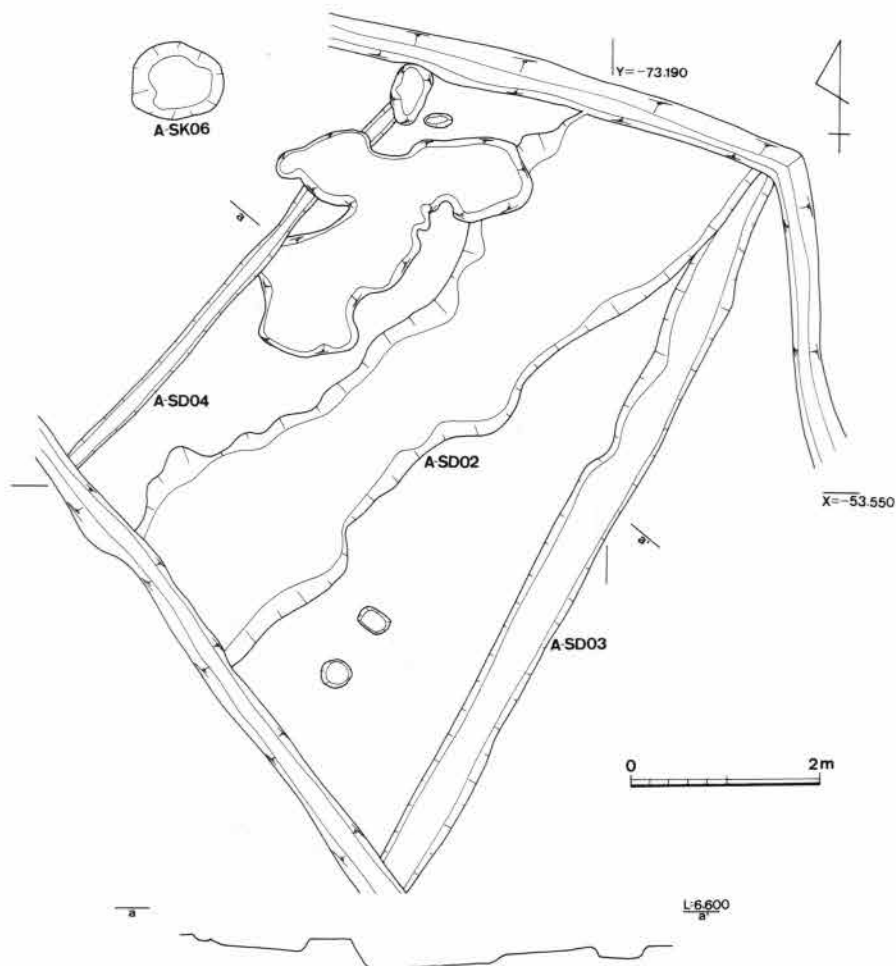


第45図 桑原口遺跡第3次調査検出遺構配置図

9層上面で検出した。

A-S D02(第46・49図) 9層上面で検出した、幅約1.2～2m・深さ0.2～0.3mの溝である。断面形は浅い「U」字形で、小刻みに蛇行しながら北に流れる溝である。約7mを検出した。埋土は黄色～暗黄灰色の砂土で、顕著な水流の跡が認められる。この溝には、遺存状態の良好な弥生土器片が多数包含されていた。杭・板なども出土した。しかし、遺物は、現位置をとどめるものではなく、出土状況からみて上流から多量の砂とともに流れ下ったものと判断した。この溝の底面、壁面は凹凸が激しく、人工的に整えられているようには見えない。自然流路を改変し、統御して溝としたものだろう。

また、この溝は現代の用水路と重複しており、多数の杭・板が出土した。弥生時代に属するものもごく一部に遺存するとは思うが、この溝の付近に認められる杭の大半は近年のものである。



第46図 A地区検出遺構実測図

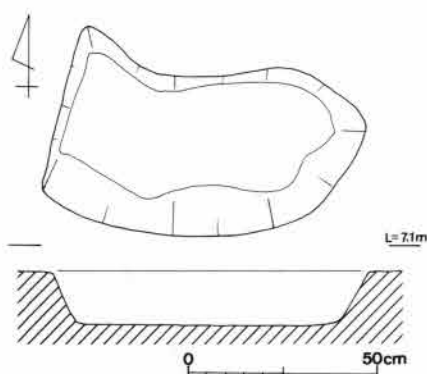
古相のものを黒点で示した。

A-S D03(第46図) 幅約60cm、深さ10~15cm、断面「U」字形の溝である。約9mを検出した。9層上面で検出した。埋土は暗黒色の砂質土で、弥生土器片を含む。A-S D02に併走し、一部を切っている。A-S D02の埋没後、ほどなくして掘られたものか、A-S D02への導水路だろう。

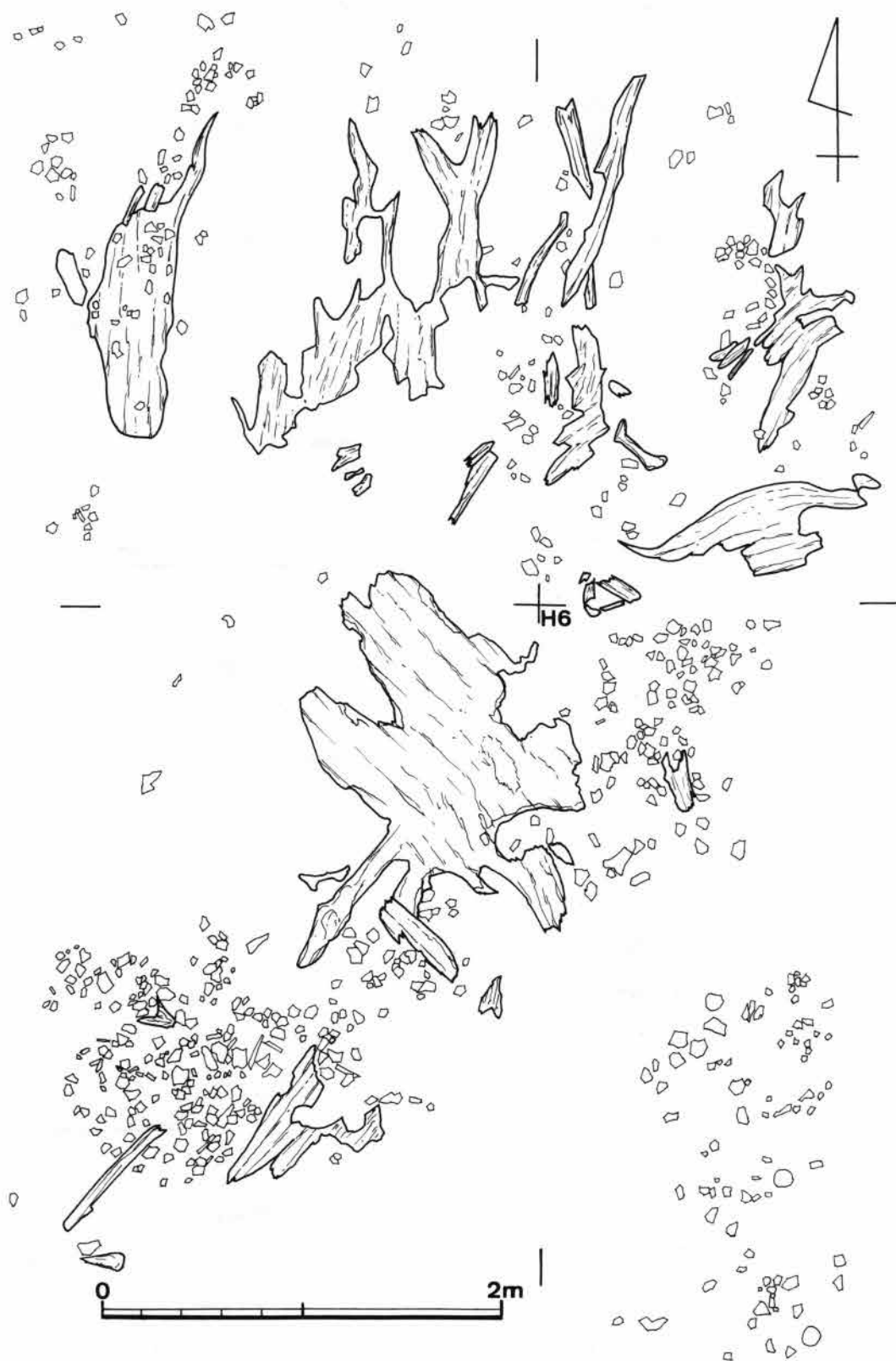
A-S D04(第46図) 幅約20cm・深さ約10cmの断面「U」字形、直線的な溝である。約5.5mを検出した。黒色粘質土を埋土とする。9層上面で検出した。弥生時代後期の土器細片をわずかに伴う。A-S D03と同様、A-S D02に併走する小規模な溝である。下流でA-S D02に取り付くようにも見える。

A-S K06(第46図) 東西に主軸をもつ楕円形土坑である。長さ約96cm・幅約84cm、深さ約12cmである。9層上面で検出した。埋土は黒色粘質土で、A-S D04と同様である。弥生時代後期の土器細片を含む。

A-S X08(第44図) 8層包含層の中で、特に遺物が密集していた範囲を任意で、A-S K08と



第47図 A-S K05実測図



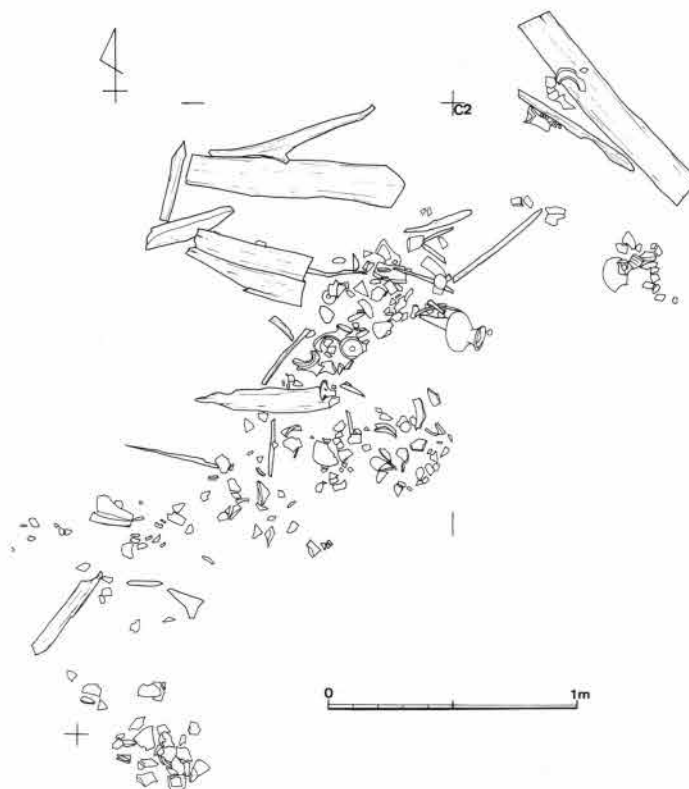
第48図 A-S X08遺物検出状況

名付けた。A-S K08は、I・H 9～I・H 5にかけての範囲で、弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけての土器破片が大量に包含されていた。第44図にスクリーントーンで示した範囲がおよその範囲である。土器は、磨耗が顕著でなく器表面の遺存状態はよい。しかし、一部を除き細片となったものが多く、完形に復原できるものはない。集落遺跡で用いられた土器が集積したものとみられる。これらは、主に、第1次調査や東側の丘陵上でみつけた住居跡(桑原口遺跡B地点)の住人の生活廃棄物とみられる。

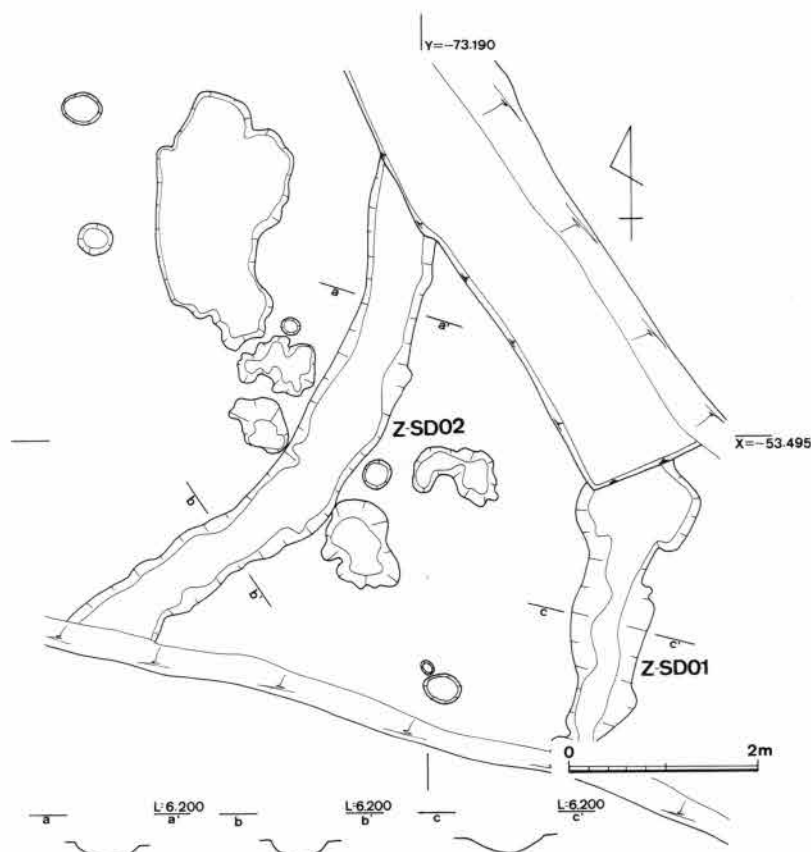
また、H 6を中心とする範囲に木の根の腐植痕跡を検出した(第48図)。根は広葉樹のものとみられ、痕跡から幹は直径1.5～2 mと推定される。9層にはりつき、8層で土器とともに検出されていることから、8層の形成時期には根株だけが遺存するといった状況が推定された。

(2) Z地区(第50図)

この地区は、試掘の結果、磨耗した土器片少量が検出されたが、遺構が認められなかったので、調査対象地外とした地区である。A地区の調査の結果、A-S D02がこの



第49図 A-S D02遺物検出状況



第50図 Z地区検出遺構実測図

地区に及ぶことがわかったので、一部拡張したものである。調査の結果、A-S D02の延長部分と、新たな溝を検出した。遺構は、無遺物層である暗青灰色砂層上面で検出した。いくつか柱穴、土坑があったが、掘形が明瞭でなく、時期が明らかでない。

Z-S D01 A-S D02の北側に続く溝である。A-S D02は、北東方向に直線的にのびるが、この部分で湾曲して、北流することがわかった。幅約0.8m・深さ約0.2mである。弥生時代後期の土器を含む。土器は、細片化したものが多い。黄灰色砂を埋土とする。

Z-S D02 Z-S D01に並行して北流する溝である。約6mを検出した。幅約0.8m・深さ約0.2mで、黄灰色砂を埋土とする。弥生時代後期の土器を含む。土器は、細片化したものが多い。

4. 出土遺物

今回の発掘調査では、弥生土器・土師器などの土器類、銅鏃、ガラス製勾玉、砥石、不明土製品など、多様な遺物が出土した。大半の遺物は、包含層である第8層、第9層直上で検出した溝(A-S D02、Z-S D01)などの遺構から出土したものであり、弥生時代後期に属するものである。弥生時代以降のものは、第8層中で古墳時代前期の遺物が少量みられたほか、上層の包含層で中世以降の土器片が散発的に認められた程度である。

以下に主な遺物について報告する。

(2) A地区出土遺物(第51～60・62～64図)

①弥生時代後期～古墳時代前期の土器 この時期の土器類には壺、甕、高杯、鉢などの器種がある。土器類は、古墳時代前期に属する一部を除くと、大半は弥生時代後期から後期末に属するものである。各器種ごとに以下のように分類し、主なものを図示した。各個体の量や特徴、胎土など観察所見は付表7・8に示すとおりである。

土器は細片が多く、個数認定が困難だったことから、各形式の個体数を計測はしていない。分類は、包含層の時期幅を把握することと型式のパリエーションを提示して桑原口遺跡の弥生土器の構成を示すことを目的としたので、細分はしておらず概括的なものである。

壺の分類

壺A 口縁部がラッパ状に大きく開く壺。広口壺。口縁端部外面の拡張の仕方で以下のように細分する。端部を内傾させ、擬凹線文を施すもの(A1)、端部を外傾させ、擬凹線文を施すもの(A2)、端部を上へ拡張するもの(A3)。

壺B 二重口縁の広口壺。古墳時代前期初頭に位置づけられるもの。

壺C 口縁部が、「く」の字状に短く立ち上がるもの。

壺D 短く直立する口縁部をもつもの。

壺E 長頸壺。

壺F 脚台のつく短頸壺。精良な胎土を用いて作られた精製土器。

壺G 偏平な体部で、最大腹径部に竹管文突帯をめぐらすもの。

壺H 口縁部が、短く直立するもの。

甕の分類 口頸部と口縁端部の形状によって次のように分類した。

甕A 頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁端部に内傾する面を作って擬凹線文を3条前後施すもの。

甕B 頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反して立ち上がる。口縁端部を斜め上方に拡張して二重口縁とするもの。端部外面に擬凹線文を施すものをB1、ナデ調整するものをB2とした。

甕C いわゆる月影式。弥生時代後期末に位置づけられる北陸系の甕である。口縁部を大きく拡張し、口縁端部外面に多条の擬凹線文を施し、内面に指頭圧痕列がみられる。内面の指頭圧痕列は認められないが、これに類すると思われるものはこの型式に含めることとした。

甕D 二重口縁の甕で、口縁部外面下端に強いナデにより稜の生じるもの。胎土に極細粒砂を多く含む。体部内面のヘラ削りを頸部屈曲部よりやや下方に施すものが多い。弥生時代後期末～古墳時代初頭の山陰系の甕である。

甕E 口縁部が「く」の字形にゆるやかに外反するもの。

甕F 口縁部がゆるやかに内湾して立ち上がり、端部を内側に肥厚させる。古墳時代前期、布留式の甕。

高杯の分類 口縁部の形状によって次のように分類した。

高杯A ゆるやかに内湾する杯部から口縁部が屈曲して立ち上がるもの。口縁端部に外傾する面をつくる。淡黄褐色～赤褐色系の色調で、胎土の精良なものが多い。

高杯B ゆるやかに内湾する杯部に、擬凹線文を施した二重口縁がつくもの。

高杯C 端部がわずかに外反する椀状の杯部をもつもの。

高杯D ゆるやかに内湾する杯部に、二重口縁がつくもの。口縁部を大きく外方に拡張する。口縁部はナデあるいはヘラミガキ調整であり、無文である。

器台の分類

器台A 円筒状のやや太めの脚柱部から口縁部が大きく開き、口縁端部を少し拡張して3～4状の擬凹線文を施すもの。

器台B 細めの脚柱部から口縁部がラッパ状に大きく開く。口縁は二重口縁で、擬凹線文を施すもの(B1)とナデあるいはヘラミガキによる無文のもの(B2)とがある。

器台C 装飾器台。器台Bの受け部にさらに受け部を付加したもの。

器台D 小型の器台。皿状の受け部をもつもの。

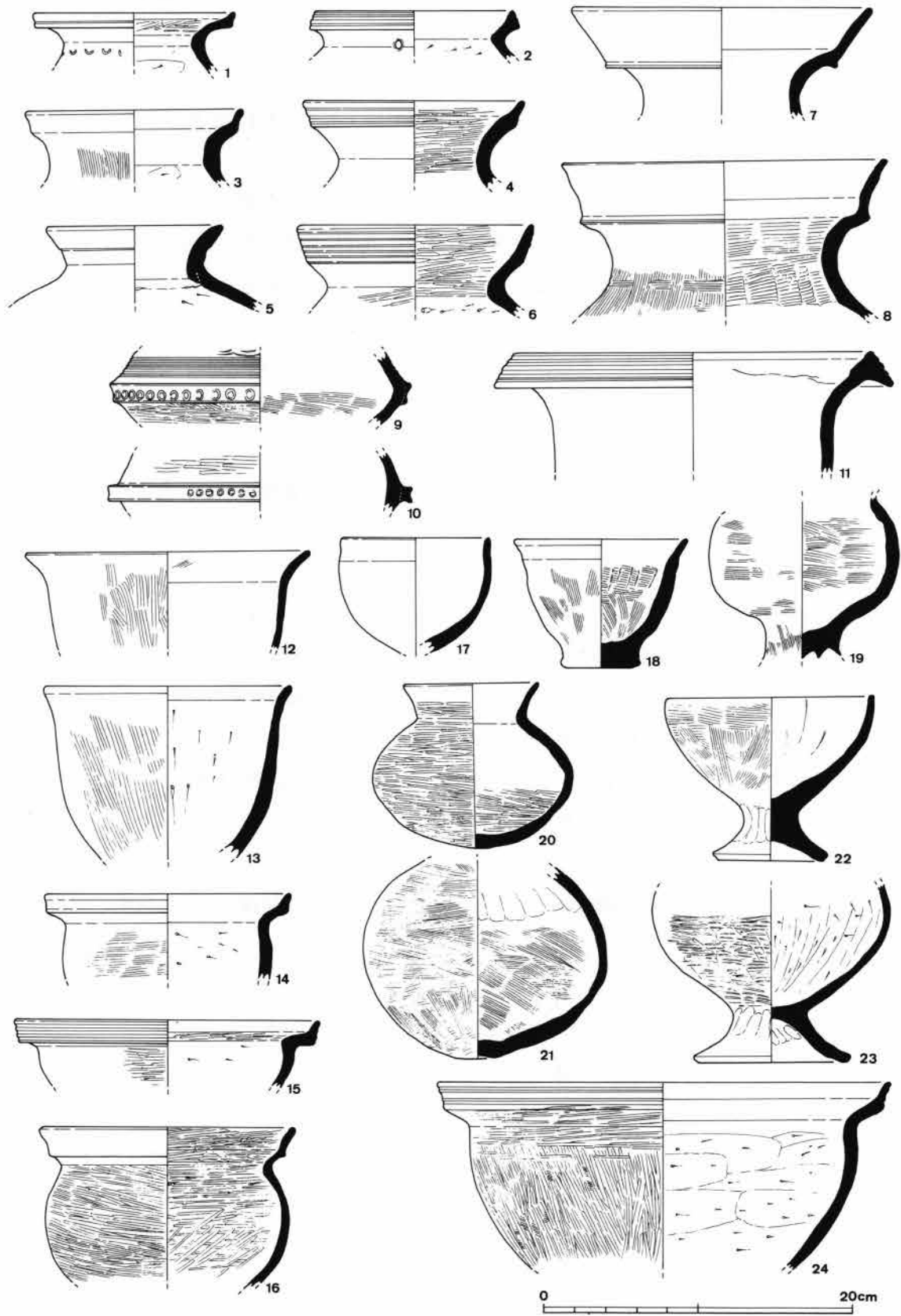
鉢の分類 鉢には脚台のつくものとつかないものがあるが、全形が不明なものがほとんどであるので、口径部、体部の形状により次のように分類した。

鉢A 体部が砲弾形で、口縁部がゆるやかに外反するもの。

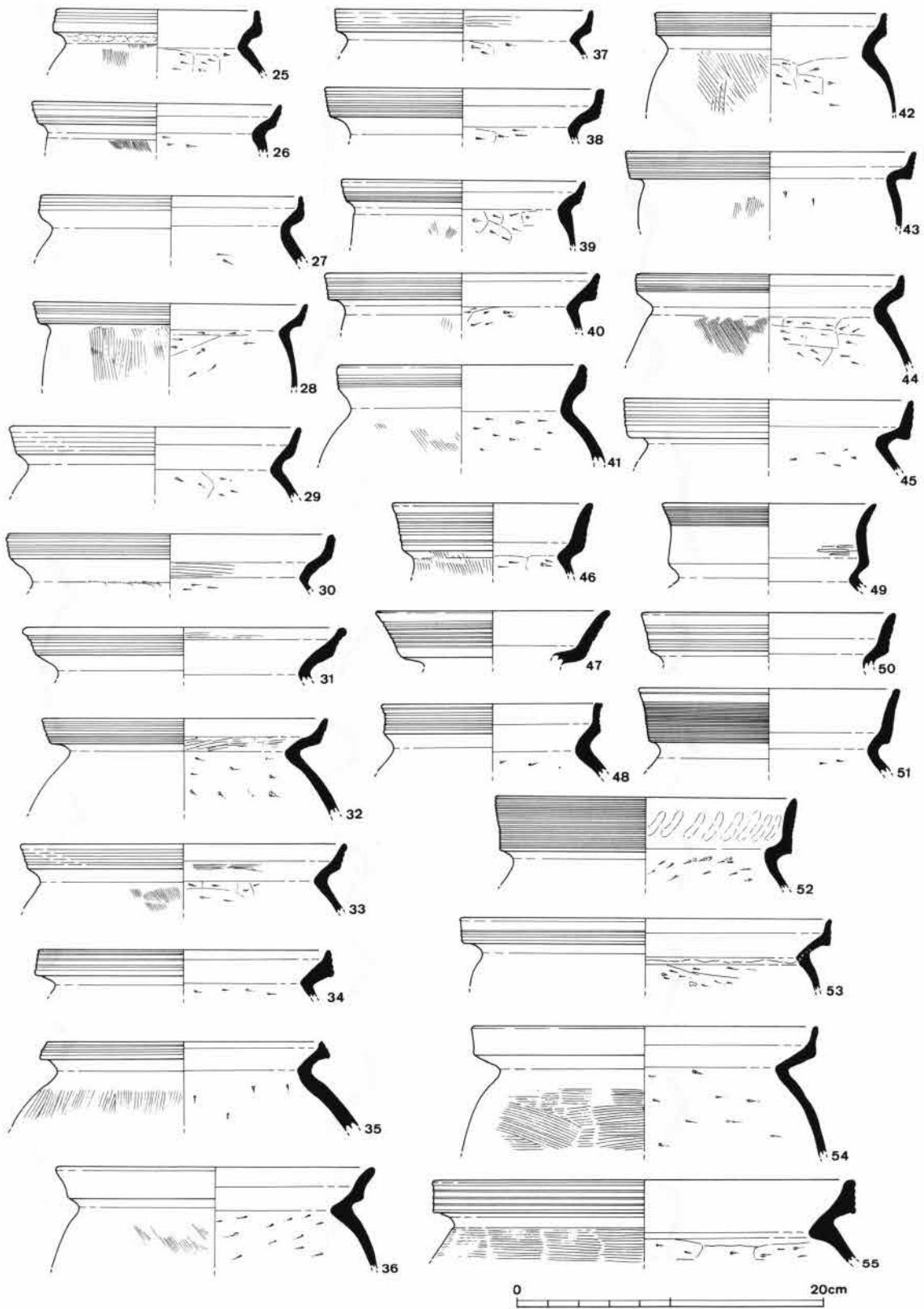
鉢B 体部が砲弾形で、口縁部が「く」字状に屈曲し、口縁端部を拡張するもの。

鉢C 体部が砲弾形で、口縁部が直立ぎみのもの。

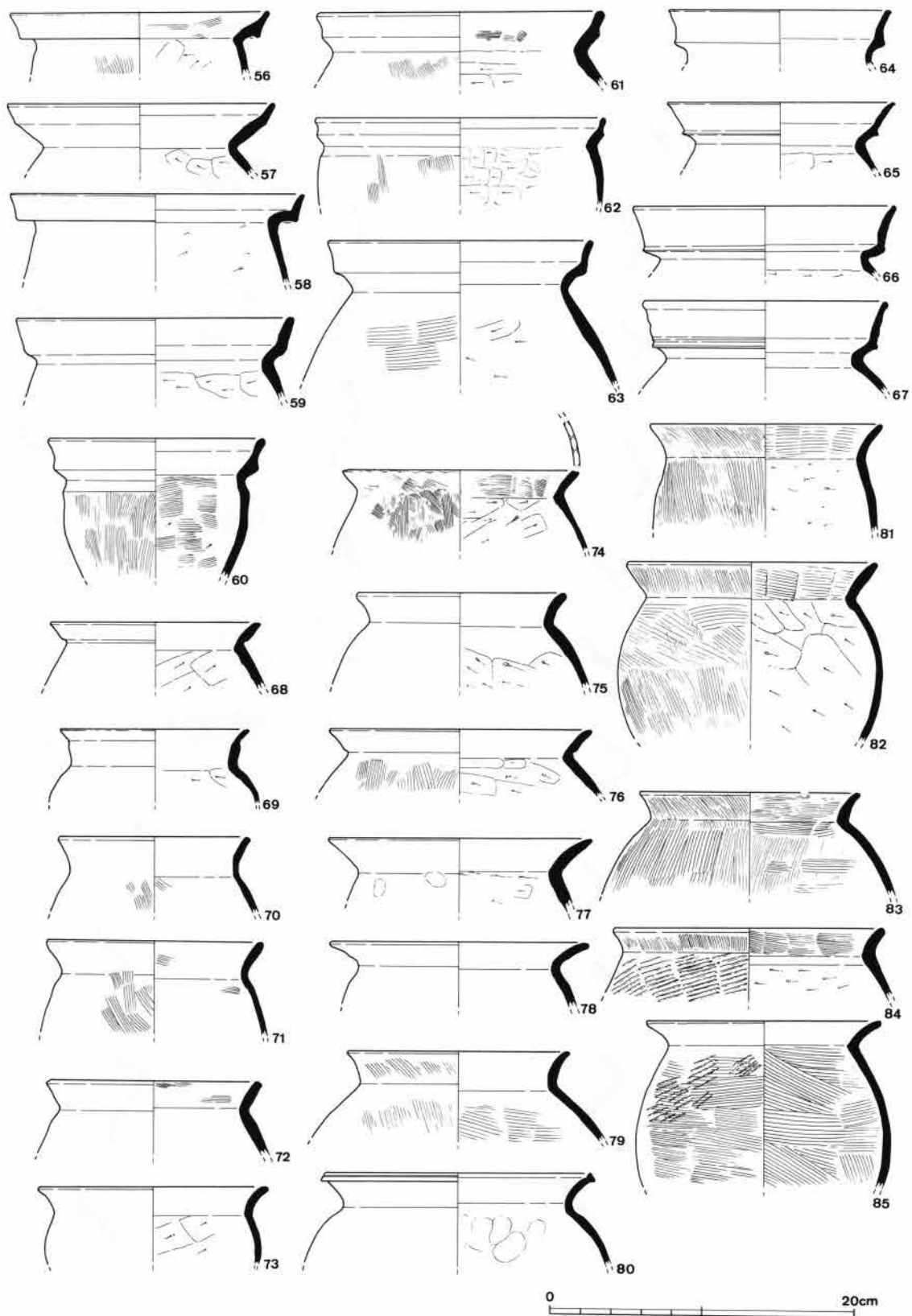
鉢D コーヒーカップ状の精製土器



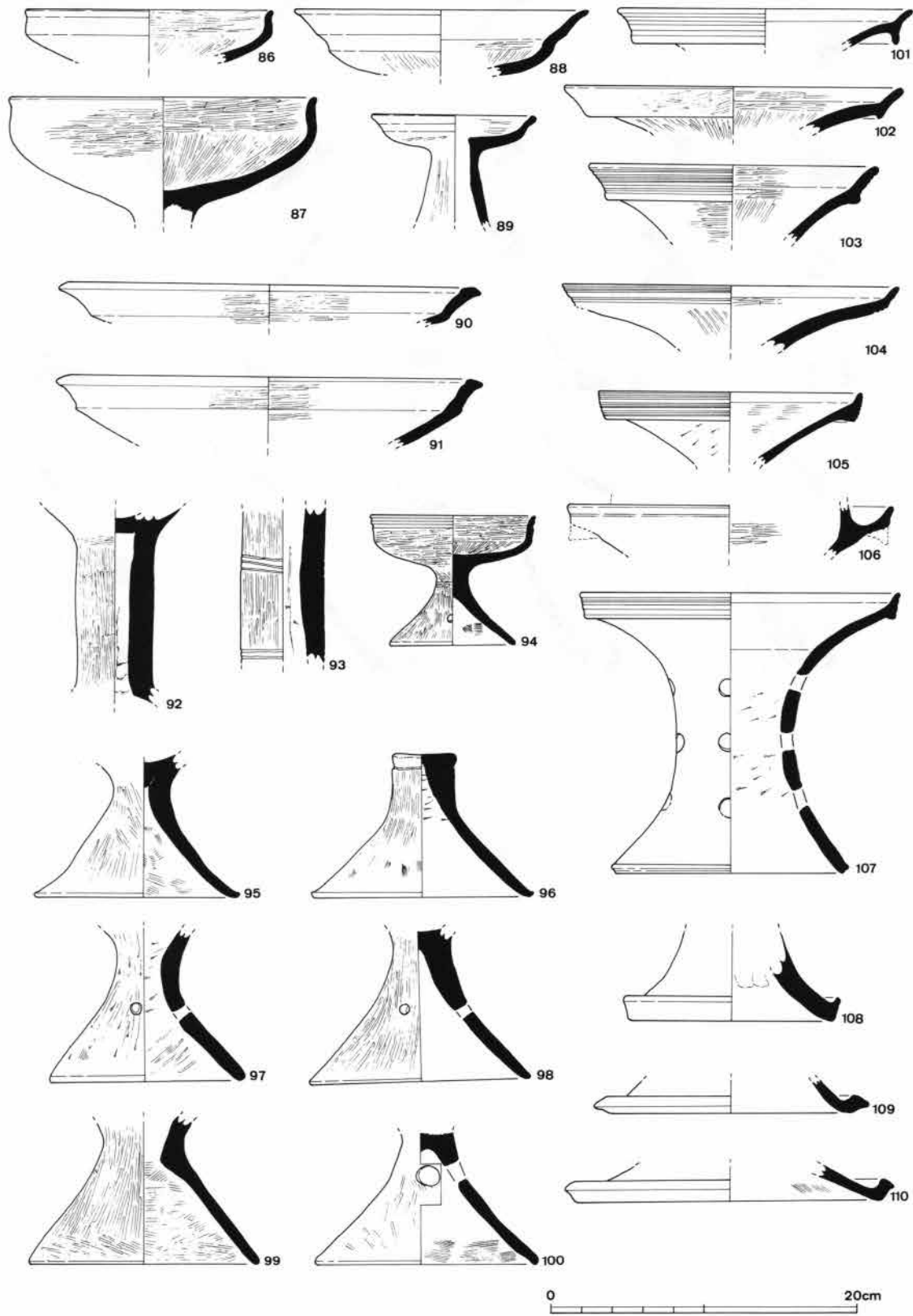
第51図 A-S D02出土遺物実測図(1)



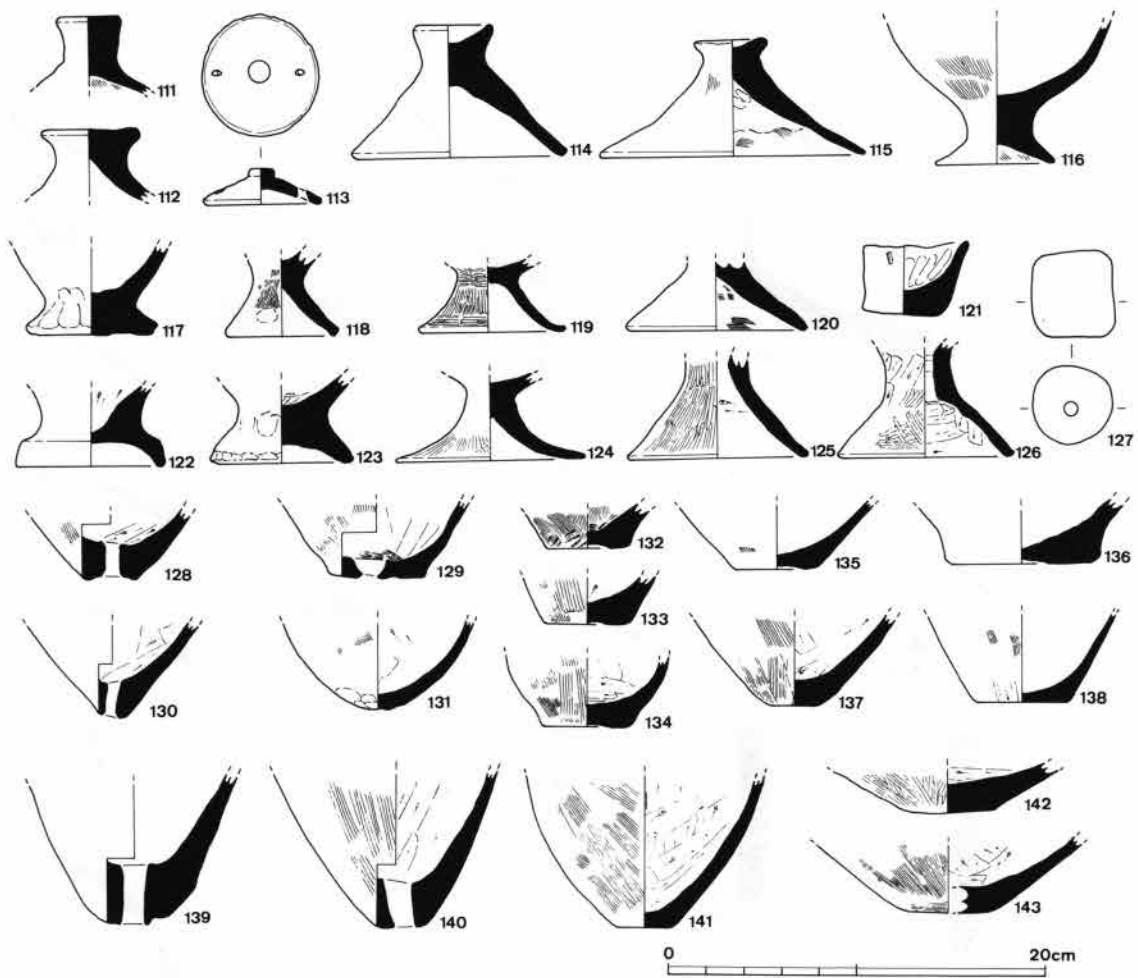
第52図 A-S D02出土遺物実測図(2)



第53図 A-S D02出土遺物実測図(3)



第54図 A-S D02出土遺物実測図(4)



第55図 A-S D02出土遺物実測図(5)

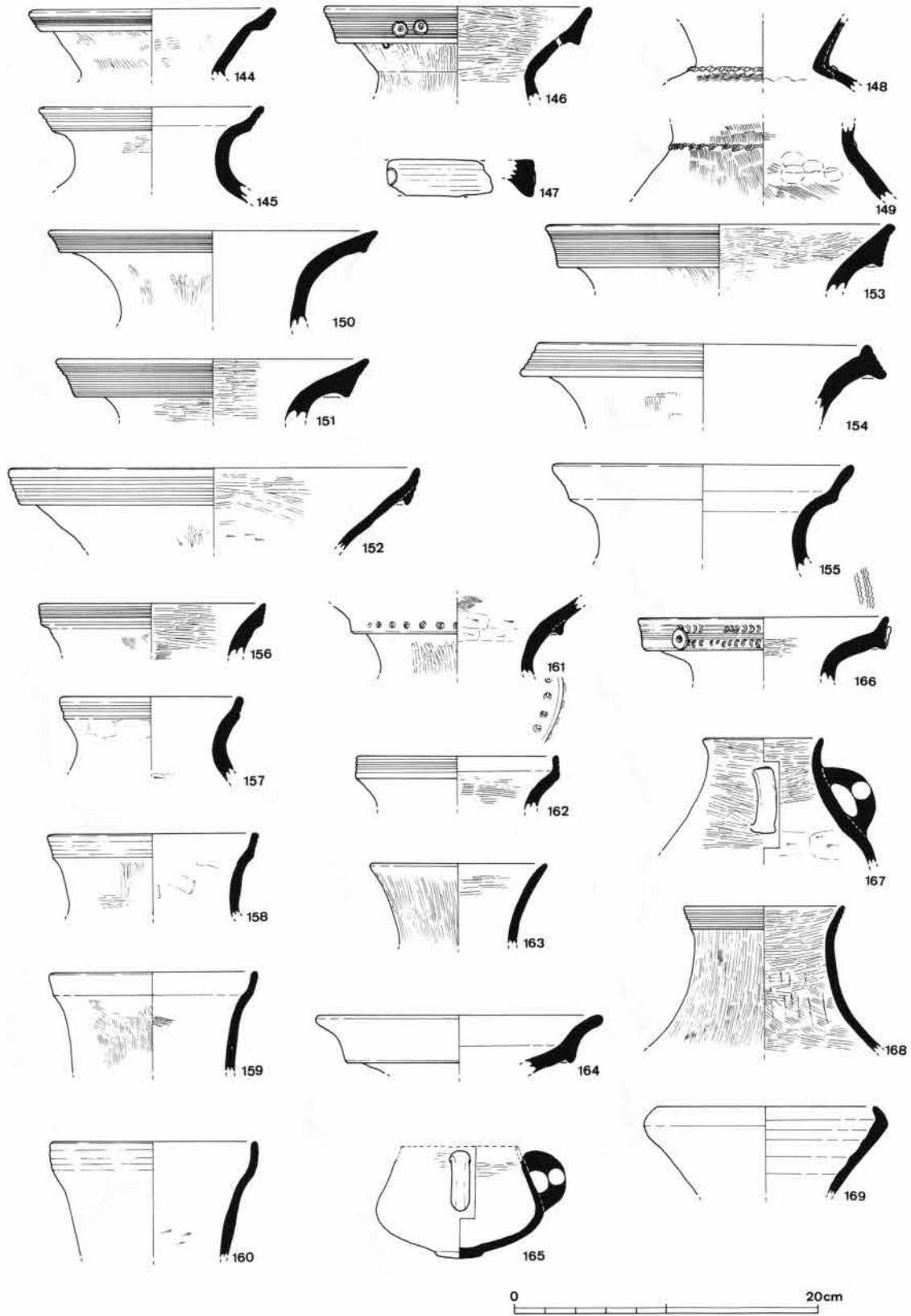
S D02出土土器(1~143) 溝の埋土と周辺から出土した遺物である。水流によって土砂とともに溝に流れ込んだ遺物群である。大形の破片が多く遺存状況がよいものが多い。近代の流路による攪乱があり、一括性に乏しい。

土器類には、壺・甕・高杯・鉢・蓋形土器・ミニチュア土器などがある。

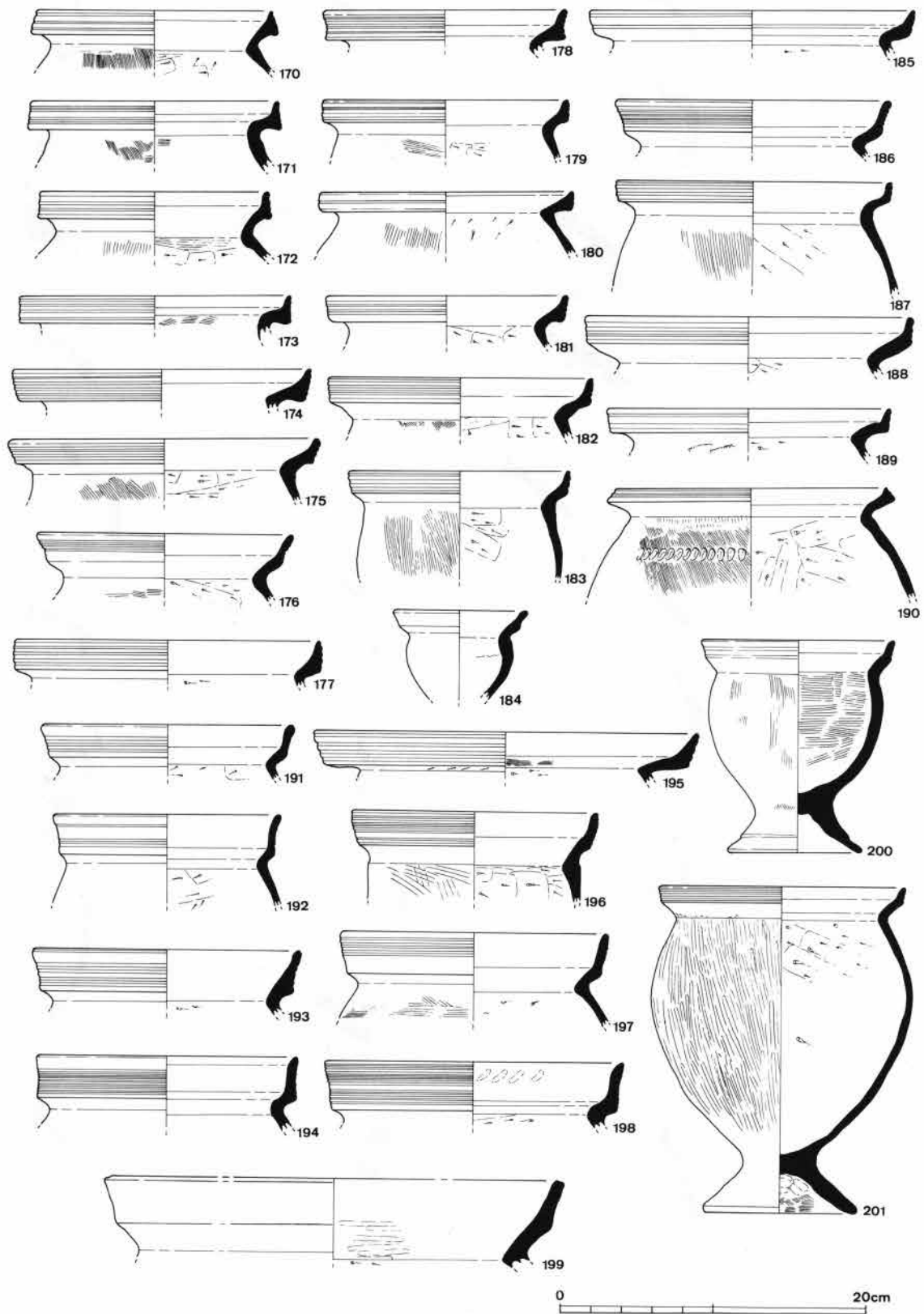
壺類にはA1(11)、A3(3・4・6)、B(7・8)、C(1・2)、G(9・10)、H(5・20・21)がある。1の頸部外面には半截竹管文がめぐる。2の頸部には紐穴がある。9・10の体部突帯には竹管文がめぐり、9は突帯上に櫛描き直線文を施す。19・23は、台付壺である。19は壺C、23は壺Bであろう。

甕類にはA(34・35)、B1(25~33・37~41・42~45)、B2(36・53・54・56~63)、C(46~52)、D(64~67)、E(68~85)がある。甕B1の口縁部は外反するものが多いが、内傾気味のもの(25)、直立気味のもの(42・53)もみられる。甕Cの擬凹線は細く、多条なのが特徴である。口縁部内面に指頭圧痕列を残すものがある(52)。甕Eには、口縁が直立気味で端面に押圧を施すもの(74)と、しっかりした面を作るもの(80)、体部外面にタタキ成形痕を残すもの(84・85)などがある。

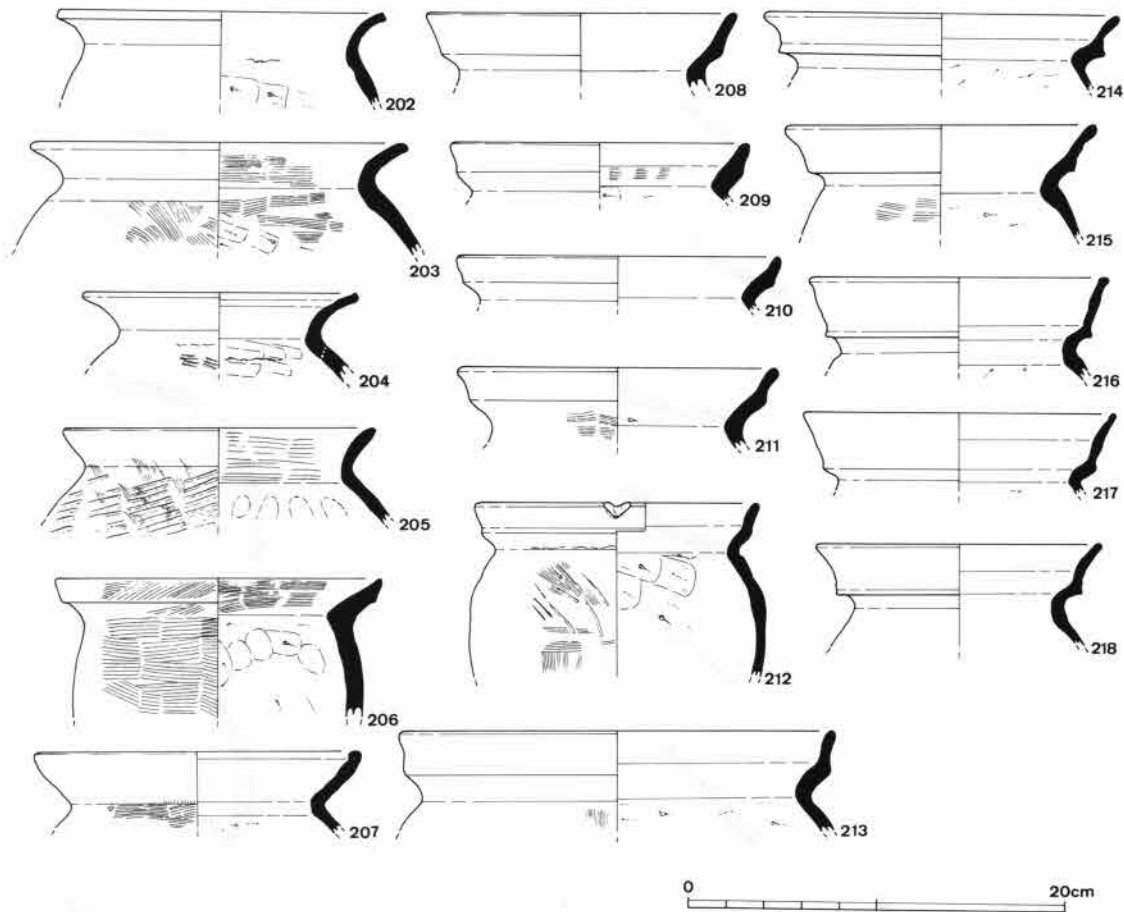
高杯にはA(90・91)、C(86・87)、D(88)がある。92・93・95・96・98・100・108~110は高



第56図 A-S X08出土遺物実測図(1)



第57図 A-S X08出土遺物実測図(2)



第58図 A-S X08出土遺物実測図(3)

杯の脚部である。92・93は高杯Aの脚柱部、108～110は脚端部である。95・96・98・100は、高杯B・Cの脚部である。108はやや古相である。97・99は器台の脚部である。

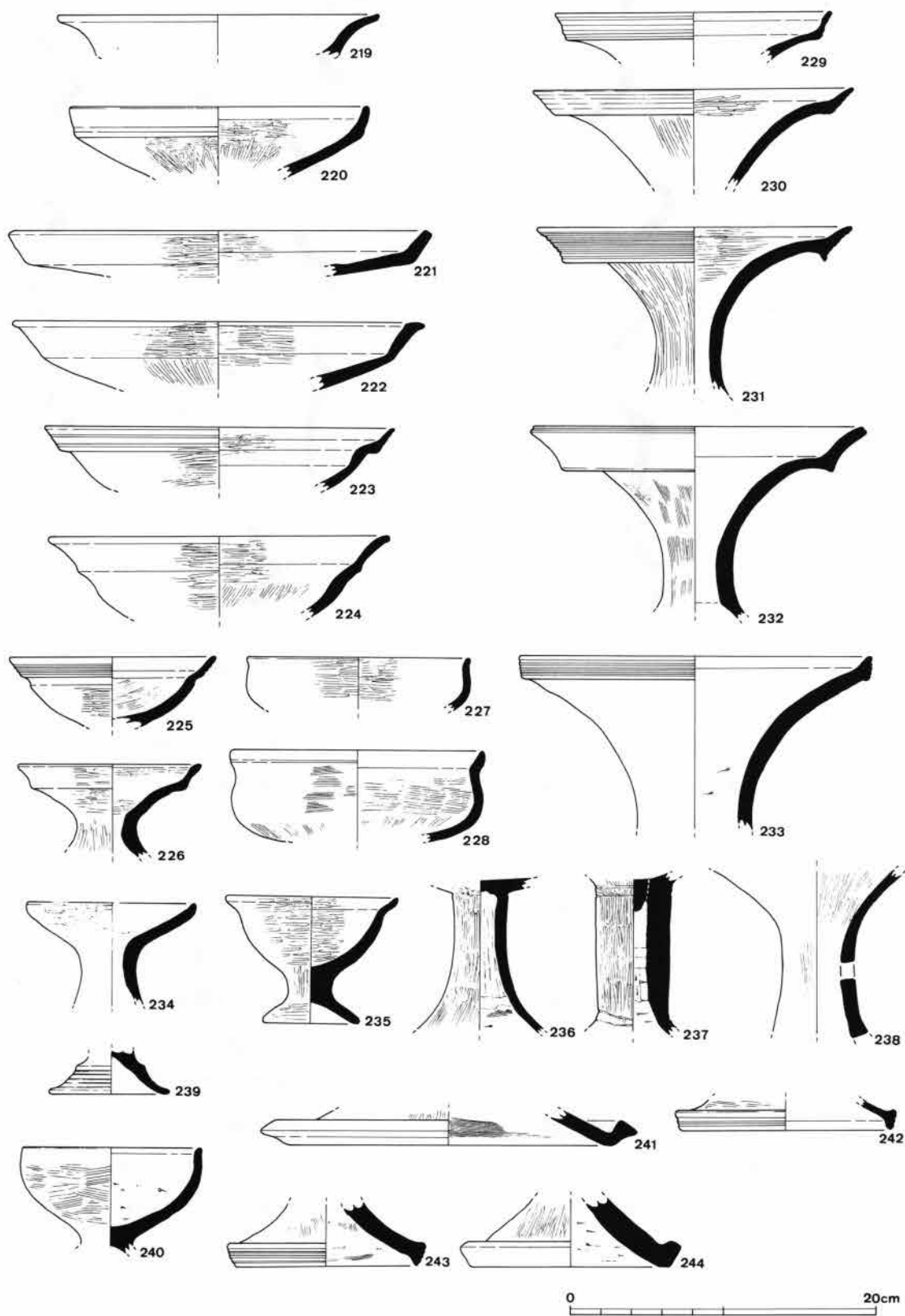
器台にはA(107)、B(101～105)、C(106)がある。鉢類にはA(12・13・17・18)、B(14・15・16・24)、C(22)がある。

111・112・114・115は甕の蓋である。つまみ頂部が平坦なもの(111・112)と、くぼむもの(114・115)とがある。113は、小形の壺の蓋であろう。116～120・122～126は、脚部である。116～118・120・122・123は、台付甕の脚部だろう。119・124は、台付壺の脚部である。121はミニチュア土器、127は土錘である。128～143は、各器種の底部である。128・130・131・139・140は鉢、129・132～135・137・138・141は、甕である。底部に穿孔がある。132・133は、底部が輪状である。132外面には、タタキ成形痕が残る。136・142・143は壺である。

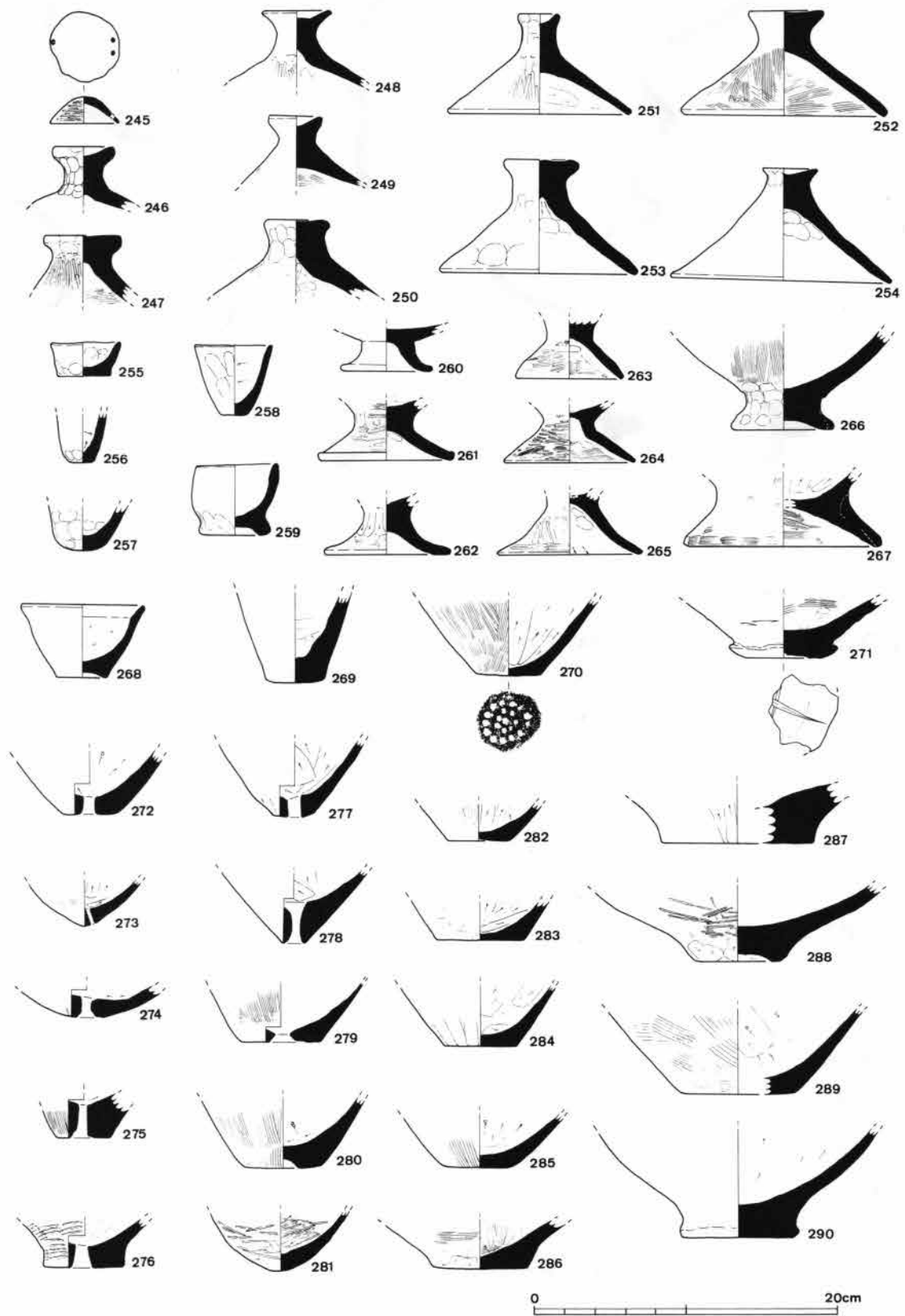
S X08出土土器(144～290) A地区の第8層には多量の遺物を含んでおり、調査地区東半部(H10区～G5区)に面的に集中して分布していたため、これをS X08として一括して取り上げた。ここに報告する遺物は、S X08として取り上げた土器群から抽出したものを中心としている。

壺、甕、高杯、鉢、蓋などの各器種が出土している。手焙り形土器の破片もある。

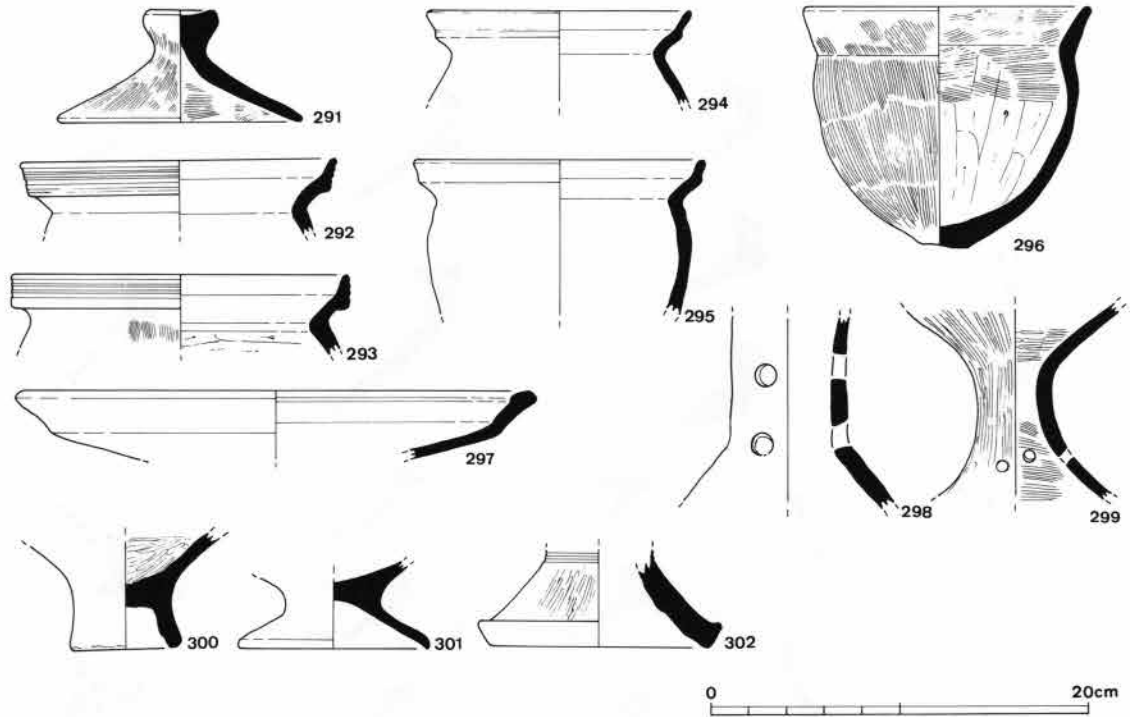
壺類には、壺A1(154)、A2(146・150～153)、A3(144・145・155・166)、B(161・164)、D(156～160・162)、E(163)、F(167・168)などがある。147は、壺Aである。角閃石を多く含む



第59図 A-S X08出土遺物実測図(4)



第60図 A-S X08出土遺物実測図(5)



第61図 Z地区出土遺物実測図

暗茶褐色の土器で、生駒西麓産である。148・149は、頸胴間に圧痕文突帯を施すもので、中期に属するものだろう。壺Dには、端部に面を作り出すだけのもの(156)と、拡張して二重口縁状を呈するもの(157～160・162)がある。壺Fは脚台をもつ精製土器である。167には把手がある。

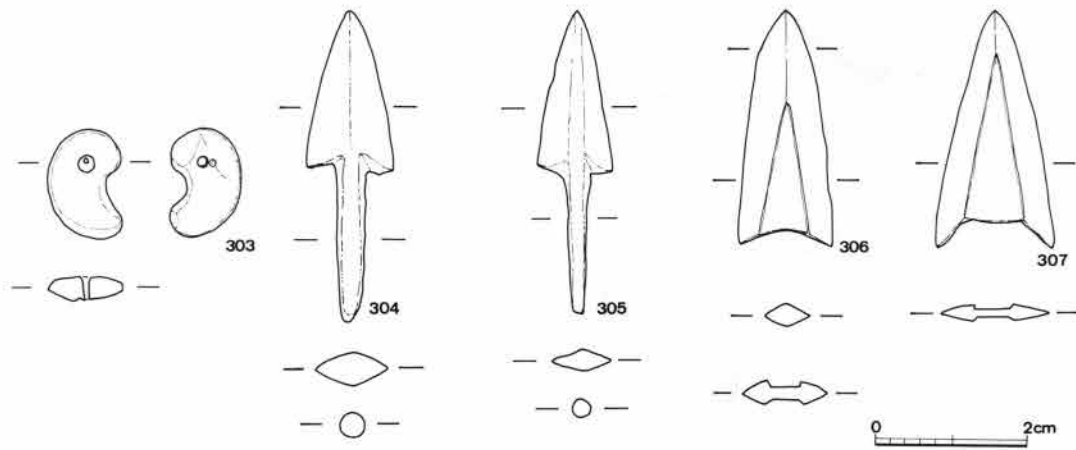
甕類には、A(170～172・180・190)、B1(173～179・181・185～189・191・195・200・201)、B2(184・199・208～213)、C(192～194・196～198)、D(214～218)、E(202～206)、F(207)がある。B類の口縁部は外傾するものが大半であるが、173のように直立するものもある。また、200・201のように脚台のつくものも定量的に存在している。甕Eには、体部外面にタタキ成形痕を残すもの(205)がある。206は、口縁が「く」の字に外反し、端部にやや広い面を作る甕である。207は甕Fで、布留式の甕である。1点のみ確認された。

高杯類には、A(220～222)、B(223・225)、C(227・228)、D(224)がある。228は、内外面ハケ調整で、口縁部に面を作る。236・237・241は、高杯Aの脚部である。242・243・244は、中期の高杯脚部である。

器台類には、A(233)、B(226・229～232)、D(234)がある。238は、器台脚部である。239は、つつみ形を呈する器台の脚部とみられる。

鉢類には、A(235)、C(240)、D(165)がある。

245は、小形壺の蓋である。246～254は、甕の蓋である。つまみ頂部が平坦なもの(247・250・253)とくぼむもの(246・249・254)がある。255～259・268・269は、ミニチュア土器である。260～267は、脚台である。260は壺か鉢、その他は台付甕だろう。270～290は、底部である。272～279は、底部に孔のあるものである。287～290は壺の底部だろう。270の底面には、棒状工具による刺突が多数施されていた。



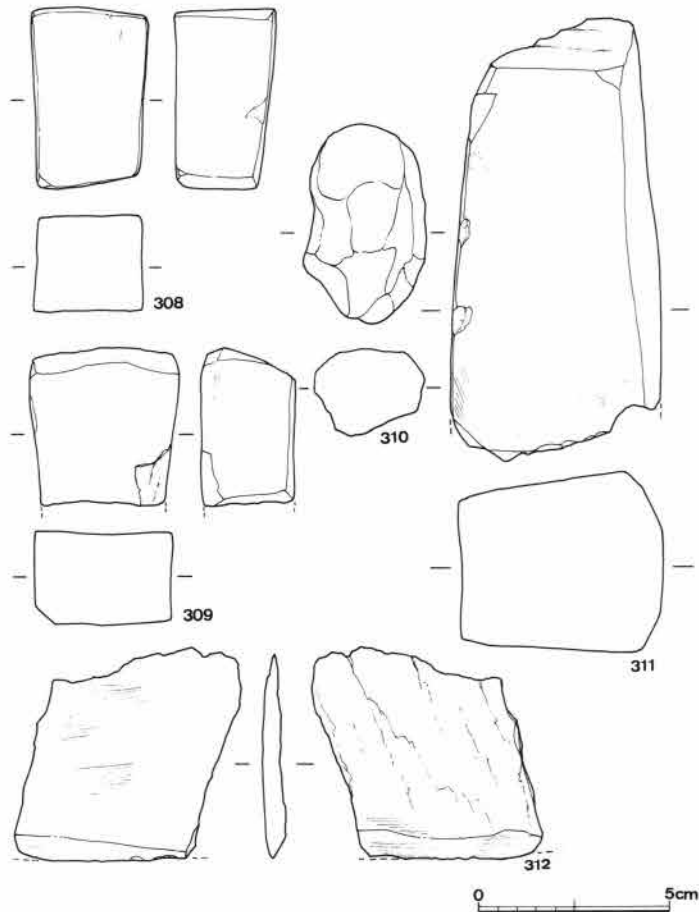
第62図 A地区出土遺物実測図(1)

303. ガラス勾玉 304~307. 銅鏃

②その他の遺物

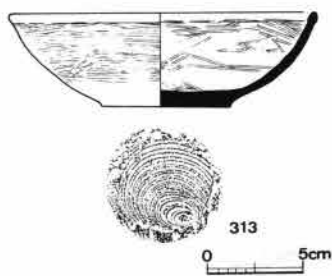
ガラス勾玉(第62図303) 長さ約1.5cm・頭部幅約9mmのコバルトブルー色のガラス製勾玉である。紐穴の穿孔は主に一方で、補助的にもう一方側から穿孔している。A地区第8層で検出した。

銅鏃(第62図304~307) 有茎式(304・305)と無茎式(306・307)のものがある。有茎式は、鏃身の断面が菱形、茎断面が円形である。304は昨年度調査したB地区、305~307は今年度A地区で出土したものであるが、ここであわせて報告することにした。304は、全長約4.1cm・茎径約3.5cmである。赤銅色で、遺存状況が良好である。305は、全長約4.0cm・茎径約2.5cmである。緑青がみられ、器表面の風化が著しい。306・307は、SX08で出土した。306は、全長約3.1cm・最大幅約1.25cmである。307は、全長約3.2cm・最大幅約1.6cmである。いずれも黒褐色で、



第63図 A地区出土遺物実測図(2)

308・309・311. 砥石 310. 粘土塊 312. 石庖丁



第64図 A地区出土遺物実測図(3)

遺存状況は良好である。鑄が短く、基部には、矢ばさみを装着するためとみられる凹面をこしらえている。

砥石(第63図308・309・311) 小型のもの(308・309)と大型のもの(311)がある。

石庖丁(第63図312) 大型の石包丁の刃部の一部である。両刃である。刃部の残存長約4.6cm、粘板岩製である。

不明土製品(第63図310) 粘土塊を握って長楕円形に固めたもの。指頭圧痕が全面に認められる。長さ約5.2cm・厚さ約4.8cm。淡橙褐色を呈し、焼成良好である。

黒色土器(第64図313) 口径約14.2cm・器高約4.8cmの黒色土器椀である。内外面とも黒色で、ヨコ方向の細かなヘラミガキが施されている。平安時代。

(2) Z地区の出土遺物(第61図291～302)

291・292・296・298はZ-S D01、293・294・295・297・299～302はZ-S D02から出土した。291は、甕の蓋である。292・293は甕B1、294・295はB2である。297は高杯A、296は鉢Aである。298・299は器台の脚部である。300・301は、台付甕の脚であろう。302は、高杯の脚である。

5. 成果と問題点

今回の調査では、中世以降の土坑・杭列、弥生時代の流路跡、良好な包含層(A-S X08)などを検出した。遺構としては明確なものは少なかったが、弥生時代後期を中心とする多量の土器群は、当該地域の集落遺跡での土器様相の一端を示すものとして貴重なものである。今回の調査成果で明らかになった点や、新たに生じた問題点などを列挙して、まとめたい。

①調査地点の性格 今回の調査地点は、冒頭で記したように、段丘縁辺が大手川の沖積地に移行する地点であり、集落隣接地点にあたる。水位が高く、居住域としては不適な地点である。水田遺構などの存在が予想されたが、遺構として検出することはできなかった。A-S D02は、灌漑用水路として機能したのかもしれない。集落の中心の一つがB地点にあることが昨年度の調査で明らかとなっているが、今回の主要な調査成果の一つである第8層土器群(A-S X08)は、B地点集落で生じた生活廃棄物が集積したものだだろう。一方、A-S D02出土遺物は、水流に伴ってさらに上流から流入した形跡があることから、今回調査した地点の上流域に広範に集落遺跡の存在を推定しうる材料として位置づけておきたい。周辺域での開発に際しては、慎重に事前調査を行う必要があろう。

②集落の時期 出土土器で最も古い時期を示すものは、148・149の壺であり、弥生時代中期(第IV様式以前)のものであろう。頸部突帯は細く、ヘラ先で刻みを施すものである。胎土・色調とも奈具谷遺跡流路跡出土品に類似するものがある。弥生時代後期の土器が主体をなし、平安時代の黒色土器や最も新しいものとしては室町時代頃の輸入陶磁細片がある。したがって、桑原口

遺跡では、弥生時代後期を中心として、弥生時代中期後半から室町時代頃にかけて断続的に人々の生活が営まれたと考えられる。

③SD02・SX08出土土器について 桑原口遺跡の中心的な時期を示すものはSD02とSX08(第8層)出土遺物である。土器群の相対年代を把握するために代表的な形式について概観しておきたい。丹後地域は住居跡や土坑などからの一括資料に恵まれないので、器種構成が明確な墳墓資料を参照する。

内傾する短い口縁部をもつ甕A、円柱状の脚柱部と109のような鋭く屈曲する脚端部をもつ高杯Aは、大宮町三坂神社墳墓群・左坂墳墓群・大山墳墓群など、弥生時代後期前半の墳墓供献土器においてセットをなす形式として知られる。後期の最も古い組成を示す土器群は大宮町大谷古墳下層墳墓^(注7)、久美浜町鳥取城跡土坑2出土例^(注8)が知られているが、上記資料はこれに次ぐ段階のものである。

甕Bは、後期中頃以降、丹後地域において在地の主体的な甕となる。擬凹線を有する甕B1は、甕Aが型式学的に進化したものである。甕Aの短く内傾する口縁部端面は、次第に拡張されて外傾し、擬凹線文が2、3条から4、6条へと多条化していく。後半になると「なで甕」と俗称される擬凹線文をもたないB2の出現率が高まる。網野町林遺跡の重複した住居跡の調査で、B2がB1に後出することが確かめられており^(注9)、終末期の墳墓出土例でも甕B1が希薄になる傾向が認められる。

甕C・Dは在地要素が少なく、外来系甕とみなしたものである。甕Cは北陸系甕と考えた。52・198は、口縁部内面に指頭圧痕列を有する月影式で、搬入土器であろう。舞鶴市志高遺跡に出土例があるが^(注10)、丹後では希な出土例として注目されよう。甕Dは、山陰系甕と考えたもので、集落遺跡では峰山町古殿遺跡に類例がある^(注11)。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭頃に編年される二重口縁甕である。66・216・217は、灰白色を呈し微細砂が多量に混入した特徴的な胎土を呈するもので、搬入品とみられる。

甕Eとしたものは、「く」の字形の口縁をもつもので、畿内系の後期甕の影響下で成立するものと考えられる。85・205は、丹波地域で模倣された畿内系の後期甕であろう。丹後地域では弥生時代後期末～前期初頭の短い期間に出現するとみられる。近年、綾部市小西町田遺跡でタタキ成形痕を有する畿内系甕を主体とする資料が一括して得られた^(注12)。綾部市域での調査で、前後する時期の墳墓からの出土資料が蓄積されつつある。丹波地域では亀岡市域、綾部市域ともにタタキ成形痕をとどめるものが優勢であるが、丹後地域では、84・85・204・205のようにタタキ成形痕を残すものは少なく、外面をハケ調整で終わるものが主体である。丹後地域でタタキ成形痕をもつ甕Fの出土が顕著な遺跡としては弥栄町ニゴレ遺跡^(注13)がある。

壺Aは丹後地域の後期を代表する形式で、集落遺跡からの発掘事例をみると、おおむねA1→A2→A3と型式変化していくと考えられる。壺Bは、古墳時代前期初頭の二重口縁壺である。161は、庄内式加飾壺の模倣であろうか。

鉢Fは、大宮町大谷古墳下層墳墓出土例を最古例とし、後期を通じて散発的にみられる。鉢D

とともに当該地域を代表する精製器種で、北陸地方にかけて分布がみられる。後期末葉の出雲の首長墓である島根県西谷3号墳に鉢Dが搬入・供献されていたことが確認され、丹後地域以東の首長の関与の可能性が論議されたことは記憶に新しい。

壺Gの類例は、弥栄町大田4号墳下層土壙^(注15)1に供献された台付加飾壺がある。体部の突帯に竹管文を二列に配列している点、器体が大形である点に相違がみられるが、同一系統の土器であろう。この型式は、墳墓供献土器としてみられることが多く、集落出土例としては稀少なものである。

高杯Bは、甕Bとともに後期後半に盛行する型式である。高杯Cも同様である。高杯Cは高杯Bと後期末葉に墳墓供献土器としてセットをなすもので、峰山町金谷墳墓群、野田川町西谷墳墓群出土資料^(注17)を典型的な事例として挙げうる。

なお、細片で図示しえなかったが、櫛描きによる列点文と直線文を配した近江系甕の体部も確認している。

以上の観察から、A-S D02とA-S X08出土土器は、弥生時代後期前半から古墳時代前期初頭までの多様な形式が幅広く存在しており、畿内や北陸、山陰、近江など、遠隔地との幅広い交流を示す土器が含まれていることが明らかとなった。当該資料は、阿蘇海沿岸地域の一つである大手川流域に後期に形成された一地域集団である桑原口遺跡の土器様相を明確に示すものであり、丹後地域の同時期の集落出土土器との比較検討材料として一定の役割を果たすものと思われる。

近年、峰山町金谷古墳群、丹後地域では加悦町白米山北古墳^(注18)、加悦町内和田古墳群^(注19)、弥栄町大田南古墳群^(注20)など、弥生時代終末期の墳墓資料が次々と明らかにされ、墳墓供献土器における他地域産・他地域系土器の存在が鮮明となってきた。中でも、北陸系土器が目立った存在になってきている。墳墓供献土器の特質を明らかにするためには集落遺跡における外来系土器のあり方を明確にすることが前提となろうが、現在のところ、丹後地域では、集落遺跡出土資料には恵まれていないのが実状である。わずかではあるが、今回報告した北陸系土器をはじめとする外来系土器は、こうした問題点を検討していく上で参考となるだろう。

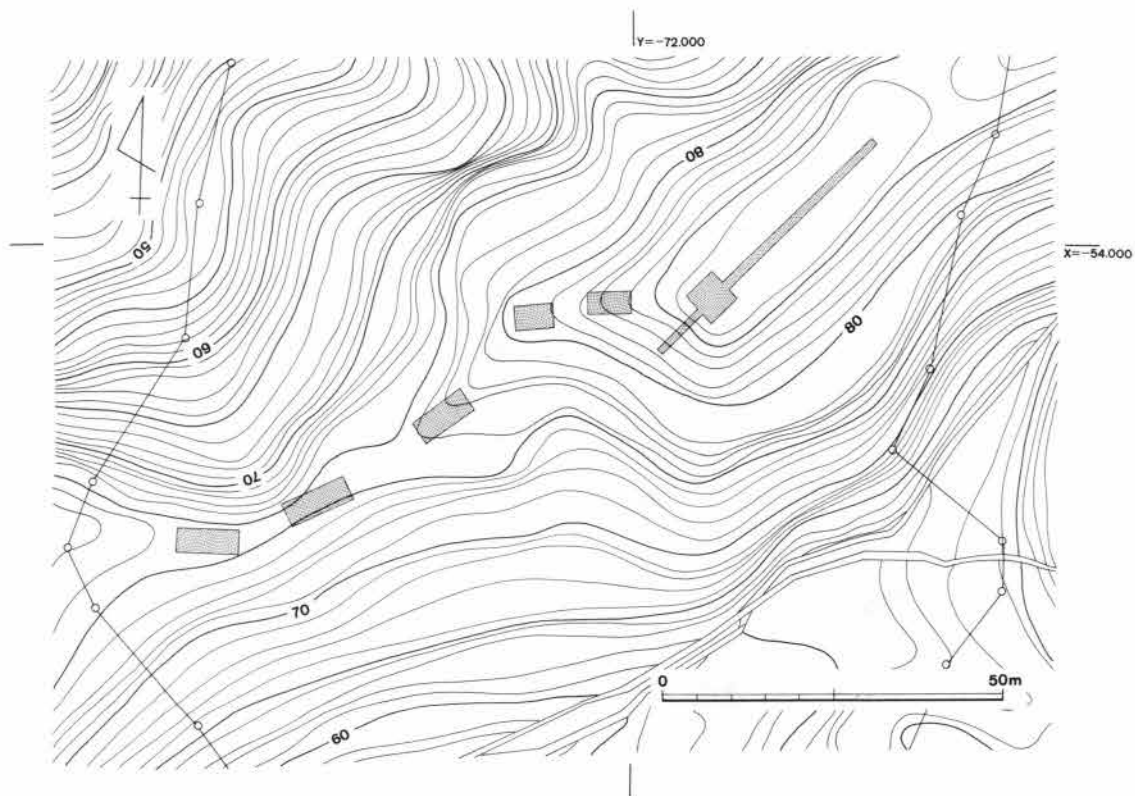
(田代 弘)

(2) 今福北城跡

今福北城跡と呼称された調査地点は、官津市字喜多小字今福にある。大手川流域の狭長な沖積地の東岸の丘陵上に位置し、大手川中流域に対する展望に優れている。今回の調査地点は、京都府教育委員会が行った京都縦貫道路線内の分布調査で確認されたものである。分布調査時に城跡と断定することはできなかったものの、曲輪と見られる階段状の地形が尾根稜線上に点在することや、立地などから城跡である可能性が指摘され、試掘調査により遺構の有無を確認する必要があると判断された。調査は、尾根稜線状に認められる平坦面が城に関する遺構であるかどうかを確かめるために、各平坦面に試掘トレンチを設けて掘削に当たった。計6か所のトレンチを設け、人力により掘削を行った。約160㎡を掘削した。掘削の結果、約20cmの表土直下で地山である花崗岩風化土壌を確認した。それぞれのトレンチを地山面で精査したが、いずれのトレンチにおいても遺構・遺物は確認できなかった。表土中にはコンクリート破片や肥料袋の残片などが含まれており、平坦地が近代に畑作地として一時利用されていたことが確認されたのみであった。遺物が出土していないので、階段状の平坦地がいつ造成されたかはわからない。

掘削の結果からは、今回の調査地点を城跡とする結論には至らなかった。

(田代 弘)



第65図 今福北城跡トレンチ配置図

(3) 盛林寺裏山古墳状隆起

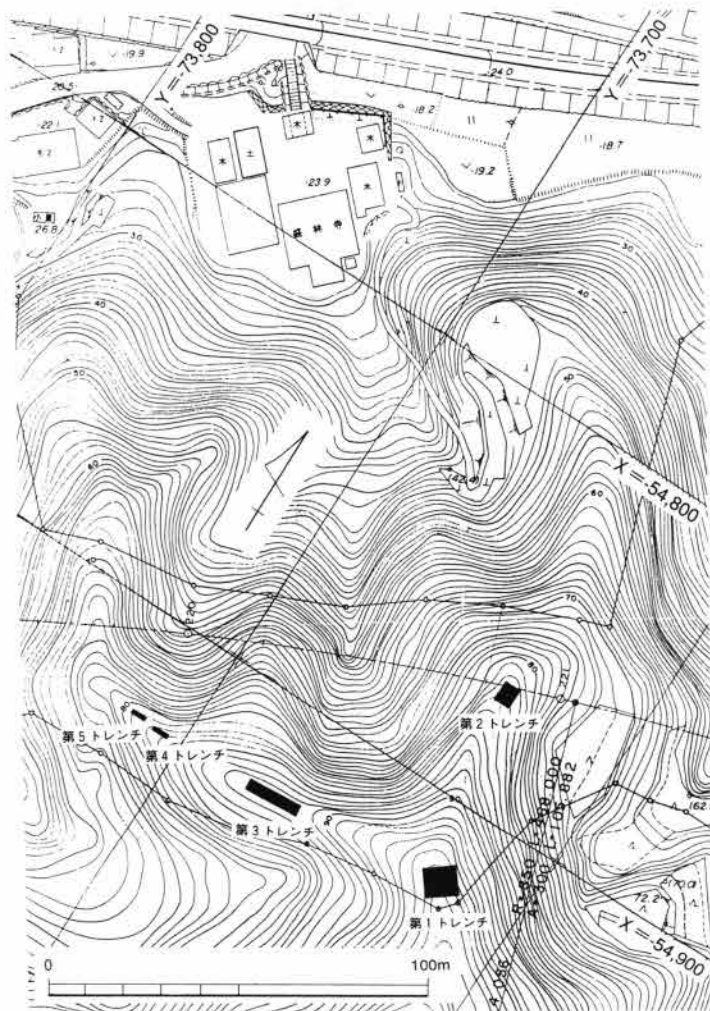
1. はじめに

盛林寺裏山古墳状隆起は、宮津市字今福小字梶谷に所在する。

調査地は、大手川右岸の標高80~100mの丘陵性山地に位置している。調査は、平成8年6月19日から同7月2日の期間で実施した。

2. 調査概要

調査は、北西2方向に派生する尾根に合計5か所のトレンチを設定し実施した。標高100mを測る最高所に第1トレンチ、北方向へ派生する尾根の先端部に第2トレンチを設定した。また、西方向に派生する尾根の中央部に第3トレンチ、先端部分に第4・第5トレンチを設定した。なお、5か所に設定したトレンチの面積は、約50m²である。



第66図 盛林寺裏山古墳状隆起トレンチ配置図

第1トレンチは、最高所に設定したトレンチであり、表土下に赤褐色の地山を検出したが、遺構、遺物は検出できなかった。第2トレンチは、表土と地山間に流土を検出したが、遺構、遺物は検出できなかった。西方に派生する尾根の平坦部分に設定した第3トレンチは、0.5mの流土を検出したが、遺構・遺物は検出できなかった。西方尾根の先端部に設定した第4・5トレンチでも遺構・遺物は検出できなかった。

3. まとめ

当該地周辺の古墳は、標高70m前後以下に築造されることが多いが、盛林寺裏山古墳状隆起では、遺構・遺物の検出はできず、古墳群としては認識できなかった。

(小池 寛)



(1) 盛林寺裏山古墳状隆起から宮津湾を望む
(南から)



(2) 第2トレンチ
全景
(南から)



(3) 第3トレンチ
全景
(西から)

第67図 盛林寺裏山古墳状隆起調査風景

- 注1 藤井矢壽子、吉岡 譲、真下春美、谷口成美、中村ひろみ、瀬戸常雄、平野喜弘、椿原みさ子、梅本みゆき、田中幸子、中武万里子 松田富士子、沖上和子、沖上美和子、今井禮子、三上衛子、直田正美、大江驍史、高岡 茂、山添英一、酒井啓子、柏木大延
- 注2 『宮津市史』資料編1 宮津市 1996
- 注3 堤圭三郎ほか「宮守線路線地域内遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1971)』 京都府教育委員会) 1971
- 注4 奥村清一郎ほか「京都縦貫自動車道関係遺跡平成7年度発掘調査概要(2)桑原口遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注5 肥後弘幸・今田昇一「京都府大宮町左坂古墳群」(『日本考古学年報』46 日本考古学協会) 1995
石崎善久「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成7年度発掘調査概要(3)左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第71冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注6 平良泰久ほか『大山墳墓群』 丹後町教育委員会 1983
- 注7 『大谷古墳』(『大宮町文化財調査報告』第4集 大宮町教育委員会) 1986
- 注8 森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度発掘調査概要(5)鳥取城跡」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注9 杉原和雄ほか『林遺跡発掘調査報告書』(『網野町文化財調査報告書』第1集 網野町教育委員会) 1977
- 注10 「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注11 「大殿遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第9冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注12 三好博喜ほか「近畿自動車道敦賀線関係遺跡(8次区間)関係遺跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書』第18冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注13 岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡平成6年度発掘調査概要(1)ニゴレ遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注14 鳥根大学法文学部考古学研究室編『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』 1992
- 注15 肥後弘幸ほか『大田南古墳群』 弥栄町教育委員会 1994
- 注16 石崎善久「金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注17 石井清司ほか『京都府弥生土器集成』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 注18 河野一隆「国道176号関係遺跡発掘調査概要(3)白米山北古墳」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注19 森 正「176号関係遺跡発掘調査概要(1)内和田古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注20 注15と同じ

付表7 桑原口遺跡A地区SD02出土土器観察表

番号	器種	地区	法量(cm)		胎土	色調	焼成	文様・技法上の主な特徴
			口径	器高				
1	壺C	B2	13.1	(3.4)	φ1mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	頸部に半截竹管文、口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリ
2	壺C	C2	12.9	(2.8)	φ1mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部内面ヘラケズリ
3	壺A3	B2	13.9	(4.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
4	壺A3	B3	14.1	(5.4)	φ1~5mmの長石・石英、雲母	黄灰褐色	良	口縁部内面ヘラミガキ
5	壺H	B3	11.2	(4.9)	φ1mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
6	壺A3		15.4	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部外面・口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリ
7	壺B	B2	19.4	(6.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗灰色	良	体部内外面ナデ
8	壺B	B3	21.1	(9.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	頸部内外面ハケ
9	壺G	C2	(最大径) 19.6	(4.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部に突帯+竹管文、体部に連弧文+櫛描き直線文、体部外面下半ヘラミガキ、内面ハケ
10	壺G	B2	(最大径) 19.7	(4.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部に突帯+竹管文、体部外面上半ヘラミガキ
11	壺A1	B2	23.4	(8.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黄灰色	良	
12	鉢A	C2	8.4	(6.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部外面ハケ
13	鉢A	C2	15.9	(11.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
14	鉢B	B2	15.9	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
15	鉢B	B2	19.6	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	体部外面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラケズリ、体部内外面ヘラケズリ
16	鉢B	C2	16.6	(10.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明黄褐色	良	体部外面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリの後ヘラミガキ
17	鉢A	B3	9.5	(7.7)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗灰色	良	内外面ナデ
18	鉢A	B2	11.2	8.4	φ1~2mmの長石・石英、雲母	褐色	良	体部内外面ハケ
19	台付壺	B2	—	(10.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内外面ハケ
20	壺H	B2	8.7	12.9	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	体部外面ヘラミガキ、体部内面下半ヘラミガキ
21	壺H	C2	(最大径) 10.7	(12.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内外面ハケ
22	鉢C	B3	13.4	10.4	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ナデ
23	台付壺	B3	(最大径) 15.4	(11)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内外面ヘラケズリの後ヘラミガキ
24	鉢B	C2	29.4	(12.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	体部外面ハケ後ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリ
25	甕B1	C2	13.3	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
26	甕B1	B2	16.4	(3.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
27	甕B1	C2	17.3	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部内面ヘラケズリ
28	甕B1	C2	18	(5.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
29	甕B1	C2	19.1	(4.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	やや不良	体部内面ヘラケズリ

30	甕B1	C2	21.3	(3.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
31	甕B1	B3	21.2	(13.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	
32	甕B1	C2	18.7	(5.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	口縁部内面ヘラケズリ、体部内面ヘラケズリ
33	甕B1	C2	21.2	(4.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
34	甕A	C1	19.1	(3.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
35	甕A	C1	18	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗黄灰色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
36	甕B2	B3	20.8	(607)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
37	甕B1	B2	16.8	(2.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗赤褐色	やや不良	体部内面ヘラケズリ
38	甕B1	B2	18.2	(3.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部内面ヘラケズリ
39	甕B1	C2	15.9	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	やや不良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
40	甕B1	B2	17.9	(3.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
41	甕B1	C2	16.2	(6.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
42	甕B2	B2	15.1	(6.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
43	甕B2	C2	18.9	(5.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
44	甕B2	C2	17.4	(5.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
45	甕B2	B2	18.8	(4.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
46	甕C	B2	13.1	(4.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
47	甕C	C2	15.2	(3.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	
48	甕C	B2	14.4	(4.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	体部内面ヘラケズリ
49	甕C	B2	13.9	(5.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	口縁部内面ヘラミガキ
50	甕C	B2	16.6	(3.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	
51	甕C	C2	17.1	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部内面ヘラケズリ
52	甕C	C2	19.6	(5.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	口縁部内面に圧痕
53	甕B1	B3	24.3	(4.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
54	甕B2	C2	22.6	(8.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
55	甕B1	C2	27.6	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
56	甕B2	C2	17	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
57	甕B2	C2	17.5	(4.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
58	甕B2	C2	19.3	(5.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
59	甕B2	C2	18.2	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部内面ヘラケズリ
60	甕B2	B1	14.2	(9.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ハケ後ヘラケズリ
61	甕B2	B1	18.9	(4.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
62	甕B2	B2	19	(5.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
63	甕B2	B3	17.4	(9.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
64	甕D	C2	14.6	(13.5)	φ2mmの高温石英含む	暗黄褐色	良	内外面ナデ
65	甕D	C2	15	(4.6)	φ1~2mmの長石・石英	黒褐色	良	体部内面ヘラケズリ
66	甕D	C2	17.3	(4.5)	φ1~2mmの長石・石英	淡褐色	良	体部内面ヘラケズリ
67	甕D	C2	16	(6.0)	φ3mmの高温石英含む	淡褐色	良	内外面ナデ
68	甕E	C2	13.8	(4.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黒褐色	良	体部内面ヘラケズリ

京都縦貫自動車道関係遺跡平成8年度発掘調査概要

69	甕E	C2	12.4	(4.7)	φ1~3mmの石英・長石、雲母	暗褐色	やや不良	体部内面ヘラケズリ
70	甕E	C1	12.6	(5.0)	φ1~2mmの石英・長石、雲母	暗茶褐色	良	体部内外面ハケ
71	甕E	C2	14.2	(6.0)	φ1~2mmの石英・長石、雲母	暗褐色	良	体部内外面ハケ
72	甕E	C2	14.1	(4.9)	φ1~2mmの石英・長石、雲母	暗褐色	良	口縁部内面ハケ
73	甕E	C2	15.1	(5.0)	φ1mmの石英・長石、雲母	暗灰褐色	やや不良	体部内面ヘラケズリ
74	甕E	C2	15.5	(15.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面ハケ 口縁部内面ハケ 体部内面ヘラケズリ
75	甕E	C1	13.8	(6.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
76	甕E	C2	17.2	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	やや不良	体部外面ハケ 体部内面ヘラケズリ
77	甕E	C2	17.4	(5.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部内面ヘラケズリ
78	甕E	B3	17	(4.2)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部内外面ナデ
79	甕E	C2	14.6	(5.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	橙褐色	良	体部内外面ハケ
80	甕E	B2	17.6	(6.2)	密 φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部内外面ナデ
81	甕E	B1	15.3	(6.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部外面ハケ、口縁部内面ハケ、体部内面ヘラケズリ
82	甕E	C2	16.5	(11.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	体部外面ハケ、口縁部内面ハケ、体部内面ヘラケズリ
83	甕E	B3	14.5	(6.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内外面ハケ
84	甕E	C2	17.8	(4.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	口縁部内外面ハケ、体部外面タタキ、体部内面ヘラケズリ
85	甕E	C2	15.4	(11.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	口縁内外面ナデ、体部外面タタキ後ハケ、体部内面ハケ
86	高杯C	C2	16.1	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	杯部外面ナデ、内面ヘラミガキ
87	高杯C	C2	20.1	(8.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明橙褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
88	高杯D	C2	19.1	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
89	器台D	B3	10.7	(7.1)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ、脚柱部外面ヘラミガキ
90	高杯A	C2	27.5	(2.4)	精良 雲母	淡黄褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
91	高杯A	C2	27.9	(4.3)	精良 φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
92	高杯柱部	D1	—	(12.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明黄褐色	良	外面ヘラミガキ
93	高杯柱部	C2	—	(9.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黄灰色暗	良	沈線文あり、外面ヘラミガキ
94	高杯C	B3	10.7	8.4	精良 φ1~2mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	口縁部外面に擬凹線文3条、杯部内外面ヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ
95	高杯脚部	B3	—	(9.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黄褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ハケ
96	高杯脚部	C2	—	(9.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	橙褐色	良	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ、上端を部分的にヘラケズリ

97	器台脚部	C2	—	(9.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明灰褐色	良	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、脚柱部内面をヘラケズリ、脚部内面ヘラミガキ
98	高杯脚部	C2	—	(9.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	橙褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ナデ
99	器台脚部	B3	—	(9.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明灰褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ハケ
100	高杯脚部	C2	—	(9.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ハケ
101	器台B	C2	19.4	(2.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	橙褐色	良	内面ヘラミガキか
102	器台B	C2	22.1	(3.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黄褐色	良	内外面ヘラミガキ
103	器台B	C2	18.9	(4.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	内外面ヘラミガキ
104	器台B	C2	22	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内外面ヘラミガキ
105	器台B	C2	17.2	(4.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ヘラケズリ後ナデ、内面ハケ
106	器台C	B2	—	(3.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内面ナデ
107	器台A	B3	20.9	18.3	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	脚柱部内面ヘラケズリ
108	高杯脚部	B3	(底径) 14.2	(5.8)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	調整不明
109	高杯脚部	B3	(底径) 17.9	(2.2)	精良 雲母	橙褐色	良	調整不明
110	高杯脚部	B2	(底径) 21.4	(2.3)	精良 雲母	赤褐色	良	調整不明
111	蓋	C2	—	(3.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	外面ナデ、内面ハケ
112	蓋	B2	—	(3.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	褐色	良	内外面ナデ
113	蓋	C2	6.3	1.9	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	2孔あり
114	蓋	2C	11.4	7	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗橙褐色	良	内外面ナデ
115	蓋	B3	14.1	6.1	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	内外面ハケ後ナデ
116	脚台部	C2	—	(7.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	外面ナデ、内面ハケ後ナデ
117	脚台部	B3	—	4.6	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内外面ナデ
118	脚台部	B2	—	4.2	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	外面ハケ、内面ナデ
119	脚台部	B2	—	3.5	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ナデ
120	脚台部	C1	—	3.6	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	外面ナデ、内面ハケ後ナデ
121	ミニチュア土器	C2	5.5	3.6	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	手捏ね土器、内外面ナデ
122	台付鉢	C2	—	(4.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	内面ヘラケズリ
123	脚台部	C2	—	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ
124	脚台部	B3	—	(4.5)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	外面ハケ、内面ナデ
125	高杯脚	B2	—	(5.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	やや不良	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
126	器台脚	C2	—	(5.7)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	脚柱部内外面ヘラケズリ、脚部外面ヘラミガキ
127	土錘	C2	(径)4.2	4.5	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	ナデ
128	有孔鉢	C2	—	(3.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
129	甕底部	C2	—	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	内外面ハケ

130	有孔鉢	C2	—	(4.7)	φ1~5mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	内面ヘラケズリ
131	鉢底部	C2	—	(4.4)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ
132	甕底部	C2	—	(1.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	外面タタキ後ハケ、内面ハケ
133	甕底部	C2	—	(2.4)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	黒灰色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ後ナデ
134	甕底部	C2	—	(3.5)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
135	甕底部	C2	—	(3.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ハケ後ナデ
136	甕底部	C2	—	(2.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶灰褐色	やや不良	内外面ナデ
137	甕底部	C2	—	(4.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
138	甕底部	C2	—	(4.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ハケ後ナデ、一部ヘラケズリ
139	有孔鉢	C2	—	(7.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	内外面ナデ
140	有孔鉢	B2	—	(8.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
141	鉢底部	C2	—	—	φ1~4mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
142	壺底部	C2	—	—	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
143	壺底部	C2	—	—	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ

付表8 桑原口遺跡A地区SX08出土土器観察表

番号	器種	地区	法量(cm)		胎土	色調	焼成	調整・技法
			口径	器高				
144	壺A3	F4	16.3	(4.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	頸部内外面ハケ後ナデ
145	壺A3		14.8	(5.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	やや不良	ヘラミガキ
146	壺A2	G8	17.6	(5.8)	φ3~4mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	口縁部に擬凹線文と円形浮文、口縁部見込みに孔あり、内外面ヘラミガキ
147	壺A	H8	(6.8)	(2.4)	φ3~5mmの長石・石英、雲母	黒褐色	やや不良	口縁部に擬凹線文と円形浮文
148	壺A	H9	—	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	頸部に圧痕文突帯+櫛描き波状文
149	壺A	H8	—	(5.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	頸部に圧痕文突帯、体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ
150	壺A2	H8	21.8	(5.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	頸部外面ヘラミガキ
151	壺A2	H8	20.6	(3.8)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	内外面ヘラミガキ
152	壺A2	F4	27.2	(5.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黒褐色	良	内外面ヘラミガキ、一部にヘラケズリの痕跡あり
153	壺A2	G8	22.9	(4.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内外面ヘラミガキ
154	壺A1	H6	21.8	(5.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	外面ハケ後ナデ、内面不明
155	壺A3	H7	19.7	(6.2)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	内外面ナデ
156	壺D	B1	14.9	(3.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラミガキ
157	壺D	G4	11.9	(4.8)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	やや不良	外面ナデ、頸部内面ナデ、体部内面ヘラケズリ
158	壺D	F4	13.9	(5.3)	φ2~5mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ
159	壺D		13.6	(6.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ

160	壺D	G9	13.6	(7.6)	φ2~5mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内面の一部をヘラケズリ
161	壺B	G8	—	(5.0)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	口縁部に円形浮文+竹管文、下端に竹管文、頸部外面ヘラミガキ、口縁部内面一部をヘラケズリ
162	壺D	G9	13.2	(3.2)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	口縁部内面ハケ
163	壺E	B3	11.6	(5.4)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	内外面ヘラミガキ
164	壺B	G9	18.8	(3.7)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	内外面ナデ
165	鉢	F4	7.8	(7.2)	密 φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内外面ヘラミガキ
166	壺A3	G9	16.4	(4.2)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明灰茶褐色	良	口縁部に擬凹線文+半截竹管文+円形浮文、内面ヘラミガキ
167	壺F	G4	7.9	(8.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母		良	外面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリ
168	壺F	G14	10.5	(9.5)	精良 φ1~2mmの長石・石英、雲母	橙褐色	良	外面ハケ後ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ハケ
169	不明	B10	14.5	(5.8)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内面に接合痕顕著
170	甕A	H6	15.5	(13.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
171	甕A	H8	16.3	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部内外面ハケ後ナデ
172	甕A		15.1	(4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部外面ハケ、頸部内面ハケ後ヘラケズリ
173	甕B1	G9	17.7	(2.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内面ハケ
174	甕B1	F5	19.6	(2.6)	密 φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	
175	甕B1	G10	20.4	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
176	甕B1	G8	16.7	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	やや不良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
177	甕B1	G9	20	(2.8)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内面ヘラケズリ
178	甕B1	G8	16	(2.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	
179	甕B1	G4	16.1	(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
180	甕A	H10	16.7	(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
181	甕B1	G9	15.9	(3.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	内面ヘラケズリ
182	甕B1	H5	17.4	(3.8)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	黒褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
183	甕B1	F6	14.5	(7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
184	甕B2	G7	8.8	(5.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	内外面ナデ
185	甕B1	B3	21.3	(2.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黒褐色	良	内面ヘラケズリ
186	甕B1	B4	18	(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黒灰褐色	良	
187	甕B1	G7	18	(6.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
188	甕B1	F4	21.5	(3.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	やや不良	内面ヘラケズリ
189	甕B1	G9	18.6	(2.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	やや不良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
190	甕A	F6	17.8	(7.2)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部に刺突文、体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
191	甕B1	G10	16.4	(3.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明淡褐色	良	内面ヘラケズリ
192	甕C	H8	14.9	(5.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	内面ヘラケズリ

京都縦貫自動車道関係遺跡平成8年度発掘調査概要

193	甕C	H8	17.6	(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗灰褐色	良	内面ヘラケズリ
194	甕C	H6	17	(4.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黒褐色	良	
195	甕B1	G9	25.2	(3.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明淡茶褐色	やや不良	内面ヘラケズリ
196	甕C	H7	16.1	(5.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
197	甕C	H8	17.5	(5.6)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	やや不良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
198	甕C	G7	19.6	(4.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内面ヘラケズリ
199	甕B2	側溝	30	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明淡茶褐色	良	口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリ
200	甕B1	G8	12.6	13.8	φ1~4mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	内外面ハケ後ナデ
201	甕B1	F4	16.1	21.4	φ2~3mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ
202	甕E	H8	17.4	(4.8)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	暗灰褐色	良	外面ナデ、体部内面ヘラケズリ
203	甕E	H8	20	(5.5)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	体部外面ハケ、口縁部内面ハケ、体部内面ハケ後ヘラケズリ
204	甕E	H8	14.6	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	体部外面タタキ、内面ナデ
205	甕E	H6	16.6	(4.6)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部外面タタキ後ハケ、口縁部内面ハケ、体部内面ナデ
206	甕E	E5	17.4	(7.4)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗赤褐色	良	口縁部内外面ハケ、体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ後ナデ
207	甕F	G7	17.3	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明淡褐色	良	口縁端部を内面に肥厚、体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
208	甕B2	H4	16.3	(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	やや不良	
209	甕B2	H7	154.9	(3.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	口縁部内面ハケ後ナデ、体部内面ヘラケズリ
210	甕B2	G4	17.1	(2.7)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	やや不良	
211	甕B2	G7	17	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	頸部外面ハケ
212	甕B2	G8	15	(9.3)	φ1~5mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
213	甕B2	G8	23.1	(5.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡赤褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
214	甕D	G4	18.8	(3.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	体部内面ヘラケズリ
215	甕D	H8	16.5	(5.8)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
216	甕D		15.9	(4.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黄灰色	良	体部内面ヘラケズリ
217	甕D	G7	16.6	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	体部内面ヘラケズリ
218	甕D	H8	15.2	(5.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	
219	高杯D	H8	21.1	(2.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	
220	高杯A	G6	19.6	(4.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	やや不良	杯部内外面ヘラミガキ
221	高杯A	F6	27.7	(2.9)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
222	高杯A	G9	27	(4.5)	精良 φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
223	高杯B	B3	23	(4.0)	精良 φ1mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
224	高杯D	G9	22.4	(5.3)	精良 φ1mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ

225	高杯B	G10	13.5	(4.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	杯部外面ヘラミガキ、内面ハケ
226	器台B	H8	12	(5.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
227	高杯C	G8	14.5	(3.3)	精良 φ1mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	杯部内外面ヘラミガキ
228	高杯C	H7	16.7	(6.0)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	内外面ハケ
229	器台B	E6	18.1	(3.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	不良	内外面ナデ
230	器台B	H8	21.1	(6.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	内外面ヘラミガキ
231	器台B	F5	20.6	(10.2)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	内外面ヘラミガキ
232	器台B	H8	22	(12.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明橙褐色	良	外面ハケ、内面ナデ
233	器台A	F6	23	(11.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	内外面ナデ
234	器台D	H9	10.9	(6.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	やや不良	脚部内面ヘラケズリ
235	台付鉢	F4	11.1	8.2	φ1~2mmの長石・石英、雲母	橙褐色	良	杯部内外面ヘラミガキ
236	高杯脚部	E5	—	(9.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ヘラミガキ、脚柱部内面にしぼり痕
237	高杯脚部	F6	—	(10.0)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	脚柱部上下端に沈線をめぐらす、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
238	器台脚部	G5	—	(10.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	内外面ヘラケズリ
239	器台脚部	F5	7.9	(3.7)	精良 φ1mmの長石・石英、雲母	暗黄灰色	良	
240	鉢C	H8	11.7	(6.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
241	器台脚部	G9	(底径) 24.6	(2.2)	精良 φ1mm以下の長石・石英、雲母	暗灰褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ハケ
242	器台脚部	側溝	(底径) 13.8	(2.0)	φ1mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	
243	器台脚部	E6	(底径) 11.8	(4.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ後ハケ
244	器台脚部	H4	(底径) 13.0	(4.6)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
245	蓋	H8	4.5	1.8	φ1mm以下の長石・石英、雲母	明茶褐色	良	紐穴あり、外面ヘラミガキ、内面ナデ
246	蓋	D5	—	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	内外面ナデ
247	蓋	G4	—	(4.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	内外面ヘラミガキ
248	蓋	G8	—	(5.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明褐色	良	外面ヘラミガキ
249	蓋	G9	—	(4.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内外面ハケ後ナデ
250	蓋	B4	—	(4.9)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	内面ヘラケズリ後ナデ
251	蓋	G4	12.1	6.5	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ
252	蓋	H8	13.6	6.9	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	内外面ハケ
253	蓋	G8	14.5	7.4	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗赤褐色	良	内外面ナデ
254	蓋	F4	4.6	7.4	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黒褐色	良	内外面ナデ
255	ミニチュア土器	G8	4.6	2.2	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	内外面ナデ

京都縦貫自動車道関係遺跡平成8年度発掘調査概要

256	ミニ チュア 土器	G7	1.6	3.2	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ
257	ミニ チュア 土器	F4	—	2.8	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	内外面ナデ
258	ミニ チュア 土器	G4	5.1	4.6	φ1~4mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	内面ヘラケズリ
259	ミニ チュア 土器	G9	5.4	4.6	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	内外面ナデ
260	脚台	H6	(底径) 6.0	(2.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	内外面ナデ
261	脚台	H8	(底径) 8.8	(4.0)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	外面ヘラミガキ
262	脚台	G8	(底径) 8.3	(3.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明橙褐色	良	外面部分的にヘラケズリ後ヘラミガキ 内面ハケ
263	脚台	H9	(底径) 7.1	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ
264	脚台	H8	(底径) 8.7	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明茶褐色	良	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ
265	脚台	H8	(底径) 9.5	(4.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明淡褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ナデ
266	台付甕	H9	(底径) 6.8	(6.5)	φ1~4mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	体部外面ハケ、内面ナデ
267	台付甕	側溝	(底径) 13.0	(4.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	脚部内外面ハケ、体部内面ヘラケズリ
268	ミニ チュア 土器	F4	8.1	4.9	φ1~2mmの長石・石英、雲母	黒褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ
269	ミニ チュア 土器	H6	(底径) 3.8	(5.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明褐色	やや 不良	外面ナデ、内面ヘラケズリ
270	甕	F4	(底径) 4.2	(5.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ 底部に 刺突文あり
271	甕	側溝	(底径) 7.0	(4.0)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗灰褐色	良	外面ナデ、内面ハケ
272	有孔鉢	G4	(底径) 3.4	(4.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ
273	有孔鉢	G8	—	(3.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明淡褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ
274	有孔鉢	H8	—	(2.1)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	外面ナデ・ハケ、内面ヘラケズリ
275	有孔鉢	E4	(底径) 3.5	(2.9)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗灰褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
276	甕	G9	(底径) 5.3	(3.3)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	外面タタキ、内面ハケ
278	有孔鉢	H6	(底径) 2.6	(4.7)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ

279	甕	A1	(底径) 5.3	(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	外面ハケ、内面ナデ
280	甕	G9	(底径) 5.0	(4.7)	φ1~3mmの長石・石英、雲母	暗灰色	やや不良	外面ハケ、内面ヘラケズリ後ナデ
281	鉢	G7		(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	内外面ヘラミガキ
282	甕	E5	(底径) 4.0	(2.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
283	甕		(底径) 5.8	(2.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
284	甕	G6	(底径) 4.7	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ
285	甕	B3	(底径) 4.2	(3.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
286	甕		(底径) 6.2	(3.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡茶褐色	良	内外面ハケ
287	壺		(底径) 10.0	(3.8)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡褐色	良	外面ヘラケズリ、内面ナデ
288	壺	H8	(底径) 5.6	(5.0)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	外面ハケ後ヘラミガキ、底部の一部をヘラケズリ、内面ナデ
289	壺	G8	(底径) 7.4	(5.5)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	明淡茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
290	壺	H8	(底径) 7.2	(7.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	外面ナデ、内面ヘラケズリ

付表9 桑原口遺跡Z地区出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)		胎土	色調	焼成	文様・技法上の主な特徴
		口径	器高				
291	蓋	13	5.8	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	内外面ハケ
292	甕B1	16.8	(3.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	暗茶褐色	良	内外面ナデ
293	甕B1	17.9	(3.9)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ハケ、内面ヘラケズリ
294	甕B2	14	(4.7)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	内外面ナデ
295	甕B2	15.4	(8.2)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	内外面ナデ
296	鉢A	15.2	12.5	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ハケ、口縁部と体部上半ハケ、体部下半はヘラケズリ
297	高杯A	27.6	(3.6)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	内外面ナデ
298	器台脚部	—	(9.4)	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	調整不明
299	器台脚部	—	9.7	φ1~2mmの長石・石英、雲母	赤褐色	良	外面ヘラミガキ、器台部内面ヘラミガキ、脚部内面ハケ
300	脚台	(底径) 5.8	5.6	φ1~2mmの長石・石英、雲母	茶褐色	良	外面ナデ、内面ヘラミガキ
301	脚台	(底径) 10.1	3.6	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄灰色	良	内外面ナデ
302	高杯脚部	(底径) 11.4	5	φ1~2mmの長石・石英、雲母	淡黄褐色	良	脚柱部下端に沈線文、外面ヘラミガキ

(田代 弘・水野聡哉)

5. 鳥谷古墳群発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、一般地方道佐々江下中線の道路拡幅工事が予定されたことから、これに先立ち京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。調査は、拡幅予定地内に所在が明らかとなっている4号墳の規模・構造などの確認・記録及び他の古墳、遺構の有無を確認することを目的として行った。また、4号墳の西北に隣接する3号墳の南側墳丘裾部の一部も今回の工事予定地に含まれるため、工事予定地内に限って調査を実施した。

調査地は、京都府北桑田郡京北町字下中小字鳥谷地内に所在する。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員石井清司、同主査調査員竹下士郎が担当し、本調査概要は竹下が執筆した。遺物写真は、調査第1課主任調査員田中 彰が撮影した。また、空中写真撮影及び基準点測量は、(株)マエダに委託した。現地調査は平成9年11月5日に開始し、平成10年1月14日に終了した。調査面積は、約300㎡である。

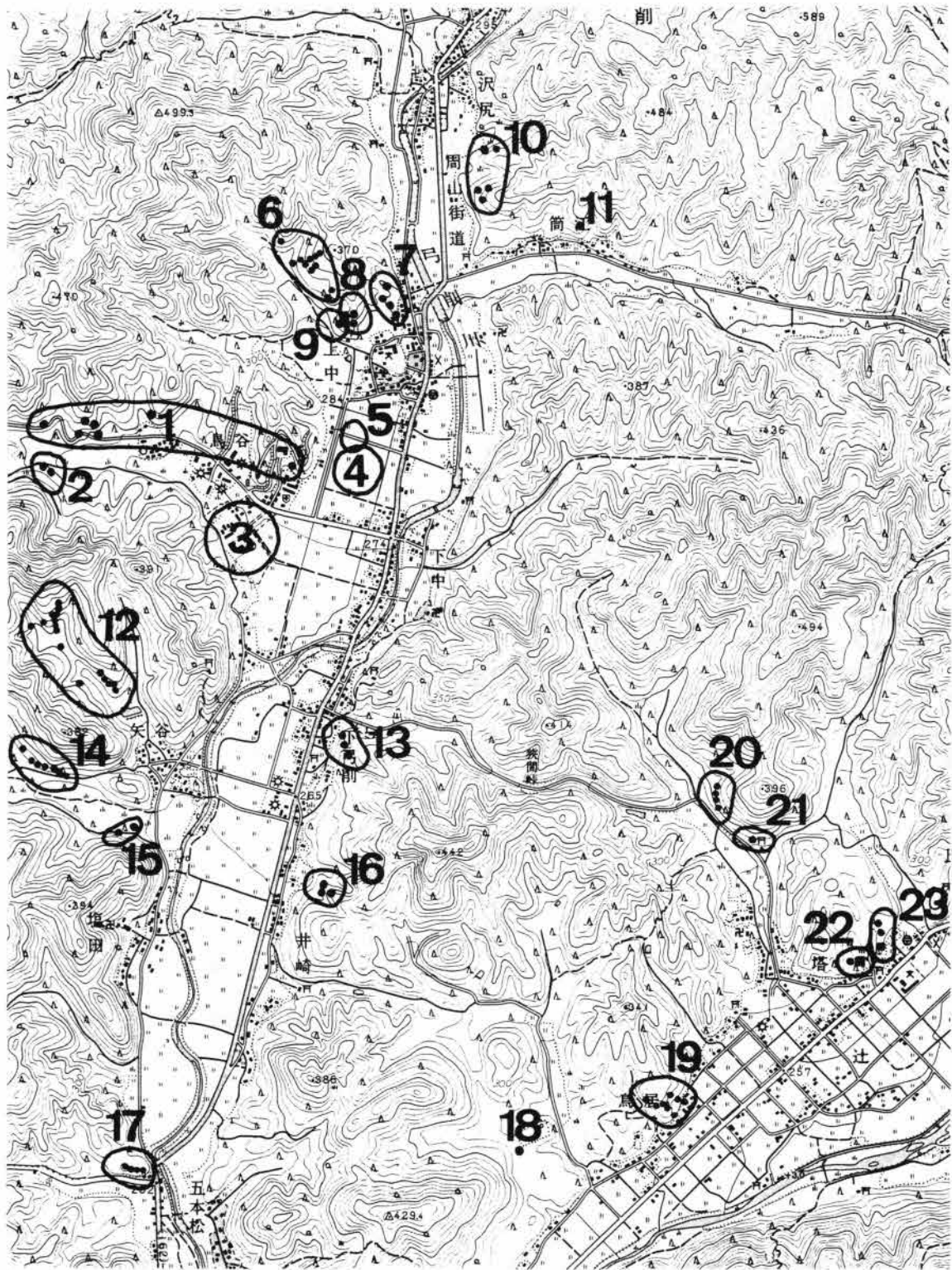
現地調査の実施、整理作業及び本調査概要の作成にあたっては、地元有志の方がたを始め、学生諸氏、また京北町教育委員会を始めとする関係諸機関に、多大な援助、協力^(注1)をいただいた。感謝したい。

なお、調査に関わる費用は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

鳥谷古墳群が所在する京都府北桑田郡京北町は、京都府のほぼ中央に位置し、大堰川(桂川)の上流一帯に広がる、丹波高地の山々に囲まれる山間の町である。町の中央を大堰川と支流の弓削川が南流し、町の中心地周山で合流した後、亀岡盆地へと西流する。この大堰川の水系をさかのほれば、若狭・近江に通じ、逆に下れば、亀岡・京都へと通じる。京北町は、この二つの川沿いの狭小な盆地を中心に、古くから林業を主要産業として発展してきた町である。

京北町の歴史的環境を簡単に概観すると、最古の考古資料としては、旧石器時代後期の可能性も指摘される、チャート製の剥片石器があげられる。また、愛宕山古墳の主体部埋土中で発見されたサヌカイト製剥片や土器片は、縄文時代にまでさかのほる可能性^(注2)がある。弥生時代になると、下弓削出土とされる偏平鈕式袈裟襷文の銅鐸がある。これは、南丹波地域で唯一の銅鐸である。また、上中遺跡や上中太田遺跡、塔遺跡などの発掘調査による遺物・遺構などからわかるように、盆地内の各所で集落が営み始められるようである。さらに、集落の広がりとともに、古墳時代になると、丘陵部などで多くの古墳が築造されている。現在町内には、約180基余りの古墳が確認されており、その多くは後期の群集墳である。その中で、今回調査の対象となった鳥谷古墳群は、



第68図 調査地及び周辺遺跡配置図(1/25,000)

- | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 鳥谷古墳群 | 2. ふくがなる古墳群 | 3. 上中遺跡 | 4. 上中城跡 |
| 5. 上中太田遺跡 | 6. 宮の谷古墳群 | 7. 弾正古墳群 | 8. 八幡宮裏山古墳群 |
| 9. 宮の谷遺跡 | 10. 岩ヶ鼻古墳群 | 11. 筒江古墳群 | 12. 矢谷古墳群 |
| 13. 狭間谷古墳群 | 14. 矢谷奥古墳群 | 15. 塩田口古墳群 | 16. しが田古墳群 |
| 17. 出口古墳群 | 18. のぼりお古墳 | 19. 鳥居古墳群 | 20. 三宅谷古墳群 |
| 21. 塔村古墳群 | 22. 愛宕山古墳群 | 23. 比賀江古墳群 | |

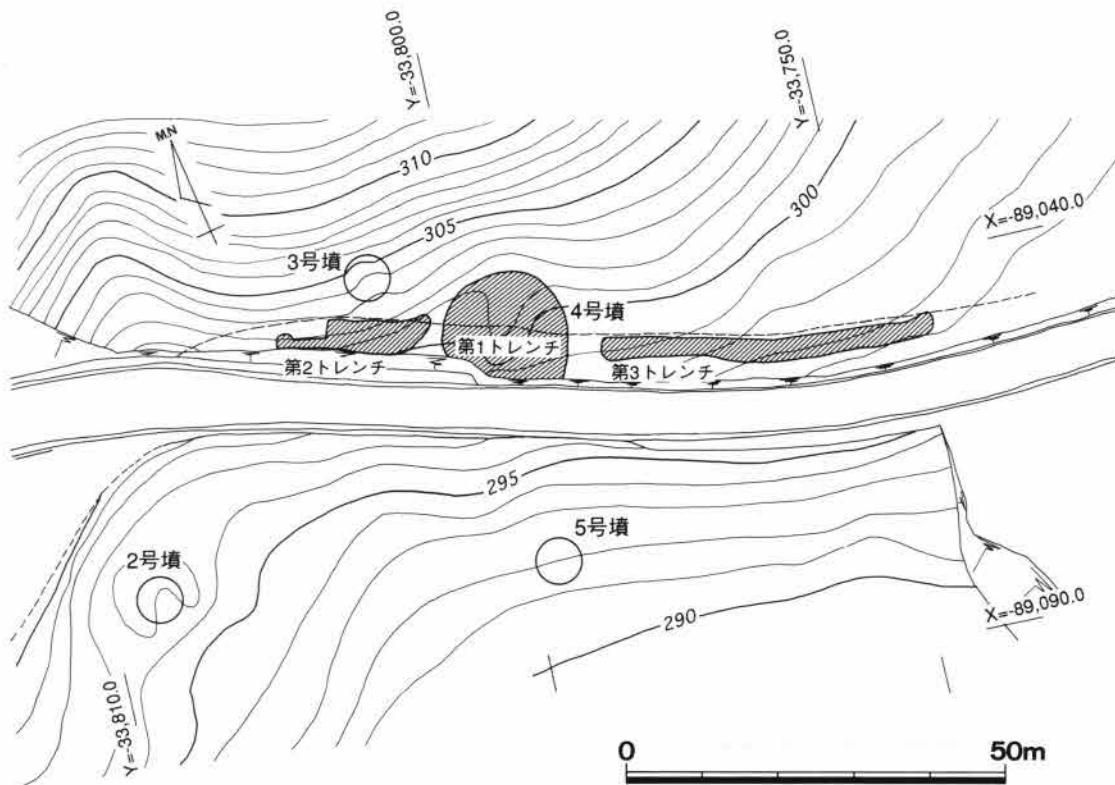
弓削川右岸に広がる丘陵地から盆地部に向かって形成された、小さな谷の南側斜面に立地している。現在7基の古墳の所在が確認されており、それぞれ直径10～18mの墳丘を持つ円墳で、横穴式石室を持つと推定されている。また、周山1号墳や愛宕山1号墳は、古墳時代中期の築造として知られる。特に愛宕山1号墳は、周山盆地全域の支配を確立した首長の墳墓という可能性も指摘されており、この地が、日本海沿岸部と近畿地方とを結ぶ交通路上の要地であったことをうかがわせる。

奈良時代の遺跡としては、周山廃寺跡や、この周山廃寺に瓦を供給した周山瓦窯跡^(注3)があげられる。周山廃寺跡の調査では、川原寺式軒丸瓦などが出土しており、この地域と当時の中央政権との関わりも指摘されている。平安時代にはいると、弓削川流域に弓削荘、大堰川流域に山国荘がそれぞれ形成され、都への木材供給地として発展していく。特に山国荘は、明治に至るまで天皇家直轄の禁裏御料地として皇室との関係も深い。中世には、明智光秀の築城した周山城跡や、周囲に箱堀形式の堀をめぐる上中城跡などがある。

以上のように、京北町では、古くから人々の生活が営まれ、飛鳥時代以降、中央政権との関わりも持ちながら独自の発展を遂げてきた地域といえよう。

3. 調査の概要

今回の調査地は、前述したように、道路拡幅予定地が対象地となり、その中には、4号墳と3号墳の墳丘部が一部含まれる。そこで、調査に際しては便宜上、4号墳に関わる調査地を第1ト



第69図 調査地配置図(1/1,000)

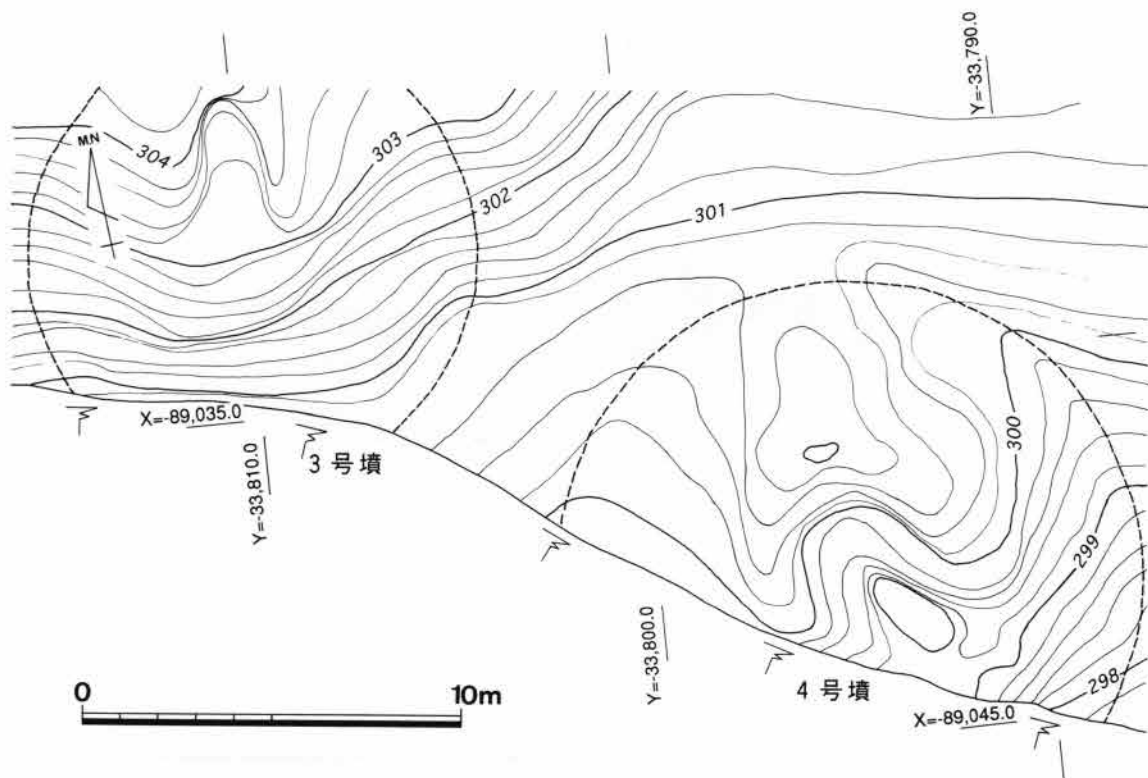
レンチ、3号墳の墳丘部に関わる調査地を第2トレンチ、また4号墳の東側で新たな古墳や遺構の存在を確認するための調査地を第3トレンチとして設定し、調査を開始した。以下、それぞれの調査地ごとに、調査成果について述べておく。

(1) 4号墳(第1トレンチ)

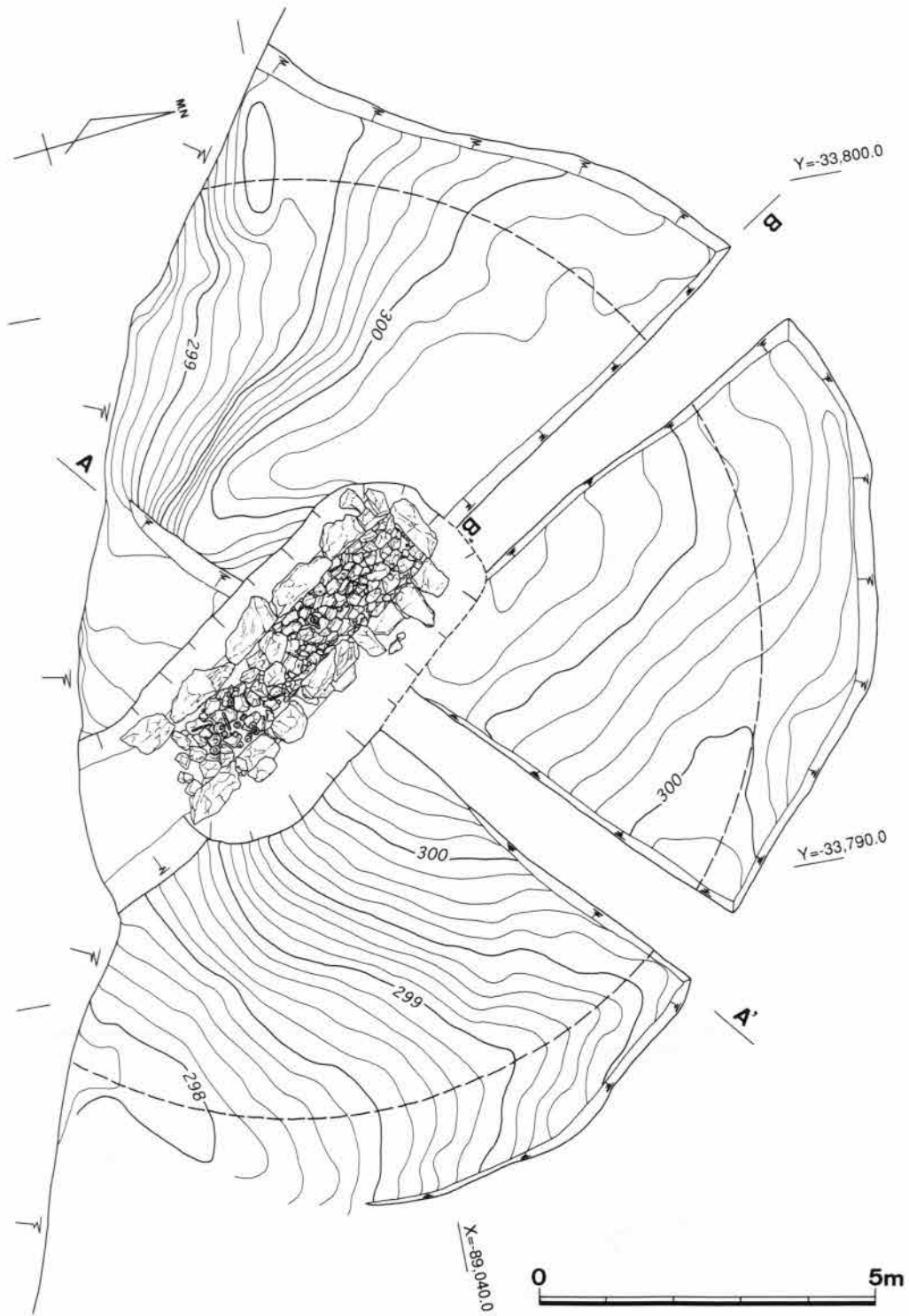
①墳丘

前述したように、鳥谷古墳群は、弓削川の西に広がる丘陵部から、東の低地部にかけて開ける谷間の南側斜面に位置する。この低地部の下中地区から日吉町に向けて、一般地方道佐々江下中線が通じており、この道路が鳥谷古墳群の中を貫通する。調査前、4号墳は、この道路によって南側の墳丘部が一部削平されていたために、直径約17.0mの半円形を呈していた。現地形の最も低い部分から頂部までの高さは、約3.2mであった。また、墳丘のほぼ中央部には、南北方向に長さ約4.0m・幅約2.0mの馬蹄形を呈する盗掘坑が認められた。

調査は、表土及び盗掘による攪乱土を除去することから開始した。その結果、明瞭な墳丘裾部は確認できなかったが、東側で、ほぼ円形にめぐっていたであろうと推定される溝状の落ち込みを一部検出した。検出全長は約5.0m・幅約1.5mである。これは、墳丘裾部を画していた周溝であったと考えられる。また、墳丘部の断面を見ると、濁黄褐色土と黒灰褐色土が互層に堆積している状況を良好に確認することができた。これは、版築によって構築された盛り土、及び裏込め土であると考えられる。これらのことから、4号墳は、直径約13.0m、石室床面から墳頂部まで約2.8mの高さを持つ、円墳であったと推定される。



第70図 3号墳・4号墳調査前測量図(1/200)



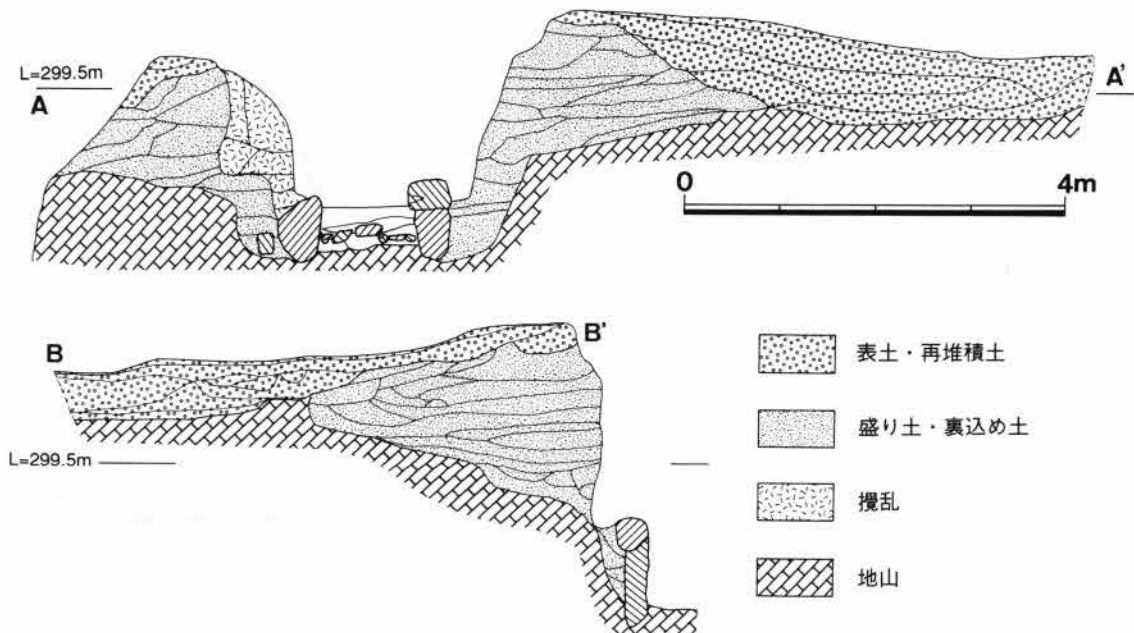
第71図 4号墳墳丘平面図(1/100)

②埋葬施設

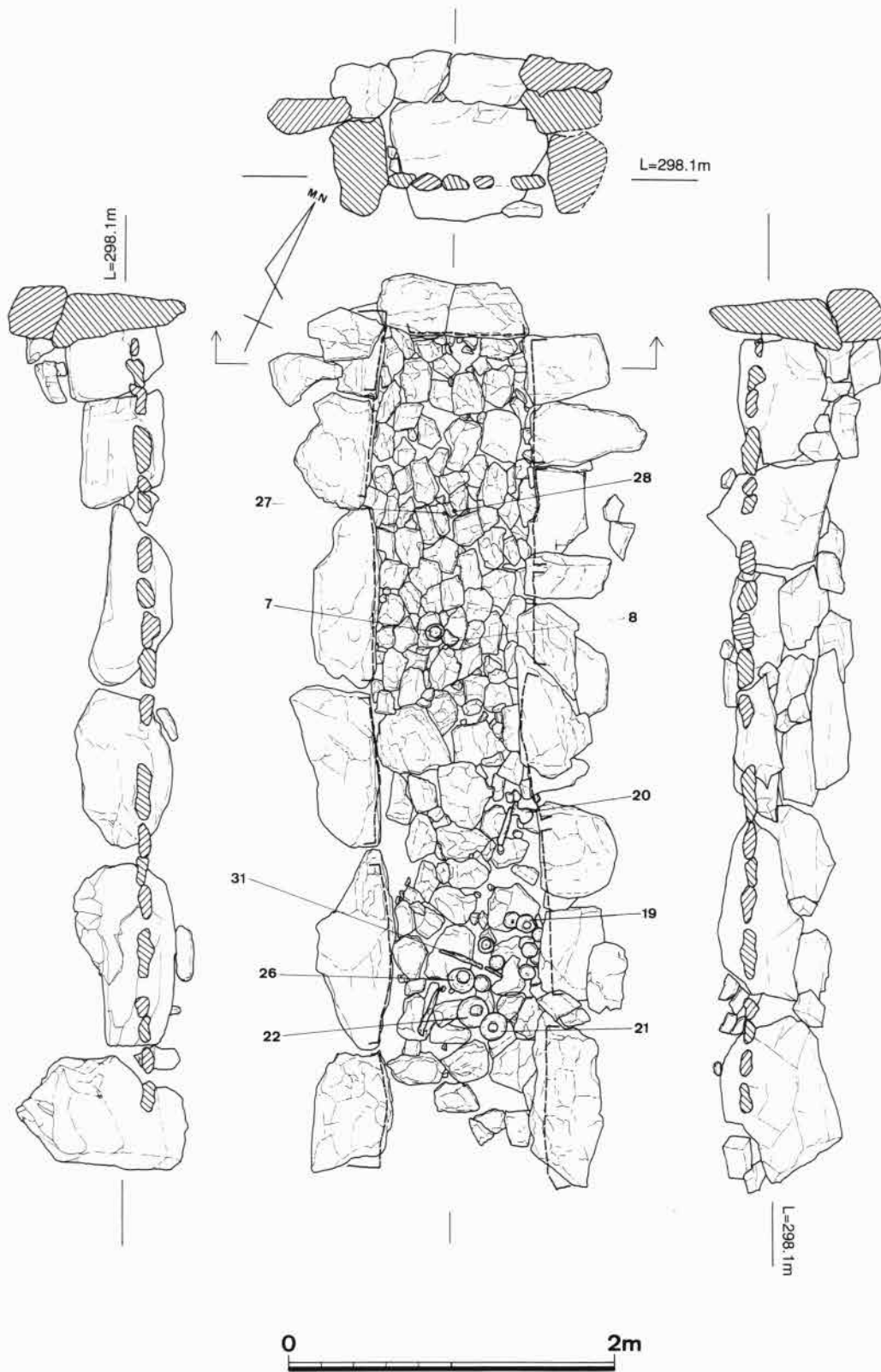
4号墳の埋葬施設としては、盗掘坑の直下で、南東に開口する無袖式の横穴式石室を1基検出した。石室の主軸は、磁北から西に30°振る。検出した石室の規模は、全長約6.2m、奥壁部幅約0.88m、開口部幅約0.98m、奥壁部の残存高約0.8mを測る。

石室は、ほぼ北から南に傾斜する斜面に、幅約3.0m・深さ約2.5m掘り込んで墓壙を造り、その最奥部に奥壁基底石を据えている。その後、長さ0.6~1.1mの石の平坦面をそろえながら左右の側壁として順に横にならべていく。次にそれぞれの上に一段、二段と積んでいくと考えられるが、今回の調査によって検出できたのは、奥壁と東側の側壁に残る二段分と、西側の側壁の一段分であり、天井石などは検出していない。しかし、断面から観察できる盛り土、及び裏込め土の堆積状況には、床石から約1.2mの高さのところまで、わずかながら変化が認められることから、石室は、天井石も含めて、この高さまで構築されたと思われる。これは、基底石・天井石を含めて、およそ3~4段分に相当する高さである。また、両側壁で開口部に据えられた石材は、横に寝かさず立てられており、石室への入り口を意識したものと考えられる。

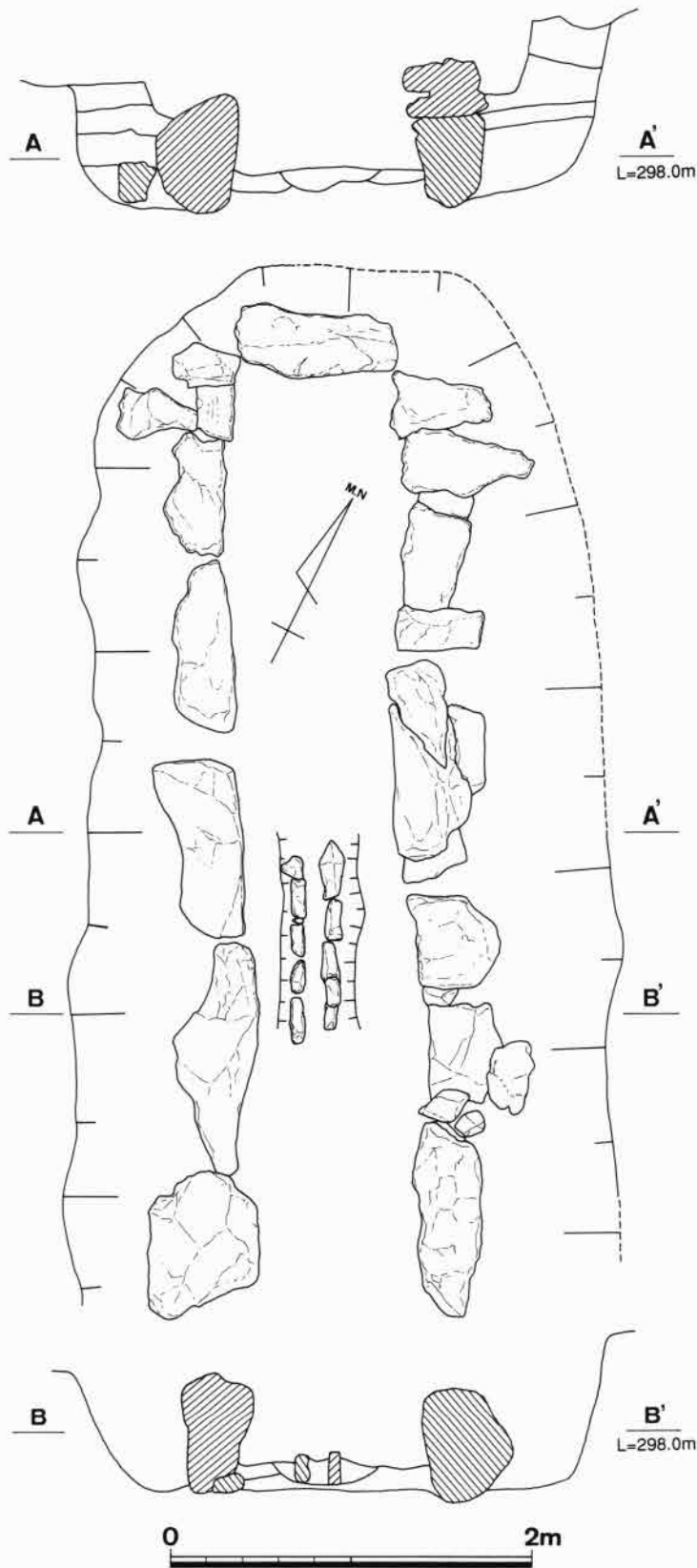
石室内床面には、拳大から人頭大の礫が一面に敷かれていた。この床石は、石室のほぼ中央部を境として、奥壁側には比較的小さい石材が密に敷かれており、開口部側には、比較的大きな石が敷かれていた。さらに、この開口部側の床石の下層では、中央部に側壁と平行するように構築された排水溝を検出した。この排水溝は、幅約50cm・深さ約10cmの溝状の掘り込みの中に、長さ約20cm・幅約15cm・厚さ約8cmの偏平な石を横に二列平行に並べて構築したものである。検出全長は、約1.1m・溝の最大幅は約0.12mである。検出時には、溝内には、暗灰褐色の砂が堆積していた。この排水溝の最奥部は、前述した床石の配置が変わる部分と一致する。開口部側の床石



第72図 4号墳墳丘断面図(1/80)



第73図 石室実測図(1/40) 番号は遺物番号



第74図 排水溝実測図(1/40)

の中で、中央に並ぶ人頭大の石は、この排水溝の蓋石を兼ねていたと考えられる。ところが、この排水溝は、開口部側約1.5mについては検出していない。しかし、開口部付近の床石下層中央部には、若干の砂層の堆積が認められたことや、石室内での出土遺物の大半が開口部付近で検出されたことともあわせると、石室構築時には、排水溝も開口部まで設置されていたが、その後の追葬時か、あるいは、盗掘により攪乱された際に、開口部付近の排水溝は破壊されたものと推定される。

石室の石材は、奥壁、側壁、床石ともに、チャートが用いられている。チャートは、近隣の山中にも露出しており、これらを利用したものであろう。奥壁、及び側壁に用いられる大きな石材の中には、切り出し、ないし配置の際の加工痕が認められるものもあった。

石室内の出土遺物は、すべて床石の直上で検出した。前述したように、出土遺物の大半は、開口部付近で出土したが、蓋杯2点は、石室内ほぼ中央部で、また金環2点は、奥壁から約1mの中央部で、鉄製品1点は、奥壁から約0.8mの東側壁直下で検出したものである。さらに、開口部で検出した三足壺の脚1

本は、破損していたが、破損した脚部は、石室内中央の西側壁直下の床石の隙間で検出したものである。

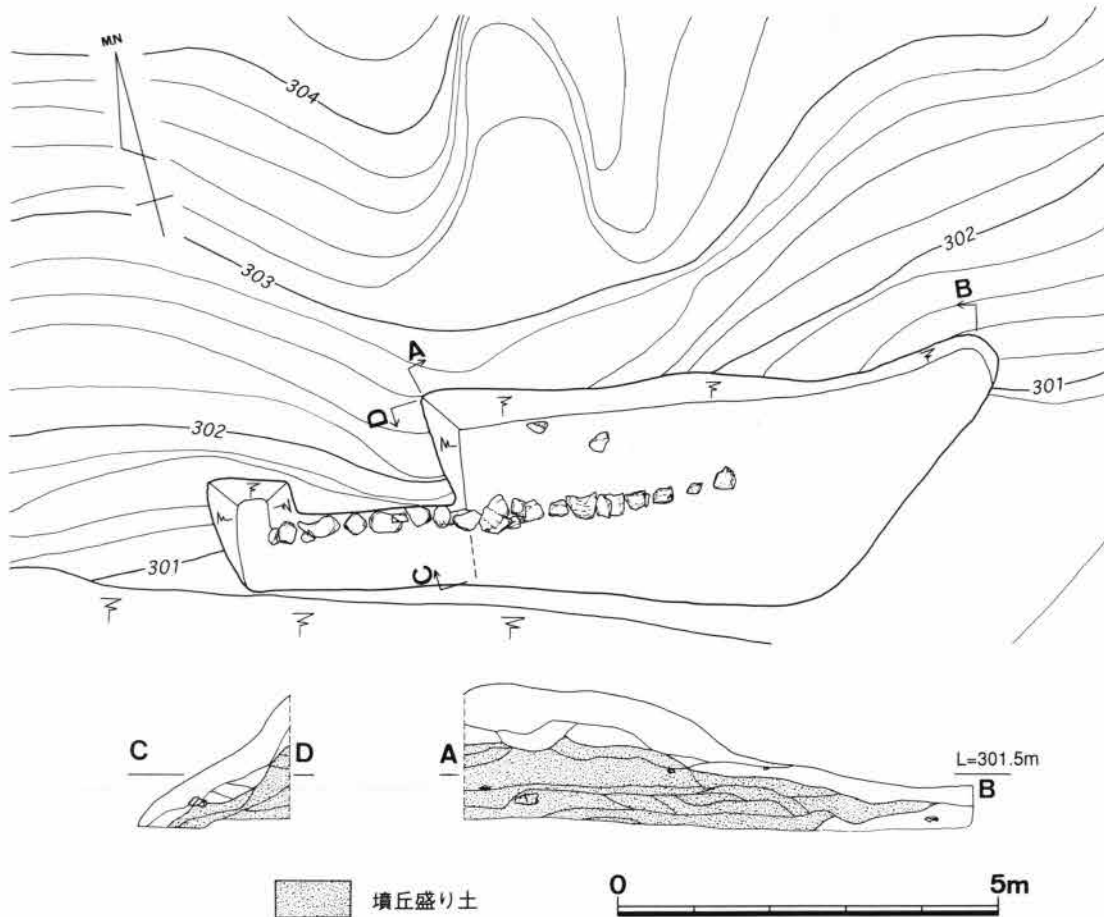
また、開口部の西側壁の直下では、瓦器椀の小片も検出した。

(2) 3号墳(第2トレンチ)

3号墳は、4号墳から北西に約15mの場所に位置する。4号墳よりやや急な斜面に位置するが、調査前、直径約10mの円形のマウンドが確認された。また、頂部には4号墳と同様の盗掘坑が認められた。今回の道路拡幅工事に伴う調査対象地は、3号墳の南側裾部の一部である。調査は、表土を除去することから開始したが、表土除去後すぐに、人頭大の石が直線的に並ぶ状況を検出したために、可能な限り、この石列の全容を検出できるようにつとめた。また、断面観察により、墳丘の盛り土の堆積状況を確認した。

この結果、まず、石列は、ほぼ東西に直線的に並ぶが、その方向は、 $N-80^{\circ}-W$ となり、検出全長は、約6.2mである。ほぼ同様な大きさの石を、2段積んで構築されていた。使用される石材は、4号墳の石室と同様のチャートである。また、この石列は、東端、西端ともに、屈曲するような状況は検出していない。列石から墳丘頂部までの比高差は、約3.0mである。

次に、断面観察によると、4号墳ほど明瞭ではないものの、表土の下層には、暗灰褐色から明



第75図 第2トレンチ平面図及び断面図(1/100)

灰褐色を呈する土層が、互層に堆積していた。これは、3号墳構築の際の墳丘盛り土であると考えられる。

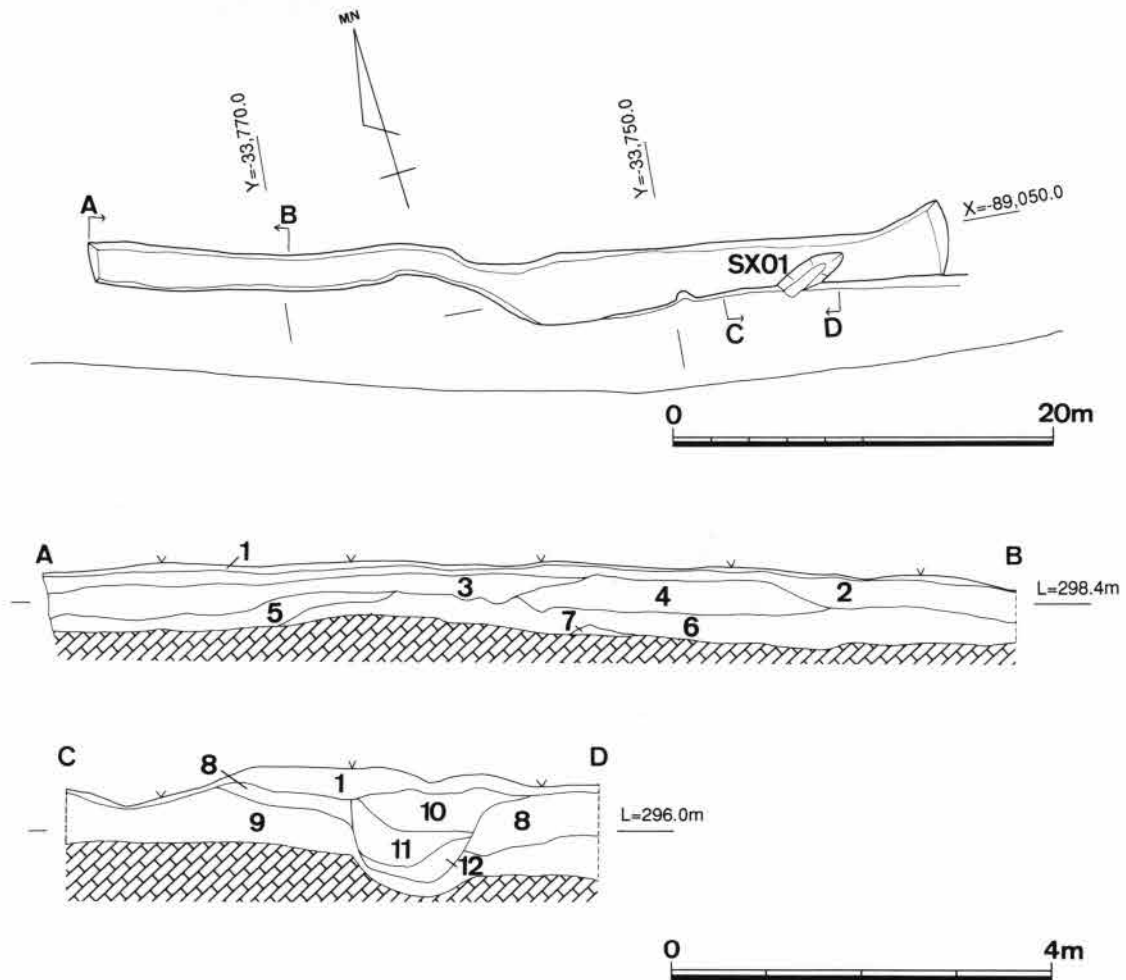
これらのことから、3号墳は、墳丘南側に直線的に配置された外護列石を持つ古墳であると推定され、これは、3号墳が方墳であった可能性を示すものでもあろう。また、3号墳の埋葬施設は、その主軸が外護列石と直交するなら、磁北から西に約10°振れたものであると推定される。

なお、この3号墳の調査に際しては、一点の遺物も検出しなかった。

(3)第3トレンチ

以前、付近の木材を伐採・搬出した際に、須恵器の壺が表土上で採集されている。このことから、4号墳の東側で、新たな古墳、遺構の存在の有無を確認するために設定したトレンチで、幅約2.2m・長さ約45mにわたって調査を行った。

調査地の西側約3/4については、表土直下に黄褐色・黒褐色の土層の堆積が確認されたのみで、遺構・遺物ともに検出しなかった。しかし、調査地の東端部で、断面に、溝ないし土坑の断



第76図 第3トレンチ平面図及び断面図

- | | | | | |
|--------------|-----------|-----------|----------|----------|
| 1. 表土 | 2. 暗茶褐色土 | 3. 黒茶褐色土 | 4. 黒灰褐色土 | 5. 明茶褐色土 |
| 6. 暗黄褐色土(礫混) | 7. 明黄灰褐色土 | 8. 暗黄灰褐色土 | 9. 黄灰褐色土 | 10. 黒褐色土 |
| 11. 暗黒灰褐色土 | 12. 暗黄褐色土 | | | |

面と考えられる落ち込みが確認され、また、表土直下で弥生土器の小片が出土したことから、この落ち込みをS X01として認識し、さらに調査地を東に約2 m拡張して調査を続けた。

調査の結果、S X01は、検出長約3.0m・最大幅約1.5m・深さ約0.8mを測る溝状の落ち込みであることが判明した。しかし、黒褐色から灰褐色を呈する埋土からは、1点の遺物も出土しておらず、その性格については不明である。また、S X01の東側では、表土直下で弥生土器の小片が20数点出土したが、新たな遺構は検出されなかった。

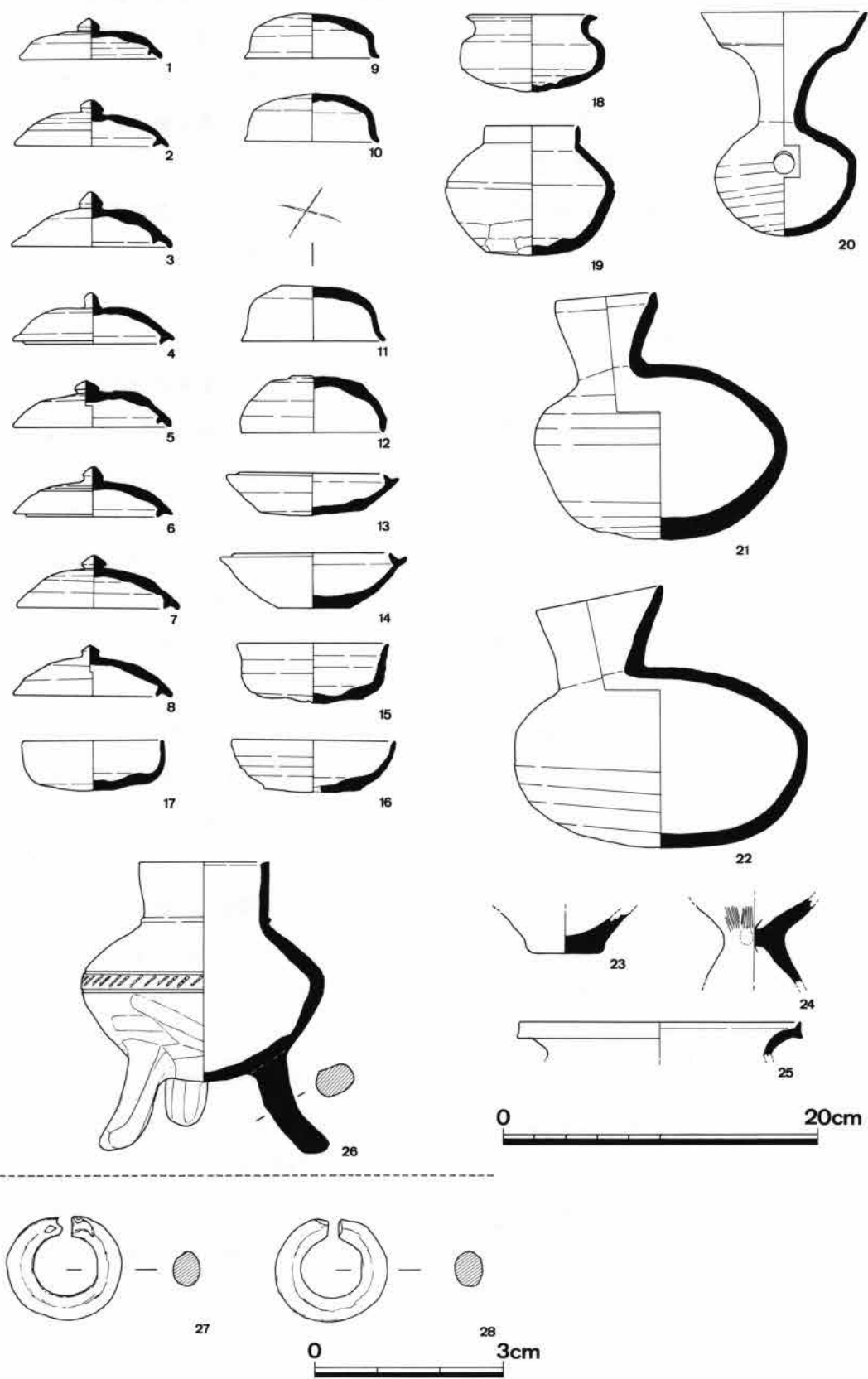
以上のことから、この地には、弥生時代の何らかの遺構があったことも想定されるが、付近は、近世に杉の植林がなされており、これによって、古代の遺構は削平されたと考えられる。

(4) 出土遺物

① 4号墳石室内出土遺物(1~22・26~34)

1~12は、蓋杯である。このうち1~8は、丸みのある天井部につまみをつけ、内面の口縁端部付近にかえりを有する。それぞれ口径9.3~10.4cm・器高2.8~3.4cmを測る。このなかで、4のつまみは、小さな円筒形状を呈し、いわゆる宝珠形ではない。また、この蓋のかえりについては、口縁端部よりも下方にのびている。6も同様に、わずかではあるが、かえりが端部より下方にのびている。また、7・8は、石室内中央部で検出したものだが、この二つの天井部外面には、朱で「凹」字状に何らかの符号らしきものが描かれていた。いずれも「凹」の底辺が約3.5cm、縦が約1.5cmで、「凹」のくぼみをつまみ側に向けている。文字ではなく、何らかの記号的な意味合いで描かれたものと思われるが、その性格は不明である。9~12は、つまみを持たない蓋である。それぞれの口径は、8.5~9.0cm、器高は、2.9~3.5cmである。この中で、9~11の端部は、わずかに外反する。11の天井部外面には、×状の線刻が見られる。また、9・10の天井部外面は、いねいに処理されているが、11・12の天井部外面には、ヘラ切りの痕跡が残される。12は、内外面ともに自然釉が残る。

13~17は、杯身である。13・14のかえりの立ち上がりは、短く内傾し、端部上面よりわずかに上方に出ている。13は、口径9.1cm・器高2.7cm、14は、口径9.9cm・器高3.6cmである。15~17は、口径8.2~9.6cm・器高3.3~3.8cmである。15・17は、底部から口縁部がほぼまっすぐに立ち上がるが、15の端部はやや外反気味である。16の口縁部は、内湾気味に立ち上がる。いずれも底部にヘラ切りの痕跡を残す。18・19は、短頸壺である。18は、丸みのある体部から短く外反する口頸部がつけられる。体部最大径9.2cm・口径7.2cm・器高5.0cmを測る。19は、算盤玉状の体部を持ち、口頸部はまっすぐに立ち上がる。体部中央には一条の凹線をめぐらしている。体部最大径10.8cm・口径6.0cm・器高8.1cmである。20は、甕である。ラッパ状に開く頸部に、外反せずに斜め上方にまっすぐに立ち上がる口縁部がつけられる。体部は、やや偏平な球体形を呈しており、中央部よりやや上方に、直径1.3cmの円孔が穿たれている。口径10.8cm・体部最大径8.9cm・器高14.1cmを測る。21・22は、平瓶である。いずれも、楕円球体状の体部の斜め上方に、端部が外側に開く円筒状の口頸部がつけられる。21は、口径6.3cm・体部径16.1cm・器高15.7cm、22は、口径8.5cm・体部径18.7cm・器高16.6cmを測る。26は、底部に三足を有する壺である。算盤玉状の



第77図 出土遺物実測図(1)

体部に、ほぼまっすぐに立ち上がる口頸部がつけられ、頸部基部から体部上半にかけては、自然釉が付着する。この自然釉の付着する状況と、体部上部には融着痕が認められることから、釣鐘状の蓋をつけて焼成したものと思われる。体部中央には二条の凹線をめぐらし、その間には、櫛描き列点文が施される。体部下半は、ヘラケズリの後ナデ調整がなされている。脚部下半は、踏ん張るように外反しており、安定感がある。脚部外面は、面取りをしながらいねいにナデられており、断面は隅丸方形になる。口径8.2cm・体部最大径15.5cm・器高18.5cmを測る。

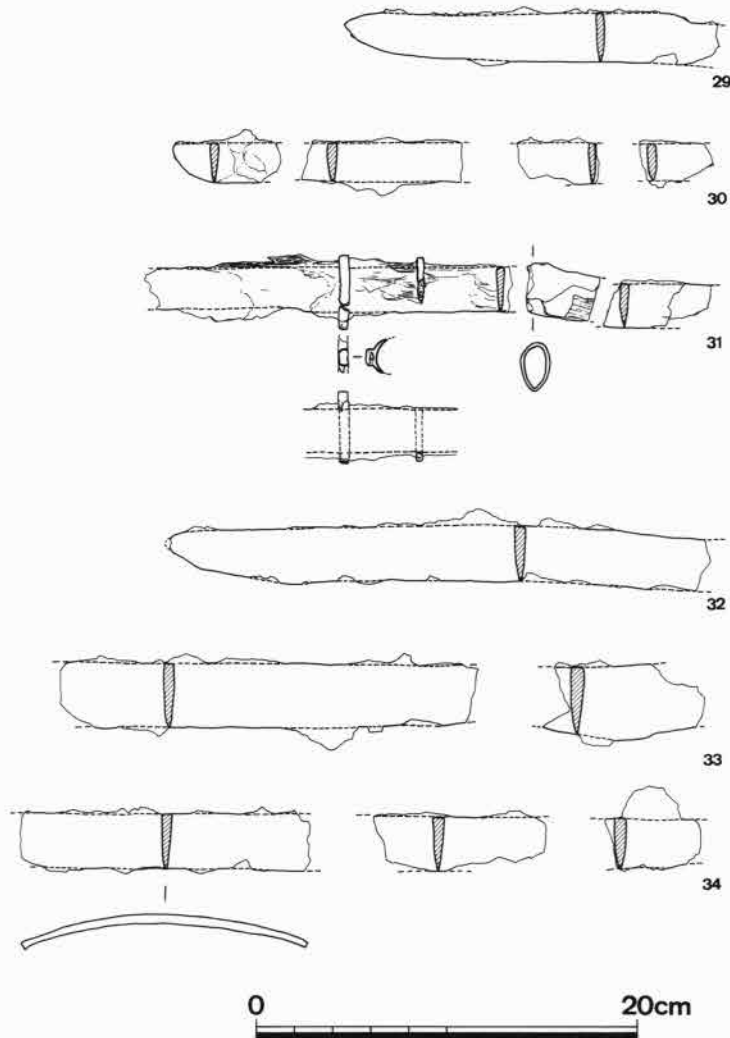
27・28は、金環である。いずれも長径6mm前後の楕円

形の断面で、銅に鍍金が施されており、長径1.8cm・短径1.6cmと同大である。どちらも緑青の吹き出しが見られたが、残存状況は良好であった。

29～34は、鉄製品である。同一の場所で取り上げたものを並べて図化した。接合関係は見いだせないものもあり、総个体数としては不明である。いずれも断面が「V」字状であり、刀であろう。この中で、31は、鞘の木質部を残しており、また、鞘の外周に鍍金を施した金具が2本残存していた。この金具のうちの一つの刃先側は、わずかに突出しており、そこには吊り金具に小さな穴が穿たれている。

②第3トレンチ出土遺物(23～25)

この調査地では、前述したように、弥生土器が出土しているが、いずれも小片で、また、磨滅・破損が激しく、図化できたのは、23～25の3点である。23は、壺の底部で、体部からやや突出する形態である。淡灰褐色を呈する胎土で、ナデが施される。底径は、4.3cmである。24は、器台である。淡灰黄褐色の胎土で、頸部の直径は、3.8cmである。杯部の外面には、ハケメが施されている。25は、甕の口縁部で、推定口径17.8cmである。淡茶褐色の胎土で、胎土中には、径



第78図 出土遺物実測図(2)

5mmほどの砂粒も含まれる。やや湾曲して外反しており、端部をつまみ上げて面を作り出している。内外面ともにナデが施されている。また、外面には、煤の付着が認められる。いずれも、V様式の後半に位置づけられるものであろう。

4. ま と め

以上が、今回の発掘調査の概略である。最後に、調査によって得られた成果について、整理し、まとめとしておきたい。

今回の調査によって、4号墳は、無袖式の横穴式石室を内部主体とし、直径約13.0mの墳丘を持つ円墳であることが判明した。また、石室内から出土した土器は、およそ飛鳥Ⅱ型式に比定されると考えられることから、7世紀の前半にこの古墳は築造され、葬送がなされたと推定されるが、追葬の有無については、明確になしえない。後世の盗掘などにより、一定量の遺物は持ち去られたと考えられ、この古墳の被葬者像は明確にはなしえないが、今回出土した遺物の中に三足壺という、全国的にも珍しい資料が含まれていたことや、推定される墳丘の規模から、鳥谷古墳群の中で、4号墳がその中心的な古墳であったのではないかと推定される。同時に、三足壺は、渡来系氏族との関係のある遺物と考える説もあり、今後、京北町の古代史を考える際に、貴重な資料となると思われる^(注4)。

3号墳については、今回、墳丘裾部の一部を調査したのみであるが、直線的に配置された外護列石を検出したことから、この古墳は、方墳であった可能性を提起することとなった。

また、3号墳・4号墳以外には、今回の調査では、新たな古墳は検出しなかったが、第3トレンチで弥生土器の破片が出土したことから、この付近では、弥生時代からすでに、人々の何らかの営みがあったことが推定される。調査地から数百m東方には、弥生時代の住居跡などが検出されている、上中遺跡も所在しており、これとの関連も含めて、さらに検討を要する。今後、付近での調査成果の蓄積により、解明されることを待ちたい。

(竹下士郎)

注1 市野千代子、太田一夫、太田秀子、古屋宗四郎、西村康夫、間嶋文子、保田寛一、吉田 敏、芦生清、大前キミ代、筒井春美、田尻茂夫、田中良蔵、西沢義貞、山田恵子、西川真介、荻野富紗子、関野雅子、尾上 忍、陸田初代、松崎才枝、松下道子

注2 奥村清一郎「愛宕山古墳発掘調査概要」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 京北町教育委員会) 1983

注3 岡内三眞・宇野隆夫他『周山瓦窯発掘調査報告書』 京都大学考古学研究室・京北町教育委員会 1982

注4 松居良晃「岐阜県不破郡垂井町綾戸古墳出土特殊須恵器(三足壺)について」(『大垣市文化財調査報告書』第16集 大垣市教育委員会 1990年)によると、国内でこれまでに13例の出土例があること、その中で、福岡県、岐阜県に出土例が多く、器形にも地域性が認められること、また各出土地には、渡来系集団が居住していたことが想定されるなどとしている。この論考によるなら、今回出土した三足壺は、算盤玉状の体部を呈しており、福岡型に当てはまるであろう。

6. 太田遺跡第5次発掘調査概要

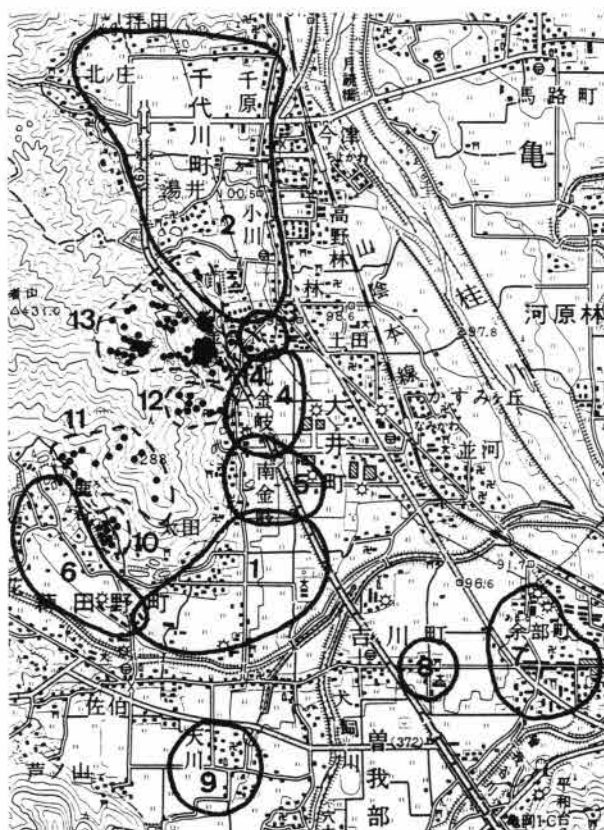
1. はじめに

太田遺跡は、亀岡市葎田野町太田ほかに所在する。亀岡盆地西側の行者山麓部に東西1,400m・南北600mにわたって広がる弥生時代前期から中世の大規模な複合遺跡である。

調査地周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が存在している。北方には千代川^(注1)遺跡、北金岐^(注2)遺跡、南金岐^(注3)遺跡、北金岐古墳群^(注4)、小金岐古墳群^(注5)、西方には古墳時代の竪穴式住居跡が多数検出された鹿谷^(注4)遺跡、鹿谷古墳群、東方では弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての大規模な墓域や集落、弥生時代中期後半の玉作り工房や朝鮮半島との関係が注目される鉄鋌が出土した余部^(注5)遺跡などがある。

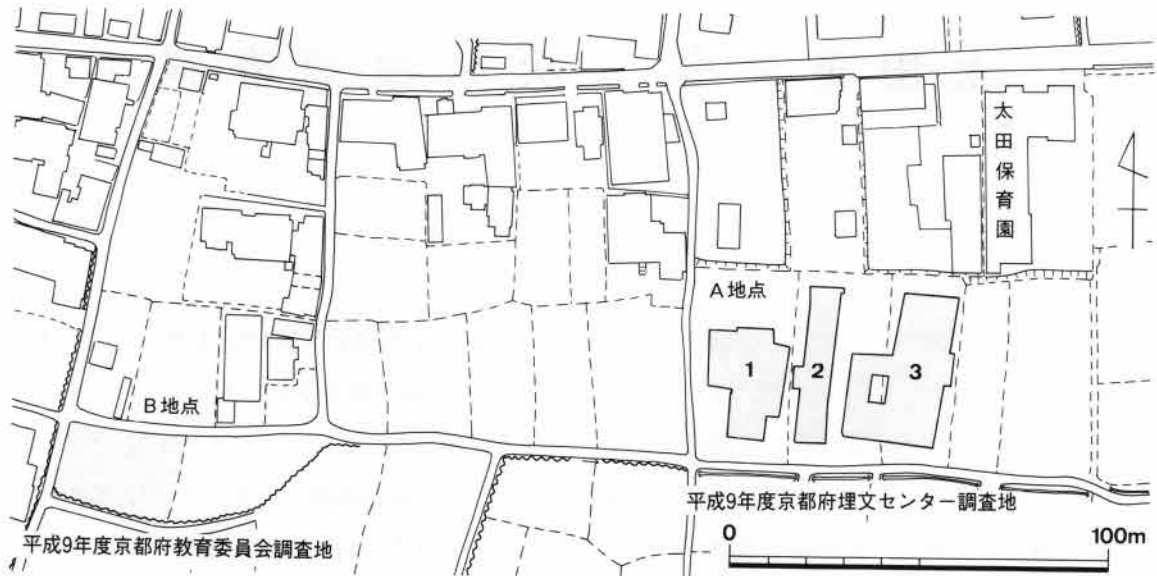
太田遺跡は、過去4次にわたる発掘調査が実施されている。京都縦貫道建設に伴い昭和57年度に当調査研究センターが実施した太田遺跡第1次調査^(注6)では、弥生時代前期～中期の直径約160m以上と考えられる環濠集落が検出されている。

第2次調査は、平成7年度に府営公害防除特別土地改良事業に伴う事前の試掘調査が、亀岡市教育委員会により実施された^(注7)。第3次調査は、平成8年度に府営公害防除特別土地改良事業に伴う事前の試掘調査が、京都府教育委員会により実施された^(注8)。この2度にわたる試掘調査の結果、弥生時代～中世の集落跡の範囲を想定させる成果が得られている。第4次調査は、第2・3次調査の成果を受けて、平成10年度の府営公害防除特別土地改良事業に伴う事前の調査が、平成9年度に京都府教育委員会により実施された(B地区)。ここは、今回の調査地(A地区)から西方150mのところであり、13世紀中頃を中心とした掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑などの遺構とともに、瓦器、土師器、須恵器、青磁、木製品(板材と曲物)などの遺物が出土している。このような結果を受け、京都府教育委員会の事前の試掘調査結果をもとに、調査トレンチを3か所に設けた。調査は、府営ほ場整備事業

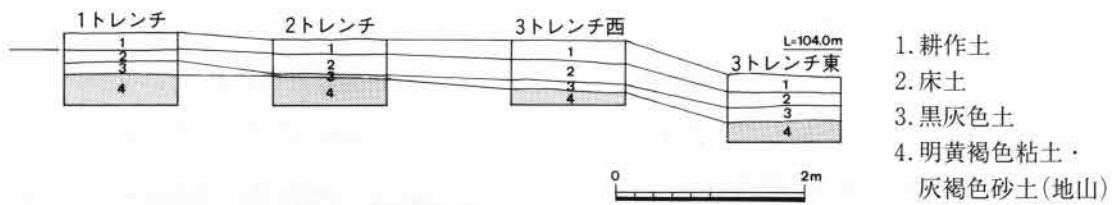


第79図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

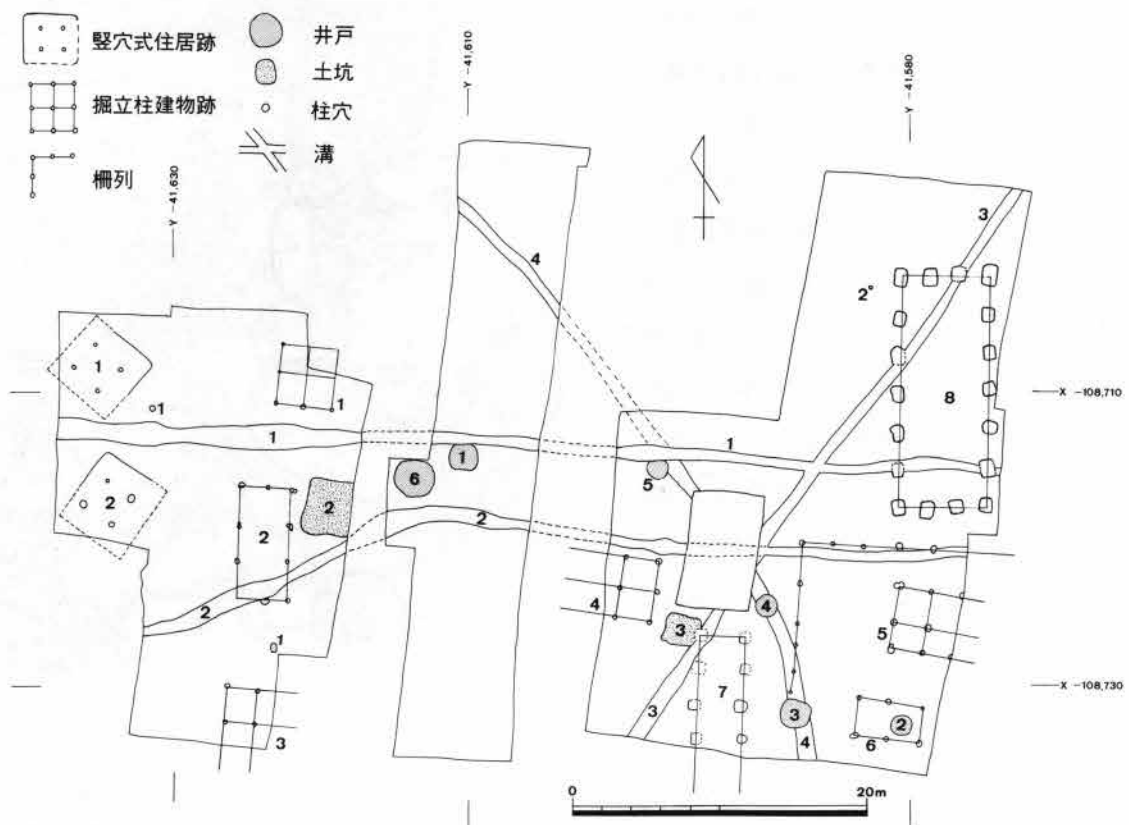
- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1. 太田遺跡 | 2. 千代川遺跡 | 3. 馬場ヶ崎遺跡 |
| 4. 北金岐遺跡 | 5. 南金岐遺跡 | 6. 鹿谷遺跡 |
| 7. 余部遺跡 | 8. 吉川遺跡 | 9. 天川遺跡 |
| 10. 鹿谷池田古墳群 | 11. 鹿谷古墳群 | 12. 北金岐古墳群 |
| 13. 小金岐古墳群 | 14. 馬場ヶ崎古墳群 | |



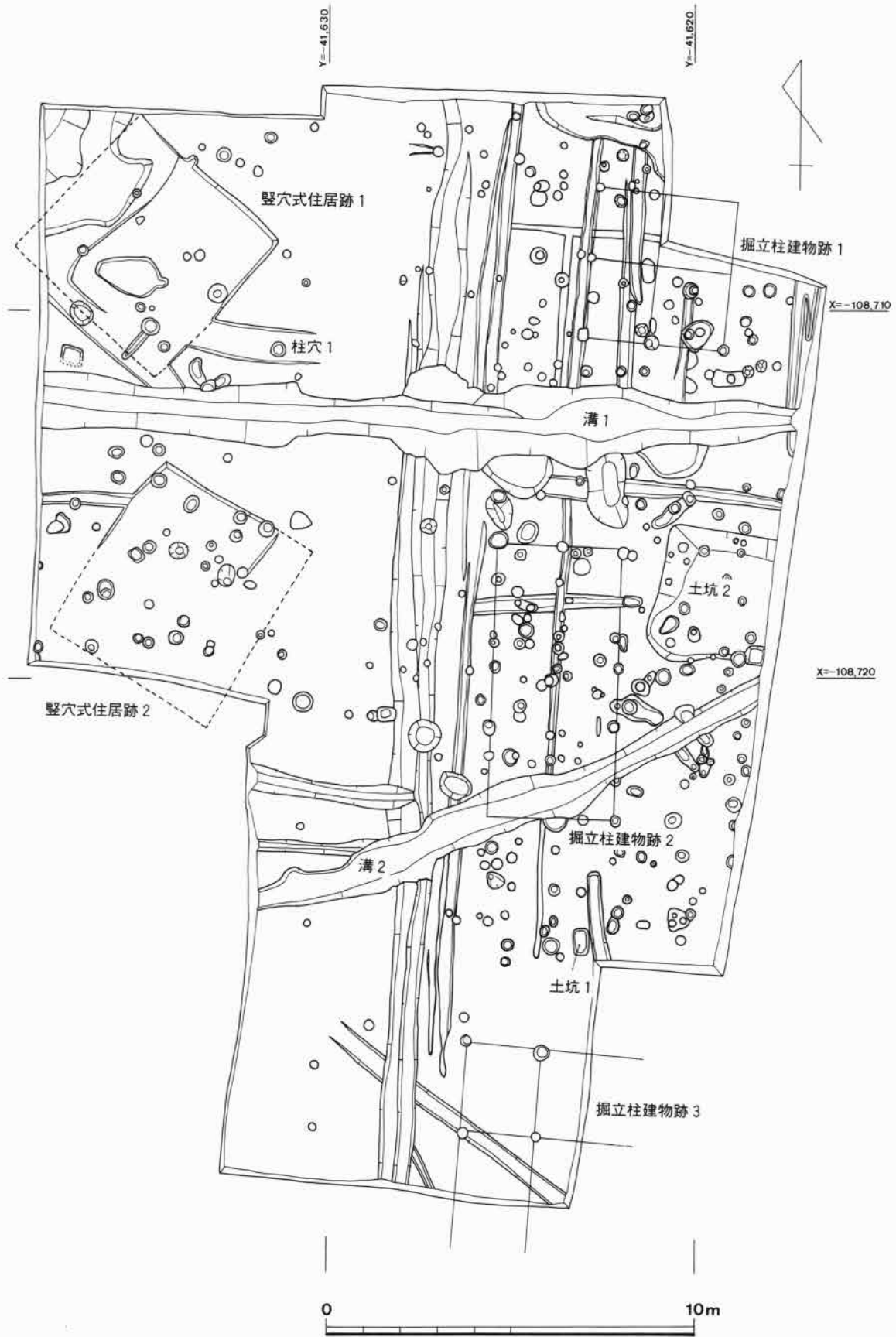
第80図 トレンチ配置図



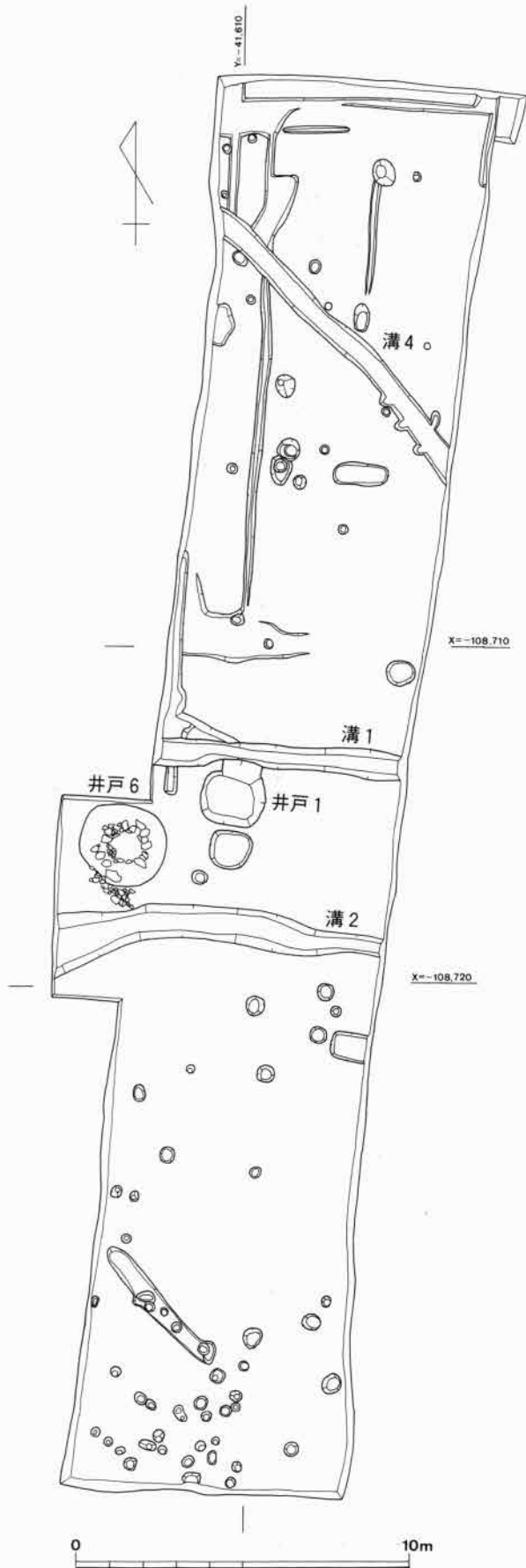
第81図 基本土層図



第82図 遺構配置図



第83図 第1トレンチ遺構配置図



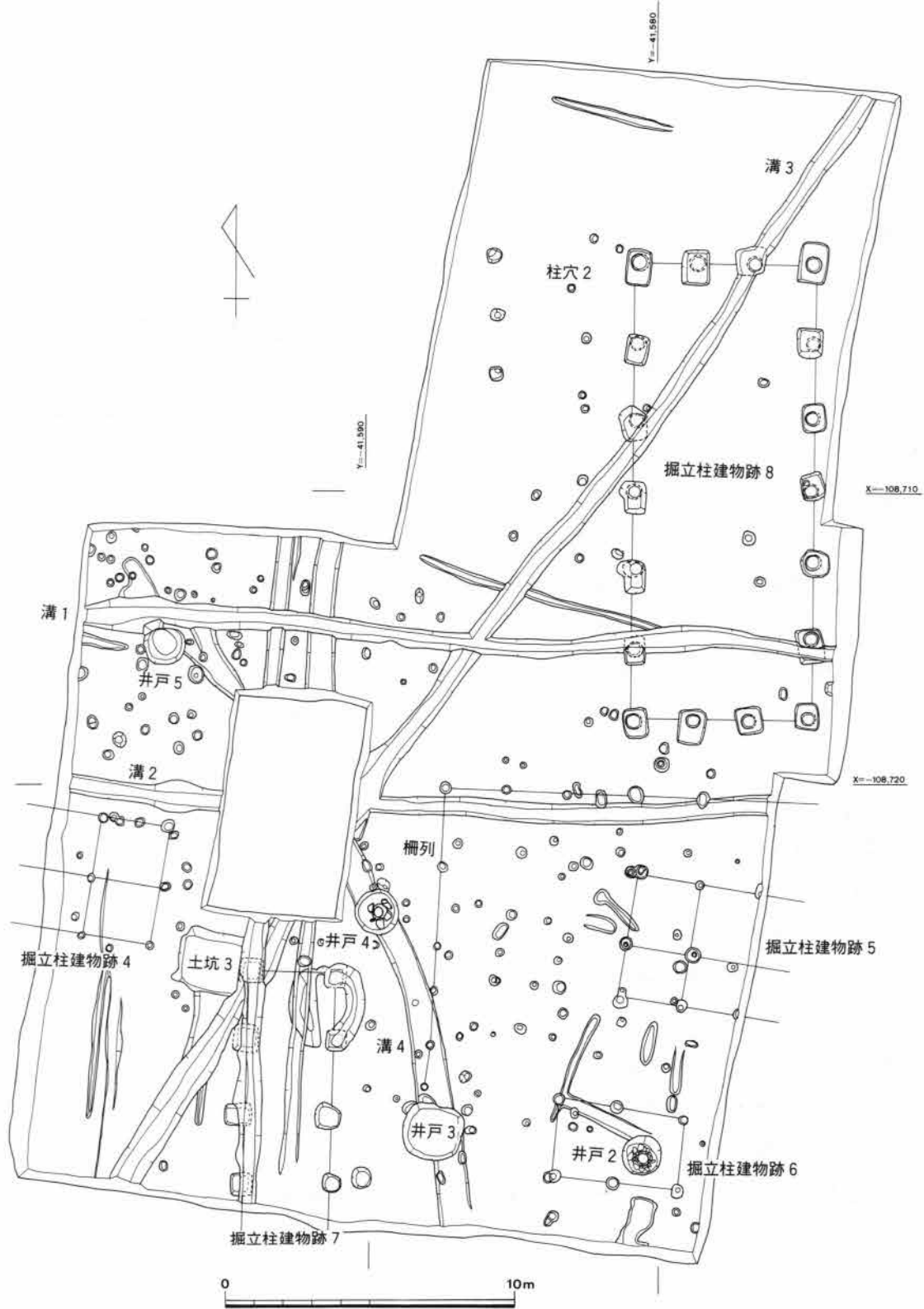
第84図 第2トレンチ遺構配置図

に先立ち、京都府亀岡土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

現地調査は、調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員増田孝彦、同主査調査員岡崎研一が担当し、平成9年10月29日～平成10年3月3日まで実施した。現地説明会は、平成10年2月24日に行った。調査面積は約1,700㎡である。調査時の空中写真撮影及び図化作業は株式会社イビソクに委託した。また、整理及び執筆は増田・岡崎が行った。写真は、遺構を増田・岡崎が、遺物を調査第1課主任調査員田中 彰が撮影した。調査期間中は京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、地元住民の方がたをはじめ、調査補助員、整理員の協力をいただいた。記して感謝する。^(注9)

2. 調査概要

京都府教育委員会の事前の試掘調査結果をもとに、調査トレンチを3か所設置した(第80図)。調査は、重機により耕作土・床土を除去することからはじめた。その後、遺物包含層である黒灰色土を人力で掘削・精査を行ったが、遺構は検出されなかった。遺構は、地山直上で検出しており、黒灰色土を埋土とする。基本層序は、上から耕作土、床土、黒灰色土、地山の順であり、地山は場所によって明黄褐色粘土、灰褐色砂土であったりする(第81図)。湧水層が高く、地山が砂土であることから、常時水中ポンプで排水を行いながら調査を実施した。調査地全体が北西から南西へゆるい傾斜をもっている。開墾に伴う削平度合いは、北西側ほど高く、南西側は整地層である遺物包含層(黒灰色土)が厚く堆積していた。



第85図 第3トレンチ遺構配置図

検出された遺構には、竪穴式住居跡2基、掘立柱建物跡8棟以上、柱穴700、井戸6基、土坑2基、溝45条などがある。南北方向に多くのびる溝は14世紀以降の耕作や区画に伴うものと考えられる。以下、検出された遺構の概略を記す。

(1) 弥生時代～奈良時代

① 検出遺構

弥生時代の遺物としては、1・3トレンチ北端付近から小片化した土器が出土しているが、遺構として確認されたものは柱穴にすぎない(柱穴1・2)。柱穴1(第83図、図版第58)から

は、掘形中位からほぼ完形の壺が出土した。柱穴2(第85図、図版第55)からは、高杯脚部が出土した。周辺に柱穴が存在するが、建物跡として特定できなかった。

古墳時代の遺構は、1トレンチ西側拡張部で竪穴式住居跡2基を検出した。いずれも中世以降の遺構によって削平されており、残存状況はよくない。

竪穴式住居跡1(第86図、図版第52) 一辺約5mの規模が復原される。検出面から深さ約0.2mを測る方形の竪穴式住居跡である。方位は、N-40.5°-Eである。周壁溝は、認められなかった。主柱穴は、直径28~34cm・深さ42~50cmを測る。西側は、後世の攪乱及び流路状の遺構で削平される。遺物として、床面で須恵器有蓋高杯・甕、土師器甕片が出土した。

竪穴式住居跡2 竪穴式住居跡1の南側に位置し、一辺約5mの規模が復原される。検出面からの深さは約0.1mで方形を呈する。方位は、N-34.5°-Eである。周壁溝は、認められなかった。主柱穴は、直径26~50cm・深さ22~30cmを測る。南側は削平を受け、ほとんど存在しない。

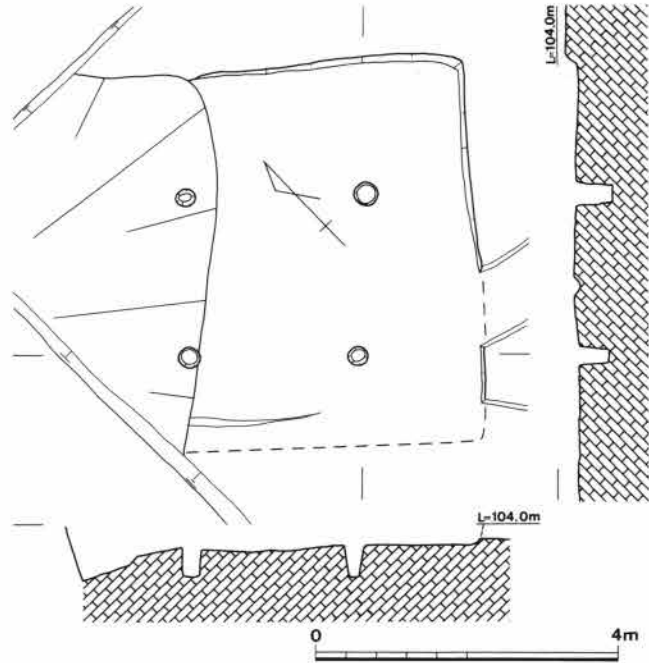
遺物としては、竪穴式住居跡の床面で細片化した須恵器・土師器が出土している。竪穴式住居跡1と近接し、同方向に造られていることから、同時期のものと考えられる。

② 出土遺物(第87図、図版第62)

1~5は竪穴式住居跡1検出面、13は床面から出土した。11・12・14・15は、竪穴式住居跡1の周辺や西側の攪乱から出土した。6は柱穴1から、7~10は柱穴2から出土した。

弥生土器甕2~5 2~5は、弥生時代後期のものである。底部から外上方に立ち上がり、体部上半部では湾曲して口縁部に至る。口縁部は「く」字状に屈曲する。体部外面にはハケ目が施され、底部外面は叩いている。口縁部内面にはハケ目が残り、体部内面をヘラ削りする。1は、古墳時代の土師器で13と同時期と思われる。

弥生土器壺6・7 6は、球状の体部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。底部は平坦で、



第86図 竪穴式住居跡1実測図

その径は小さい。体部は、半ばがやや張り、口縁端部は「S」字に屈曲している。底部から口縁部にかけて外面はヘラ磨きしており、ていねいな作りである。7は、外面に4条の擬凹線がめぐり、弥生時代後期後半の土器である。

弥生土器器台 8~10 ラッパ状に開く脚部と、大きく横方向に開く杯部からなる。脚部には、円形の透かしが3か所に施される。外面にはヘラ磨きが密に施され、脚端部内面にはハケ目が残る。弥生時代後期後半に比定される。

須恵器杯蓋 11 ほぼ平坦な天井部から内湾しながら外下方に降り、口縁部は下方を向く。端部は尖る。天井部外面はヘラ削りを施す。

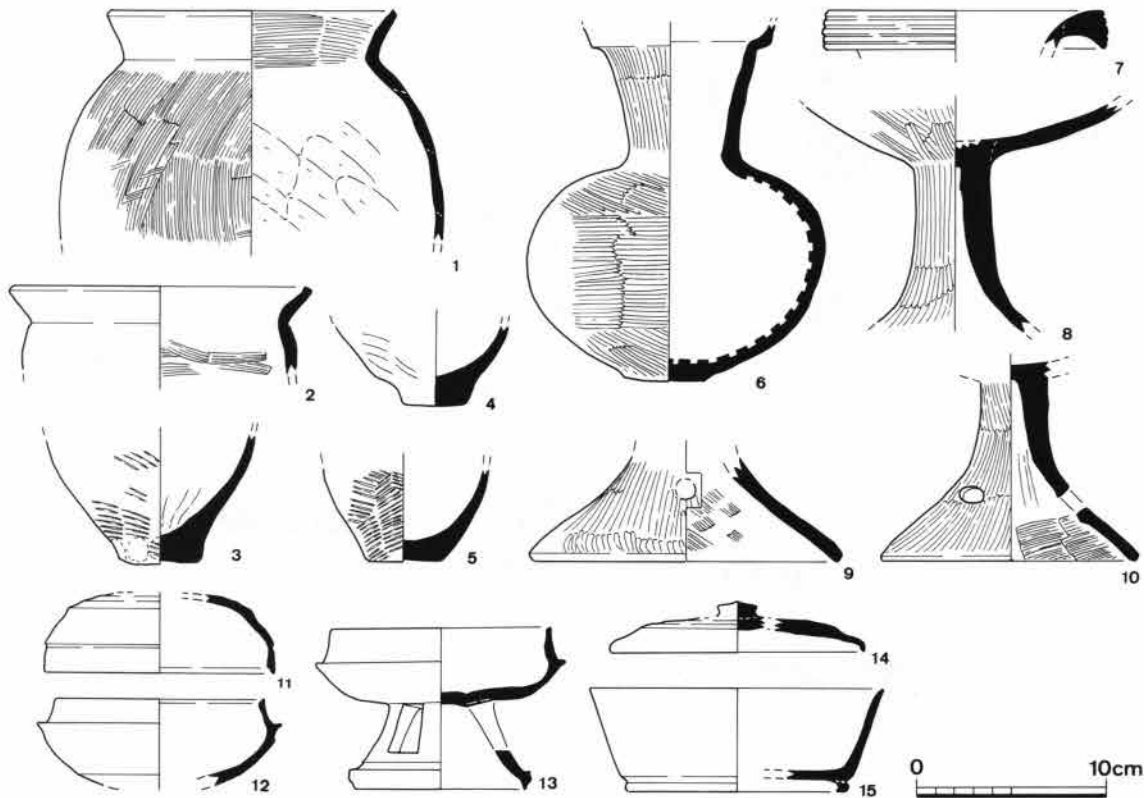
須恵器杯身 12 底部から内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部は内上方に立ち上がる。底部外面はヘラ削りを施す。

須恵器有蓋高杯 13 「ハ」字状に開く底部と杯部からなる。脚部には、長方形の透かしが3か所に施される。脚端部は下方に尖る。杯部口縁部は、上方に立ち上がり、前述の杯蓋・杯身よりも古い形態を示す。形態から高杯はTK10、杯蓋・杯身はTK43併行期に相当するものと思われる。

須恵器蓋 14 つまみと蓋本体は、別個体のものである。平坦な天井部から屈曲して下方に尖る口縁部からなる。天井部には、宝珠つまみが付く。ロクロナデ成形で形作っている。

須恵器杯 15 輪状高台をめぐらす杯である。平坦な底部と外上方にまっすぐ立ち上がる体部からなる。口縁端部は尖る。蓋14・杯15は、その形態から8世紀末の土器と思われる。

そのほか、図化できなかったが、布目瓦の破片が5点ほど出土している。



第87図 出土遺物実測図(1)

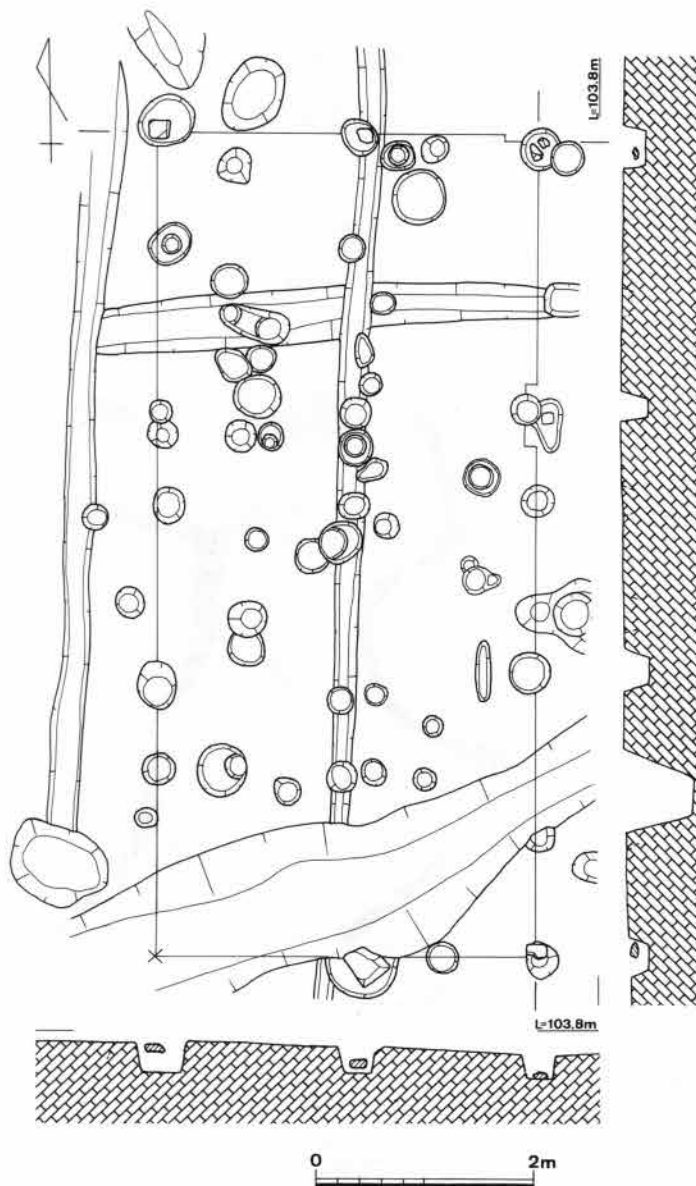
(1)鎌倉時代

①検出遺構

遺構として検出されたものには、掘立柱建物跡8・井戸6・溝45・土坑3がある。掘立柱建物跡の多くは、南北方向に主軸を置く傾向が認められた。

掘立柱建物跡1 (第83図、図版第51) 1トレンチ北端で検出した建物跡である。2間(約4.1m)×2間(約3.85m)の南北棟の総柱建物跡と考えられる。柱間寸法は、南北約2.2m・約1.9m、東西約1.85m・約2.0mと間隔を異にする。柱穴は、直径0.3~0.4mの円形あるいは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さ0.36~0.41mを測る。方位はN-5.5°-Eである。

掘立柱建物跡2 (第88図、図版第51) 1トレンチ中央部で検出したもので、南辺の一部が道路南側溝と切り合う、2間(約3.5m)×3間(約7.4m)の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行が約2.4m・約2.6m、梁間が約1.8m・約1.7mと間隔が異なり、東辺中央の柱間が若干ずれる。



第88図 掘立柱建物跡2実測図

る。柱の掘形は、直径0.2~0.7m・深さ0.2~0.3mを測る。梁間側の柱穴には、根石や柱の固定に石材が用いられている。方位はN-1°-Eである。

掘立柱建物跡3 (第83図) 1トレンチ南側で検出したもので、規模は1間(約2.1m)以上×1間(約2.4m)以上を測る。ほかの建物跡の柱間から考えると梁間が短くなっており、南北棟の総柱建物跡と思われる。方位はN-4.5°-Eである。柱穴は、直径0.3~0.45m・深さ0.12~0.22mを測る。建物跡の方向は、掘立柱建物跡1・2と同一線上に並んでおり、同時期の可能性がある。

掘立柱建物跡4 (第85図、図版第54) 3トレンチ西側で検出したもので、東西棟の総柱建物跡と思われる。方位はN-9°-Eである。確認規模は、2間(約4.1m)×1間(約2.4m)以上を測る。柱間寸法は、桁行が約2.2m、梁

間が約2.0m・約2.1mと間隔が異なる。掘形は、直径0.28~0.48m・深さ0.16~0.2mを測る。

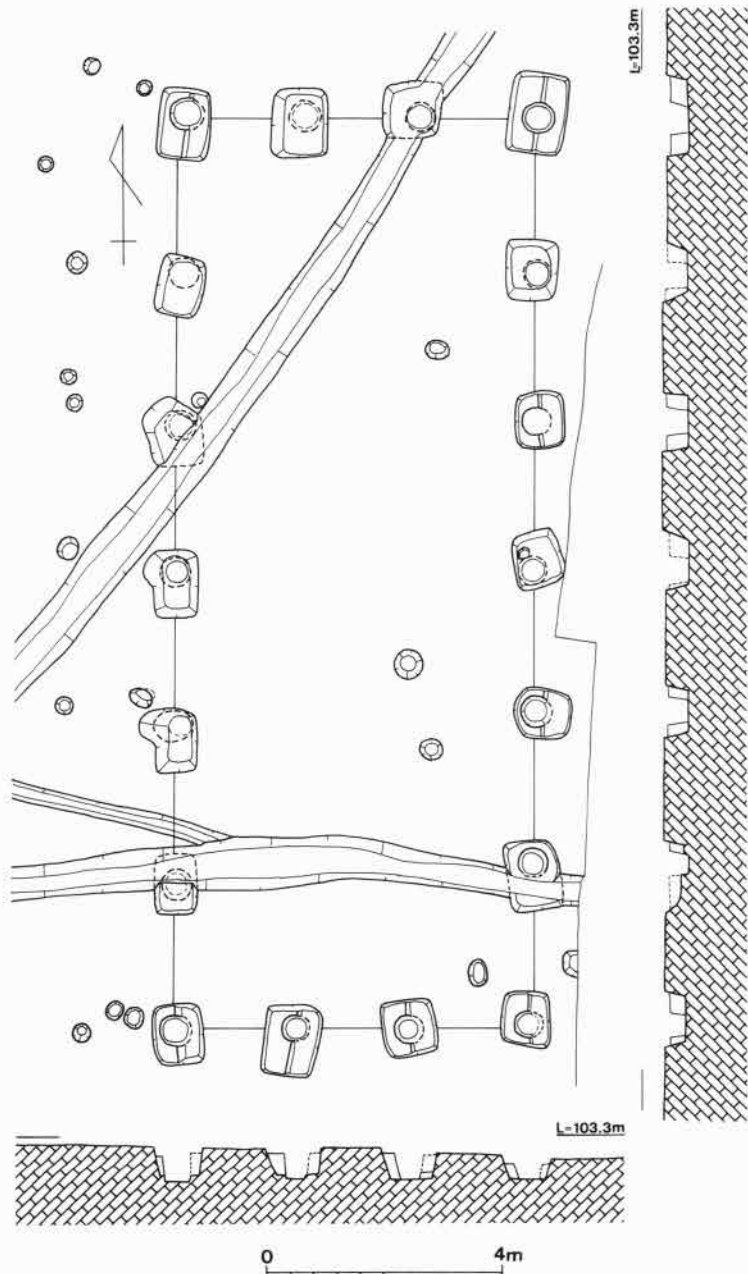
掘立柱建物跡 5 (第85図、図版第59) 3トレンチ西側で検出した2間(約4.35m)×2間(約4.4m)以上の東西棟建物跡。方位はN-10°-Eである。柱間寸法は、桁行が約2.2m、梁間が約1.85m・約2.5mと間隔が異なる。掘形は、直径0.3~0.57m、検出面からの深さ0.35~0.4mを測る。

掘立柱建物跡 6 (第85図、図版第59) 3トレンチ南側から検出した東西棟の建物跡で、井戸2の覆い屋と考えられる。1間(約2.7m)×2間(約4.4m)の東西棟建物跡で、方位はN-5.5°-Eである。柱間寸法は、東辺が約2.45m・西辺が約2.7m、桁行が約2.1m・約2.3mと間隔が異なる。掘形は、直径0.32~0.45m、遺構検出面からの深さ0.3~0.38mを測る。

掘立柱建物跡 7 (第85図、図版第59) 3トレンチ南端中央部で検出した南北棟建物跡である。1間(約3.0m)×3間(約5.2m)以上約3m・南北約2.4mの等間隔を測る。検出面からの深さは0.2~0.28mを測る。東辺北側の柱穴2か所は溝によって削平される。

掘立柱建物跡 8 (第89図、図版第54・55) 3トレンチ北側で検出した大型掘立柱建物跡で、3間(約6.3m)×6間(約15.6m)を測る南北棟建物跡で、方位は真北を向く。柱間寸法は桁行が約2.6m、梁間が約2.1mの等間隔を測る。掘形は、一辺約0.9mの方形のものと、短辺0.7~1m・長辺1~1.3mの長方形をなすものがある。遺構検出面からの深さは、ともに0.4~0.65mを測る。建物跡の四隅の柱穴は大きい。柱穴内の埋土中から弥生時代後期の土器に混じって瓦器椀片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

以上の掘立柱建物跡のうち、掘立柱建物跡8と同方向の掘立柱建物跡2・7は、同時期のものと思われ、出土遺物から鎌倉時代中期頃に比定される。

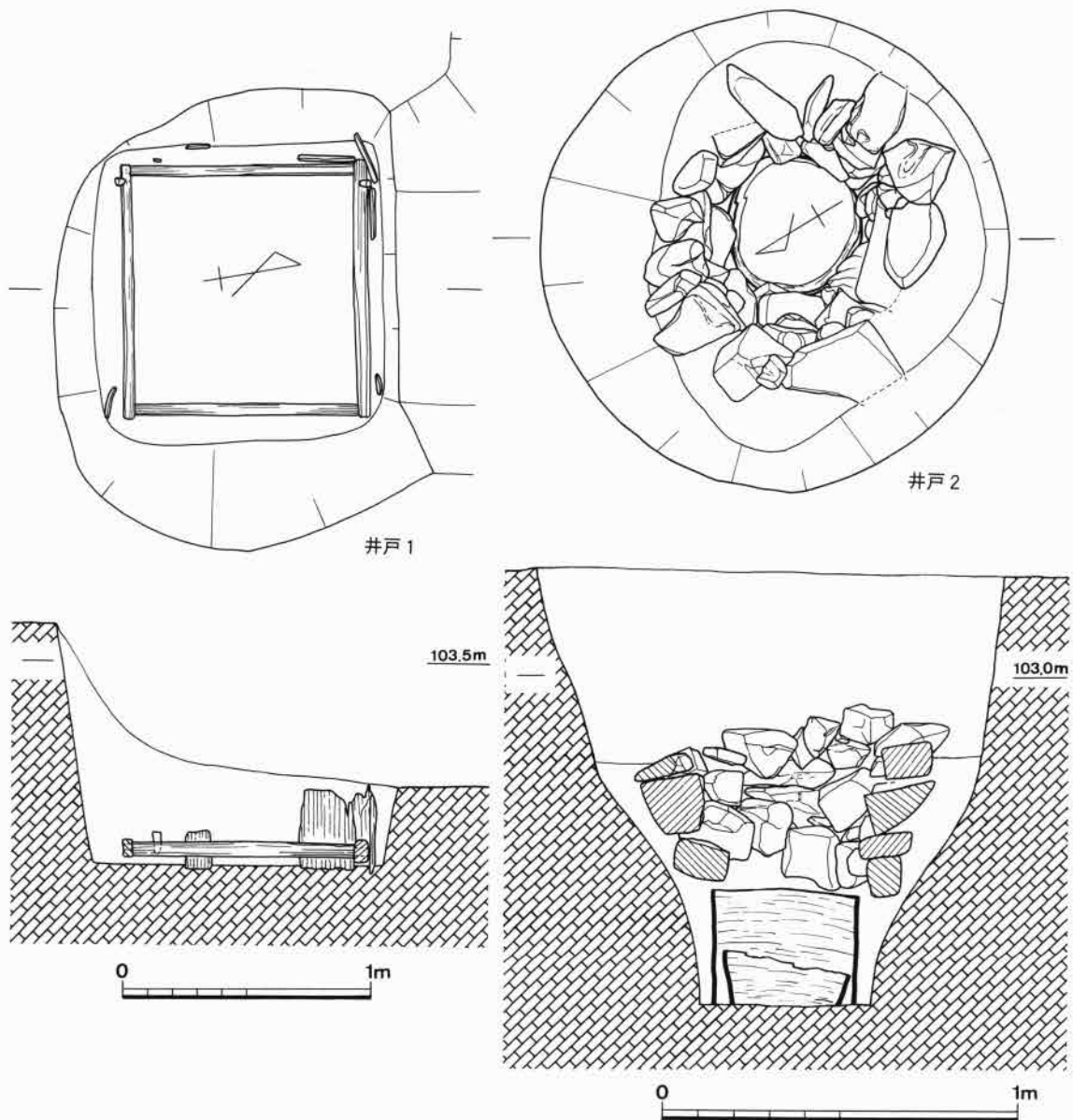


第89図 掘立柱建物跡8実測図

柵列(第85図、図版第53) 3トレンチ中央部分で検出した南北約8.05m・東西9m以上を測る鍵状の柵列である。方位は、 $N-3^{\circ}-E$ である。南北・東西方向は、掘立柱建物跡7・8にはほぼ平行し、柵列の内側に当たる掘立柱建物跡5・6は平行しない。

溝 南北・東西・北西～南東・南西～北東方向にのびる溝を45条検出した。このうち、南北方向にのびる素掘り溝は現在の畦畔と同じ方向で、大半が耕作痕跡や区画に伴うと考えられる。出土遺物から、鎌倉時代後期に掘削されたものである。方向などから条里制地割りの基準に合わせられたとも考えられる。

トレンチに対して 45° 方向にのびる溝3・4は、現在の畦畔になる以前の集落内の水路であった可能性がある。溝3は、後述する道路遺構北溝1・南溝2と深さ・幅とも大差ない。注目されるのは、各トレンチの中央部分を東西にのびる幅約0.7m・深さ約0.7m前後の2条の溝で、この



第90図 井戸1・2実測図

両溝間は、各トレンチとも平均約5mの幅を持っている。3トレンチ～2トレンチまではほぼ直線的にのびてきた二つの溝のうち、北側溝1は1トレンチ端まで直線的に続くが、南側溝2は1・2トレンチ間でその方向を南南西に転じている。形態からみると、この二つの溝は道路に伴う側溝と考えられ、出土遺物から鎌倉時代前期と考えられる。また、1トレンチで南側溝2が方向を転じる部分は、「Y」字状に分岐する交差点であった可能性がある。

3トレンチで検出した大型建物跡は、道路遺構が機能を終えた後に建てられている。この大型建物跡の方向も道路遺構とは異なっており、他にも何棟かは同じ方向の建物跡があるので、今後これらの建物跡の配置がどのような状況であったのか、また、その時期や性格を明らかにしたいと考えている。道路遺構と平行する建物跡は、道路遺構と同時期と考えられるが、道路上に建つものはそれ以前の建物跡と推定される。道路遺構・溝1・溝2と溝3の前後関係は、出土遺物、切り合い関係からも明らかではない。

確認された建物跡は、1・3トレンチの南東端の遺物包含層中から鍛冶滓や少量の鉄製品が出土していることから、鍛冶工房(鍛冶生産)に伴う建物跡の可能性もある。また、柱穴内の根石や土坑に見られる熱を受けた痕跡のある石材は、鍛冶生産に伴う石材であったものを再利用、放棄されたとも思われる。

井戸 2トレンチで方形石組み井戸1基、方形木枠組み井戸1基、3トレンチで円形石組み井戸2基・方形木枠組み井戸1基・素掘り井戸1基を検出した。

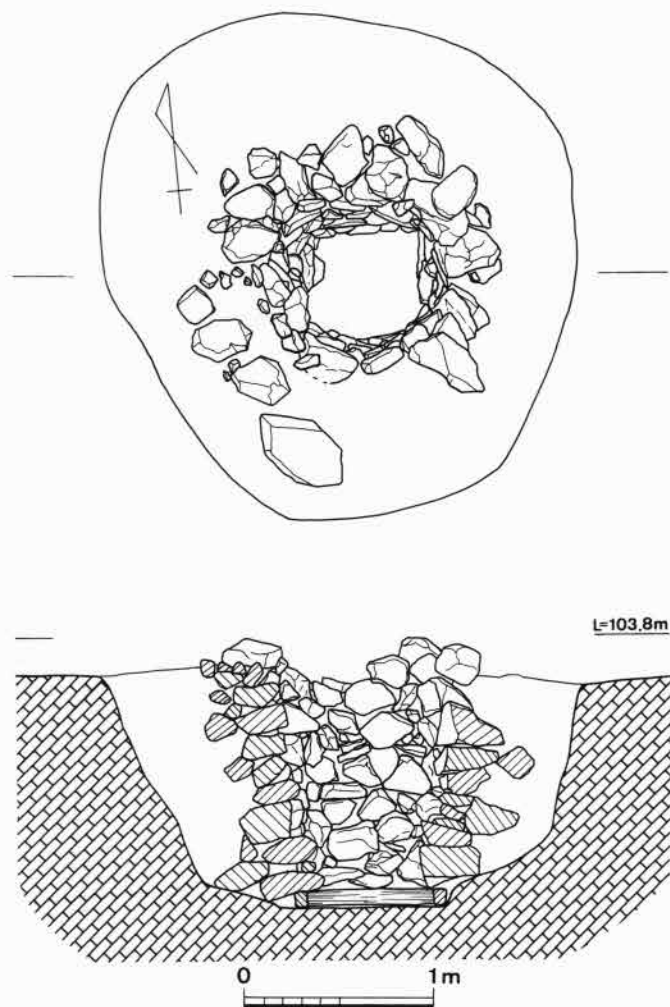
井戸1(第90図、図版第56) 2トレンチ中央部で検出した方形木枠組み井戸である。掘形は、長径約1.85mの楕円形を呈し、深さ約0.9mを測る。底面で木枠組みを検出した。木枠は、四隅に5cm×8cmの角材を据え、横木との接合は柄により組み合わせ、1m四方の木枠としている。側材は、幅25～30cmの薄い板材を4枚組み合わせていたと推定される。

井戸2(第90図、図版第59) 3トレンチ掘立柱建物跡6で検出した円形石組み井戸である。掘形直径は約1.4m、石組みの内径は約0.6m、検出面からの深さ約1.4mを測り、井戸底部では二重に重ねた、高さ約40cmの曲物を検出した。石組みは曲物を設置し、裏込めした後、その上から石材を積み上げたもので、高さ約0.6mが残存する。内部から瓦器・土師器・陶器が出土した。

井戸3(第85図、図版第56) 3トレンチの南端で検出した方形木枠組み井戸である。掘形は、約1.8m×約2mの方形を呈し、深さ約1.4mを測る。底面で木枠組みを検出した。木枠は、四隅に約6cm×約10cmの角材を据え、横木との接合は柄により組み合わせ、1m四方の木枠としている。側材は、幅25～30cmの薄い板材を4枚組み合わせていたと推定される。出土遺物には、須恵器・黒色土器・土師器がある。

井戸4(第85図、図版第56) 3トレンチ掘立柱建物跡7の北東側で検出した円形石組み井戸である。掘形直径は約1.4m、石組みの内径が約0.5m、検出面からの深さ約0.8mを測る。井戸の底部で高さ約23cmの曲物を検出した。石組みは、曲物を設置し、裏込めをした後、その上部から石材を積み上げたもので、高さ約0.25mが残存していた。出土遺物には瓦器・土師器がある。

井戸5(第85図、図版第57) 3トレンチ掘立柱建物跡4の北側で検出した円形素掘り井戸であ



第91図 井戸6実測図

る。北側は、道路北側側溝により削られる。掘形直径は約1.45m、検出面から深さは約1.1mを測る。出土遺物には、須恵器・土師器がある。

井戸6(第91図、図版第57) 2トレンチ井戸1の西側で検出した円形石組み井戸である。掘形は、長径約2.65mの楕円形をなし、石組みの内径約0.6m、検出面から深さが約1.4mを測る。石組み底面には胴木が検出された。胴木は、四隅に約7cm×約8cmの角材を据え、横木との接合は柵により組み合わせて、0.8m四方の木枠としている。石組みはこの胴木の上から積まれるが、底面は方形で、上方に向かって徐々に円形になるように積み上げている。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・陶器・下駄がある。

出土遺物からすると、井戸1・3・5は平安時代後期、井戸2は鎌

倉時代前期、井戸4・6は鎌倉時代中期頃のものと考えられ、時代を追って築造方法が異なる。

土坑1(第83図、図版第58) 1トレンチ東側拡張部の道路上遺構の中央部で検出したもので、一辺約2.8m・深さ約0.3mを測る。内部中央部を中心に拳大~人頭大の川原石や山石が多く混入する。これらの石材は、規則性もなく部分的に焼けた石も認められた。内部から多量の瓦器・土師器皿に混じって黒色土器・須恵器・陶器片が出土した。

土坑2(第83図、図版第58) 掘立柱建物跡3の北側で検出した。検出した規模は、西辺約3.8m・北辺約3m・深さ約0.22mを測り、底面で瓦器椀が完形で出土している。

土坑3(第85図、図版第59) 3トレンチ東側拡張部で検出したもので、東辺側を近世以降の溝によって削平されている。残存する規模は、西辺約2.0m・北辺約2.1m・深さ約0.23mを測る。内部から多くの瓦器・土師器皿に混じって、黒色土器・陶器片が出土した。

(2)出土遺物(第92・93図、図版第62~64)

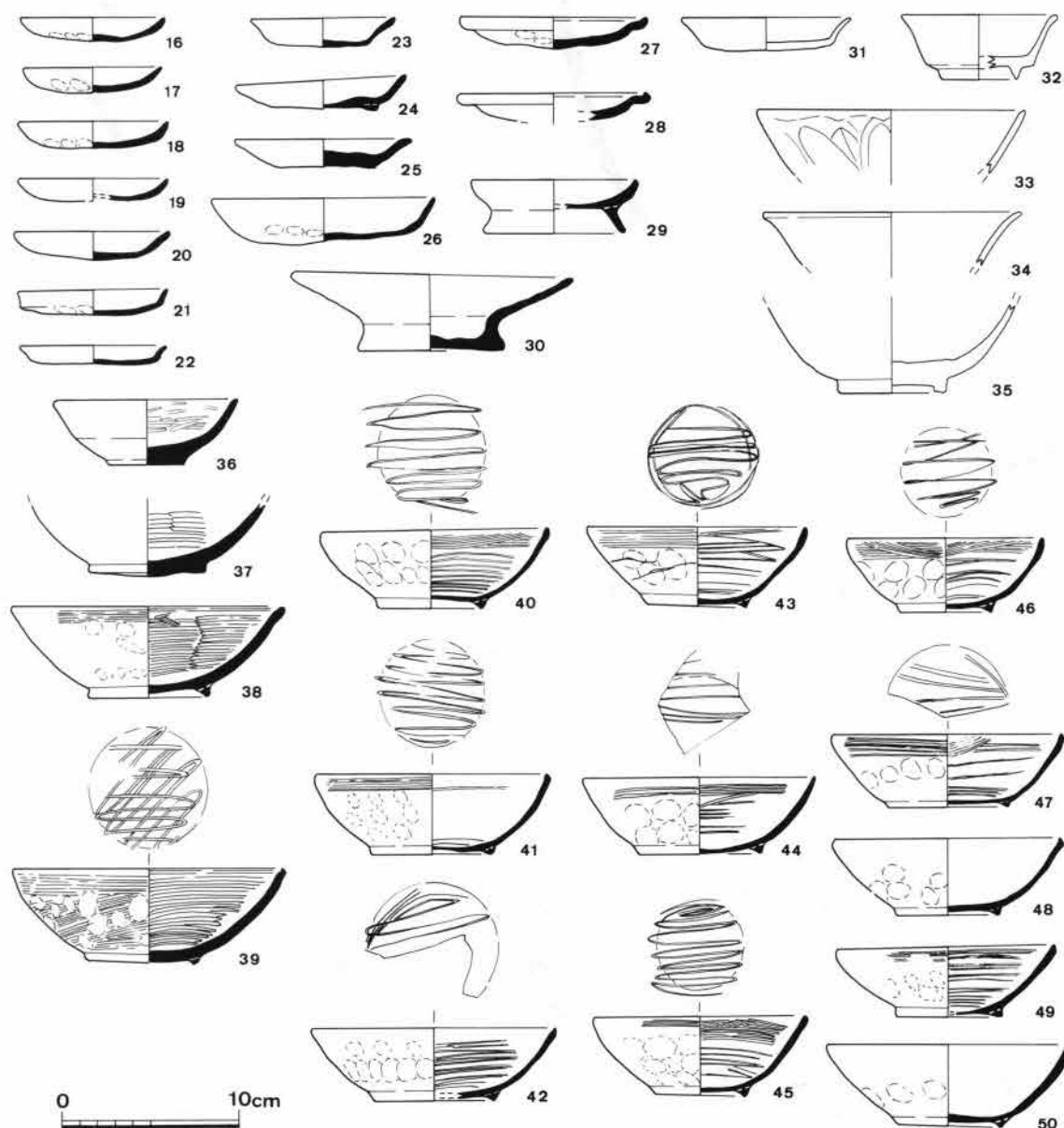
溝3からは16・32が、溝4からは50が出土した。土坑1からは17・40・42・48が、土坑2からは31が、土坑3からは23・34・37~39・59が出土した。井戸3からは24が、井戸5からは57が、井戸6からは19・22・29・35・43・53・56・58が、井戸6周辺からは64が出土した。竪穴式住居

跡1西側の攪乱・流路状遺構からは51・52・54が、包含層から60～63・65～68が出土した。その他の遺物は、柱穴・包含層・新しい溝から出土した。

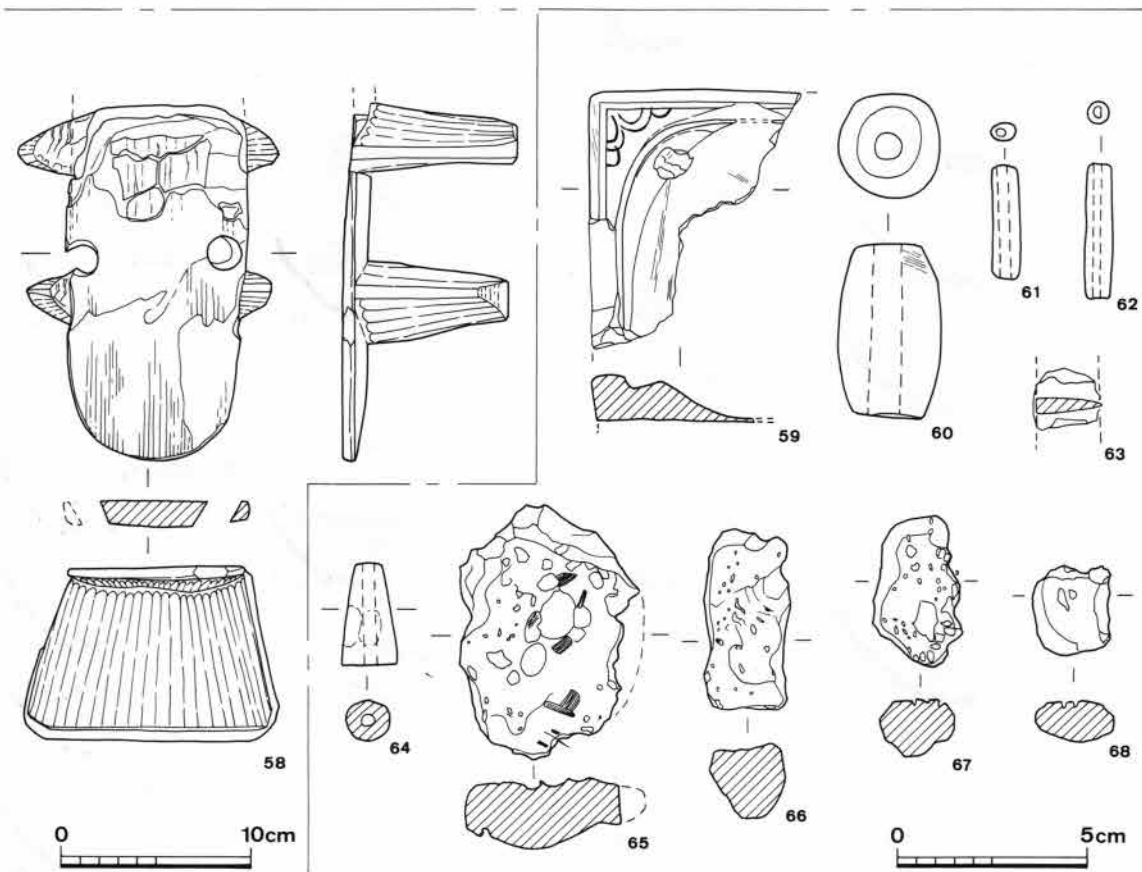
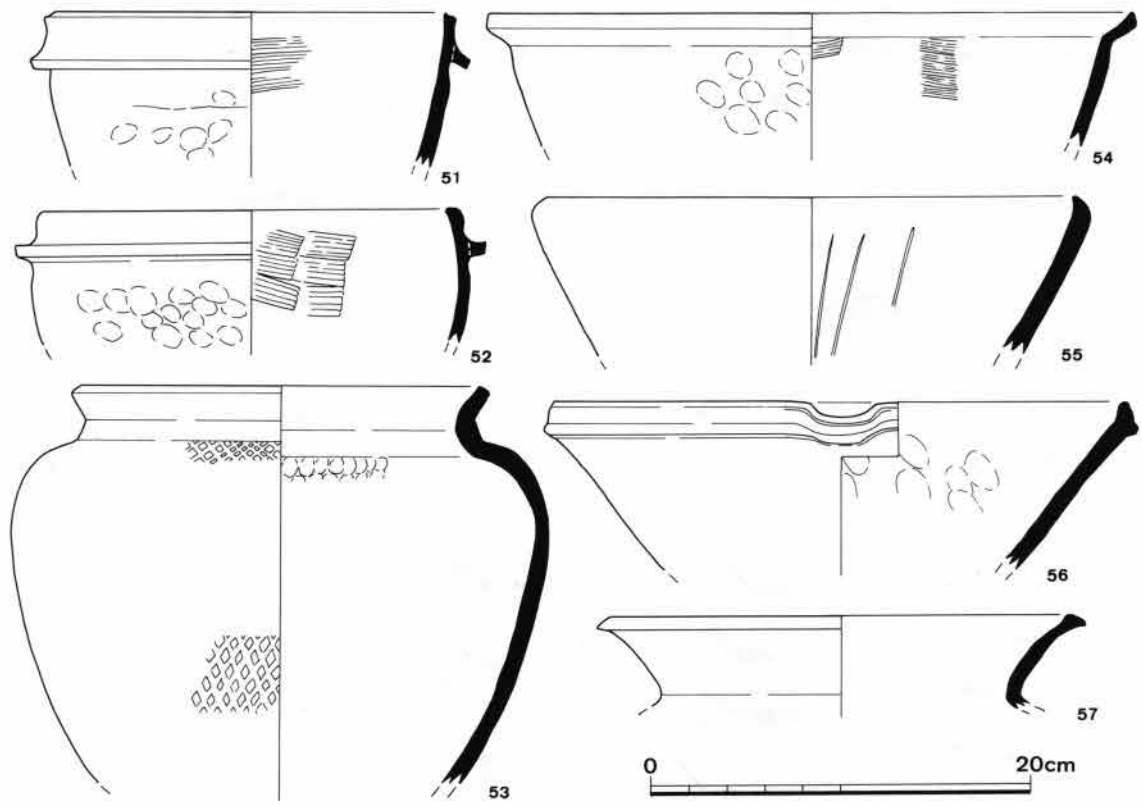
土師皿16～29 口径8～9cmと13cm前後のものに分けられる。小皿の方が出土量は多い。小皿は、その形態から5つに分けることができた。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る皿(16～20)、平坦な底部縁から屈曲して短く立ち上がる皿(21・22)、底部外面に糸切り痕を残し、平坦な底部から外反しながら立ち上がる皿(23～25)、「て」字状の皿(27・28)、高台をめぐらす皿(29)である。その形態から、27・28は、平安時代後期のもので、その他は平安時代後期から鎌倉時代と思われる。

土師器杯30 平坦な底部縁から「S」字に屈曲し、口縁部は大きく開く。

陶磁器31～35 31は白磁皿、34は白磁碗である。32は、青磁の杯である。33・35は、青磁の椀である。



第92図 出土遺物実測図(2)



第93図 出土遺物実測図(3)

黒色土器碗36～39 出土量は、瓦器碗と比較すると非常に少量であった。平底の底部から内湾しながら立ち上がり口縁部に至る36・37と、断面三角形の高台がめぐる38・39の形態に分けられた。38・39は、口縁内面に1条の沈線を施す。39の底部内面には、簡略化された格子状暗文が施される。体部外面には指頭圧調整痕が残る。38・39は、高台が瓦器碗に類似するが、体部の形状は黒色土器の様相をとどめており、器壁も厚い。この土器は、瓦器碗に先行するもので、11世紀末に相当すると考えられる。

瓦器碗40～50 底部から内湾しながら口縁部に至る。口縁部付近でわずかに屈曲するものもある。口径13～14cm・器高4～4.5cmを測り、断面三角形の高台が付く。小さいものでは、46の口径は11.4cm・器高4.2cmを測る。体部内面は渦巻き状の暗文が、底部内面には平行線状に暗文が施されていた。暗文は、それほど密には施されていない。体部外面は指頭圧調整される。

瓦質羽釜51・52 全体の形状については不明であるが、脚部の破片が出土していることから、52には三足が付くと思われる。体部内面は部分的にハケ調整され、外面は指頭圧調整される。

陶器甕53 肩部の張る体部と大きく屈曲する口縁部からなる。口縁端部は平坦である。体部外面には、格子状の叩きが施される。軟質。

瓦質鍋54 底部は欠損するが、丸みのある底部が続くと思われる。口縁部で「く」字状に屈曲する。体部内面には部分的にハケ調整の痕跡が残る、外面は指頭圧調整される。石鍋片も認められたが、図化できなかった。

陶器すり鉢55 外上方にまっすぐ立ち上がる体部・口縁部からなる。口縁端部は内上方に尖る。

須恵器片口鉢56 外上方にまっすぐ立ち上がる体部と、口縁部が「く」字状に大きく拡張する。

須恵器甕57 口縁部のみでわずかに外反しながら立ち上がる。端部は平坦である。

下駄58 二枚歯の下駄で非常に高い。先端付近は欠損していたが、全体に加工痕が残っていた。対はなく、部分的に炭化していた。

硯59 硯の角の部分である。破損状況がひどく、全体は不明である。

土錘60～62 円柱状の土錘である。大きな60は、長さ4.5cm・幅2.7cmを測る。

鉄製刀子63 幅1.7cmを測るが、破片であるため、全体は不明である。

不明土製品64 断面台形を呈し、中央に径0.4cmの孔が設けられており、鍛冶滓の出土も見られたことから、鞆羽口のミニチュア品の可能性がある。

鍛冶滓65～68 総数14点の鍛冶滓が出土した。小型のもので、一部欠損するものも認められ、表面に気泡や木炭の細片が見られる。刀子63が出土していることから、周辺に鍛冶工房跡が存在したと考えられる。金属学的分析を行っていないため、精錬鍛冶滓か、鍛錬鍛冶滓かは不明である。65は84g、66は26g、67は15g、68は8gを測る。

銭貨(第94図、図版第64) 3トレンチ南溝内西端で4枚が重なって出土したもので、銭名が判読できたものは開元通寶1枚で、唐銭で初鑄は武徳4(621)年である。



第94図 銭貨拓影
(1/1)

3. ま と め

今回の調査によって、行者山麓部分にも弥生時代後期の集落が存在することが判明した。また、古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出され、西方に位置する鹿谷遺跡との関係が注目される。

奈良時代・平安時代についても、出土遺物や遺構などから引き続き集落が形成されていたことが明らかである。鎌倉時代の遺構としては、道路遺構を中心に小規模な掘立柱建物跡とともに礎石を伴わない大型建物跡を検出し、集落内での建物の配置やありかたを考える上で重要なものとなった。また、時期を特定することはできなかったが、鍛冶滓の出土は亀岡市内では初めてであり、生産活動を知る上で重要なものとなる。この地域は、中世の佐伯荘が考えられており、これらのことと合わせて考えると興味深い。

各時代を追って井戸の構築方法や、集落の変遷を垣間見ることができた。掘立柱建物跡や6基の井戸内からは瓦器碗を主体とした多くの土器が出土し、亀岡市の中世を考える上で重要な遺跡の調査となった。

(増田孝彦)

- 注1 水谷壽克・森下 衛・鶴島三壽・中川和哉・柴 暁彦ほか「千代川遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注2 石井清司・田代 弘ほか「北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注3 吉水眞彦・大槻眞純ほか「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』 京都府教育委員会) 1977
田代 弘・細川康晴「国道9号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要(3)小金岐古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注4 野島 永・河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注5 「余部遺跡第2次」 現地説明会資料 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997
- 注6 村尾政人・田代 弘ほか「太田遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注7 樋口隆久「太田遺跡第2次発掘調査」(『亀岡市文化財調査報告書』第37冊 亀岡市教育委員会) 1996
- 注8 松尾史子「府営農業基盤整備関係遺跡平成8年度発掘調査概要 [1] 太田遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』 京都府教育委員会) 1997
- 注9 主な調査参加者 奥田栄吉・石田正美・大西芳美・石田忠一・田中広志・田中修治・石田初美・大西幸江・人見幸代・奥村 幸・大石ふゆ子・福島ちえ子・原野実子・奥恵美子・野木美智恵・森川久子・村嶋みよ子・岡本志げ乃・前田佳代子・八木知子・片山八重子・井内美智子・津久田さつき・笠々下美雪・石田すみ子・中西貞子・小滝初代

圖 版

図版第1 松ヶ崎遺跡第5次

(1)調査地遠景
(南東から)



(2)調査地遠景
(南から)



(3)調査地全景
(東から)
手前から第5・6・7・8
トレンチ



図版第2 松ヶ崎遺跡第5次



(1)第5 トレンチ全景 (東から)



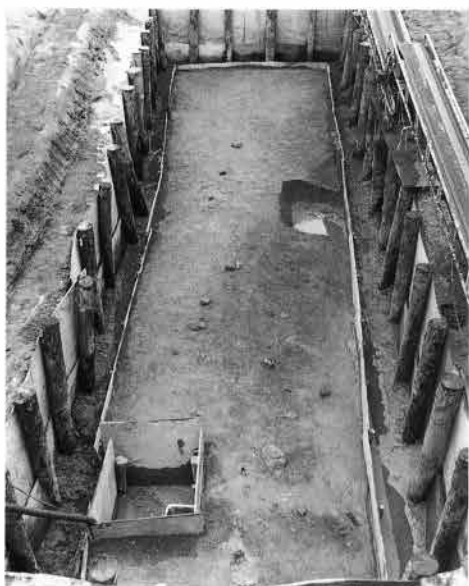
(2)井戸 S E01検出状況 (南から)



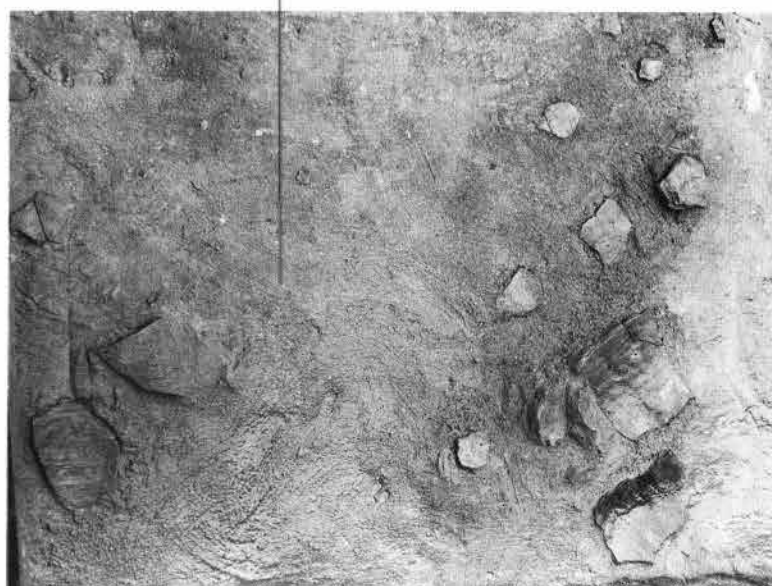
(3)井筒検出状況 (南から)



(4)S E01出土桶



(5)第7 トレンチ全景 (西から)



(6)S K04縄文土器出土状況 (上が東)

(1)第7トレンチ全景
(東から)



(2)第7トレンチ西断面
(東から)



(3)第7トレンチ下層南断面
(北から)



図版第4 松ヶ崎遺跡第5次



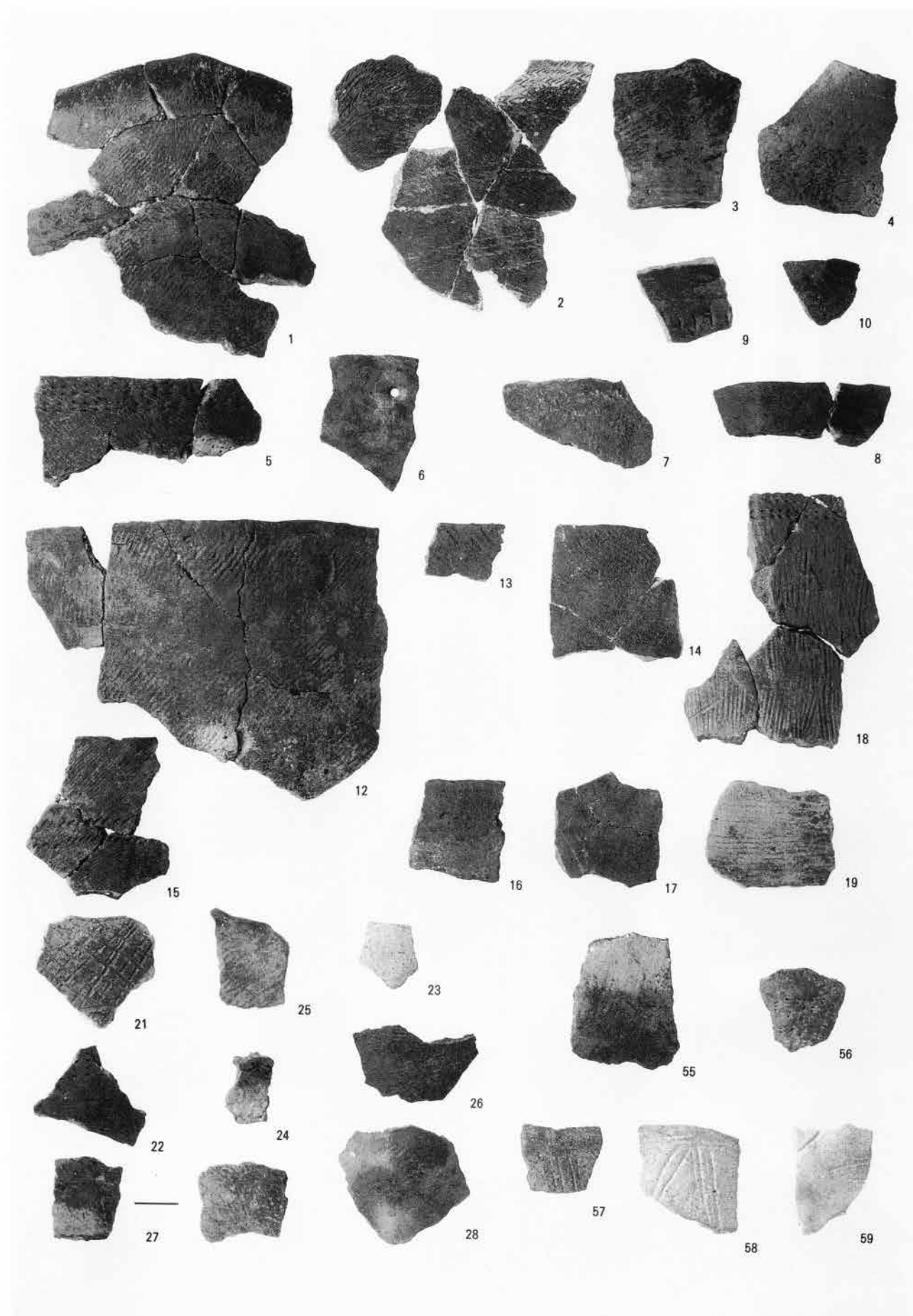
(1)石囲い炉S X03検出状況
(上が西)



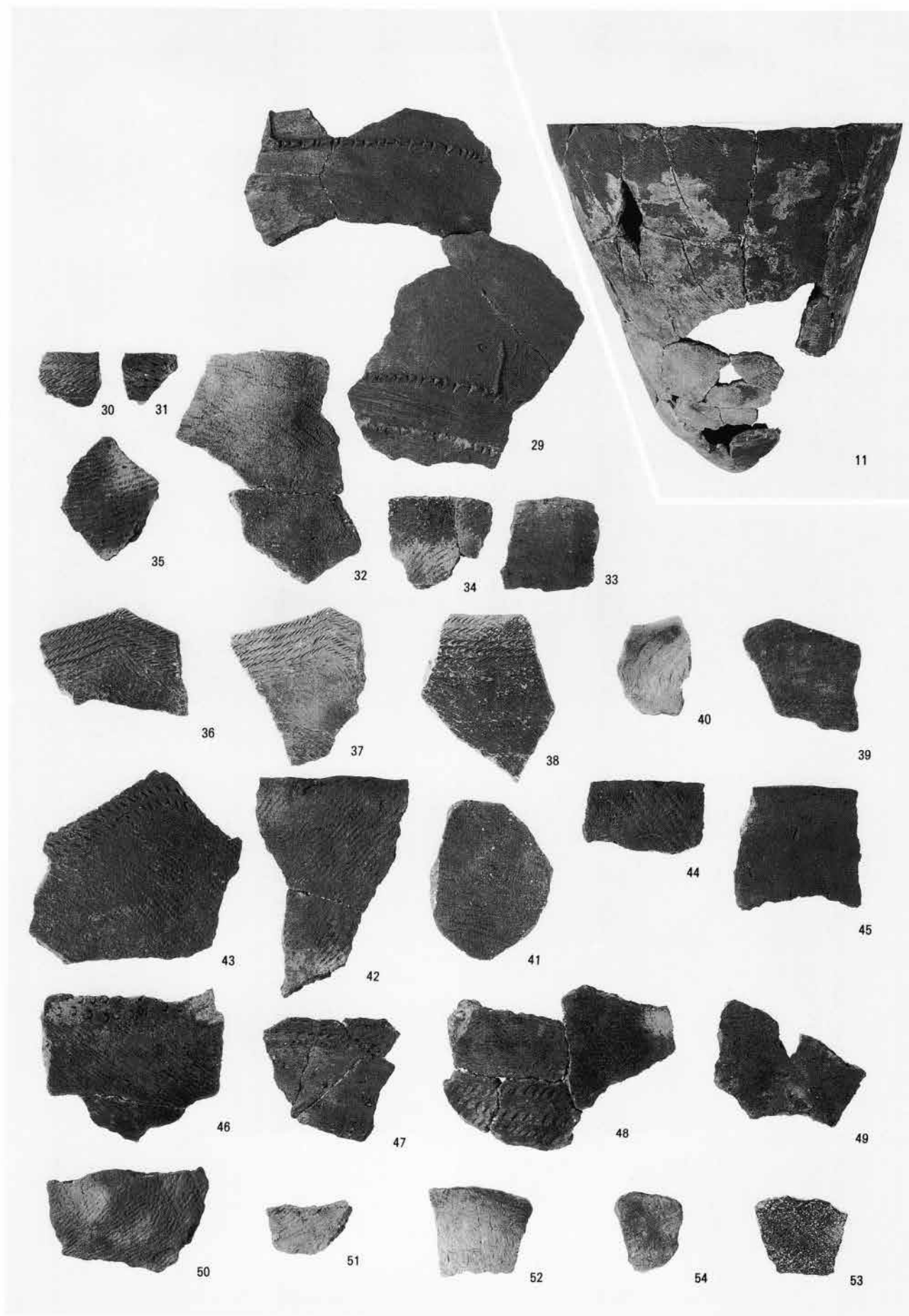
(2)第17層遺物出土状況
(上が西)



(3)第18-2層遺物出土状況
(上が北)



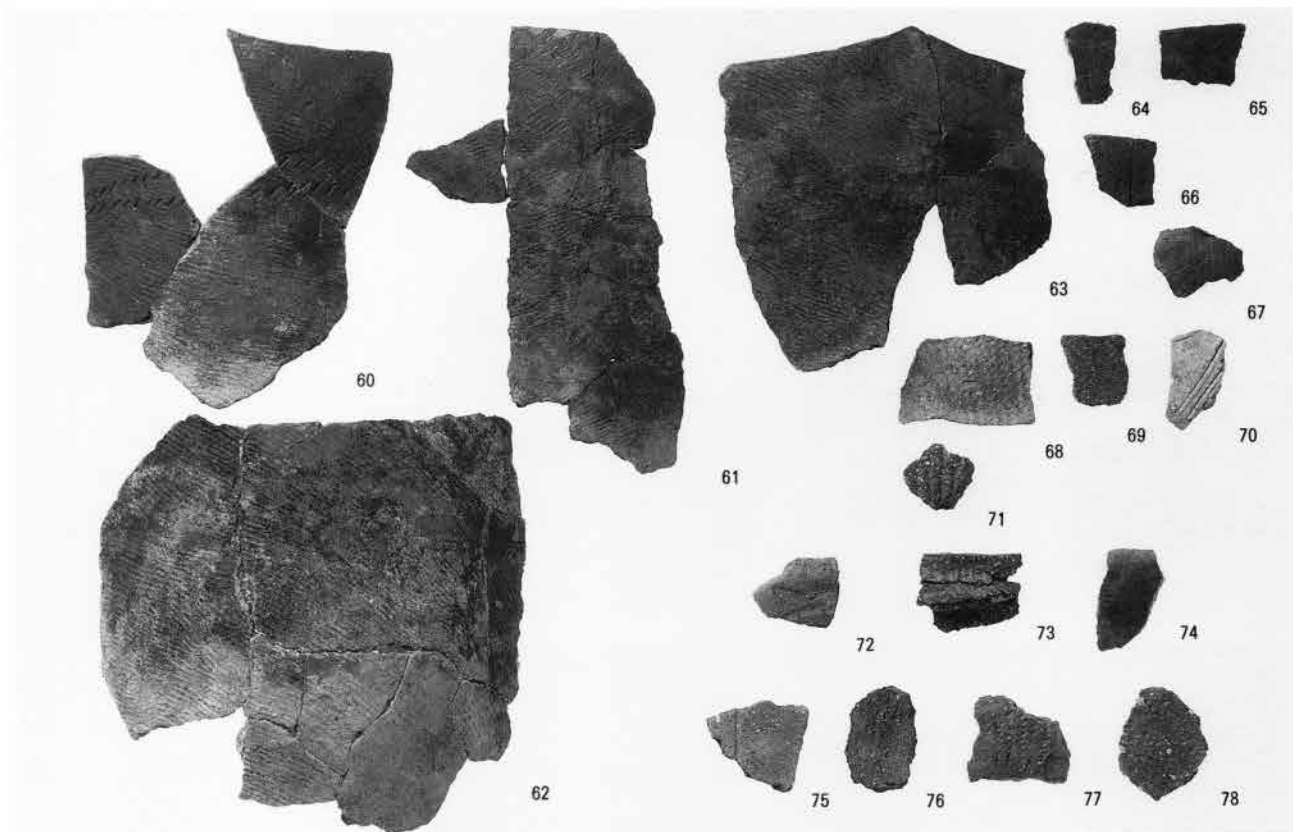
第8トレンチ出土土器(1) 番号は挿図の土器番号と一致
1~10, 第18-2層 12~19, 第17層 21~28, 第15層 55~59, 第10層



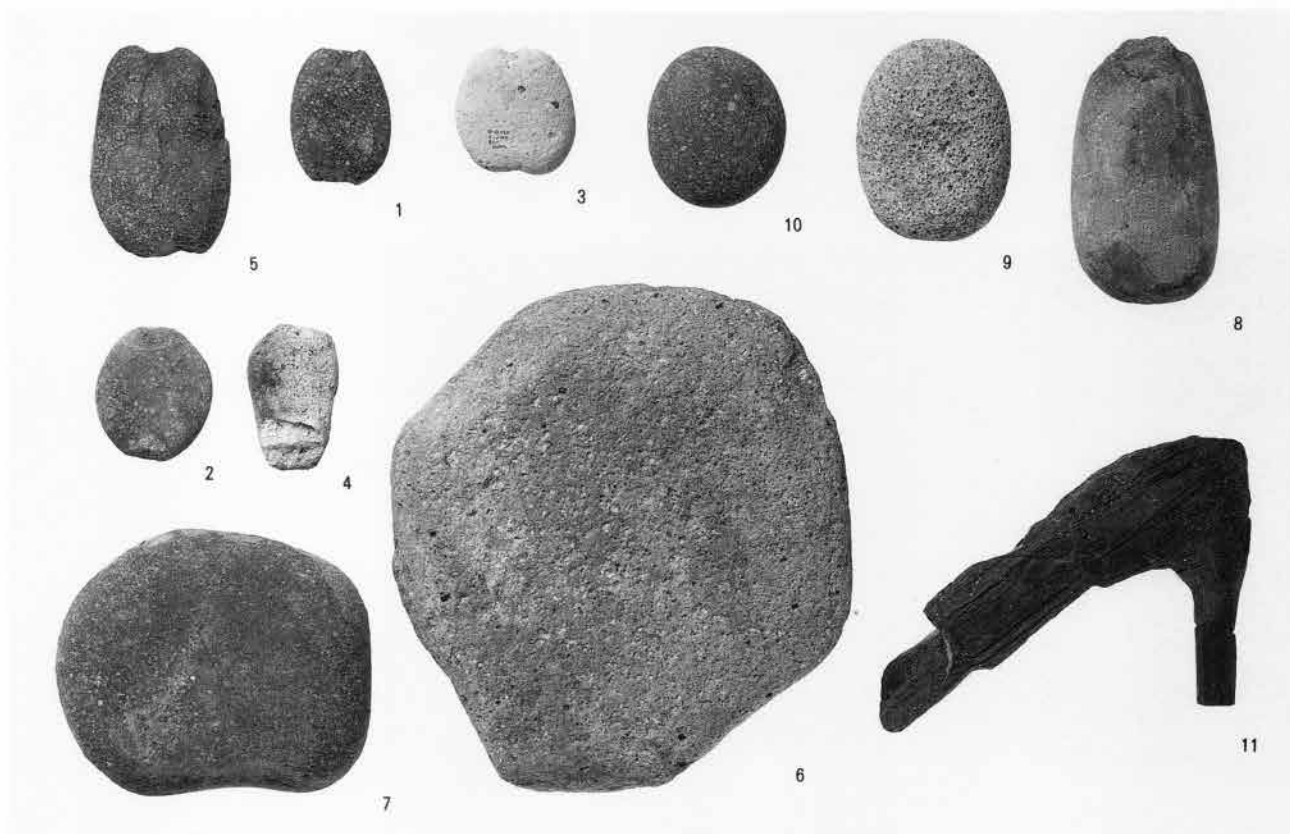
第8トレンチ出土土器(2) 番号は挿図の土器番号と一致

11, 第17層 29~35, 第12-2層 36~49, 第12-1層 50~54, 第10層

図版第7 松ヶ崎遺跡第5次

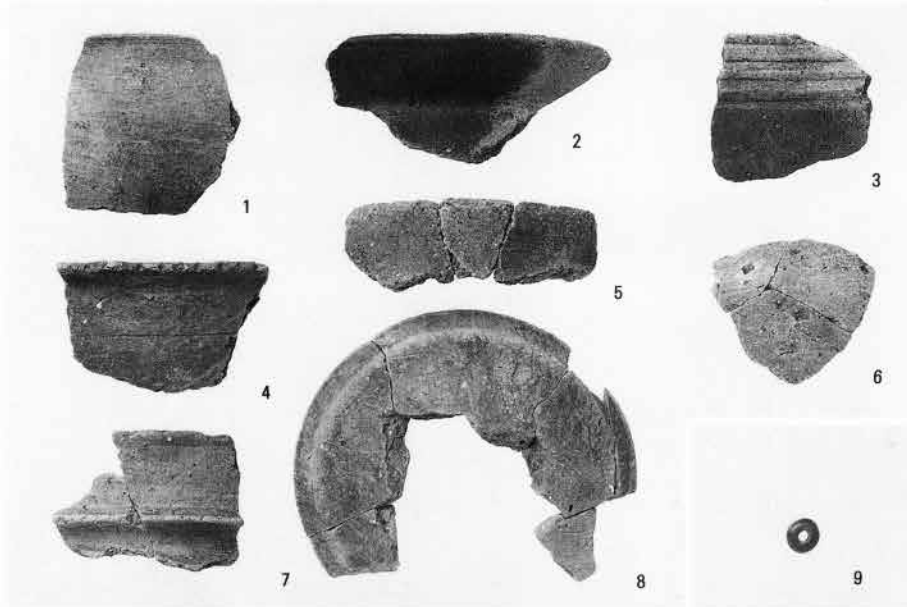


(1)第7トレンチSK04・第10層出土土器（番号は挿図の土器番号と一致）
60～62. S K04 63～78. 第10層



(2)第8トレンチ出土石器・木器
1～5. 石錘 6・7. 石皿 8～10. 敲石 11. 石斧柄

図版第8 松ヶ崎遺跡第5次















(1)第5トレンチSE01・SX02
出土遺物
1・2. SE01 3~9. SX02
(9のみ1/1)

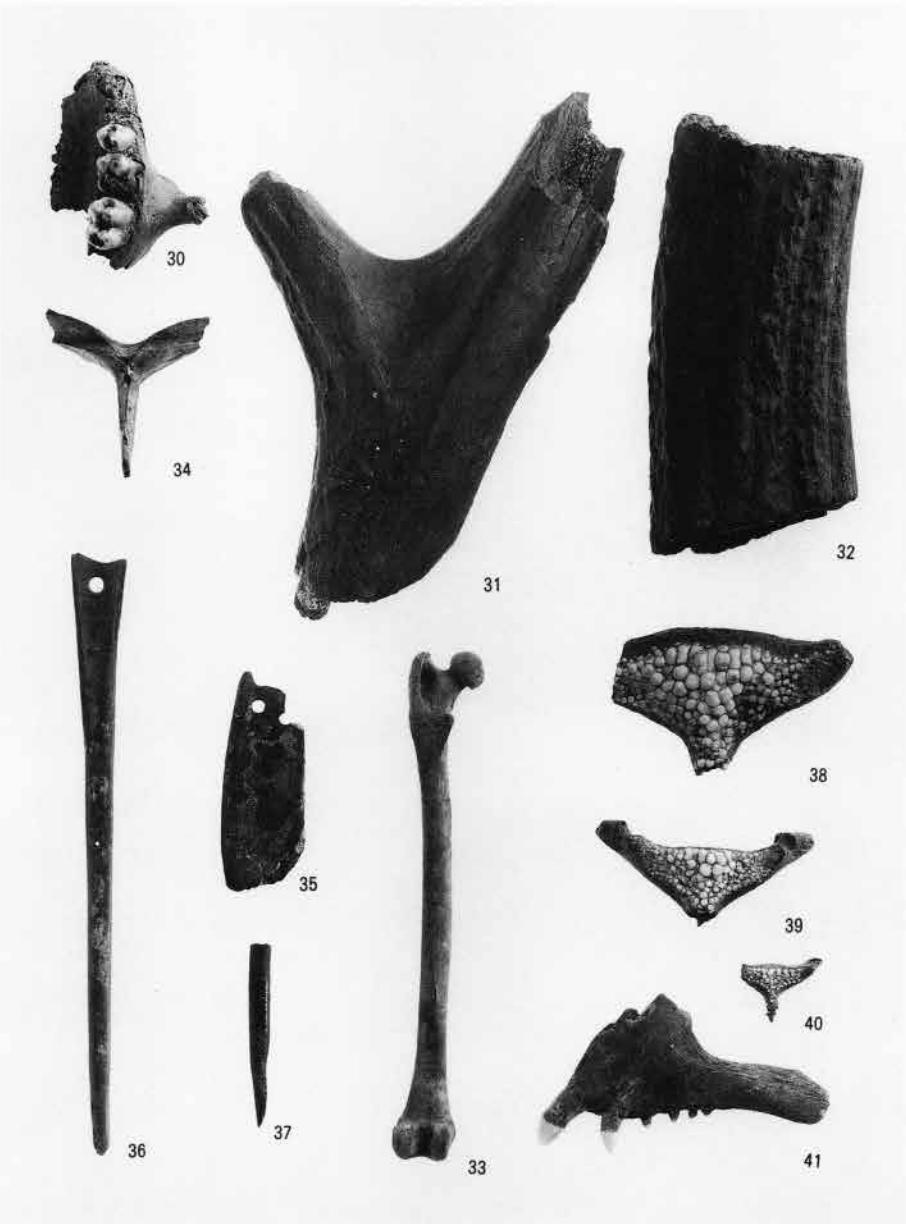
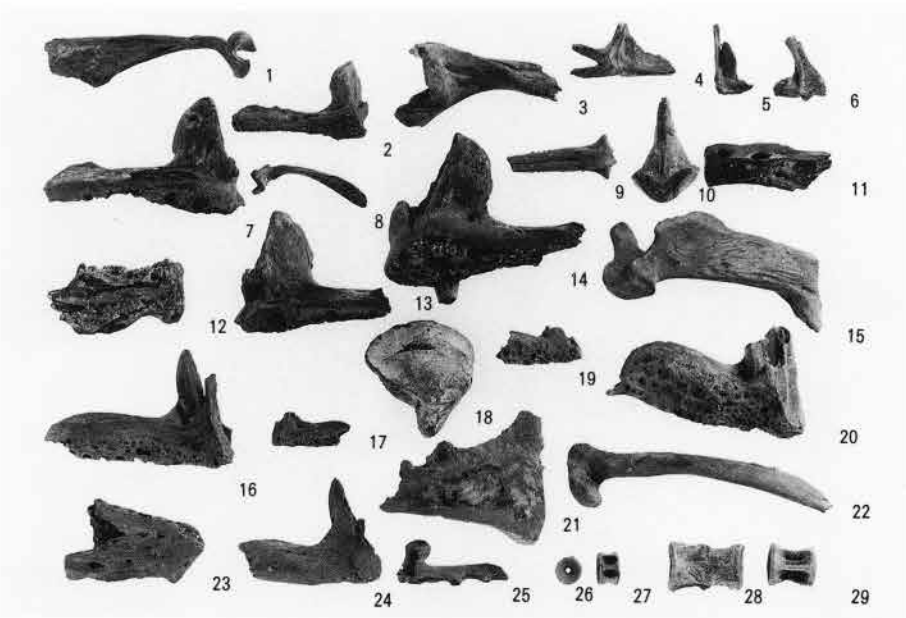


(2)S E01出土桶細部(1)



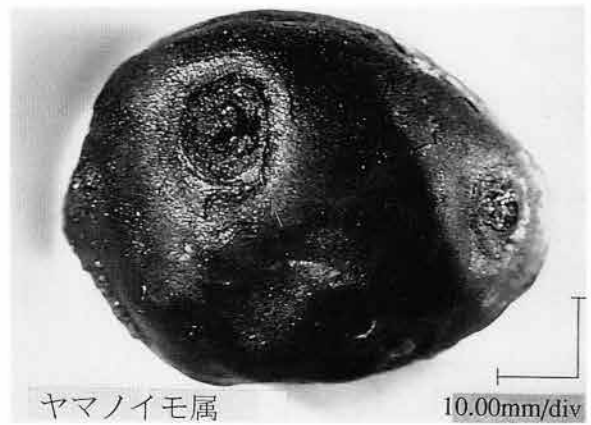
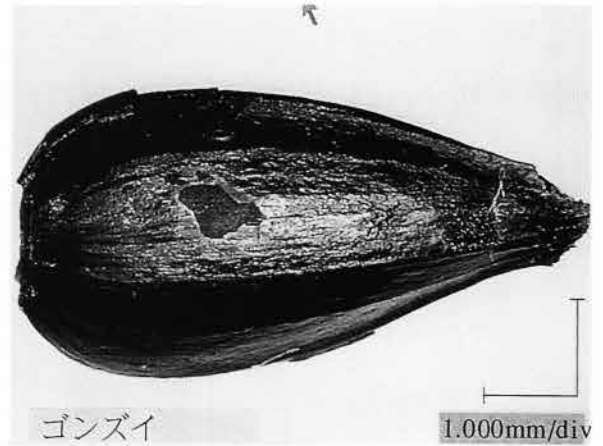
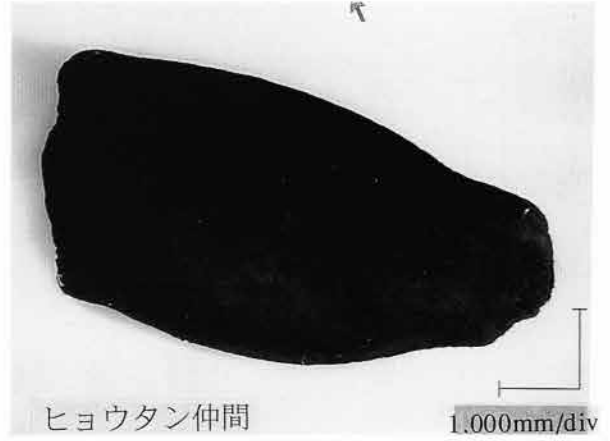
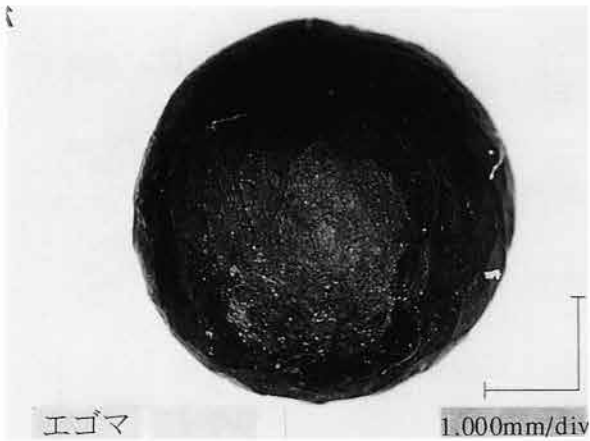
(3)S E01出土桶細部(2)

-  1~3・10・11. スズキ
-  4. コチ
-  5. イサキ
- 6~8・12~15. ハタ科15 (3.0cm)
-  9. カワハギ
-  16~18. マダイ
-  19・20・22~24. クロダイ
-  21. フグ
-  25. ヒラメ
- 26・27. イワシ類
- 28. カワハギ
- 29. スズキ
-  30. ニホンザル上顎骨
-  31・32. 鹿角
- 33. タヌキ大腿骨
-  34. 鳥類胸骨
- 35~37. 骨角器36 (11.5cm)
-  38~41. カンダイ



42. 糞石 (原寸)

図版第10 松ヶ崎遺跡第5次



出土植物遺存体



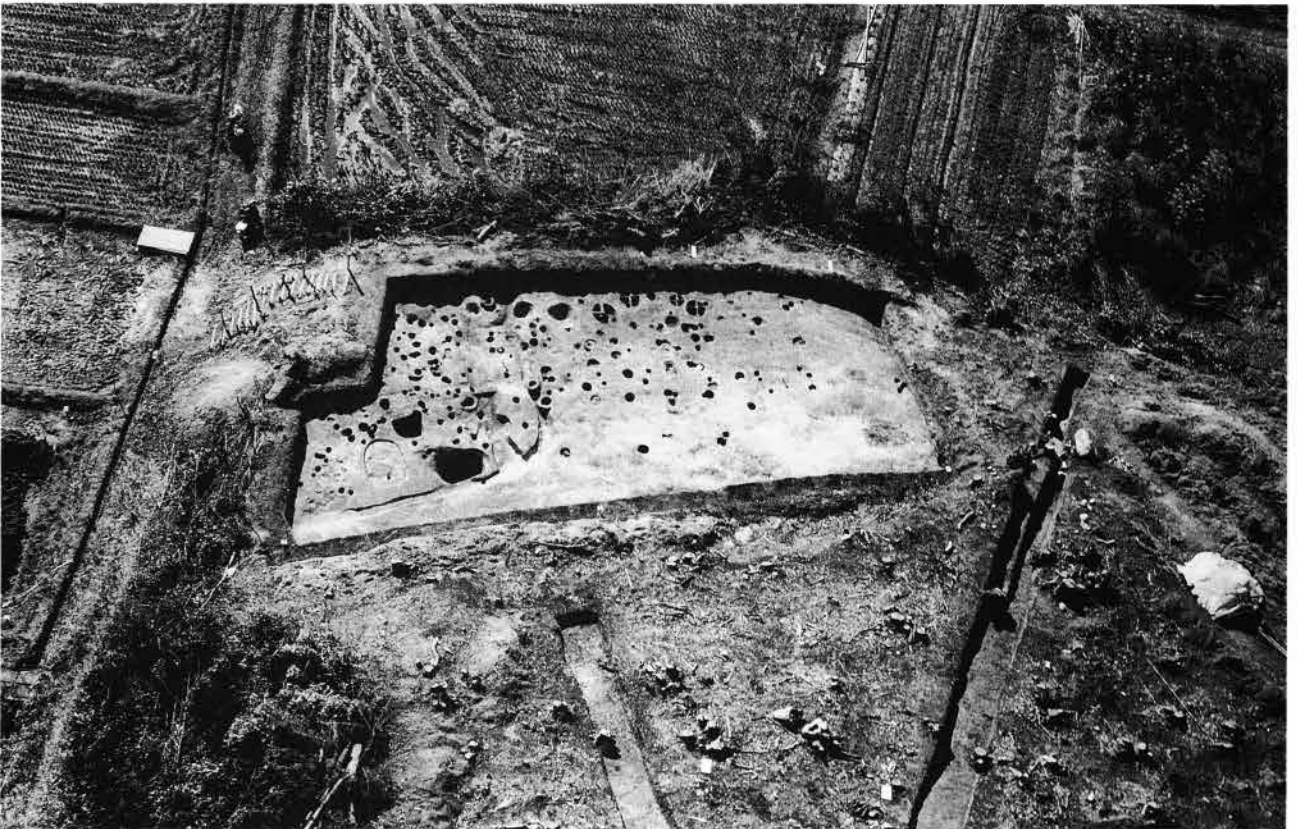
(1)調査地遠景 (南東から)



(2)調査地全景 (南東から)



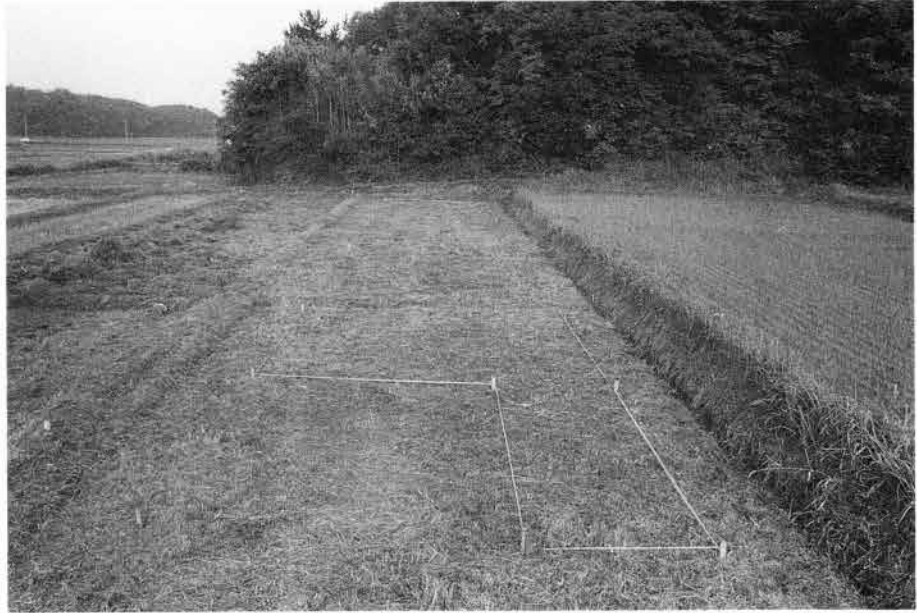
(1)第1トレンチ全景（北東から）



(2)第2トレンチ全景（北東から）

図版第13 横枕遺跡

(1)第1トレンチ調査前風景
(南東から)



(2)第1トレンチ谷の肩部
掘削状況
(南東から)



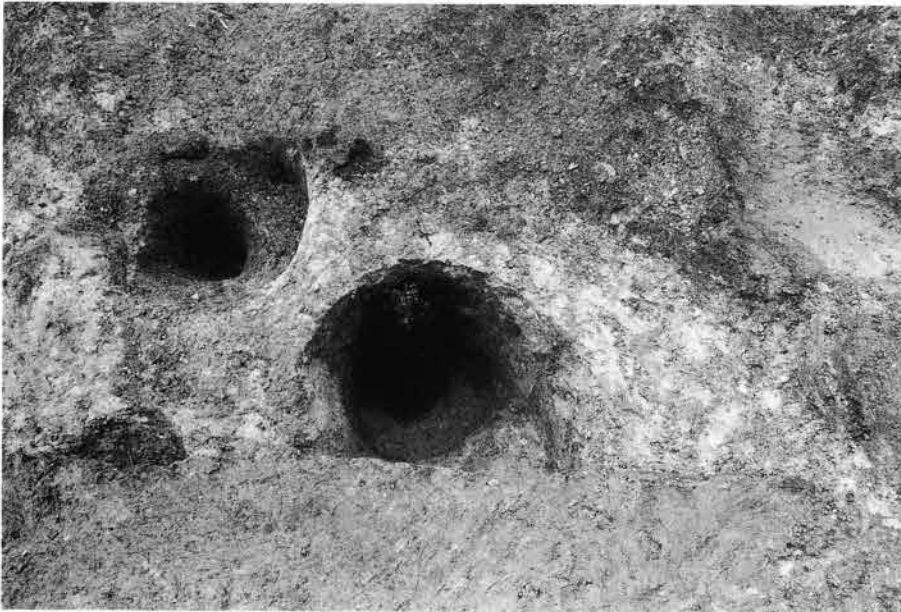
(3)第1トレンチ谷の肩部
完掘状況
(南東から)



図版第14 横枕遺跡



(1)第1トレンチ谷の肩部
完掘状況
(北東から)



(2)柱穴4
(北東から)



(3)銅製帯金具出土状況
(南から)

図版第15 横枕遺跡



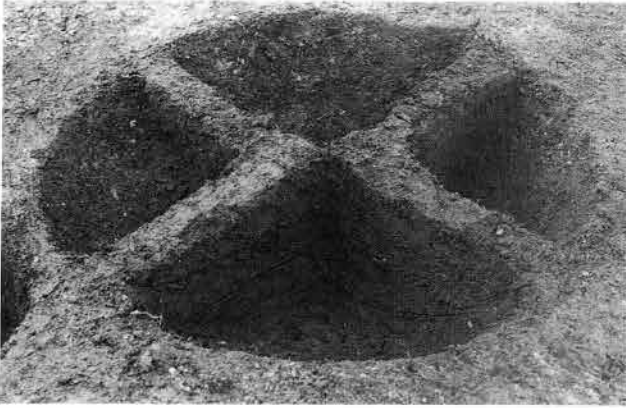
(1)第2トレンチ掘立柱建物跡
(北東から)



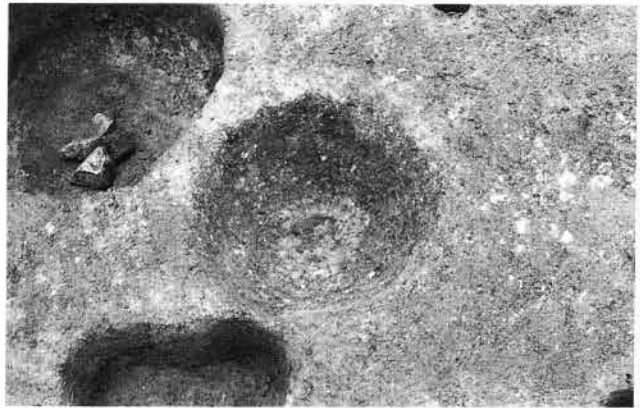
(2)第2トレンチ竪穴状遺構
(北から)



(3)第2トレンチ土坑群
(南から)



(1) S X 08掘削状況 (南から)



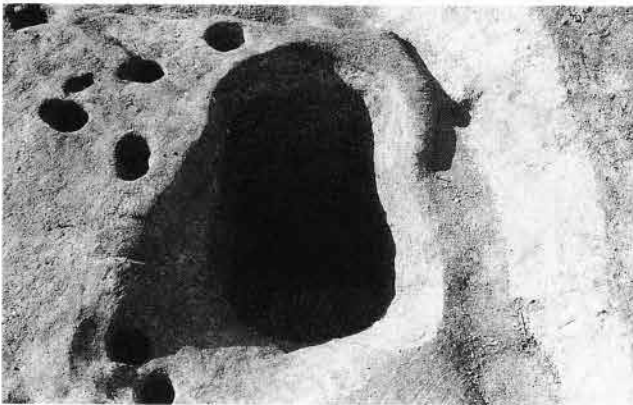
(2) S X 08完掘状況 (南から)



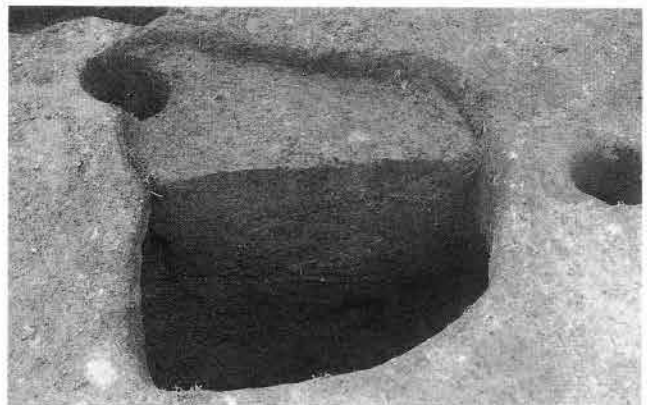
(3) S X 05掘削状況 (南から)



(4) S X 05完掘状況 (南から)



(5) S E 01完掘状況 (南東から)



(6) S K 01土層断面 (南から)



(7) 第5 トレンチ石材散乱状況 (西から)



(8) 五輪塔 (東から)



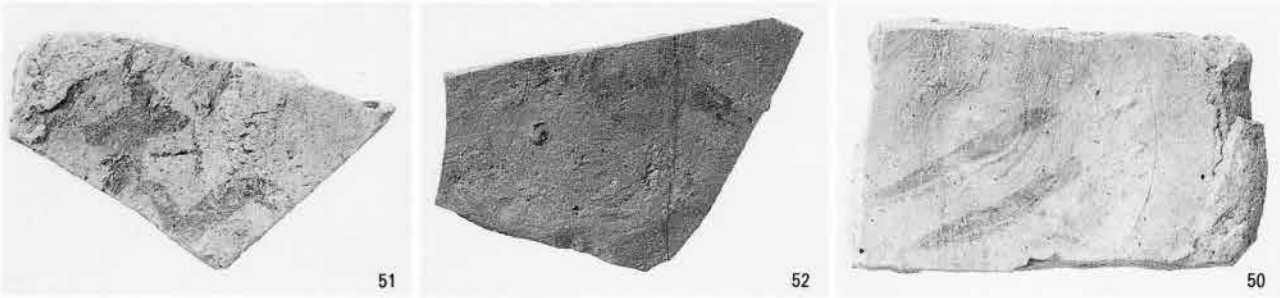
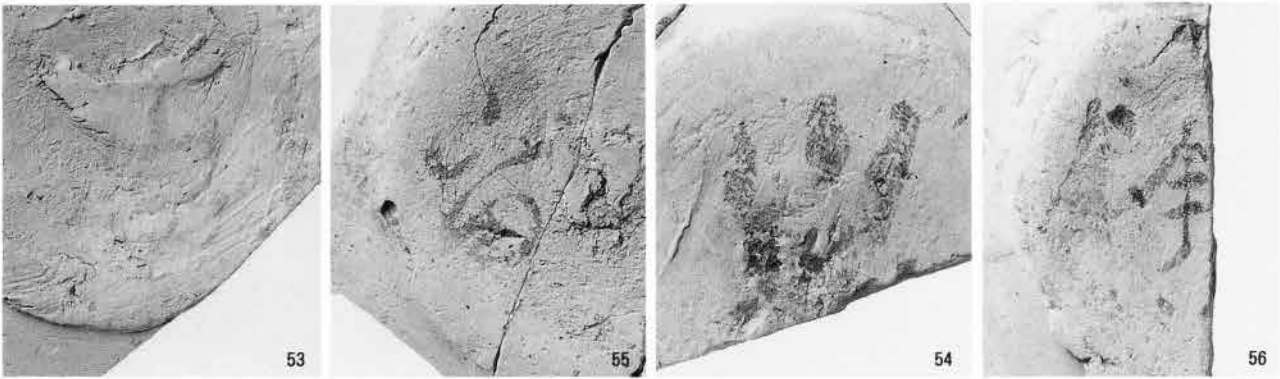
(1)第2～5トレンチ近景 (南西から)



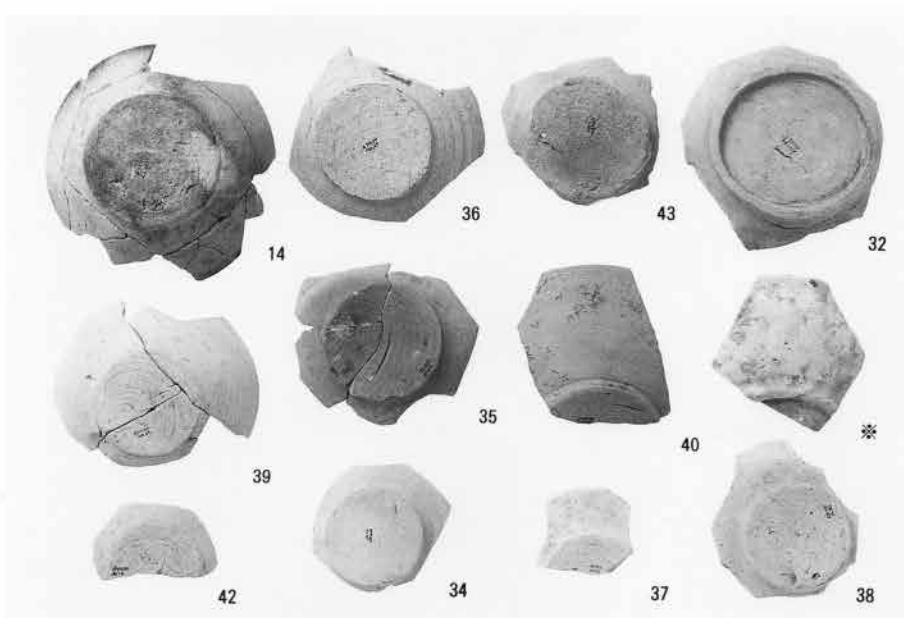
(2)第3トレンチ全景 (南から)



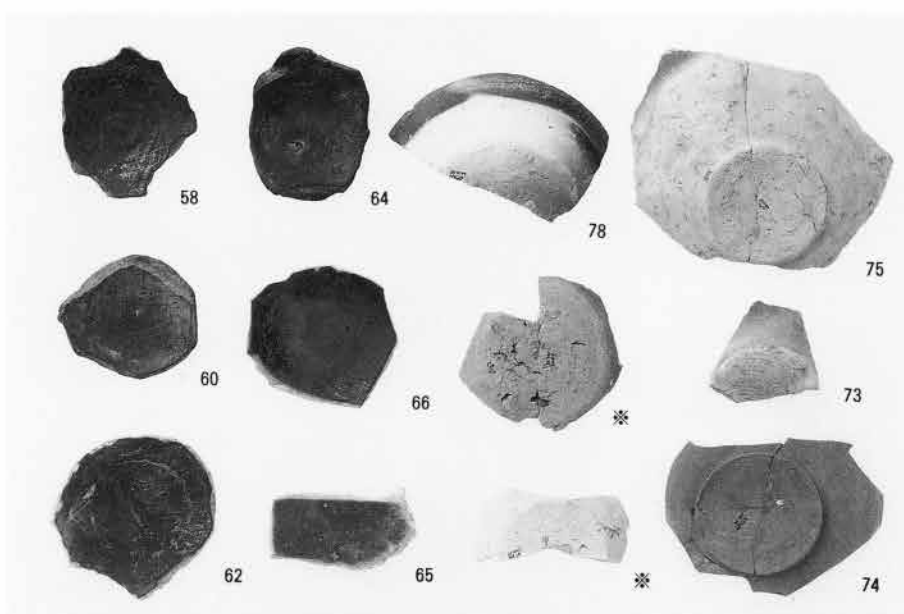
(3)第4トレンチ全景 (北東から)



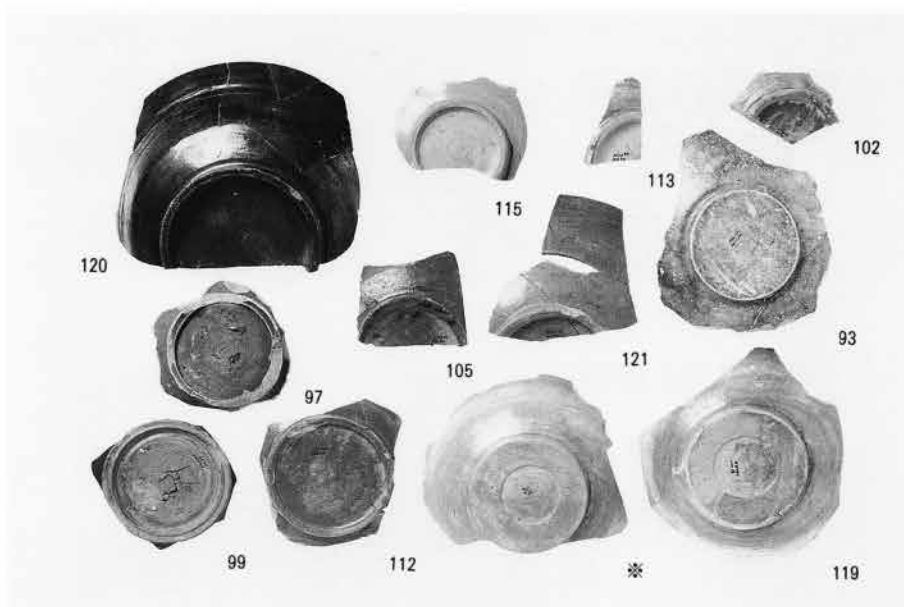
(1)土師器

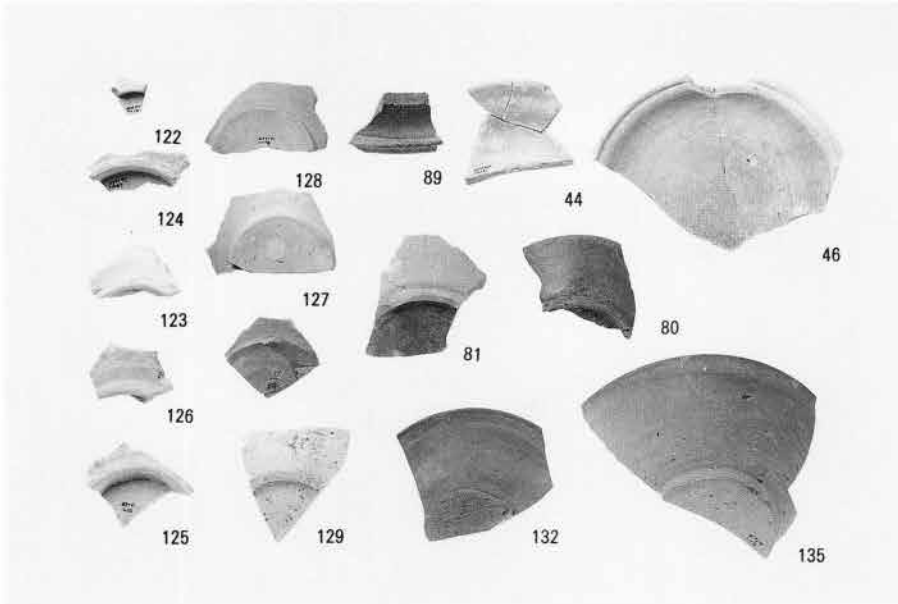


(2)黒色土器・須恵器

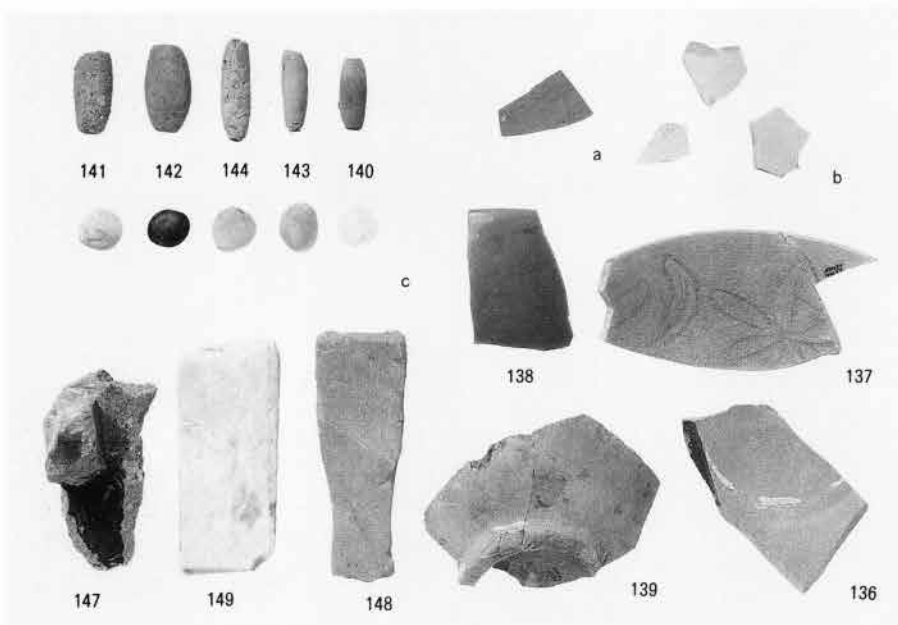


(3)緑釉陶器

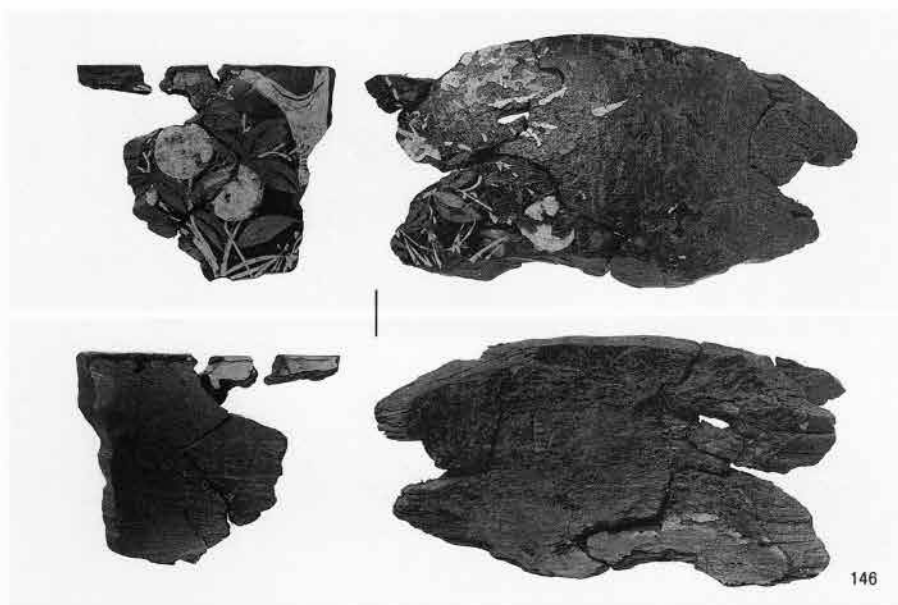




(1)無釉陶器・丹塗り土師器



(2)石製品・輸入陶磁器
a. 青磁片 b. 白磁片
c. 基石



(3)漆器碗



(1)調査前全景（空撮、右上が北）



(2)調査前全景（東から）



(1) 1・2号墳区画溝断面（東から）



(2) 1・2号墳区画溝（東から）



(1) 2号墳全景（北東から）



(2) 2号墳完掘後全景（北東から）



(1) 2号墳第1主体部（北西から）



(2) 2号墳第1主体部完掘後（北西から）



(1) 2号墳第2主体部（北西から）



(2) 2号墳第2主体部完掘後（北西から）



(1) 2号墳第3主体部（北西から）



(2) 2号墳第3主体部遺物出土状況（南西から）



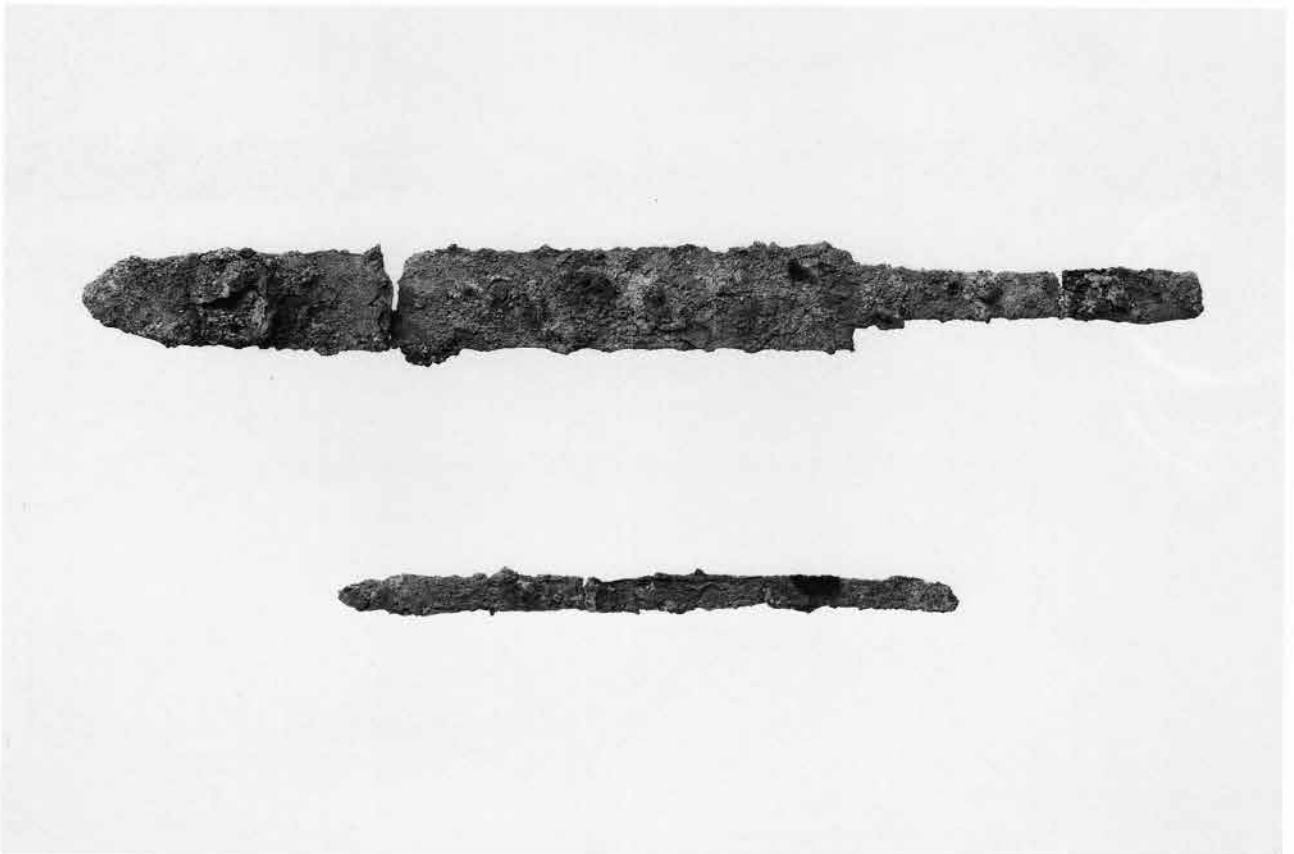
(1) 2号墳第3主体部完掘後（北西から）



(2) 3号墳全景（北東から）



(1) 3号墳主体部（北西から）



(2) 出土遺物（鉄製品）



(1)桑原口遺跡遠景（南東から）



(2)A地区全景（西から）

図版第30 桑原口遺跡第3次



(1) A-S D02 検出状況
(北西から)



(2) A-S D02 検出状況
(南から)



(3) A-S D02 埋土の状況
(南から)



(1) A - S D02遺物出土状況
(南東から)



(2) A - S D02遺物出土状況
(東から)



(3) A - S D02
出土遺物の記録風景



(1)A-S X08掘削風景



(2)A-S X08遺物出土状況
(西から)



(3)A-S X08 (上から)

(1) A-S X08木の根掘削風景
(北西から)



(2) A-S X08木の根検出状況
(西から)



(3) A-S X08木の根検出状況
(北東から)





(1) A-S X08遺物出土状況
(真上から)



(2) A-S X08遺物出土状況
(西から)



(3) A-S X08遺物出土状況
(真上から)

(1) Z-S D01 検出状況
(南から)

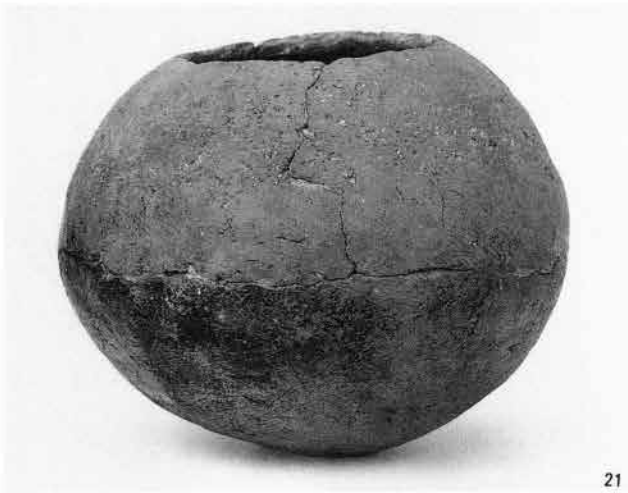


(2) Z-S D01 検出状況
(南東から)



(3) Z-S D02 検出状況
(南から)







225



87



94



240



22



231



232



235



200



114



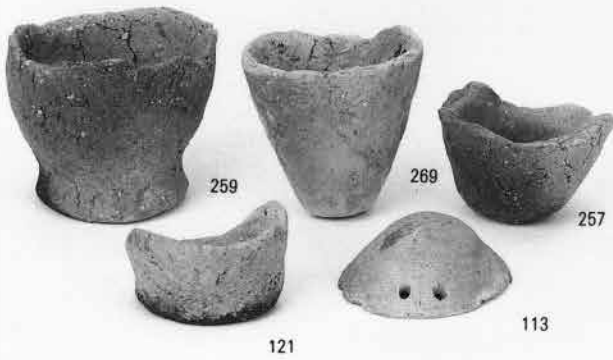
63



16



82



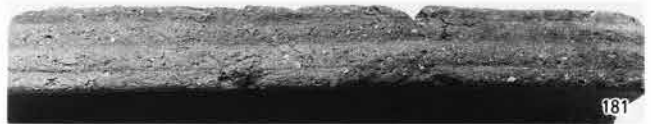
259

269

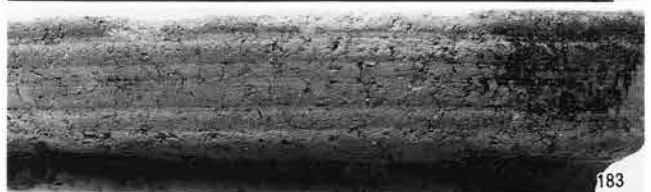
257

121

113



181



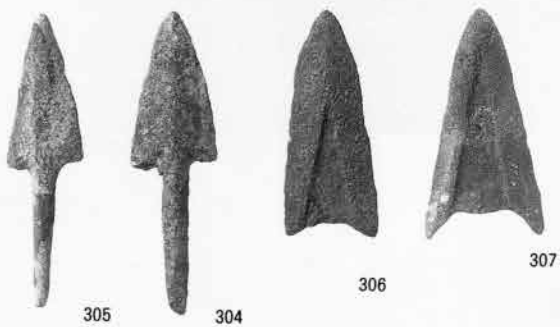
183



84



52



305

304

306

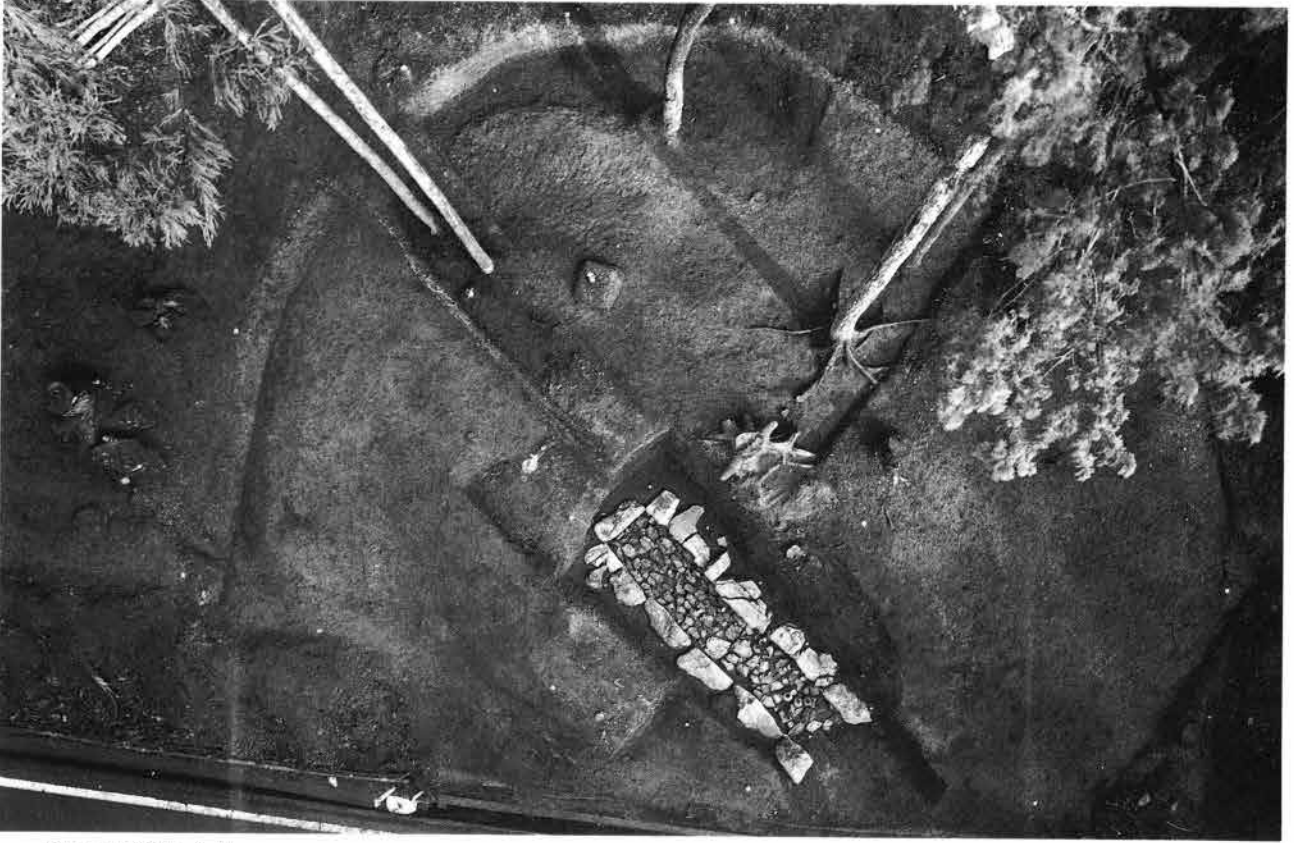
307



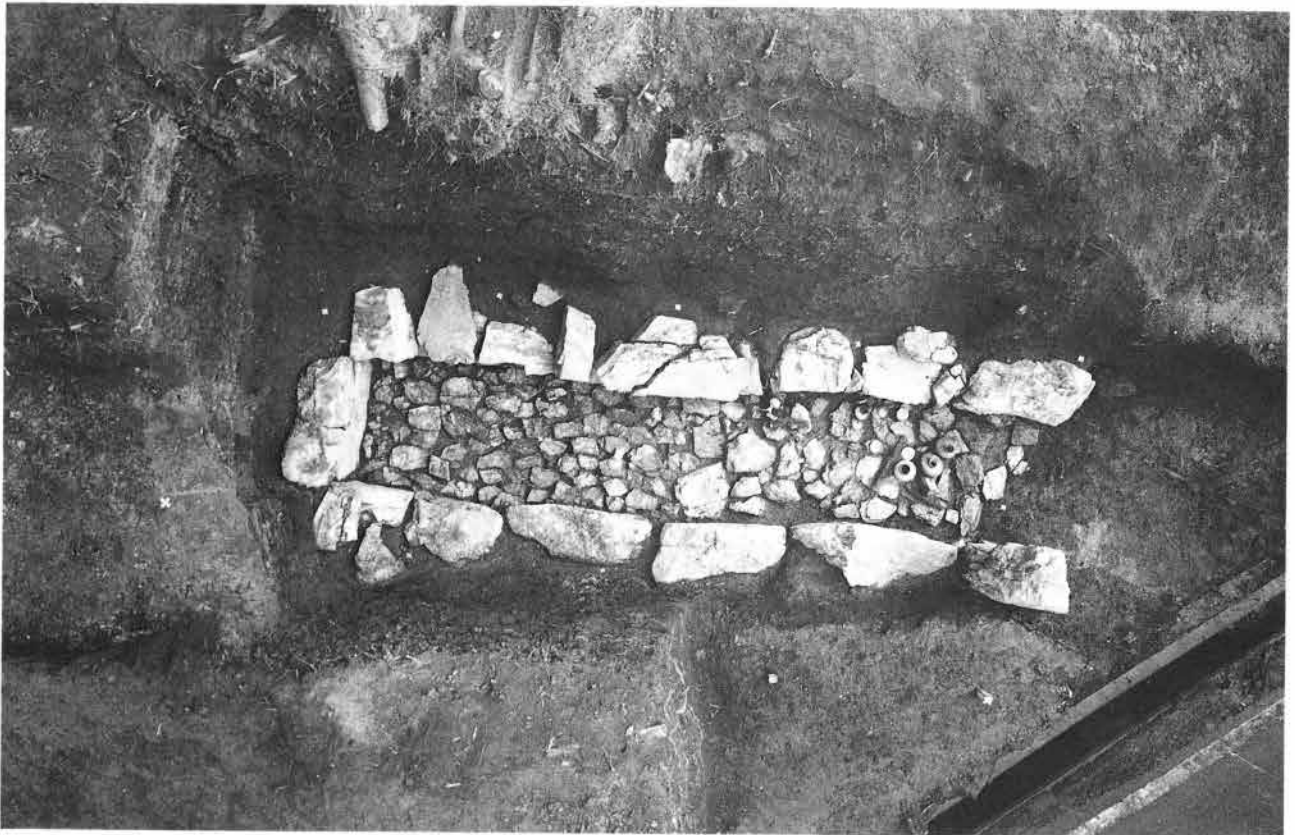
(1)調査地遠景（西上空から東を見る、調査地は中央下）



(2)調査前風景（東から）



(1) 4号墳墳丘全景



(2) 4号墳石室全景

(1)石室内遺物出土状況
(南から)



(2)排水溝検出状況
(南から)



(3)排水溝検出状況
(南から)





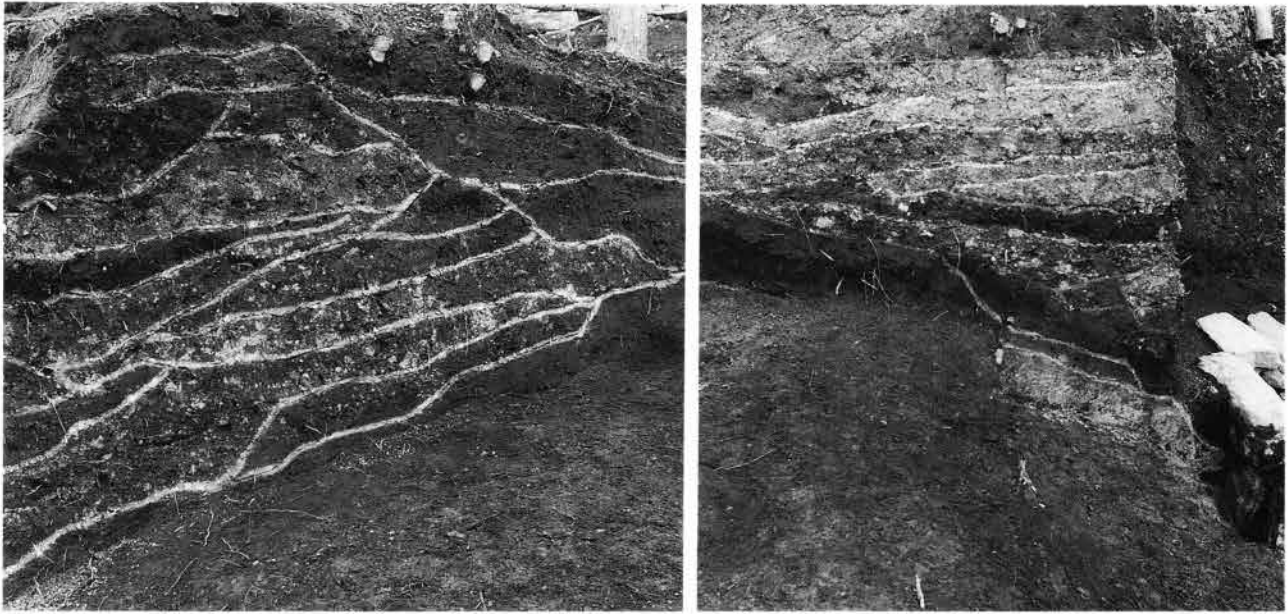
(1) S X01検出状況
(南から)



(2) S X01完掘状況
(西から)



(3) 2 トレンチ完掘状況
(西から)



(1) 墳丘盛り土土層断面
(南面・西面)



(2) 裏込め土堆積状況
(奥壁裏・西側壁裏)

(3) 3号墳外護列石
(南から)

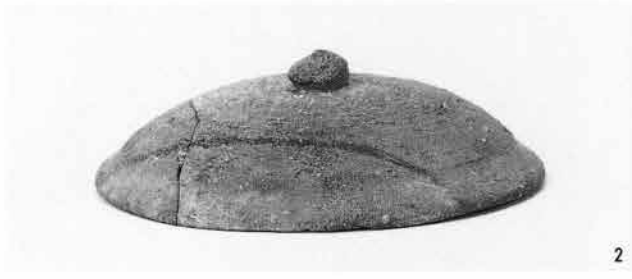




1



6



2



3



8



4



5



7



26



20



9



13



10



14



11



17



12



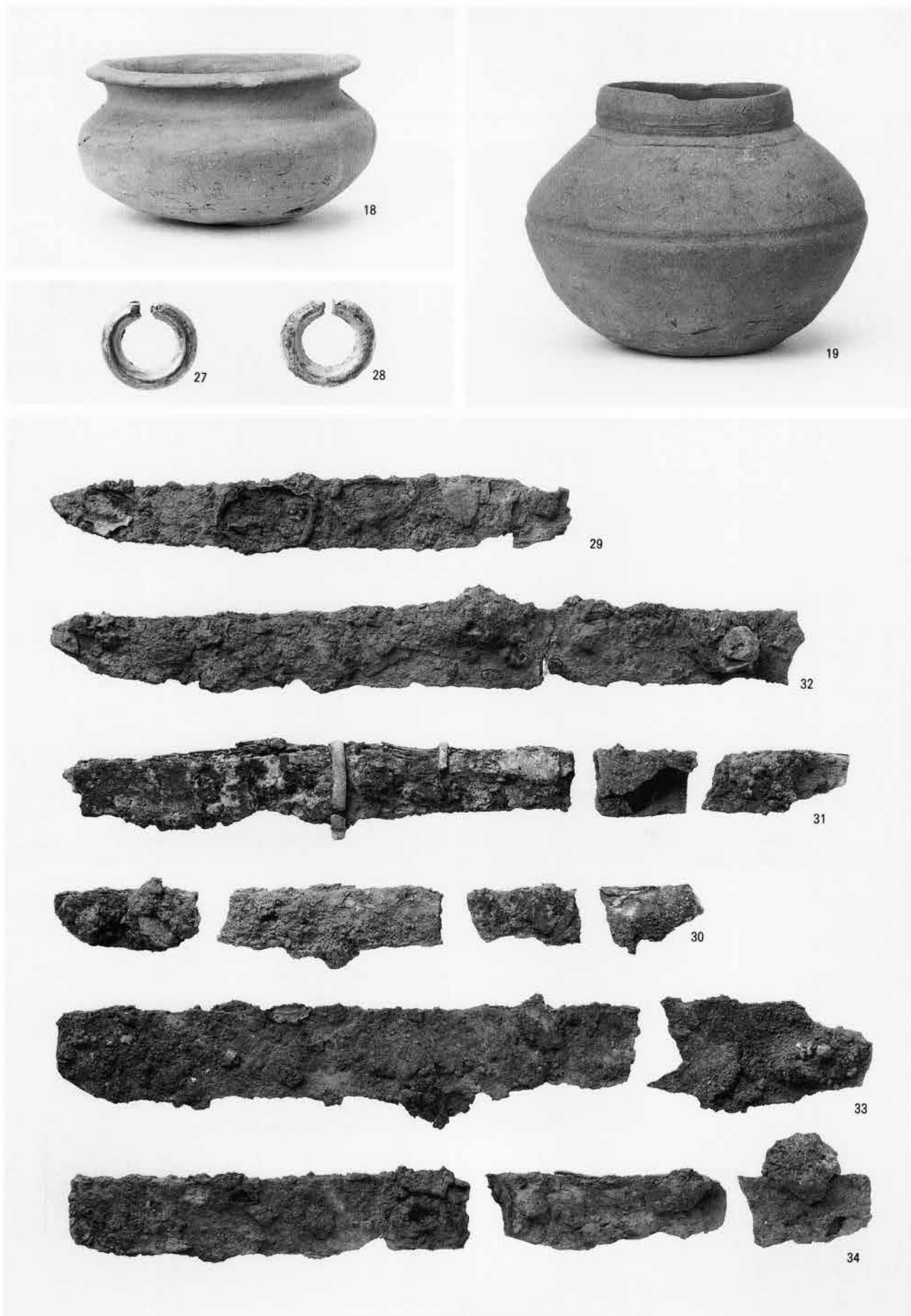
15



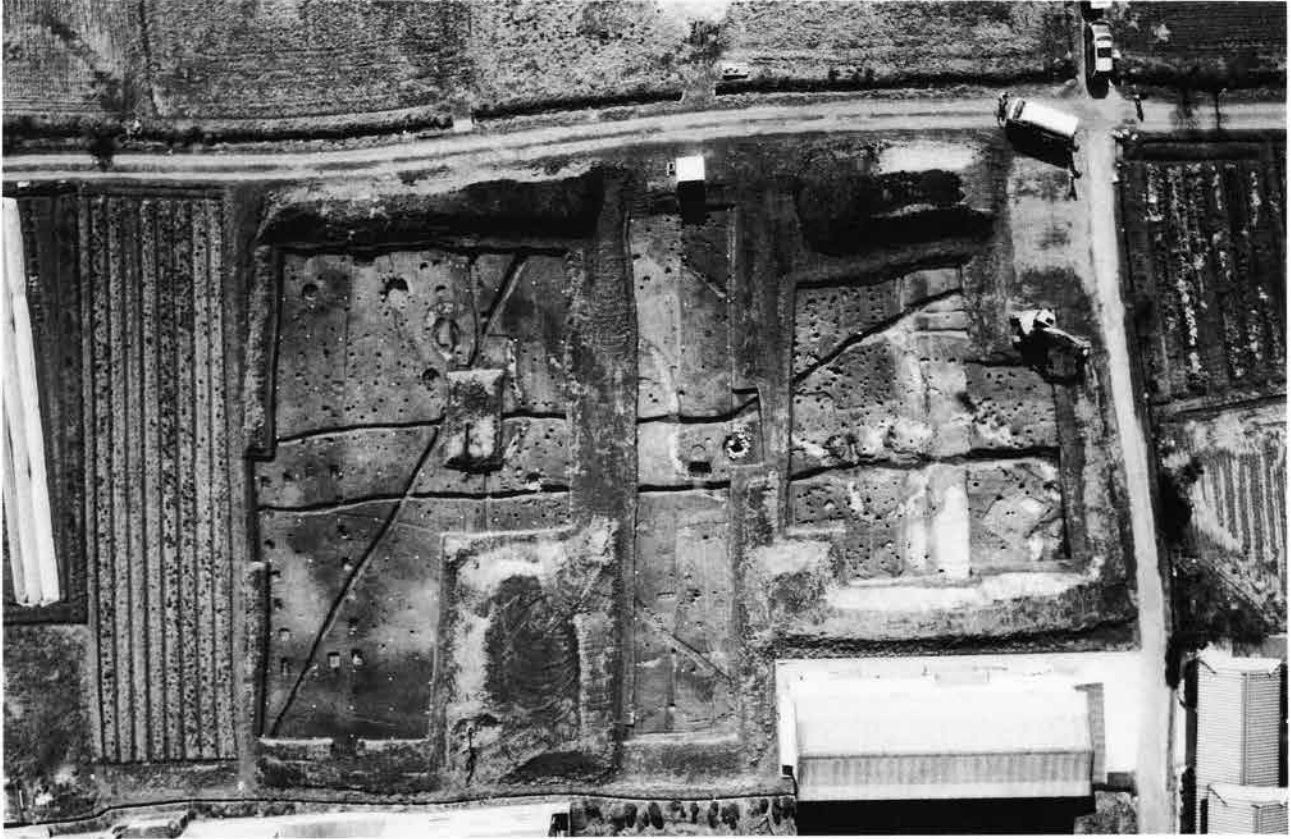
21



22



出土遺物(3) 付番は実測図番号と対応



(1)調査地空中写真(真上から)



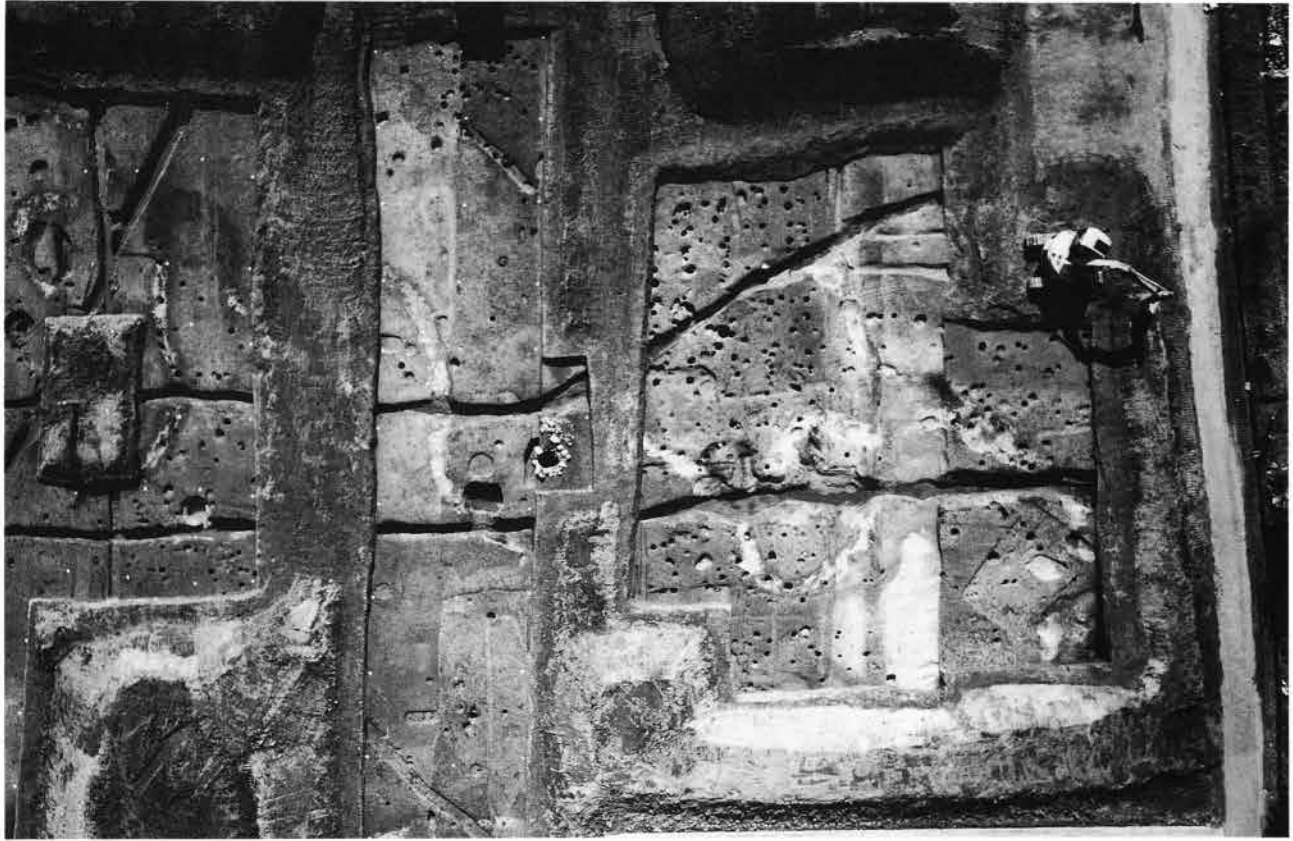
(2)調査地空中写真(南から)



(1)調査地空中写真(西から)



(2)調査地空中写真(東から)



(1) 1・2トレンチ全景 (真上から)



(2) 3トレンチ全景 (真上から)



(1)調査前近景 (南西から)



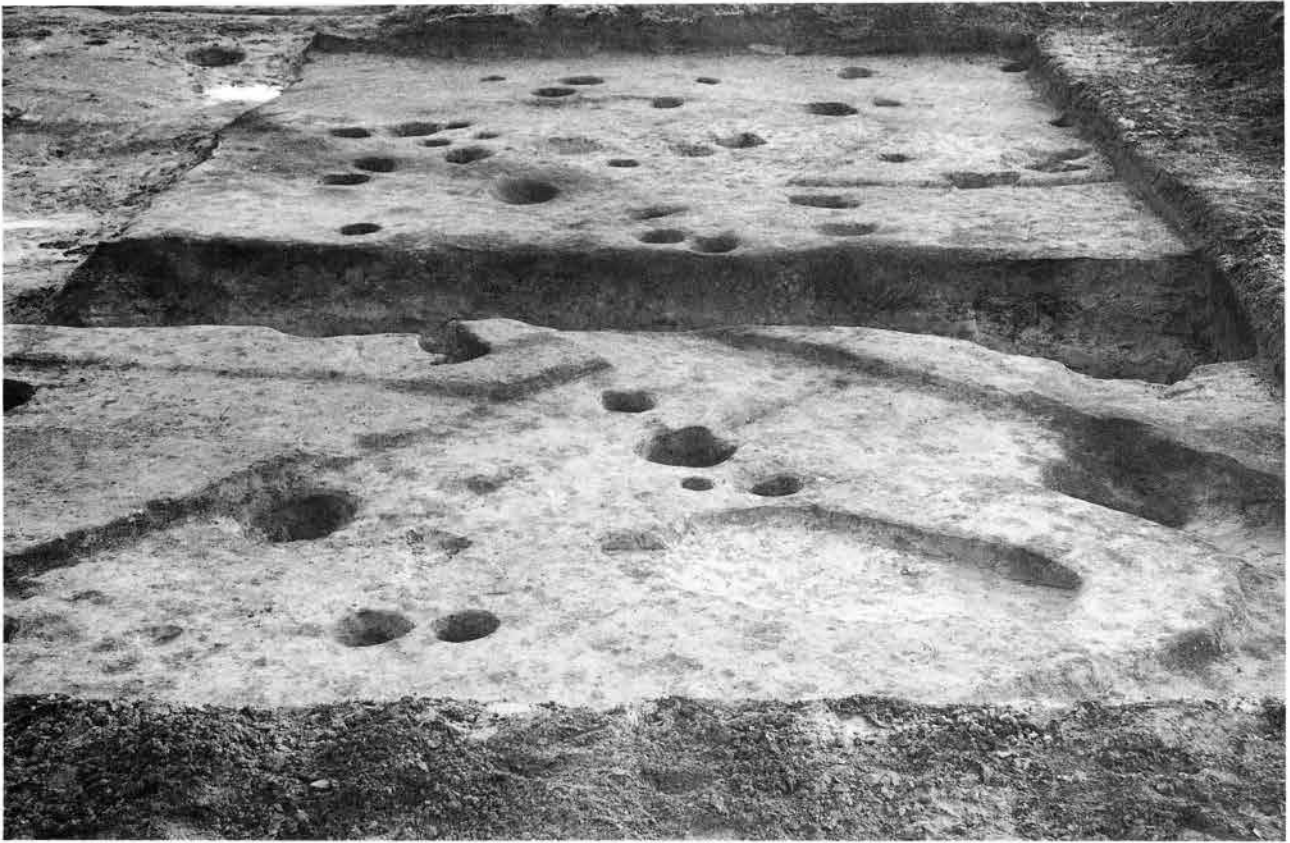
(2)1 トレンチ全景 (北から)



(1) 1 トレンチ全景 (南から)



(2) 1 トレンチ道路遺構・掘立柱建物跡 2 全景 (南西から)



(1) 竪穴式住居跡1・2 全景（北から）



(2) 竪穴式住居跡1・2 全景（南から）



(1) 2 トレンチ全景 (南から)



(2) 3 トレンチ全景 (南から)



(1) 3 トレンチ西側拡張部掘立柱建物跡4 全景（北から）



(2) 掘立柱建物跡8 全景（北から）



(1)掘立柱建物跡8 全景（西から）



(2)1・2トレンチ道路遺構全景（北東から）



(1)井戸1 全景 (南から)



(2)井戸3 全景 (西から)



(3)井戸4 全景 (南から)

(1)井戸5 全景 (南から)



(2)井戸6 全景 (北から)



(3)井戸6 断面 (南から)





(1)柱穴内遺物出土状況（西から）



(2)土坑1 遺物出土状況（西から）



(3)土坑2 礫検出状況（東から）



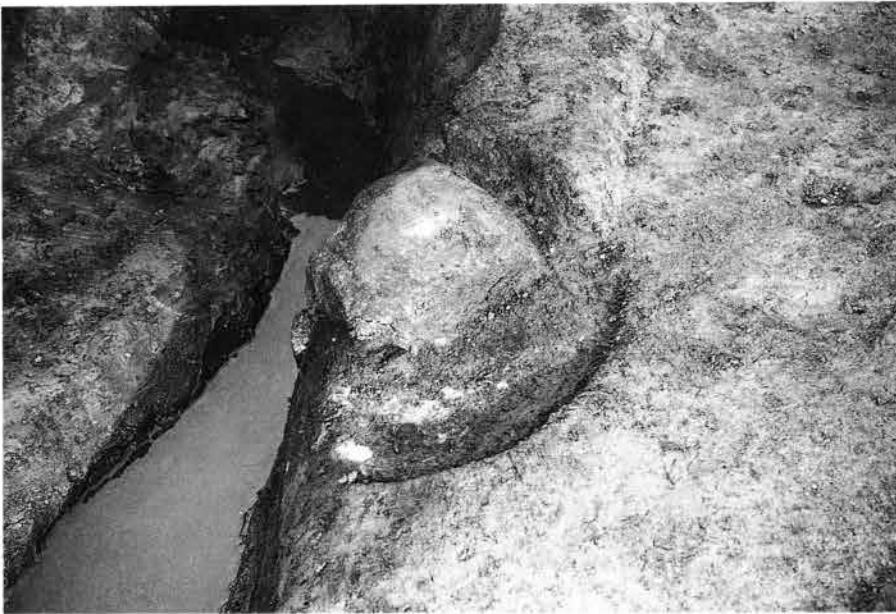
(1)掘立柱建物跡7 (南から)



(2)掘立柱建物跡6 (南西から)



(3)掘立柱建物跡5 周辺柱穴
検出状況 (西から)



(1)掘立柱建物跡2 柱穴内石材
検出状況（西から）



(2)掘立柱建物跡2 柱穴内石材
検出状況（西から）



(3)掘立柱建物跡2 柱穴内石材
検出状況（西から）

(1) 2 トレンチ溝1 東断面
(西から)



(2) 1 トレンチ溝2 東断面
(西から)



(3) 3 トレンチ溝2 西断面
(東から)





13



6



1



10



3



16



26



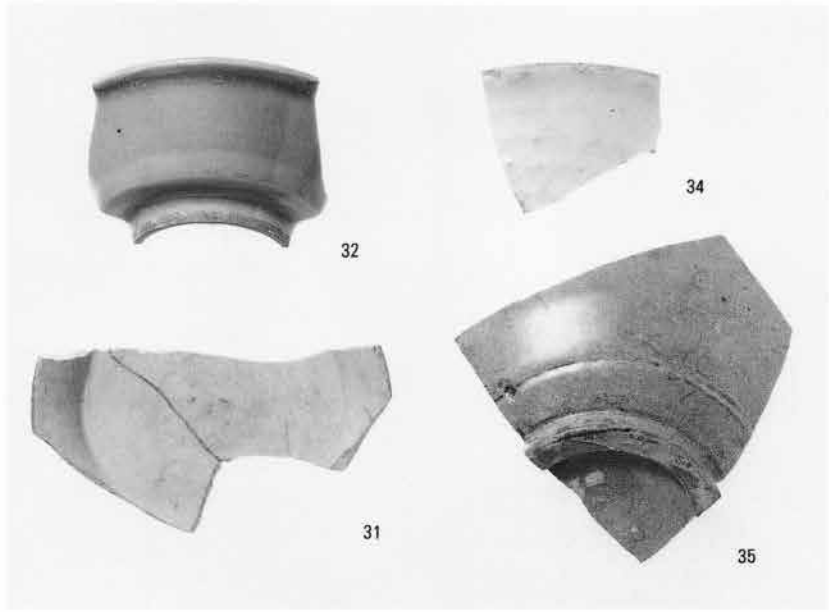
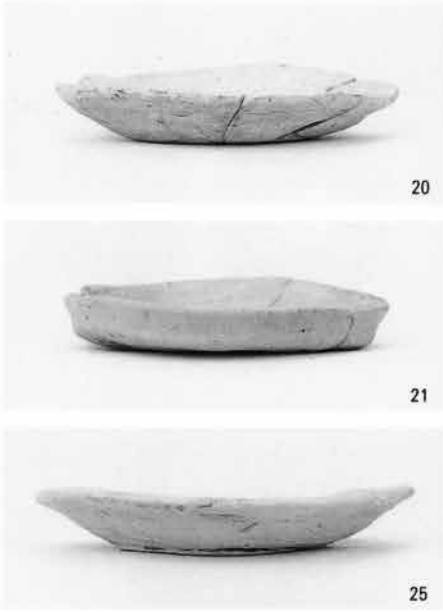
17

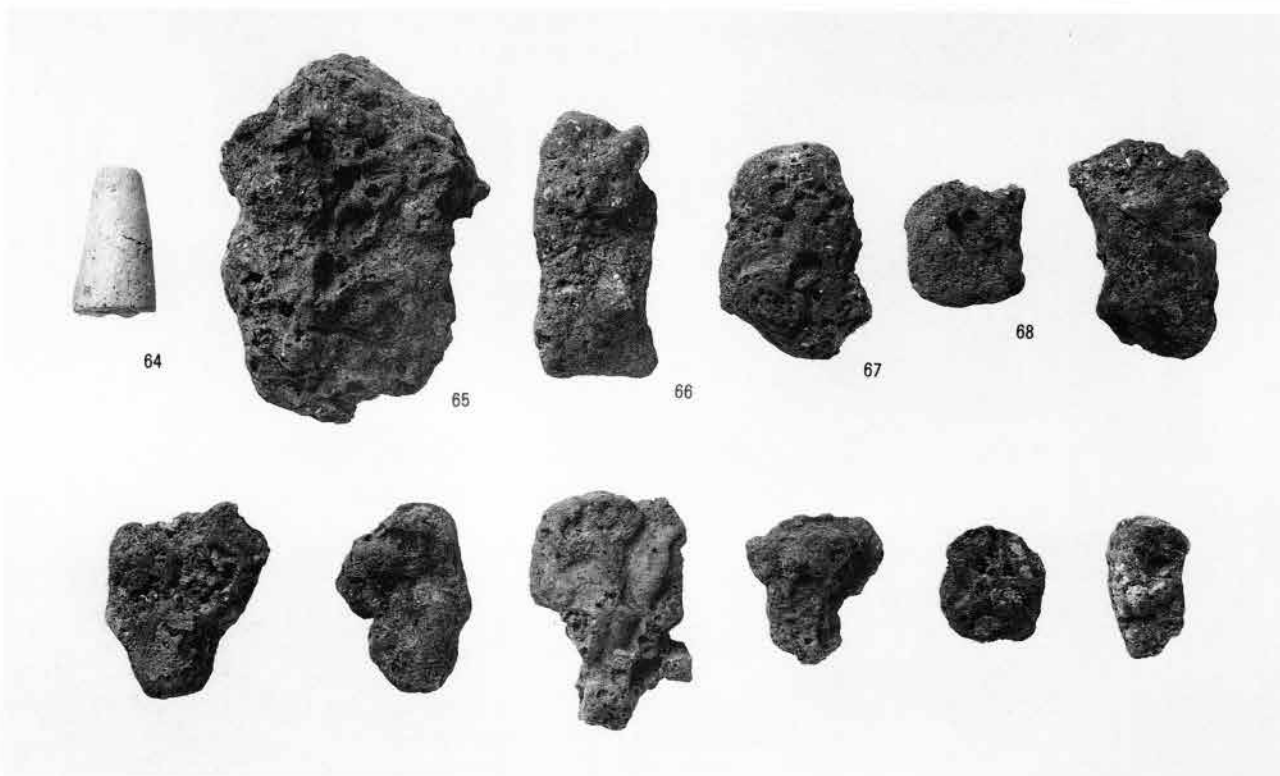
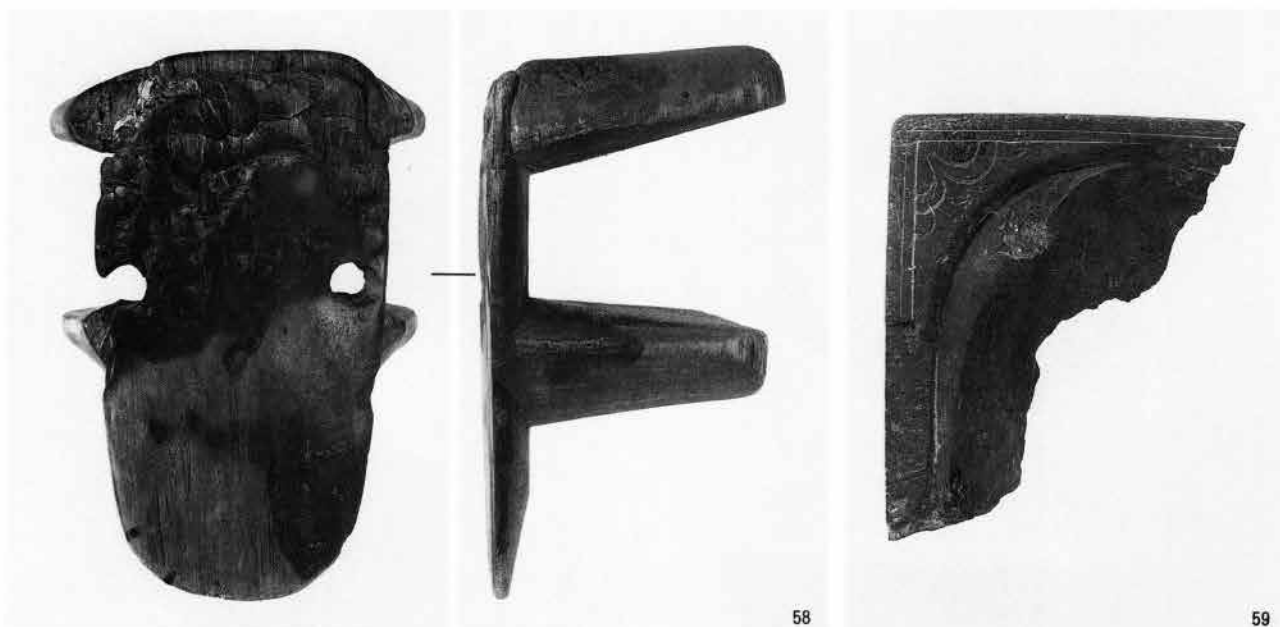
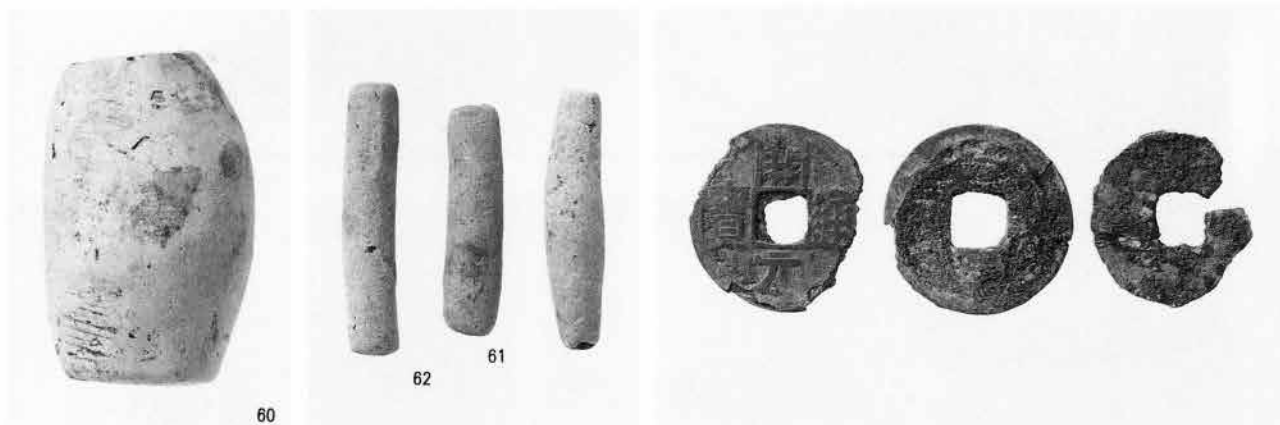


30



18





報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第82冊							
編著者名	戸原和人・松尾史子・引原茂治・田代 弘・小池 寛・竹下士郎・増田孝彦・岡崎研一							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone	075(933)3877		
発行年月日	西暦 1998 年		3 月		26 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつがさきい せきだい5じ 松ヶ崎遺跡 第5次	たけのぐんあみの ちょうおおあざきづ 竹野郡網野町大字 木津小字松ヶ崎	501	37	35° 38' 53"	134° 58' 22"	19970707 ～ 19970910	460	道路改良
よこまくらい せき 横枕遺跡	たけのぐんあみの ちょうあざしまづこ あざよこまくら 竹野郡網野町字島 津小字横枕	501	64	34° 41' 15"	135° 3' 30"	19971008 ～ 19971219	530	道路建設
いまちこふん ぐん 井町古墳群	たけのぐんたんご ちょうとくみつこあ ざいまち 竹野郡丹後町徳光 小字井町	502	—	35° 42' 26"	135° 5' 15"	19971016 ～ 19971219	450	道路建設
くわはらぐちい せきだい3じ 桑原口遺跡 第3次	みやづしあざきたこ あざくわはらぐち 宮津市字喜多小字 桑原口	205	31	35° 30' 53"	135° 11' 34"	19960425 ～ 19960925	450	道路建設
いまふくきた じょうあと 今福北城跡	みやづしあざきたこ あざいまふく 宮津市字喜多小字 今福	205	—	35° 30' 22"	135° 12' 2"	19960703 ～ 19960925	160	道路建設
せいりんじうら やまこふんじよ うりゆうき 盛林寺裏山 古墳状隆起	みやづしおあざい まふくこあざかじや うりゆうき 宮津市字今福小字 梶谷	205	—	35° 30' 9"	135° 11' 19"	19960619 ～ 19960702	50	道路建設
とりだにこふ んぐん 鳥谷古墳群	きたくわたぐんけい ほくちょうあざしも なかこあざとりだに 北桑田郡京北町字 下中小字鳥谷地内	381	7	35° 11' 48"	135° 37' 44"	19971105 ～ 19980114	300	道路拡幅
おおたいせき 太田遺跡第 5次	かめおかしひえだの ちょうおおた 亀岡市稗田野町太 田	206	108	34° 1' 8"	135° 32' 40"	19971029 ～ 19980303	1,700	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ヶ崎遺跡 第5次	集落	縄文 弥生 古墳	石囲い炉 なし 井戸	縄文土器・木製品・ 石製品・骨角器・獸 骨・魚骨・種子・糞 石 弥生土器 転用木製桶・ガラス 小玉	
横枕遺跡	官衙関連	奈良 平安 鎌倉 室町	堅穴状遺構・井戸・土坑・柱 穴 掘立柱建物・柱穴	須恵器・丹塗り土師 器 土師器・須恵器・緑 釉陶器・灰釉陶器・ 無釉陶器 黒色土器・須恵器・ 青磁・漆器 青磁	墨書土器 円面硯・石 鍋
井町古墳群	古墳	古墳	木棺直葬墳	鉄剣・鉄製鉈・土師 器	
桑原口遺跡 第3次	集落	弥生 古墳 平安	流路・溝・土器溜まり 流路・溝・土器溜まり	弥生土器・銅鏃・ガ ラス勾玉 土師器 黒色土器	
今福北城跡	—	—	—	—	
盛林寺裏山 古墳状隆起	—	—	—	—	
鳥谷古墳群	古墳	古墳	横穴石室	須恵器	
太田遺跡 第5次	集落	弥生 古墳 鎌倉	柱穴 堅穴住居 掘立柱建物・溝・井戸・土坑 柵列	弥生土器 須恵器・土師器 黒色土器・瓦器・陶 磁器・鍛冶滓・土師 器・木製品・刀子・ 硯・土錘・銭貨	

京都府遺跡調査概報 第82冊

平成10年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)